# 第 9 章　陸上作戦の観点から見たフォークランド戦争

## 第 1 節　アルゼンチン軍の侵攻

### 第 1 項　フォークランド諸島侵攻計画の立案

アルゼンチンでは 1981 年 12 月 8 日に陸軍総司令官(Comandante en Jefe del Ejército)レオポルド・ガリチェリ陸軍大将(Teniente general Leopoldo Galtieri)を大統領(Presidente)とする軍事政権(フンタ：junta)が誕生した。12 月 18 日には、軍事政権内で最初のマルビナス（フォークランド）諸島問題に関する会議が開かれた。さらに 1982 年 1 月 5 日に再度軍事政権内で会議が開かれ、次のイギリスとの交渉の前に有利な状況を作り上げようと検討が行われた。その結果は、マルビナス、サウス・ジョージア、サウス・サンドイット各諸島の主権回復のため、最大限各種交渉を再開する。また同時に、各種交渉が失敗した場合は、軍事力を行使する代替計画を準備することが決定された。交渉が進展しないことを予想して、国際連合の脱植民地化委員会(UN Decolonization Committee)へ 8 月に申し立てを行い、11 月には国際連合総会へ提議することを計画した。これらによってアルゼンチンは、国際的な支持を集めることができると考えられた[827]。

アルゼンチンによるフォークランド諸島侵攻作戦計画の作成は、アルゼンチン海軍総司令官(Comandante en Jefe de la Armada)ホルヘ・アナヤ大将（Almirante Jorge Anaya）がアルゼンチン海軍作戦部長(Comandancia de Operaciones Navales)フアン・ロンバルド中将(Vicealmirante Juan Lombardo)へ命じたことがきっかけであった。時期は、この戦争開始の 3 カ月半前すなわち 1981 年 12 月 15 日であった。その際アナヤ大将の指示は「マルビナス諸島を奪回せよ。しかしそれらを確保する必要はない」（傍点引用者）というものであった[828]。つまり海軍の最高指揮官は、イギリスは反撃しないと予想していた。

統合作戦となるため、陸軍および空軍の人間も集め 1982 年 1 月中旬から、統合作戦計画作成が始まった。作成完了時期は、9 月 15 日とされ、その日の前に何らかの動きを取ることは一切考えられなかった。9 月は真冬の過酷な天候が終わる時期である。その時までにはフォークランド周辺でイギリス海軍軍艦として唯一存在を示している氷海警備艦「エンデュアランス」(Ice Patrol Ship HMS Endurance)も、イギリスで計画されている予算削減で解役されているはずであった。またこの時期には年の初めに招集されたアルゼンチン陸軍の兵士も、訓練が十分進んでいる頃である。イギリス軍による反撃は予想されなかった。もし反撃があったとしても、9 月までにはアルゼンチン海軍航空隊(Comando de Aviación Naval de la Armada Argentina: CONA)攻撃部隊の 1 隊がフランス製シュペル・エタンダール攻撃機 14 機と対艦ミサイル・エグゾセ 15 発で再編成が完結しているはずであった[829]。

計画ではフォークランド諸島へ上陸する部隊の大部分は、アルゼンチン海軍(Armada Argentina または

---

827 Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I: The Origins of the Falklands War* (London; Routledge, 2005), pp.153-154.
828 Martin Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas' : The Argentine Forces in the Falklands War* (London; Penguin Books, 1990, first published in 1989 by Viking), p. 1.
829 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 4-5.

Armada de la República Argentina: ARA)と海兵隊(Infantería de Marina: IM)が占めていた。またアルゼンチン陸軍(Ejército Argentino)の小さな部隊が上陸部隊に含まれた。フォークランドに駐留するイギリス海兵隊の小部隊を屈服させた後、すぐに完全な歩兵 1 個連隊が駐屯するはずだった。アルゼンチン空軍は少数の輸送機の提供を求められただけだった[830]。

主な上陸部隊には、海兵隊第2歩兵大隊(Batallón de Infantería de Marina 2: BIM 2)が選ばれた。この大隊はフォークランド諸島に地形がよく似たパタゴニア(Patagonia)のバルデス(Valdés)半島で上陸作戦演習を開始し、2月から3月にかけて何回か上陸演習を行った[831]。

基本的な上陸計画は、3 月 9 日に軍事政権へ提示され、軍事政権はそれを承認して、統合軍総司令官会議議長(Junta de Comandantes en Jefe de las Fuerzas Armadas)スアレス・デル・セロ海軍大将(Almirante Suárez del Cerro)に示した。作戦計画は 9 月までかけて準備するはずだった[832]。

### 第 2 項　侵攻作戦の突然の前倒し

サウス・ジョージア島でのアルゼンチン廃材回収業者の行動およびアルゼンチン政府の対応は、イギリス政府の態度を硬化させた。3 月 23 日イギリス政府は、アルゼンチンが廃材回収業者を退去させないなら、イギリスの手で実力を以て業者をサウス・ジョージア島から退去させる、とアルゼンチン政府に通告した。これに対してアルゼンチンは、イギリスに業者を退去させないようサウス・ジョージア島へ兵力を送ることを同日決意した。さらにアルゼンチン軍事政権はこの危機を口実にフォークランド諸島を占領しようと決意した[833]。

同日夕方、軍事政権はフォークランド諸島侵攻計画を立案しているグループへ、どれくらい早く即時に侵攻する計画がまとめられるか諮問した。大急ぎで計画をまとめ上げたロンバルド海軍中将は、3 月 25 日に、同月 28 日に出港しフォークランド上陸は 4 月 1 日であると回答した。軍事政権はロンバルド中将の回答を承認し、ただちにフォークランド上陸作戦とサウス・ジョージアへのさらなる兵力増強の準備に取りかかるよう命令した[834]。

### 第 3 項　フォークランド侵攻作戦部隊の計画とその編成

上陸部隊である 40.1 任務群(Grupo de Tareas 40.1)司令官カルロス・ブセル海兵隊少将(Contraalmirante IM Carlos Büsser)の作戦計画は、総督公邸(Government House)とイギリス海兵隊兵舎を奇襲攻撃し、できれば流血なしに占領しよう、というものであった。このため多方向から圧倒的に優勢な兵力で襲撃しようとしていた。ブセル少将の考えでは、夜のうちに特殊作戦上陸中隊(Agrupación Comandos Anfibios)がスタンレーの南 2 マイル（約 3.2 キロメートル）の海岸に上陸し、徒歩行軍により

830 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 5.
831 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 5.
832 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 6.
833 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 10, 13.
834 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 13-14.

ムーディ・ブルック(Moody Brook)にある海兵隊兵舎やスタンレーのさまざまな重要拠点を占領する。翌日の夜明けには主上陸部隊が空港北側の海岸から上陸し、陸軍の小隊をただちに総督公邸へ送り占領させる。また海兵隊はスタンレーの占領を完了する。安全が確認され次第、アルゼンチン本土から小型航空機で空港に着陸し、陸軍の大部隊を乗せた航空機が着陸できるよう空港の準備を行う。この部隊は上陸部隊と交代し、フォークランド諸島へ駐屯するのだった。これらのスタンレー地区における作戦実施と同時に、さらに陸軍の 2 個小隊が砕氷船「アルミランテ・イリサル」(Rompehielos ARA Almirante Irizar)からヘリコプターで着陸し、グース・グリーン(Goose Green)からダーウィン(Darwin)の地域を占領する予定だった[835]。

このフォークランド諸島侵攻作戦で、直接上陸作戦を行った部隊は、第 40 上陸作戦任務部隊（Fuerza de Tareas Anfibia 40）であり、艦艇は新鋭の戦車揚陸艦「カボ・サン・アントニオ」(Buque desembarco de tanques ARA Cabo San Antonio)（満載 8,000 トン)、潜水艦「サンタ・フェ」(Submarino ARA Santa Fe )、輸送船 1 隻、駆逐艦・フリゲート等 5 隻であった。その上陸部隊は、前述のように海兵隊第 2 歩兵大隊が主力で、以下のように編成されていた。

| | |
|---|---|
| 司令部および通信部隊 | 42 名 |
| 海兵隊第 2 歩兵大隊 | 387 名 |
| 上陸車両大隊 | |
| 　水陸両用装甲兵員輸送車 LVTP-7 [836] | 20 両 |
| 　軽揚陸補給貨物車両 LARC-5 | 5 両 |
| 　　人　員 | 101 名 |
| 上陸特殊作戦中隊 | 92 名 |
| 水中障害破壊部隊（海浜偵察。潜水艦「サンタ・フェ」で輸送） | 12 名 |
| 海兵隊野戦砲兵大隊（分遣隊） | |
| 　　105 ミリメートル榴弾砲 | 6 門 |
| 　　人　員 | 41 名 |
| 予備隊（海兵隊第 1 歩兵大隊より） | 65 名 |
| 補給隊 | 84 名[837] |

この他にアルゼンチン陸軍は、フォークランド侵攻部隊に第 25 機械化歩兵連隊から 1 個小隊 39 名を提供した。この小隊は先遣部隊であり、アルゼンチンがフォークランドの首都スタンレーを占領後、本隊の第 25 自動車化歩兵連隊はただちに空路で乗り込み、侵攻部隊に代わってフォークランド諸島に駐屯する

835 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 23.
836 LVTP-7 はアメリカ製であるが、アメリカ軍では 1985 年から制式名が AAV7 へ変更されている。
837 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 15, 19.

のであった。また占領後の民政を担当するために、41名からなる将兵もこの侵攻部隊に加わった[838]。

なお、このフォークランド諸島侵攻の作戦名は、「ロサリオ作戦（Operación Rosario）」とよばれた。

### 第4項　イギリスのフォークランド陸上防衛態勢

フォークランドに駐屯していたイギリス海兵隊分遣隊(Royal Marines Detachment, NP8901)は約40名であった。1982年3月は、ちょうど分遣隊交替の時期であり、別の隊がフォークランド諸島に赴任しようとしていた。サウス・ジョージア島における両国間緊張の高まりから、3月25日在アルゼンチン・イギリス大使館付き海軍武官は、状況が落ち着くまで先に駐屯していた隊を引き揚げず、両方の分遣隊を駐屯させ戦力を2倍にすべきだと提案した。この提案は3月29日に承認された。また3月28日には、アルゼンチン艦艇の無線交信から、イギリスはアルゼンチンのフォークランド諸島侵攻意図を察知した。しかしイギリス海空軍基地からきわめて遠くにあるフォークランド諸島へは、この交代要員以外の兵力増強は行うことができなかった[839]。

つまりアルゼンチン軍がフォークランド諸島に侵攻したとき、島に所在するイギリス海兵隊分遣隊の人員は、69名であった。またアルゼンチン侵攻時には、「エンデュアランス」から海軍の兵員11名が増強のため下船していた。これに加えて、イギリス海兵隊を除隊してフォークランド諸島に在住していた者1名が再志願した。この分遣隊の保有する武器は、各自の個人携行兵器の他は、少数のロケット発射機と機関銃数丁であった。車両は4トン・トラック1両とランドローバー3両であり、フォークランド諸島の地形からすると限定的な機動力しか持っていなかった[840]。

イギリス海兵隊分遣隊の戦争における役目は以下の4点であった。

① 武力侵攻の事態にあってもフォークランド海外領土政府の存在をフォークランド諸島内に確保し、その統治権行使を可能とすること

② イギリス本土政府とフォークランド海外領土政府の間に、秘匿性の確保された代替通信手段を提供すること

③ フォークランド海外領土政府の統治権行使を妨害し、またはそこに居住する島民の生命を危険に陥れるような侵攻を妨害し、可能なら阻止すること

④ フォークランド海外領土政府が存続できない事態におちいっても、部隊の結束を維持すること[841]

この分遣隊の他に、島民の志願者からなるフォークランド諸島防衛隊(Falkland Islands Defence Force)があり、当時 23 名が志願していた。しかしあくまで海兵隊を補助する役目であり、アルゼンチンの侵攻

---

838 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 19, 43.
839 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I,* pp. 198-201.
840 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I,* p. 57; Idem, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II: War and Diplomacy* (London; Routledge, 2005), p. 4.
841 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 4-5.

の際には監視哨に配置されただけだった[842]。

4 月 1 日にフォークランド諸島総督レックス・ハント卿(Governor, Sir Rex Hunt)は、本国から「信頼ある情報源によると、明らかにアルゼンチン軍任務部隊は 4 月 2 日の早朝には、ペンブルク岬(Cape Pembroke)〔スタンレー空港のある半島の東端の岬〕沖に集結しているだろう」と警告を受けた。政府の指示は、アルゼンチン軍の上陸が予想されるので、兵力を配備しできることを行え、またスタンレー空港の滑走路に穴をあけろ、というものだった[843]。

イギリス海兵隊分遣隊指揮官マイク・ノーマン少佐(Major Mike J. Norman)の侵攻に対する計画は、アルゼンチンの侵攻初頭において可能な限り激しい打撃を加え、最大限の損失を与え上陸地点で部隊の展開を強い、交渉の時間を得るというものだった。一方ハント総督の考えは、首都スタンレーにおいて一軒一軒立てこもって戦うことを絶対回避することであった。そのため海兵隊は、海岸および空港からスタンレーへ向かう経路に準備した陣地へ分隊を配置することになった。ノーマン少佐は、分遣隊の三分の一の兵力を総督公邸に配置し、残りの兵力で一隊を空港のある半島へ、もう一隊をハリエット港(Port Harriet)とスタンレーの間の接近経路に配置した。ノーマン少佐自身は分隊と共に、スタンレーの南東にあるルッカウト・ロックス(Lookout Rocks) に戦闘司令部を置いた（図第 15)。スタンレー空港の滑走路は、車両とドラム缶で封鎖された[844]。

第 5 項　侵攻作戦の始まり

侵攻部隊の乗船および貨物の積み込みは、アルゼンチン南部の海軍基地プエルト・ベルグラーノ(Puerto Belgrano) で 3 月 28 日から始まり、その日のうちに侵攻部隊は出航した。当初の計画では 3 月 31 日から 4 月 1 日の夜間に上陸する予定であったが、悪天のため上陸が 24 時間延期された[845]。

またこの遅延の間にアルゼンチン軍は状況の変化を察知し、最初の計画を完全に予定どおりに進めることが不可能なことを理解した。その変化は第 1 に、奇襲性が失われたことだった。イギリス海兵隊分遣隊の兵力が 2 倍になったこと、4 月 1 日にハント総督が島民にアルゼンチンの侵攻が目前であるとラジオ放送したこと、および滑走路が封鎖されていることをアルゼンチン軍も知ったのであった。これはアルゼンチン空軍(Fuerza Aérea Argentina: FAA) によって運行されている国営航空会社 LADS (Lineas Aéreas del Estado) のスタンレー駐在員エクトル・ヒロベルト空軍中佐(Vicecomodoro Hector Gilobert) が、通報したものと思われる。また砕氷船「アルミランテ・イリサル」に搭載のヘリコプターが、荒天により破損し使用できなくなった[846]。

これらの状況の変化により、計画の細部が修正された。主力部隊の上陸地点は、当初計画のスタンレー空港の北側海岸から、約 1.5 キロメートル西側のヨーク湾(Yorke Bay) に変更された。アルゼンチン本土

842 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 4.
843 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 4.
844 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 5.
845 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 19.
846 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 7; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 23.

から航空機による直接着陸は放棄された。総督公邸を占領するはずだった陸軍の小隊は、空港の確保と滑走路の開放に任務が変更された。特殊作戦上陸中隊は、スタンレーの重要拠点を占領する予定だったが、奇襲性が失われたため総督公邸の占領に任務が変更された。グース・グリーンからダーウィンにかけての占領も、ヘリコプター破損のため見送られ、その任務にあたっていた陸軍の2個小隊は、スタンレー上陸部隊の予備となった[847]。

4月1日夕方頃には天候も穏やかになり、1900時（現地時間：世界時－4時間：以下軍用時間帯の「Q」で表す。）ブセル少将は戦車揚陸艦「カボ・サン・アントニオ」で艦内放送により将兵に対し、明日から始まるマルビナス奪回作戦について訓辞を行った。その最後に「もし諸官が敵の軍隊、女性または個人の財産に対して非道な行為をとった場合は、本官は諸官に対し最大限の懲罰を課するだろうことを警告しておく。明日、諸官は勝利の感激に満ち溢れているだろう。しかし同時に厳正な規律を保持し、自己の任務を果たさなければならない。」と規律の維持について強調した。ブセルの回想では、この訓辞の時に将兵からサッカーの試合でゴールが決まったときのような歓声があがったという[848]。

第6項　イギリス海兵隊兵舎への攻撃

4月1日 2130Q 時にシール崎(Seal Point) 沖合でミサイル駆逐艦「サンティシマ・トリニダド」(Destructor Misilístico ARA Santísima Trinidad)から、特殊作戦上陸中隊の92名がゴム・ボート21艇に乗り発進した。最初の計画ではハリエット港に入り、その中のマラット・クリーク(Mullet Creek)を遡行するつもりだった。しかしゴム・ボートの航路が北により過ぎたため、ハリエット港をいくらも進まないうちに、海草の密集する海岸付近に来てしまった。密集する海草によりボートの速度が極めて遅く、その水域からぬけ出すこともできなかったため、ただちに付近の海岸へ上陸することにした。2300Q 時にマラット・クリーク入口より約1.5キロメートル東のレーク崎(Lake Point)付近へ最初の海兵隊員が上陸した[849]。

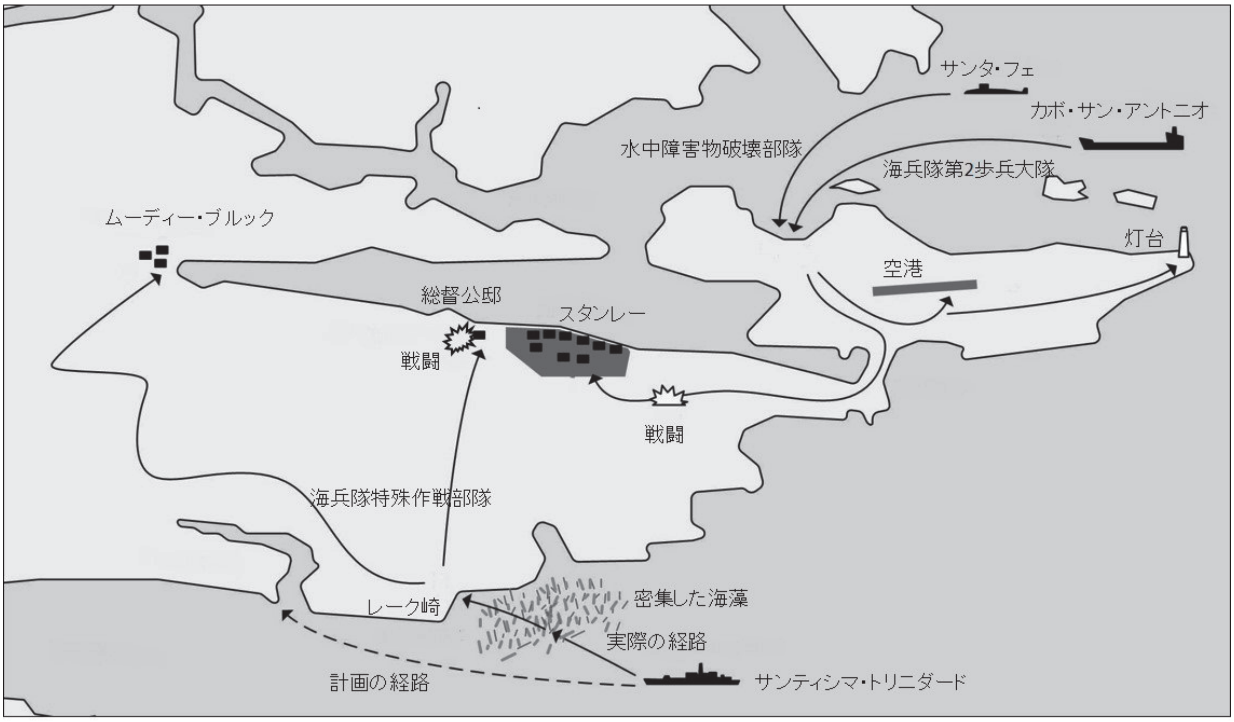
中隊は2隊に分かれ、1隊76名はサンチェス・サバロツ海兵隊少佐（Capitan de Corbeta IM Sánchez Sabarots）を指揮官としムーディー・ブルックのイギリス海兵隊兵舎へ向かった。上陸地点から兵舎までは約6マイル（約9.6キロメートル）であった。サバロツ少佐はフォークランド諸島の偵察写真を侵攻前に見ており、芝生におおわれた平坦なところだと思っていたが、実際は非常にでこぼこしたところであった。10キロメートル足らずを行軍するのに6時間を要し、地図上の距離に対する常識的な徒歩に要する時間が通用しない世界であった。この隊は兵舎に攻撃開始予定時刻の2日 0530Q 時に着いた[850]。

サバロツ少佐は、イギリス海兵隊兵舎の事前偵察を行いたかったが、あきらめて計画どおり攻撃を開始した。その計画は、当初の奇襲が成立することを見込んだままのものであり、イギリス海兵隊員が兵舎の中で就寝中であるという前提で、可能な限りイギリス側に死傷者を出さないというものあった。部隊は兵

[847] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 23-24.
[848] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 23-24.
[849] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 26-27.
[850] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 27, 30.

舎を取り囲み、兵舎の中へ催涙ガス弾を投げ込んだが、何の反応もなく兵舎が空であることを知った[851]。前述のとおり、イギリス海兵隊分遣隊は、前日のうちに配備を終わり、兵舎に配員はなかったのであった。

その後サバロツ少佐の部隊は、事前の計画どおり機関銃その他を空へ向け発砲し、イギリス側へ自分達の存在と火力の強さを知らしめようとした。ブセル少将の考えでは、この兵舎への攻撃、総督公邸への攻撃およびスタンレー占領部隊の上陸が同時に行われ、この力の誇示によって、総督公邸にいるイギリス軍指揮官がいち早く降伏を決意するだろうというものだった[852]。




図第15　アルゼンチン軍のスタンレー占領(1982年4月2日)

ウィキメディア・コモンズ　(http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Operation_Azul.jpg?uselang=ja)を筆者が加工した。

第７項　総督公邸への最初の攻撃と失敗

１日深夜シール崎に上陸した、特殊作戦上陸中隊のもう１隊は、ペドロ・ヒアチノ海兵隊少佐(Capitan de Corbeta IM Pedro Giachino)を指揮官とし 16 名で編成されていた。この部隊は、前日に攻撃目標を変換されたため、総督公邸に関する情報を何も持っていなかった。攻撃開始時刻も予定の２日 0530Q 時から遅れ、0615Q ときであった[853]。

総督公邸には、前述のようにイギリス海兵隊分遣隊の三分の一が守備についていた。またイギリス民間商船「フォレスト」(MV Forrest) がレーダー・ピケの役割でウィリアム港（Port William）を見張ってお

851 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 30.
852 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 30.
853 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 31.

り、2 日 0230Q 時にはアルゼンチン艦艇の動きを捉え、分遣隊に報告していた。その後スタンレー南西にあるサパー丘(Sapper Hill)の監視哨からハリエット港でヘリコプターらしきものの動きがみられること、さらにはウィリアム港に艦船が進入しているという報告が相次ぎ、0430Q 時に総督は緊急事態を宣言した。0600Q 時には、前述サバロツ少佐の部隊のイギリス海兵隊兵舎における発砲音が聞こえ、その後総督公邸の背後から接近する者があることが報告された。またヨーク湾へ上陸舟艇が上陸したことも報告された。海兵隊分遣隊指揮官ノーマン少佐は前方に配置した 2 コ隊へ総督公邸に移動して守備するよう命じ、ノーマン少佐自身も総督公邸へ向かった[854]。

ヒアチノ少佐の部隊は小高い丘を越え半島を横切ってスタンレーの西端にある総督公邸に到達した。彼は小さな部隊をさらに分け、総督公邸の両側に各 1 隊を配置し、公邸の後ろに 1 隊を置いた。夜明けが近づくにつれ、公邸に出入りあるいは巡回する人のようすや車両の到着も見えた。また海兵隊兵舎における射撃音から、アルゼンチン軍の上陸をイギリス人もわかっているだろうことが容易に想像できた。それでもヒアチノ少佐は、奇襲成立と死傷者を出さないことを前提とした、最初の作戦構想にこだわった。ヒアチノ少佐は 4 名の部下と一緒に、裏口から入ってハント総督に降伏を要求するつもりで、公邸の背後から接近した。ところが詳細な情報の欠如により初めから失敗を犯した。ヒアチノ少佐の一隊はドアを見つけ中に入ったが、その建物は総督の執事の住居で、公邸とはつながっていなかった。部隊はその建物を出て、公邸の背後へ向かった。しかし公邸がイギリス海兵隊分遣隊の集中防御地点になっていたことを彼らは知らなかった。公邸は 31 名の海兵隊員と 11 名のイギリス海軍の水兵および 1 名の元海兵隊の志願兵が自動小銃を、ハント総督はピストルを、総督付運転手はショットガンを構えていた。雨あられのような銃弾が公邸の後面から、ヒアチノ少佐とその部下へ注がれた。ヒアチノは倒れおびただしく出血し、もう 1 名も 2 発銃弾を受け倒れた。他の 3 名は執事の家のブロックに身を隠し無事だったが、のちにイギリス軍の捕虜となった。この失敗の後 2 時間半、総督公邸周辺の状況は動かなかった[855]。

### 第 8 項　アルゼンチン海兵隊主力の上陸とフォークランド諸島の完全占領

アルゼンチン上陸部隊は、主力部隊を上陸させる前に、水中障害物破壊部隊(Buzos Tácticos)から分遣されたダイバーからなる偵察隊を、2 日 0430Q 時潜水艦「サンタ・フェ」からヨーク湾へ潜入させた。0600Q 時（この日の日出は 0700Q 時頃）、戦車揚陸艦「カボ・サン・アントニオ」はヨーク湾海岸線から 2 マイル（約 3.2 キロメートル）沖合に停泊し、20 両の水陸両用装甲兵員輸送車 LVTP-7 と数両の軽揚陸補給貨物車両 LARC-5 を発進させた。これら上陸舟艇は、3 つの集団に分かれ、最初の集団は、4 両の LVTP-7 からなり先鋒の役目を担った。第 2 の集団は 14 両の LVTP-7 からなり、主力を形成した。上陸部隊指揮官のブセル少将と海兵隊第 2 歩兵大隊長のアルフレド・ウェインスタブル海兵隊中佐（Capitan de Fragata IM Alfredo Weinstabl）は、この集団に座乗していた。第 3 の集団は回収車型の LVTP-7 を 1 両と数両の

---

[854] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 7-8.
[855] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 31-32.

LARC-5 から編成されていた[856]。

上陸舟艇の針路は、航空母艦である「カボ・サン・アントニオ」のレーダーによって確認し、無線によって誘導され、岩礁地帯を回避した。上陸舟艇の部隊は海岸線に近づくと、偵察隊によって海面に敷設された赤い灯火に沿って進み、最終的に砂浜に上陸することができた。最初の LVTP-7 は 0630Q 時に上陸し、やがて全車両が上陸に成功した。最初に主力上陸部隊が行ったことは、スタンレー空港の確保だった。空港には人気はなかったが、滑走路は古い車やコンクリートのブロックが積まれ、離着陸できない状態だった。それらは海兵隊員の手によって撤去され、アルゼンチン陸軍部隊の飛来に備えた[857]。

空港の確保が済むと、海兵隊第 2 歩兵大隊はスタンレー市街を占領するため前進した。空港のある半島からスタンレーの市街へ行くには、幅 250 メートル、長さ 500 メートルほどの地峡を通らなければならない。アルゼンチン軍は、イギリス軍がここに防御陣地を設置して待ちかまえているものと考えたが、そこには何もなかった。アルゼンチン軍主力部隊に対するイギリス軍の最初の反撃は、0715Q 時スタンレー市街の東方で、ごく少数の部隊が行った。イギリス軍は家屋の中から、アルゼンチン軍の LVTP-7 へ機関銃とロケット弾射撃を行った。機関銃弾は命中したが、ロケット弾は命中しなかった。アルゼンチン軍は LVTP-7 を防御隊形に散開させ、兵員を降ろし無反動砲と迫撃砲により反撃した。しかしイギリス側へ死傷者を出さないという命令に従い、これら砲の反撃は、イギリス兵のいる家屋の屋根を狙い、発射弾数も少数に限られた。イギリス軍は、この攻撃により被害は受けなかった。またイギリス軍は LVTP-7 の 1 両から兵員が降車しなかったように見えたことから、相当の損害をアルゼンチン軍に与えたと考え、総督公邸へ向け撤退した。実際はアルゼンチン側のこの戦闘における損害は、1 名の軽傷者だけであった[858]。

0800Q 時には、アルゼンチン軍はスタンレーを掌握し、海兵隊の砲兵部隊および予備隊も上陸した。スタンレー空港には、増強のアルゼンチン陸軍部隊を輸送する航空機が着陸を始めた。残りは総督公邸のみとなり、多数のアルゼンチン海兵隊員により包囲されていた。ノーマン少佐はハント総督に 2 つの選択肢を提示した。1 つは全員で突破して島のどこかに総督府を置き、相手に占領されるまで抵抗を続けること、もう 1 つは休戦交渉を行うことであった。ハント総督は、島民と軍人へ不必要な生命の損失を与える命令を下すことができず、交渉を行うことにした[859]。

ヒロベルト中佐（フォークランド諸島在住のアルゼンチン国籍の者は 4 月 1 日にイギリス側によって拘束されていた。）を仲介役として、上陸軍指揮官ブセル少将に連絡を付け、0920Q 時ブセル少将は総督公邸にあらわれた。0925Q 時にハント総督は、射撃停止と武器を置くことをノーマン少佐に命じ、ここにフォークランド諸島における戦闘はいったん停止したのであった。アルゼンチン側は、1 名の死者（ヒアチノ少佐）と若干の負傷者を出したが、アルゼンチン側の狙いどおりイギリス側へ死者を生じることはなか

[856] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 32-33.
[857] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 33-35.
[858] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 35-37.
[859] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 37-38; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 8.

った[860]。

#### 第9項　サウス・ジョージア島の占領

##### a　アルゼンチン軍のサウス・ジョージア島占領決心

サウス・ジョージア島でのアルゼンチン廃材回収業者の動きを監視し必要があれば逮捕するため、イギリス海軍氷海警備艦「エンデュアランス」はイギリス海兵隊員22名を乗せ3月24日からサウス・ジョージア島およびその周辺で監視活動を行っていた。一方アルゼンチンも23日イギリスの手で廃材回収業者を逮捕・送還することを防止するため、アルゼンチン海軍極地輸送艦「バイア・パライソ」(Rompehielos ARA Bahía Paraíso) により海兵隊員を乗せ出発させた。「バイア・パライソ」は24日深夜リース(Leith)にアルフレド・アスティス海兵隊大尉(Teniente de Navío IM Alfredo Astiz)を指揮官とする兵員11名と物資を上陸させた。これはイギリスも察知した[861]。

アルゼンチン軍は26日には、フォークランド諸島と同時にサウス・ジョージア島も占領することを決心した。サウス・ジョージア島奪回のため、セサル・トロムベタ海軍大佐(Capitán de Navío César Trombetta)を指揮官として第60任務群(Grupo de Tareas 60)が編成された。この部隊の艦船は、極地輸送艦「バイア・パライソ」とコルベット艦「グェリコ」(Corbeta ARA Guerrico) からなり、また搭載ヘリコプター2機と上陸兵力として約80名の海兵隊員が乗組んでいた[862]。

##### b　イギリスのサウス・ジョージア島への兵員配備

一方「エンデュアランス」に乗船していたイギリス海兵隊22名は、3月31日に下船し、サウス・ジョージア島のキング・エドワード崎(King Edward Point)にあるイギリス南極探検隊(British Antarctic Survey: BAS)の基地（グリトヴィケン：Grytviken）から直線で800メートルほど離れた場所）に駐屯した。指揮官はキース・ミルズ海兵隊中尉(Lieutenant Keith Mills)であり、武装は各自の個人携行武器の他、カール・グスタフ84mm無反動砲とM72 66mmロケット弾であった。ミルズ中尉に与えられた命令は以下のとおりであった。

① サウス・ジョージア島においてイギリス軍事力の存在を示すこと
② 緊急時においてグリトヴィケンにあるイギリス南極探検隊の人員を守ること
③ リースにあるアルゼンチン廃材回収業者の動静監視を継続すること

---

860 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 38-39; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 8-9.
861 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I*, pp. 176, 181-183.
862 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I*, p. 187; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 15, 41-42.

またミルズ中尉はアルゼンチン軍による襲撃があるかもしれないとの警告を受け、アルゼンチン人がサウス・ジョージア島へ上陸し、彼らが明らかに武装していると思われた場合は、無警告で発砲せよ、と命じられた[863]。

4 月 1 日には、探検隊基地でも、ハント総督による、アルゼンチンの侵攻が目前に迫っているとのフォークランドのラジオ放送を聞くことができた。4 月 2 日には英国放送協会 (BBC)ワールド・ニュースによって、アルゼンチンがフォークランドへ侵攻したことを聞いた。またその日の朝にイギリス国防省から「エンデュアランス」艦長へ「駆逐艦に搭乗した 40 名のアルゼンチン海兵隊によるグリトヴィケンへの襲撃が、極めて高い確率で予想される。予想時刻は 2 日現地時間 1300 時〔サウス・ジョージア島の現地時間は世界時－3 時間 : 以下軍用時間帯の「P」で表す〕。「エンデュアランス」は自己の存在を最大限隠ぺいし、アルゼンチンにわからぬよう海に浮かぶ情報収集母体の役目を果たすこと。」と電報が届いた。またフォークランド諸島へのアルゼンチン侵攻の結果から、交戦規定(ROE)を一部改訂し「警告なしに発砲しないこと」をミルズ中尉へ指示した。艦長はこれらをミルズ中尉へ転電した。ミルズ中尉は、猛烈な嵐の中で、キング・エドワード崎の海岸とさん橋に鉄条網と爆発物を敷設させ、また探検隊基地の周りに防御陣地を築かせた[864]。

c　サウス・ジョージア島の占領

4 月 2 日 1325P 時頃、アルゼンチン海軍極地輸送艦「バイア・パライソ」が、グリトヴィケンのあるカンバーランド湾(Cumberland Bay)に侵入してきた。アルゼンチンの計画では、サウス・ジョージア島も 2 日に奪回する予定であった。しかし極めつけの悪天のため、探検隊基地に対し無線通信により「明朝もう一度来て通信する」と通告し、去って行った。この件は探検隊基地から「エンデュアランス」を経由して本国へ報告された。これを受けイギリス本土は、3 日早朝アルゼンチン軍が上陸する前に、ミルズ中尉に対し以下のような指示を行った。

もし 3 日世界時 1000 時〔以下軍用時間帯の「Z」で表す〕の「バイア・パライソ」の基地に対する要求が降伏であったなら、基地指揮官〔戦闘時においてはミルズ中尉〕は従ってはならない。基地指揮官は、上陸を行おうとするどんな試みも抵抗を受けることを明示しなければならない。もしそれからアルゼンチン軍が侵攻するなら、海兵隊分遣隊は、交戦規定(ROE)に定められたとおり武力を用い侵攻に抵抗しなければならない。しかし無益に人命を失うおそれが生じる前に、抵抗をやめなければならない。

ここで言及されている交戦規定(ROE)は、一部改訂される前の 3 月 31 日に示したものを指しており、こ

863 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 11.
864 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 11-12.

の指示を受けたミルズ中尉は若干の混乱を生じた[865]。

4 月 3 日の夜明けには天候も著しく回復し、0730P 時に予期したとおり「バイア・パライソ」から超短波(VHF)通信があり、基地の降伏を要求した。アルゼンチン軍は「エンデュアランス」が見えないため、イギリス海兵隊はいないだろうと誤解していた。そのためフリゲート「グェリコ」を海岸に接近させ、2 機あるヘリコプターのうち、1 機（アルエット：Alouette）をグリトヴィケンの偵察に発進させ、もう 1 機（ピューマ：Puma）には海兵隊員の第 1 陣を搭乗させた。ミルズ中尉は、降伏要求を短波(HF)通信でゆっくり復唱し、アルゼンチン側をいらだたせると共に、「エンデュアランス」に事態を知らせることができた。アルゼンチンは 5 分後に、全員が海岸に集合するように要求した。そのとき「グェリコ」はすぐそばまで来ており、ヘリコプターは上空を飛んでいた。ミルズ中尉は無線でアルゼンチンへ、ここにはイギリス軍がおり、その任務は上陸を防ぐことであると通告したが、完全に無視された[866]。

ミルズ中尉は、「グェリコ」からボートが派遣されるだろうと考え、さん橋まで出た。彼は上陸部隊の将校に会って、部隊を上陸させないよう説得しようと思っていた。ところがアルゼンチン軍のヘリコプターがさん橋から 30 ヤードほど離れた場所に兵員を降下させていた。ミルズ中尉は急いで防御陣地へ戻り分遣隊に合流した。降下したアルゼンチン部隊の銃撃にさらされ、またピューマ・ヘリコプターによりさらに兵員が増強されるおそれから、ミルズ中尉は部下に射撃を命じた。ピューマ・ヘリコプターはイギリス軍陣地の近くを飛行したので、銃弾が数十発命中し、兵員のうち 2 名が死亡、残りは全員負傷した。パイロットは何とか操縦して湾の反対側の陸上へ突っ込んだ。トロムベタ大佐は「グェリコ」へイギリス軍陣地の砲撃を命じた。しかし湾内にある「グェリコ」の 100 ミリメートル砲は、近すぎるため最大の俯角をとっても、低い位置にあるイギリス軍陣地を射撃することができなかった[867]。

それに対しイギリス海兵隊員は、「グェリコ」へカール・グスタフ無反動砲と M72 ロケット弾で射撃を加えた。カール・グスタフ無反動砲は 2 発発射できただけで、後は弾薬不良のため発射できなかった。しかしその 1 発が船体横の喫水線より上に命中し、大きな穴をあけた。M72 ロケット弾については、資料により命中したとするものと命中しなかったとするもの両方がある。また他の海兵隊員は、機関銃と自動小銃の集中射撃を「グェリコ」へ行い多数が命中した[868]。

その間にアルエット・ヘリコプターが「バイア・パライソ」と海岸の間を約 20 往復飛行して、不時着したピューマ・ヘリコプターの負傷者を収容し、またアルゼンチン海兵隊員を着陸させた。着陸した海兵隊員は、巧みに身を隠しながら周辺を占領し、陣地を構築し、ミルズの分遣隊に圧力を加えていった。もはや分遣隊の退却路はふさがれてしまった。さらにアルゼンチンの射撃によって、ナイジェル・ピーターズ伍長(Corporal Nigel Peters)が腕に負傷し多量に出血していた。また被弾した「グェリコ」はいったん

---

865 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 12-13.
866 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 13.
867 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 13-14; Gordon Ramsey, *The Falklands War Then and Now* (Old Harlow, Essex; After the Battle, c2009), p. 27.
868 Roger Perkins, *Operation Paraquat: The Battle for South Georgia* (Somerset; Picton, 1986), pp. 79-84; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 27.

沖へ出て、イギリスの無反動砲の届かない距離から、ミルズの分遣隊の陣地へ100ミリメートル砲の砲撃を始めた。砲の旋回機構が被弾のため故障しており、最初は陣地から遠くへ着弾していたが、船自体を動かして方向を定め、そのうち陣地の近辺に着弾するようになった[869]。

ミルズ中尉はこの状況に至って、十分アルゼンチン軍に損害を与えたこと、それ以上の抵抗が絶望的であること、および本国からの指示である「無益に人命を失うおそれが生じる前に、抵抗をやめる」に従い、アルゼンチン軍へ降伏した。イギリス軍の損害は、負傷1名（ピーターズ伍長は十分な治療を受けイギリスへ送還され完全に回復した）のみであったが、アルゼンチン軍の損害は、フリゲート艦1隻損傷、ヘリコプター1機全損、死者3名（ピューマ・ヘリに搭乗していた海兵隊員2名と「グェリコ」の水兵1名）、負傷者数名であった。圧倒的に少数で火力も劣るイギリス分遣隊は、よく戦ったと評価できる。逆にアルゼンチン軍はイギリス軍兵力の偵察が不十分なまま、イギリス軍はいないだろうという思い込みで兵力投入を行い、無用な損害を出したのであった[870]。

d　まとめ

フォークランド諸島における最初の陸上の戦いは、アルゼンチン側がイギリス側の兵力を知り（イギリス側が直前に2倍にしたことは侵攻前日までわからなかったが）、それに対して10倍以上の兵力を投入した。数時間の戦闘でイギリス軍は降伏しており、フォークランドを占領するという目的を十分に達成し、横綱相撲といってよい。上陸作戦も、それが専門である海兵隊部隊が事前に訓練を行って本番に挑んだものであり、当日上陸がスムーズに行ったことは、アルゼンチン海兵隊の能力の高さを示すものだろう。しかし総督公邸の攻撃については、わざわざ占領のため準備していた部隊をその任から外し、総督公邸について知識のない部隊を投入したのは理解できないところである。

他方イギリス軍は、圧倒的なアルゼンチンの兵力に直面しても、武力による抵抗を行った。イギリスが抵抗せずただちに降伏しても、軍事的結果は同じであっただろう。また結果的にイギリス側の死者はゼロであったが、武力による抵抗を決意するさい、死者がでないという保証はなかったはずである。しかし政治的に考えた場合、無抵抗で互いに一発も発砲せずに占領された場合、アルゼンチンに武力侵攻ではなかったという宣伝の口実を与えることになっただろう。その意味でイギリス海兵隊員は、国益を守るため圧倒的に劣勢な状況でも義務を果たしたといってよいだろう。また十分銃火を交わした後で死者の出ないうちに降伏したことは、イギリス人の冷静な性格をみることができる。

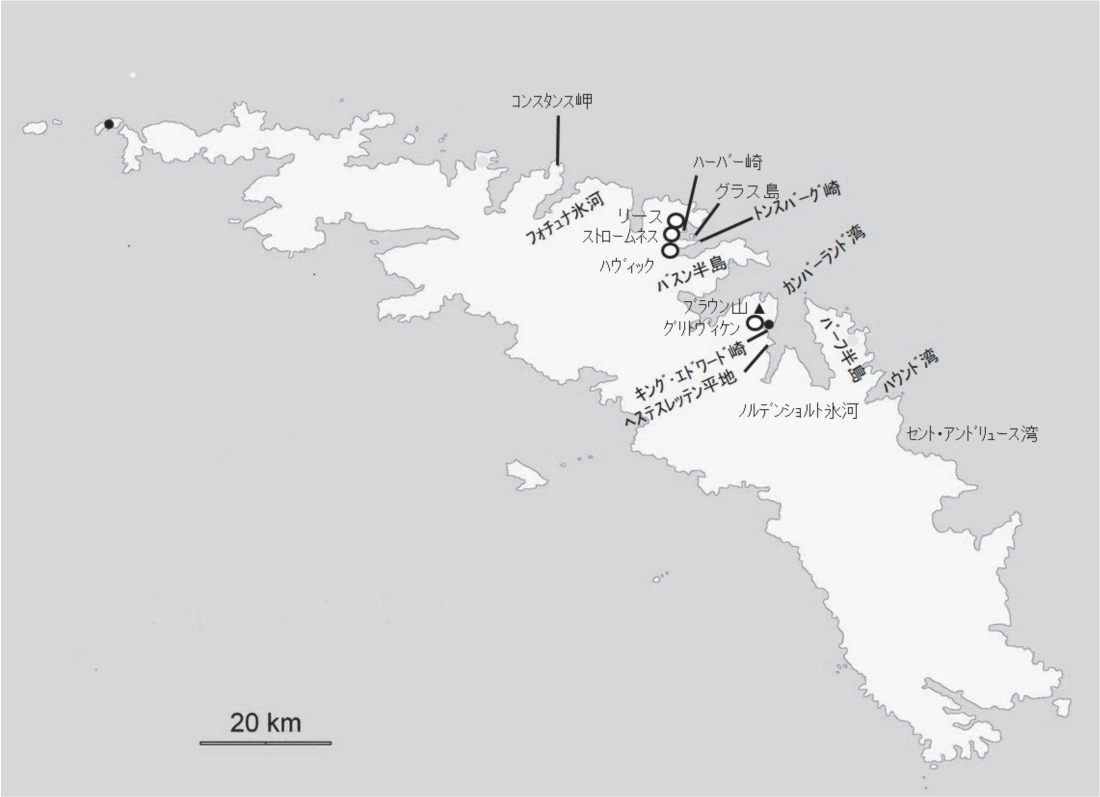
結局のところ、アルゼンチン軍は「マルビナス」奪回には成功したが、当初もくろんでいた奇襲は成功しなかった。これは直接この陸上戦闘に関係することではないが、すでに3月28日の時点でアルゼンチン艦艇の無線交信を傍受したイギリスがアルゼンチンの侵攻意図を察知し、奇襲の要素はなくなっていた。

---

869 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 14; Perkins, *Operation Paraquat*, pp. 84-85; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 27.

870 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 14; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 42; Perkins, *Operation Paraquat*, p. 85; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 27.

歴史書をひもとくまでもなく、イギリスが通信諜報等の情報戦にたけていることは周知の事実であり、無線封鎖も行えなかったアルゼンチン軍の能力には大いに疑問がもたれるところだろう。結局奇襲による無血占領という機会を自身で台無しにしたわけだが、奇襲が成功したとしてもイギリス人が抵抗しないという確証をアルゼンチン人に 図第8 たのだろうか。それはこの後でも延々と出てくるアルゼンチンのイギリスに対する見込み違いの数々を見ると、深刻な考察がなされていたのか大いに疑問である。またそれが結局武力侵攻という形になり、国際世論の場で非難されることになったのであった。




図第 16　サウス・ジョージア島地図

出典：Wikimedia Commons (http://en.wikipedia.org/wiki/File:SG-Settlements.png)を基に、Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I: The Origins of the Falklands War* (London; Routledge, 2005), p. xviii; Gordon Ramsey, *The Falklands War Then and Now* (Old Harlow, Essex; After the Battle, c2009), pp. 96-97を参考にして地名を加えた。

## 第２節　アルゼンチンのフォークランド陸上防衛体制

### 第１項　アルゼンチン軍のフォークランド諸島投入部隊と装備等

４月２日アルゼンチン海兵隊を主体とする部隊が、フォークランドを占領した。しかしフォークランドに駐屯する部隊は陸軍であり、フォークランド諸島に近いアルゼンチンのチュブ州(Provincial del Chubut)に駐屯する第 9 機械化歩兵旅団(Brigada de Infantería Mecanizada IX)第 25 機械化歩兵連隊(Regimiento de Infantería Mecanizado 25)であった。その日のうちに航空機により 630 名の将兵がフォ

ークランドへ輸送された。海兵隊の多くは、輸送機の帰りの便でアルゼンチン本国へ戻っていった[871]。

新たにアルゼンチンが獲得したフォークランド諸島、サウス・ジョージア島、サウス・サンドイッチ諸島には軍政がしかれ、その長は陸軍中将(General de División)オスバルド・ガルシア(Osvaldo García)であった。ガルシア中将は 4 月 2 日占領直後のスタンレーに来て、一連の宣言を行った。しかしその後彼はすぐアルゼンチン本土へ戻ってしまった。7 日には、マルビナス総督(la gobernación de las Malvinas) 陸軍少将(General de Brigada)マリオ・メネンデス(Mario Benjamín Menéndez)がスタンレーに到着した[872]。第 25 連隊の駐屯は、あくまでイギリスが奪回を行わないという前提のものであった。それが国際連合でイギリスの立場に立った安全保障理事会決議第 502 号が決議され、イギリスが任務部隊を編成出航させると、その前提はもろくも崩れ去った。アルゼンチンはフォークランドを増強しなければならなかった。最初に選ばれた増強の部隊は、同じく第 9 機械化旅団の第 8 機械化歩兵連隊(Regimiento de Infantería Mecanizado 8)で、4 月 6 日に空路フォークランドへ輸送された。また海兵隊からは海兵隊第 5 歩兵大隊(Batallón de Infantería de Marina 5)が 4 月 8 日に増強された[873]。

続いて首都ブエノスアイレスの周辺に配備されている第 10 機械化歩兵旅団（Brigada de Infantería Mecanizada X、主な部隊は第 3、第 6、第 7 機械化歩兵連隊: Regimiento de Infantería Mecanizado 3, 6, 7）がフォークランドへ派遣されることになった。4 月 9 日早朝に第 10 旅団には 36 時間以内にフォークランド諸島へ移動するよう命ぜられた。旅団の幹部は、入営したばかりの新兵を、経験を積んだ予備役兵に交代させるため、大急ぎで予備役の招集を行った。招集を拒否する者はほとんどなく、第 10 旅団では大部分の新兵を予備役兵に交代させることができた[874]。

その後、4 月 21 日にアルゼンチン空軍のボーイング 707 はイギリス任務部隊の南下状況を偵察し、航空母艦 2 隻と駆逐艦・フリゲート艦 8 隻の存在を報告した。アルゼンチン軍は任務部隊の構成からイギリスがフォークランド奪回の決意が固いことを認識した。ガリチェリ大統領が翌 22 日にスタンレーを訪問しメネンデス総督と状況を話し合った。両者はさらにフォークランドの兵力を増強することに合意した。そのため外交関係でアルゼンチンと一番問題の少ないウルグアイ(Uruguay)との国境に配備されている、第 3 機械化歩兵旅団(Brigada de Infantería Mecanizada III、主な部隊は第 4、第 5、第 12 機械化歩兵連隊: Regimiento de Infantería Mecanizado 4, 5, 12 )をフォークランドへ派遣することになった。これでフォークランド諸島へ配置された兵員は合計で約 13,000 名になった。なお今まで述べてきたフォークランドへ派遣された旅団またはその隷下の連隊はいずれも「機械化」された部隊であったが、フォークランド派遣時には機械化装備は本土に残し、みな実質歩兵部隊となったので、以下では「機械化」の呼称を省略す

[871] Martin Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas' : The Argentine Forces in the Falklands War* (London; Penguin Books, 1990, first published in 1989 by Viking), pp. 40-41.
[872] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 43; Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston; Faber and Faber, 1991, first published 1990), p. 149.
[873] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 47.
[874] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 48-52.

る[875]。

第 3 旅団の駐屯するウルグアイ国境付近は亜熱帯地方であり、これから冬を迎えるフォークランド諸島へ派遣するのは最も不適当な部隊だった。当初第 3 旅団は 4 月 16 日からチュブト州へ移動し、第 9 旅団がフォークランドへ移動した穴を埋めるはずであった。それがさらにフォークランドで戦うことになったのだった。人員は航空機で移動し個人携行品しか持っていなかった。その他の支援兵器、無線機、車両、スコップ、銃清掃用具、予備弾薬などはすべて輸送船へ搭載した。しかし 4 月 12 日からイギリスによるフォークランド周辺の海上封鎖が始まり、船舶はフォークランド諸島へ到着しなかった[876]。

この海上封鎖による重装備等の不足は、他の部隊においても程度の差はあれ同様であった。ある部隊は迫撃砲、機関銃、無線機および調理器具が全く届かず欠いたままであった。その他、無線機の電池とか武器清掃用の油脂など、細かい基本的な物が不足し、また故障した小銃を携行あるいは個人携行武器を持っていない兵士までいたのであった[877]。

フォークランド諸島へ配備されたこれらアルゼンチン軍部隊の編成について、4 月 26 日マルビナス諸島総軍司令官(jefe del Comando Conjunto de las Islas Malvinas)にマルビナス総督メネンデス陸軍少将が就任した。フォークランド諸島にはこの他に陸軍少将が 3 名おり、第 9 旅団長陸軍少将アメリコ・ダエル(Américo Daher)は、マルビナス諸島総軍司令部の参謀長となった[878]。

第 10 旅団長陸軍少将オスカー・ホフレ(Oscar Luis Jofre)はプエルト・アルヘンティノ集団(Agurupacíon Puerto Argentino)司令官に任命された。この集団は首都スタンレーを中心として、第 3, 4, 6, 7, 25 連隊、海兵隊第 5 大隊、第 3 砲兵群(Grupo de Artillería 3)、第 4 空中機動砲兵群(Grupo de Artillería Aerotransportado 4)、海兵隊野砲大隊 B 中隊(Batería B, Batallon de Artillería de Campaña Infantería Marina)、第 601 高射群(Grupo de Artillería Antiaérea 601)、第 101 高射群 B 中隊(Batería B, Grupo de Artillería Antiaérea 101)、 第 10 装甲偵察車小隊(Escuadrón Exploración de Caballería Blindado 10)、第 601 ヘリコプター大隊(Batallón 601 de helicópteros) 等の部隊が指揮下にあった[879]。

第 3 旅団長陸軍少将オマル・パラダ(Omar Edgardo Parada)は沿岸集団(Agurupacíon Litoral)司令官となった。沿岸集団とプエルト・アルヘンティノ集団の作戦境界は東フォークランド島の北部を南北に分割する線（公式に示したものは未見だが、Middlebrook および Freedman and Gamba-Stonehouse の地図上ではほぼ西経 58 度 31 分の線に近い）で分割され、その線の東はプエルト・アルヘンティノ集団、西は西フォークランド島も含み沿岸集団の担当であった。沿岸集団は、東フォークランド島グース・グリーンに、イタロ・ピアッヒ陸軍中佐(Teniente Coronel Ítalo Ángel Piaggi) を指揮官として第 12 連隊および第 25 連隊の B 中隊を主力とするメルセデス任務部隊（Fuerza de Tareas Mercedes）を配置した。また西フ

875 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 54-56; Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* pp. 145-146.
876 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 56-57.
877 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 64.
878 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* p. 145.
879 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* pp. xxvi-xxvii, 145; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 58-59.

ォークランド島には、ポート・ハワード(Port Howard)に第5連隊、フォックス・ベイ(Fox Bay)に第8連隊と第9工兵中隊を配置した。しかし沿岸集団司令官のパラダ少将は戦争中スタンレーに所在し、アルゼンチン軍がフォークランド諸島で通信機材に事欠いていたことを考えると十分な指揮は行えなかっただろうし、2個の集団にアルゼンチン軍を分割した意味もなかった[880]。

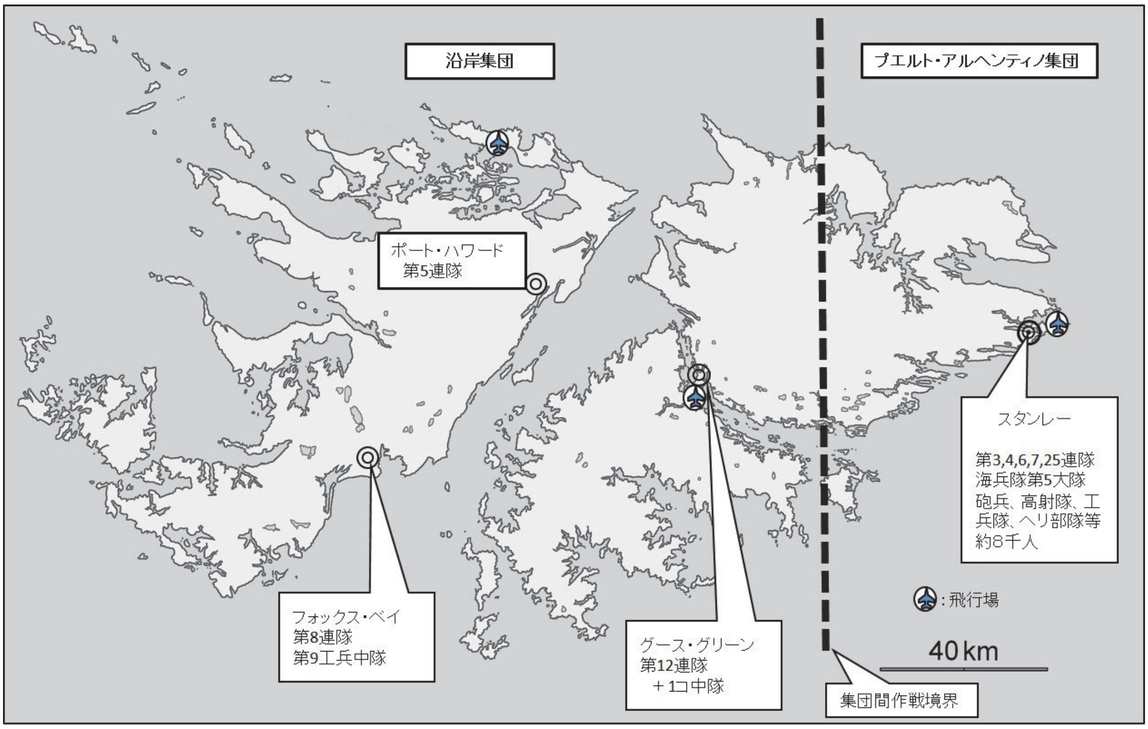
フォークランド諸島へ揚陸されたアルゼンチンの重装備を挙げてみると、まず海兵隊 2 個野砲中隊(Baterías A & B, Batallon de Artillería de Campaña Infantería Marina)のオットー・メララ 105 ミリメートル砲が 6 門、また陸軍第 3 砲兵群および第 4 空中機動砲兵群にもオットー・メララ 105 ミリメートル砲が各々18 門配備された。さらに戦争間に空輸でスタンレーへ 155 ミリメートル榴弾砲を 4 門持ち込んだ。これらを合計するとイギリス軍が揚陸した砲の数よりアルゼンチンの方が多かった。対空火器では、海兵隊が最初に 30 ミリメートル対空機関砲 12 門とイギリス製タイガーキャット地対空ミサイル発射器 3 基をフォークランド諸島に持ち込んだ。その後陸軍の第 601 対空連隊が 2 連装 35 ミリメートルエリコン対空砲 12 門、20 ミリメートルラインメタル対空砲 3 門、タイガーキャット地対空ミサイル発射器 3 基、2 連装ロラン地対空ミサイル発射器 1 基を同諸島へ配備した。また空軍は 20 ミリメートル機関砲 8 門を配備した。その対空能力は、ほとんどが昼間好天時に目視で交戦する時に限られた。また海兵隊は、イギリス軍が陣地に対しヘリボーン作戦を行うのを恐れ、12.7 ミリメートル重機関銃 27 門をフォークランド諸島へ追送した[881]。

その他工兵部隊では海兵隊工兵中隊(Compañía de Ingenieros Anfibios/ Infantería Marina)がフォークランド諸島で唯一工作機械等を完備した部隊だった。陸軍の工兵部隊も 2 個中隊が上陸したが、イギリス軍の海上封鎖のため工作機械等のほとんどをフォークランド諸島へ上げることができなかった。海兵隊工兵中隊は、スタンレー周辺の海岸を要塞化するよう求められたが、スタンレー以外に上陸できる場所は、いくらでもあるので意義を感じなかった[882]。

機動力については、アルゼンチン軍は上陸作戦時に海兵隊が装軌車両を用いたが、フォークランド諸島を奪回すると、アルゼンチン本土へ帰還させてしまった。守備に移行してからは、アルゼンチン側に装軌車両はなかったのである。またヘリコプターについては 26 機フォークランド諸島へ配備されたが、大部隊を動かすには少数であり、イギリスの上陸地点へ対抗部隊を投入するような能力はなかった[883]。

---

[880] Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* pp. xxvi-xxvii, 145-146; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 57-60.
[881] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 60-61; Gordon Ramsey, *The Falklands War Then and Now* (Old Harlow, Essex; After the Battle, c2009), pp. 110-111.
[882] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 61.
[883] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 64.




図第 17　アルゼンチン軍兵力配備

フォークランド諸島の図はウィキメディア・コモンズ（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Egmont-Soledad.PNG）を加工した。兵力配備は、Martin Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London; Viking, 1989), pp. 58-59; Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston; Faber and Faber, 1991, first published 1990), pp. xxvi-xxvii. を参照とした。

### 第 2 項　アルゼンチン軍のフォークランド防衛構想

これまでアルゼンチンがフォークランドに揚陸した部隊とその主な装備を記述したが、その陸上における防衛戦略は、どうだったのであろうか。そもそも島嶼防衛を考える場合、航空優勢を保持していれば、相手は侵攻できない。しかし航空優勢だけでは、相手が潜水艦で海上封鎖を行った場合、大きな空輸能力を持たない限り、島嶼に対する補給は全うできない。島嶼を航空基地とする場合航空作戦が継続できないし、島嶼の守備隊も能力を全く失うことはなくとも、大いに損ねることは確かだろう。ここの記述では陸上戦闘を主眼にしているが、航空優勢を確保し対潜戦を優位に進めなければ陸上戦闘で勝利を収めることは困難なことは確かだろう。

アルゼンチンは、接近して来るイギリス空母任務部隊が上陸部隊もともなっており、またその上陸部隊はスタンレーの近傍に上陸するだろうと考え、それが作戦の基本となっていた。スタンレーより遠く離れた場所にイギリス軍が上陸した場合は、スタンレーにある予備の歩兵戦力と特殊作戦部隊をヘリコプターで投入し妨害しようという考えであった[884]。しかし装軌車もなければヘリコプターも少数であり、フォークランド諸島の地誌上徒歩で急速な部隊機動はできず、機動戦は不可能であった。陣地戦しかもスタンレー周辺に兵力の四分の三を集中したのであった。

海上封鎖されて航空優勢もイギリス側に大いに分がある状態で、アルゼンチンは陸上戦闘で何ができる

[884] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 62-63

のだろうか。太平洋戦争の島嶼防衛戦でも日本は航空優勢をほとんど失い、制海権もない状態であった。その状態で、日本は硫黄島や沖縄で、勝てはしなかったにしろ、大きな損害を上陸軍に与えたのだった。その要点は何かといえば、徹底した築城と可能な限りの火力集中であった。アメリカ軍の徹底した爆撃・砲撃に対し、地下深くあるいはコンクリートでその火力に上回る防御壁を築いて隠れ、アメリカ軍が歩兵を立てて接近してきたとき大量の火力で相手を圧倒する戦術であった。

それからみるとアルゼンチンの陣地戦もあながち間違っておらず、その実行の仕方が間違っていたといえるだろう。アルゼンチンは海上封鎖の完了する前に、大量の築城資材、建設労働者、火砲、弾薬、食糧、地雷、機雷、障害物を送りこみ、徹底した工事を行えば、イギリス軍が上陸しても、冬の季節となり任務部隊が活動できなくなり、外交交渉の可能性が生まれたかもしれない。

## 第3節　イギリス軍の反攻準備

### 第1項　イギリスの迅速な部隊派遣

イギリスのフォークランド諸島奪回のための作戦準備で、なによりも重視されたのはスピードであった。これはフォークランド諸島周辺の気象特性で、これから厳しい冬に向い6月に入れば上陸作戦は不可能になるからであった。しかしスピードを重視したため、上陸作戦を行う任務部隊は、まとまった作戦計画なしに出航せざるを得なかった[885]。この作戦は「コーポレート作戦」(Operation CORPORATE) と名付けられ、任務部隊をフォークランド諸島周辺の領域に移動し、その周辺で行われる海上・海中、陸上および航空の戦闘と、その後にイギリスへ帰って来るまでのすべての活動を含んでいた[886]。

任務部隊中の陸上作戦を行う部隊には、海兵隊(Royal Marines: RM)として唯一残されていた海兵隊第3コマンド旅団(3rd Commando Brigade)が4月2日早朝に72時間以内に出動せよ、との命令を受けた。この旅団は、第40、42、および45の3個コマンド大隊(40, 42 and 45 Commando, RM)を基幹としていた。またこの旅団の不十分な防空能力を補うため、イギリス陸軍防空連隊のレピア地対空ミサイルを装備したT中隊(T Battery, 12 Air Defence Regiment, RA)が付加された。また76ミリメートル砲装備のスコーピオン4両、30ミリメートル機関砲装備のシミター4両およびサムソン装甲回収車1両（いずれも装軌式で同一シャーシ）からなる偵察装甲車隊(Medium Recce Troop, B Squadron, The Blues and Royals)も付加された。4月3日には旅団に陸軍第3空挺大隊(3rd Battalion, The Parachute Regiment) が付加された[887]。同日、サッチャー首相はイギリス下院議会でフォークランド諸島を奪回するために任務部隊(Task Force)を編成することを宣言した[888]。こうして4月5日には最初に海兵隊の部隊を搭載したイギリス艦艇が、ポーツマス(Portsmouth)等から南大西洋に向け出港した（「コーポレート作戦」時における第3コマンド旅

---

885 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 50.
886 Martin Middlebrook, *Operation Corporate: The Falklands War, 1982* (London; Viking, 1985), p. 68.
887 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 53.
888 David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London, Guild Publishing, 1987), p. 68.

団の編成を第 4-1 図に示す)。

しかしこの時期は上陸作戦の方針、構想あるいは目的がはっきりしないまま、出航を急ぐことが優先されたため、貨物の搭載順序などに大きな問題を残した[889]。たとえば 4 月 7 日に 317.0 任務隊指揮官(Commander Task Unit: CTU 317.0)クラップ准将(Commodore Michael C. Clapp)は、作戦構想を全く知ることができない、と不満を抱いた。搭載を急がされ、民間徴用船を割り当てられ、はっきりした上陸作戦の目的がないものだから、限られた空間に基本的に自分たちが重要だと考えるものに絞って搭載していた。確固とした情報を得て、参謀本部と国防省が明確な目的を示したら、搭載のやり直しの問題が起こることをクラップは心配していた[890]。さらに 4 月 9 日にクラップは、艦隊最高司令官(CINCFLEET)兼第 317 および第 324 任務部隊指揮官(Commander Task Force: CTF 317/CTF 324)海軍大将ジョン・フィールドハウス卿(Admiral Sir John Fieldhouse)へ、アセンション島(Ascension Island)で軍事訓練が必要なこと、また人および貨物を大急ぎで積載したので、アセンション島で再度積み直しの必要があることも訴えた。何から順に降ろしていくか優先順位が明確さを欠いていたので、搭載する際に恣意的に積み込んだのだった[891]。ジェレミー・ムーア海兵隊少将(Major General Jeremy Moore)はのちに、「作戦構想の説明を受け、戦術的見地で搭載を行ったなら、出発が 2 週間遅れても、5 月 21 日に上陸できた。その方がアセンション島で再度の完全な積み直しを行う無駄な努力するより良かった。」と述べている[892]。

### 第 2 項　イギリスのアルゼンチン陸軍に対する見積もり

アルゼンチン陸軍の装備は、戦争前には著しく改善されていた。しかしそれらは、アメリカやその他西側諸国ならびに自国製の雑多なものの寄せ集めでもあった。イギリスは、アルゼンチンの弱点は砲兵火力と防空であるとみていた。そのうえフォークランド諸島駐屯のアルゼンチン軍には、高性能の火砲は一部分しか展開していないと予想していた。また装備が少数多岐にわたり、アルゼンチン本土南部の鉄道輸送網が不十分であることと、軍に機械的な輸送手段が欠如していることから、アルゼンチン陸軍は極端な補給・整備・維持の問題に直面するだろうと予想した[893]。

イギリスはフォークランド諸島にあるアルゼンチンの重装備が、水陸両用装甲兵員輸送車 LVTP-7 が 22 両のみと考えていた。事実はフォークランド上陸作戦終了と共に、アルゼンチン海兵隊のほとんどはアルゼンチン本土へ引き上げ、LVTP-7 もそれに伴い全数本土へ帰還していた。イギリスはアルゼンチンが 105 ミリメートル砲の小部隊を配置しているだろうことは正しく予想していた。またアルゼンチンの最終的フォークランド駐屯兵力は 5,000～8,000 名と見積もっていた[894]。

---

[889] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 54; Rodney A. Burden, Michel I. Draper, Douglas A. Rough, Colin R. Smith, David L. Wilton, *Falklands the Air War* (Dorset; Arms and Armour Press, 1986), pp. 428-443.
[890] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 54.
[891] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 54.
[892] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 54.
[893] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 80-81.
[894] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 81.

フォークランド諸島の地勢から、アルゼンチン軍は固定防御の態勢をとるであろうと想像された。樹木がなく隠ぺいできないこと、また泥炭地か岩石地帯であることから、防御陣地の準備は困難であり、大量の工兵資材を必要とした。しかしアルゼンチン側にはイギリスが来襲するまでに時間があった。また地形の偵察、予備兵力を移動するための道路の設営およびヘリコプター離発着場の設営もできたはずであった。戦闘が始まったならば、ヘリコプターを使わない限り、予備兵力を移動させることは困難になると思われた。しかしヘリコプターが多数使用されることは、それによって大量の燃料を消費し、また多くの整備作業を必要とするので、海上封鎖を受けているアルゼンチン軍の状況では、ありえそうにないことであった。同様の理由から、戦車は数両以上使われることはないものと見なされた。しかしイギリス軍は、アルゼンチン軍のヘリコプター運用能力については過小評価していた。彼らは、大きな損失を伴いながらも、必要ならば天候不良や夜間でも 1 個連隊を輸送するだけの高い能力を持っていた[895]。

### 第 3 項　初期のイギリスの上陸作戦方針の変遷

イギリスには、フォークランド諸島が軍事的危機におちいったときのため緊急事態対処計画は存在しなかった。それどころか NATO 域外のいかなる地域においても 1 個旅団より大きい兵力の運用を支援する計画はなかった。また詳細な計画を立てるための時間も信頼できる情報もなかった。当時予想される軍事行動で詳細な計画があり、フォークランドにもっとも似たものは、北部ノルウェーへの大規模展開であった。これに 11,000 キロメートルを移動する余裕を見込めば、何をどれくらい持っていけばよいか、もっともよい手引きとなった[896]。

イギリスは、任務部隊の戦闘能力の持続力についても判断しなければならなかった。体力の消耗と資源の消費、アルゼンチンの攻撃に直面して、どれくらい長期にわたり効果的な作戦を継続できるか、規模を縮小しなければならないのか、あるいは放棄すべきか[897]、これらのことは相手もあることであり、実際に戦闘にならないと、はっきりわからないことであった。

フォークランド諸島は道路のない場所だと知られていたので、車両はほとんど持っていかなかった。大部分の地域は、装軌車両か、4 輪駆動車でも荷が軽くなければ路外走行することができなかった。それに対してヘリコプターは、船から貨物を海岸に揚陸するにも、陸上で荷物を前線まで運ぶにも、重宝されるはずであった[898]。4 月 10 日には、部隊が海岸に上陸したなら、ヘリコプターを使って船から直接支援することが合意された。その時点においては、第 1 に航空優勢と海上優勢が確保されなければ上陸作戦が許可されないというのが前提であり、そうすることが可能であると思われたからである[899]。

上陸作戦についてもなかなか方針が決まらなかった。フォークランド諸島の東側に上陸すれば、航空脅威は減少するが、アルゼンチン駐屯軍の脅威は増大し、西側に上陸すると航空脅威は増大するとみられた。

[895] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 81.
[896] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 54-55.
[897] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 71.
[898] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 54-55.
[899] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 54.

上陸作戦前にアルゼンチン航空戦力を撃破すればよいのであるが、アルゼンチン軍指揮官がまさに上陸作戦に備えて航空戦力の温存を図ったなら、うまくゆかないだろう。おそらくアルゼンチン軍指揮官は、イギリスの上陸作戦が始まったなら戦闘を回避することはできないと予測された。しかし上陸作戦の前ならば彼らに戦闘を行う義務はないのである。とくに彼らがイギリス軍の優秀さを認めているのなら、ますます上陸作戦前の戦闘を回避すると見なされた[900]。

もし航空と海上の優勢が得られないなら、上陸作戦は厳しいものとなる。イギリス政府が損耗の多い作戦を強行しようとしたなら、フォークランド諸島の奪回に失敗し、名誉は地に落ちる。それとは反対に上陸作戦を放棄することは、この島に関する交渉権を失ってしまうだろう。もう 1 つの戦略はアルゼンチンのフォークランド所有を放棄させるために、長期の封鎖を行うことであった。しかしそれでアルゼンチンが降参するかは、決して明確なものではなかった。冬の季節が到来し、防御側に有利になり、アルゼンチンが居座り続けるかもしれなかった。長期封鎖を行うとイギリスは島民の状態を心配して、逆に圧力がかかるかもしれなかった。3 番目の戦略は、上陸を見合わせて、成功可能な上陸が行える状況が作り出されるまで、上陸群をアセンション島に控置するか南大西洋上で待たせておくことが考えられた[901]。

もし上陸作戦がうまくいったとして、それから次に上陸部隊が何をなすべきかが問題であった。フォークランド諸島の一角にイギリスの存在を示すことでイギリス政府の目的が達成されるかは不明であった。逆にスタンレーにおける戦闘が避けられないとすると、地域島民（スタンレーに島民の大部分が集中していた）の安全をどうやって確保するか見通しがつかなかった。フォークランド諸島の再占領が進捗するとしても、それはアルゼンチンの抵抗力の強さとイギリスの作戦継続能力に左右される。もし抵抗が頑強であれば、今の上陸部隊で十分であるか不明であった[902]。

4 月 14 日に参謀本部(Chiefs of Staff)に提出された見積もりは、翌日フィールドハウス海軍大将に送付され、作戦計画の方針を定める基礎となった。その見積もりでは、イギリスがフォークランド諸島周辺で制海権と十分な航空優勢を確保できると予想された。またスタンレーに近い地域は、早期に決定的な軍事的効果を得るために上陸作戦を行う場所として最適であり、戦術的奇襲効果も得ることができる、としていた。スタンレーから遠い地域に上陸すると、アルゼンチン駐屯部隊に対し十分な圧力をかけることができない。しかし近すぎると、イギリス軍が脆弱なうちに、早期にアルゼンチン軍の攻撃を受けることとなる[903]。

この時期計画策定者は、スタンレーを困難な目標と考えていた。丘にかこまれ、その丘は監視哨にも防御陣地にも適当な場所であった。またスタンレーへの直接の攻撃は、島の多数の島民を犠牲にする危険もあった。だから上陸後の作戦は、選ばれたアルゼンチン軍陣地への限定的攻撃となり、また特殊作戦部隊が主体となることが予想された。このような攻撃に対して、アルゼンチン駐屯軍が希望を失い士気を喪失

[900] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 80.
[901] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 80.
[902] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 80.
[903] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 198.

することは、保証されていなかった。彼らは塹壕にこもり抵抗を続ける可能性もあった。さまざまな要素の中でもっとも懸念されたことは、島民のこうむる犠牲であった。この時期では島民へ対する考慮から、長期にわたる封鎖も含め直接攻撃に代わる案を検討する傾向があった。陸軍参謀長の陸軍大将エドウィン・ブラモール卿(The Chief of the General Staff, General Sir Edwin Bramall)は、陸上作戦に適切な構想がないことを心配していた。またブラモール大将は上陸作戦の実行可能性と必要性について疑念を抱いていたので、基本的戦略が固まるまでは陸上作戦の構想は放置されるものとみていた[904]。

このような考えから第 3 コマンド旅団へ兵力の追加を行うことは、必要な追加兵力ではなく、兵站支援上にも再補給にも問題を増やすだけとみられ、躊躇されていた。それでもなお、上陸後のことはさておき、上陸作戦につきまとう困難を考えると、兵力増強を求める用心深い意見が大勢を占めた。参謀本部は戦時内閣へ第 5 歩兵旅団(5 Infantry Brigade)の中から、第 2 空挺大隊(2nd Battalion, The Parachute Regiment) 900 名を第 3 コマンド旅団へ増強するよう求めた。この件はサッチャー首相に 4 月 15 日報告され、この大隊を運ぶために適当な艦船を増加することも合わせて承認された[905]。

### 第 4 項　イギリス軍指揮官の作戦に対する考え

4 月 12 日ウッドワード少将は大西洋上から次の電報により本国政府の注意を喚起した。

もはやアルゼンチン軍は十分な時間が与えられているので、イギリス軍が厳重に防衛されているだろうスタンレー空港を奪回することは、大変な犠牲とスタンレー市街に対する付随的損害なしにできないだろう。そうであれば、フォークランド諸島へ急いでもなんら有利な点はない。それならば海上封鎖を続けて、必要な装備を得て、アルゼンチン軍の集中するところを避けて、たとえば西フォークランド島に上陸し飛行場を設置する。そしてハリアー(GR.3)を、空母「ブルワーク(Bulwark)」〔予備役空母を現役に戻し〕に搭載するか、アセンション島から空中給油してこの離着陸場へ運ぶ。これは非常な助けとなり、残りのシー・ハリアー(Sea Harrier)を防空に専念させることができる。これは安い選択肢ではないが、他に代替手段がない。少なくとも早期占領が必然的にもたらす結果より、人命の損失は著しく少なくなるだろう[906]。

それに対するフィールドハウス海軍大将の回答は、ウッドワード海軍少将の考えが完全に外れてはいないことを示した。

我々も全く同じ立場で考えている。何よりも本官は、急いで行う上陸作戦の機会がすでに過ぎ去っていると確信している[907]。

---

904 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 199.
905 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 199.
906 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 199-200.
907 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 200.

4月15日の参謀本部の計画方針は、明白に全面的な陸上戦を行うことを忌避しており、海岸に立てこもることという考えを促進するものであった。しかしフィールドハウス大将の本心は、フォークランド諸島の全面占領の計画が必要であるというものだった[908]。

他方ウッドワード少将はフィールドハウス大将から難題を投げかけられていた。それは2隻の空母のうち1隻が戦闘やその他の理由で使えなくなった場合どう対処するかというものであった。これは1つしか離着陸できる場所がない場合、シー・ハリアー運用の安全が確保できないので、全作戦を放棄して引き揚げなければならないからであった。それに対するウッドワード少将の回答は、西フォークランド島に離着陸場を造成して、イギリス空軍のファントム(Phantom)戦闘機を配備し、長期にわたって艦隊とフォークランド諸島の防空能力を増強するというものだった[909]。

しかし東フォークランド島に残ったアルゼンチン軍はどうするのか、という問題については、西フォークランド島に防衛可能な立てこもりできる場所を確保できるなら、イギリスの交渉能力がより高まるというものであった。ウッドワード少将は、もし西フォークランド島が不適切ならば、東フォークランド島南部のラフォニア(Lafonia)にあるロー湾(Low Bay)が、海上および上空からの攻撃から防御できる場所であると考えていた[910]。

ウッドワード少将は、フィールドハウス大将からもう1つ、「南へ急げ」と言われていた。ウッドワードは、南下する上陸部隊を護衛しなければならないことを信じていた。しかし彼は、クラップ准将とフィールドハウス大将の間で南方への移動を行う前にアセンション島でどれくらい準備を行わなければいけないか、議論が行われたことを知らなかった[911]。

クラップ准将とトンプソン准将(Commander Task Unit 317.1: Brigadier Julian H. A. Thompson)は、まだ南方へ行く準備が完了していなかった。彼らには部隊を訓練する時間が必要だったし、それ以上に船に大急ぎで積み込んだ物資を積み替えなければ、アセンション島を出航することができなかった。彼らは上陸地点については、上陸に続いてフォークランド諸島の完全占領が当然と信じており、その最終的目標に向かうのに最適な場所に上陸するべきと考えていた[912]。

4月17日には、任務部隊がアセンション島へ集まり始めていた。この日、本国から任務部隊司令官フィールドハウス海軍大将が、任務部隊司令部の参謀を伴いアセンション島へ航空機で来訪した。彼らは航空母艦「ハーミーズ」上で、フィールドハウスの指揮下にある、空母戦闘群指揮官ウッドワード海軍少将、水陸両用群指揮官クラップ海軍准将および上陸群指揮官トンプソン海兵隊准将ならびにその幕僚と、作戦の全様相について会議を行った。その会議では、初めて作戦の全般構想とタイムテーブルが示された。それによると水陸両用群および上陸群は4月19日にアセンション島にそろい、4月29日にそこを出発し、

[908] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 200.
[909] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.
[910] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.
[911] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.
[912] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.

フォークランド諸島には 5 月 16 日到着する予定であった。これはクラップとトンプソンによる、上陸部隊は船内の貨物を上陸作戦に向くように積み直さなければならないという強硬な主張を最大限入れると共に、5 月を過ぎれば、兵站の維持および上陸部隊兵士の健康・士気に大きな負担がかかり、空母戦闘部隊の支援船の支援能力が尽きてしまうからであった。上陸地点はまだ決まっていなかったが、サン・カルロスがすでに強力な候補地として挙がっていた[913]。

### 第 5 項　上陸作戦概略の策定

フィールドハウス大将はアセンション島から帰国すると、フォークランド諸島へ上陸する作戦「サットン作戦(Operation SUTTON)」を立てるための作戦の概略を準備し、4 月 20 日参謀長委員会議長に示した。これは、フォークランド諸島を奪回するという観点から、いつ、どのようにしてイギリス軍をフォークランド諸島へ上陸させるかをまとめたものである。以下にその大枠を示す。フォークランド諸島の強風波浪の天候は 4 月下旬から頻繁となり、冬は 5 月中旬から始まる。月に 15 日は雨となり、5 日は嵐である。長期間海上にいると、特に悪天の場合乗船している兵員の疲労が著しくなる。また悪天は、上陸後に開けた場所や標高の高いところでは、兵員の士気と生存上で問題となる。反面いったん上陸してしまえば、この悪天は北極圏での経験を積みよく訓練されたイギリスの兵士には好ましいと思われた。逆にアルゼンチン軍は、兵員の宿泊場所を得るため、野原ではなく入植地、特にスタンレーの近傍に集中するだろうと想像された。

兵員の士気および体力、気象条件、政治の要求および軍事的判断を考えると、すべて早期に上陸を行うことが好ましかった。上陸にふさわしい期間は 5 月 14 日から 23 日の間に絞られた。空母戦闘部隊の戦域への進出と最初の上陸作戦の実行には、十分時間の余裕があるので、航空優勢の確立と、フォークランド諸島にあるアルゼンチン軍飛行場の無力化は、達成されるものと考えられた[914]。概略では、上陸地点は具体的に示されず、今後の情報収集とさらなる研究によるものとされた。情報を得るために、シー・キング(Sea King)・ヘリコプターか、潜水艦を使って特殊作戦部隊をフォークランド諸島へ潜入させることが示された[915]。

この概略に対しイギリス陸軍参謀は、上陸以後の陸上作戦について、いつ発動され、目的は何であり、それに伴う問題点について検討がなされていないと意見を述べた。また以下の疑問点も表明した。「陸上軍は、決意を持ったアルゼンチン軍に対し、それに突撃をかけ占領し維持するだけの十分な兵力を持っているのか。政治家は上陸作戦を行うよりも、外交手段も合わせた他の作戦を好むのではないか。」これらの疑問が解決した上で全面的にフォークランドを占領する計画を支持した。上陸時期については、遅らせても

913 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 202-203; David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London, Guild Publishing, 1987), p. 89.
914 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 207.
915 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 206-207.

有利になる点は何もなく、早ければ早いほど良いという意見だった[916]。

イギリス空軍参謀も、上陸以後に対し配慮が欠けているとの意見に同意したが、それ以上に海上封鎖が完璧に実行できるか心配していた。空軍参謀は、海上封鎖を続けアルゼンチン軍の士気が破壊されてから、上陸作戦を行うべきだという考えだった。この目的のために、航空偵察と航空地上支援攻撃を最大限用いるべきであり、シー・ハリアーはその能力を持っており、防空だけに使うことは資源の無駄であるとした[917]。

イギリス戦時内閣は、アルゼンチンへ最大限の圧力をかけるため、目に見える軍事的準備を進捗させるように望んでいた。4 月 22 日に政府は、アセンション島にいる水陸両用群をその日か翌日に出動させるように、フィールドハウス大将に通告した。アセンション島では水陸両用群および上陸群が荷物の積み直しのまっ最中であり、部隊はそのニュースを聞いて大いに失望した。水陸両用群指揮官クラップ准将は、そのようなことを行えば、作戦に混乱と致命的な損失をもたらすだろうと、妥協を許さない警告をフィールドハウス大将に申し立てた[918]。4 月 23 日にサッチャー首相は海軍参謀本部で説明を受け、その中でフィールドハウス大将は、つねに軍事的合理性より、つかの間の政治的配慮が優先され、それが困難をもたらしていることを説明した。24 日にフィールドハウス大将はアセンション島へ首相が納得したことを電報した[919]。

4 月 25 日には、首相官邸において、戦時内閣と高級指揮官・参謀部が会議を開いた。参謀部の提出資料には、多数の選択肢は書かれていなかった。水陸両用群がフォークランド水域に着いたなら長期に待つことはできず、上陸日の目標は 5 月 16 日であった。具体的にどこに上陸するかは書かれていなかったが、仮定は東フォークランド島の北部でスタンレーに近いところであった。真の問題点は上陸後であって、5,500 名の上陸イギリス軍が、スタンレーの周りにほとんど集中した 8,000 名のアルゼンチン軍と直面することであった。イギリス軍の機動能力の優勢と、空海の封鎖がうまくゆくこと、およびアルゼンチン軍航空戦力の消耗に期待していた[920]。

それにもかかわらず橋頭堡が確保されてから何が起こるか、正確には予想できなかった。イギリス軍が上陸することにより、アルゼンチン軍は軍事的に不利であることを悟り、名誉ある撤退に合意するかもしれない。しかしアルゼンチン軍が激しく戦う可能性があることも認識された。参謀部は、全面的な戦闘を行うよりも、島民から離れた場所にある外縁の部隊、司令部および兵站施設に対し連続して破壊・士気喪失させる攻撃を考えていた。戦時内閣は、イギリス軍に損失をもたらすであろうが、全面的な上陸を行う計画に承認を与えた[921]。

### 第 6 項　第 5 歩兵旅団の増強

[916] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 208.
[917] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 208.
[918] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 210-211.
[919] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 211.
[920] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 211.
[921] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 211-212.

イギリス軍は、2 個陸軍空挺大隊の増強を受けた海兵隊第 3 コマンド旅団が陸上兵力の主体であった。しかしこの兵力で、抵抗するアルゼンチン軍からフォークランドを奪回できるかという問題のほか、アルゼンチン軍の攻撃を受けた場合守ることができるかという問題も生じた。ある程度の兵力増強が必要であるということは、計画当初から明らかであった。しかし 4 月 25 日の戦時内閣と指揮官・参謀部の会議でもこの問題は持ち出されなかった[922]。

4 月 27 日になると、アルゼンチン軍のフォークランド諸島の陸軍部隊が 7 個連隊（アルゼンチンの 1 個連隊は 600 名強で、イギリスの 1 個大隊に相当する）であるという情報から、フィールドハウス大将は、上陸部隊に 1 個旅団増強が必要であると要請した。上陸部隊を 8 個大隊にするわけである。彼の考えは、任務部隊は消耗戦にはとても勝てそうにないから、短期間で強烈かつ決定的な戦闘を行わなければいけない、というものであった。参謀部の中には上陸作戦の必要性を疑う者もいて、また政治的影響も大きいことから決定に時間を要し、1 個旅団増強が戦時内閣で決定されたのは 5 月 3 日であった。第 5 歩兵旅団(5 Infantry Brigade)が増強部隊であり、旅団長はトニー・ウィルソン陸軍准将(Brigadier Tony Wilson)だった。この旅団は、第 3 コマンド旅団を増強するためすでに第 2、第 3 空挺大隊を引き抜かれており、グルカ小銃兵第 1 大隊(1st Battalion, 7th Duke of Edinburgh's Own Gurkha Rifles)のみであった。そのためウェールズ近衛第 1 大隊(1st Battalion, Welsh Guards)とスコットランド近衛第 2 大隊(2nd Battalion Scots Guards)を増強した[923]。

またフォークランドで作戦する陸上部隊が 2 個旅団となったので、陸上作戦を統一指揮する組織としてフォークランド諸島陸上軍(Land Forces Falkland Islands: LFFI)を設け、その指揮官としてムーア海兵隊少将を任命した。指揮権発動は 5 月 20 日からであった。ムーア少将はすでに 4 月中旬から、任務部隊司令部の陸上部隊副司令官(Land Forces Deputy)となりフォークランド戦争に関わっていた[924]。

### 第 7 項　上陸地点の選定

4 月 30 日から、特殊部隊の SAS と SBS の合計 10 組が、イギリス海軍第 846 飛行中隊のシー・キング・ヘリコプターに輸送されて、フォークランド諸島の各所へ潜入した[925]。これら特殊部隊の任務は、上陸候補地点の地理的情報（海岸の傾斜、波浪の程度、接近経路、単位時間にどれくらいの上陸揚収艇を上陸させることができるか、装軌車・装輪車が上陸地点から島内へ走行することが可能な出口があるか等）とアルゼンチン軍の情報（上陸候補地点あるいはその近傍にアルゼンチン軍は所在するか、どこに主力は所在して何をしているか、アルゼンチン軍の警戒要領はどのようなものか、士気はどうであるか等）を収集することだった[926]。

---

922 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 212-213.
923 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 213-216.
924 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 455; Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 94.
925 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 278.
926 Julian Thompson, *No Picnic: 3 Commando Brigade in the South Atlantic: 1982* (London; Leo Cooper in association with Secker & Warburg Ltd, 1985), pp. 31-32.

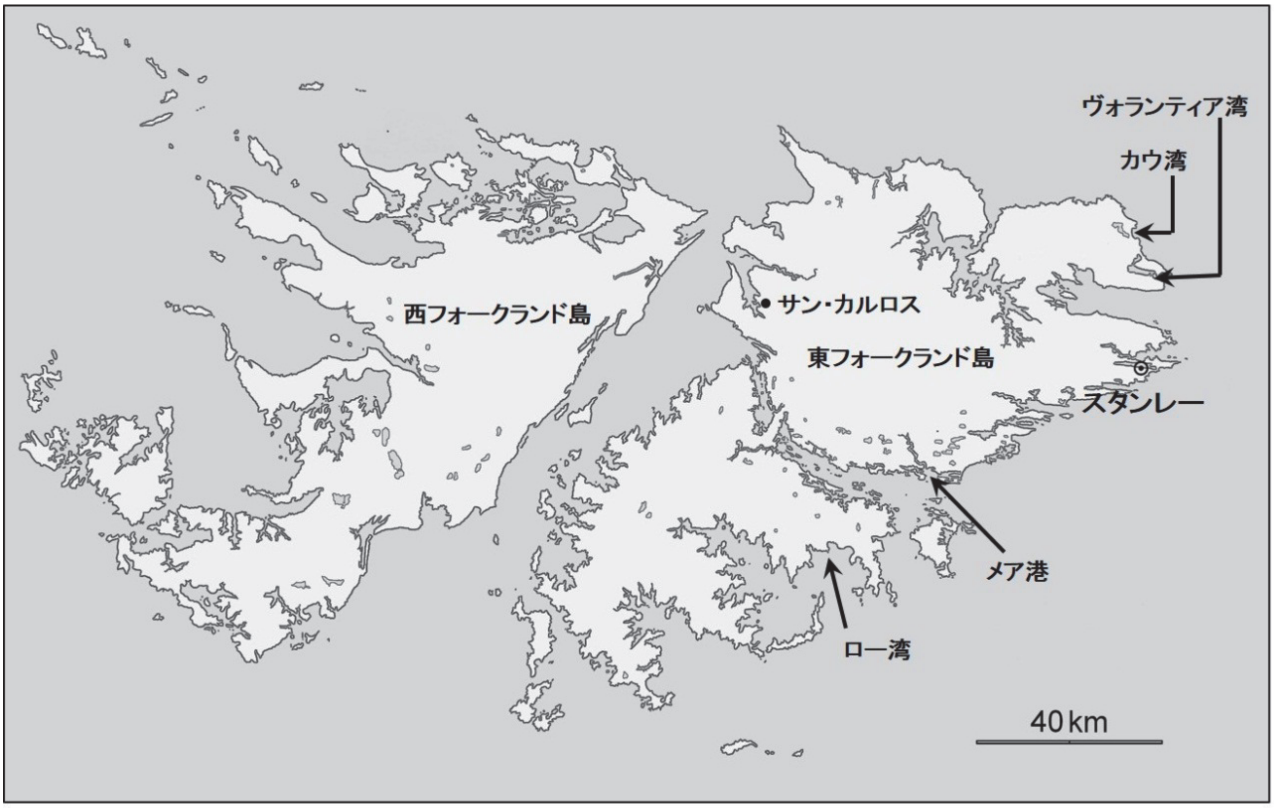
また上陸地点の絞り込みには海兵隊第 3 コマンド旅団参謀のサウスビー=テルユア海兵隊少佐（Major Ewan Southby-Tailyour）の知識と経験が大いに役立った。ヨットマンのサウスビー=テルユア少佐は、過去フォークランド海兵隊分遣隊の隊長だったとき、これらの島の海岸線をくまなくヨットで調査し、多数の図とレポートを作成していた。これが上陸地点を絞り込むうえで大いに役立った[927]。

上陸地点は、5 月 10 日にサン・カルロスに決定された。イギリス軍の上陸地点の候補については、大きく 3 つの場所が考えられていた。1 つは西フォークランド島であり、残りは東フォークランド島の北か南へ上陸するものであった。西フォークランド島は、アルゼンチン陸上軍の反撃が最小であり、展開した部隊に対し防護を与えることができ、アルゼンチン軍部隊から十分距離を取ることができ、島民に対し与える危険を最小にできる利点があった。反面アルゼンチン本土からの航空攻撃に対し脆弱であり、また駐屯するアルゼンチン軍主力に対し直接圧力をかけることができない欠点があった。さらにもう一度東フォークランド島へ上陸しなければならず、それは部隊を暴露し危険であった。また先にウッドワード少将の考えた、西フォークランド島にファントムの離着陸可能な飛行場を作るという案も、上陸部隊にそのような資材も労働力もなかったので実行不能であった[928]。

東フォークランド島の南部への上陸は、アルゼンチンの抵抗が少なく、島民へ被害を与える危険が少ない利点があった。南部にある前述のロー湾は、地形が岩におおわれ車両や物資を上陸するための砂浜がなかった。また航空機が低空飛行しやすく、いきなり湾上に現れることが可能なため、対空戦闘が行いづらいと見なされた。また東フォークランド島南部は、グース・グリーンの幅 2 キロメートルほどの地峡を通らなければ島の北部へ行けないことも問題であった。東フォークランド島南部は候補地から外された[929]。東フォークランド島北部では、サン・カルロス、カウ湾(Cow Bay)／ヴォランティーア湾(Volunteer Bay)、メア港(Mare Harbour)に候補が絞られた。カウ湾／ヴォランティーア湾は、スタンレーに近くただちにアルゼンチン軍へ圧力をかける利点があった。しかし敵前上陸の危険性が高く、アルゼンチン軍の即応対処部隊の反撃を受ける可能性があった。メア港はスタンレーから西南西へ約 50 キロメートル離れショアズール海峡(Choiseul Sound)に面している。ここは海の攻撃からは、さえぎられた良い場所であるが、空からの攻撃に対してはさえぎるものがなく、候補から外れた[930]。

サン・カルロスは、奥深い湾であり艦艇や潜水艦からの攻撃から守りやすかった。また丘陵にかこまれ空からの攻撃に対しても守りやすく、少なくとも停泊地にエグゾセ・ミサイルが飛んで来る危険はないと考えられた。また特殊部隊による偵察の結果からサン・カルロスの近辺にアルゼンチン軍の隊部隊がいないことも確認された。これらの点からサン・カルロスが上陸地点に選ばれたのだった[931]。

[927] Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 196.
[928] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 198.
[929] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 198, 201.
[930] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 202, 452.
[931] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 448, 452.




図第 18　イギリス軍の上陸作戦実施候補地

図はウィキメディア・コモンズ（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Egmont-Soledad.PNG）を加工した。上陸作戦実施候補地は、Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 198, 201, 202, 448, 452. に基づく。

第 8 項　上陸作戦実行の指示

5 月 10 日には、317 および 324 任務部隊指揮官フィールドハウス海軍大将は、317.1 任務群指揮官トンプソン海兵隊准将へ、フォークランドへ上陸しその地点をしっかり保持するより以上のことを準備するように、指示(instruction)した。これは 4 月 15 日の参謀本部の指令(directive)が、フォークランドを回復する見込みを以て上陸する、という曖昧だったものに比べ、はるかにはっきりしたものであった。12 日にはフィールドハウス大将は、参謀長委員会議長(Chief of Defence Sraff, CDS)海軍大将テレンス・ルウィン(Admiral of the Fleet Sir Terence Lewin)から、作戦の目的がフォークランド諸島を可能な限り速やかに奪回することで、合意を引き出した。しかし上陸後に取る行動については、極めて曖昧なままであった[932]。

同じく 12 日フィールドハウス海軍大将は、隷下部隊へ「作戦命令 3/82」(Operation Order 3/82)として「サットン作戦」を発令した。この作戦の目的は「可能な限り速やかにフォークランド諸島を奪回する」というもので、以下の 6 段階で実施される予定だった。

段階Ｉ：第 317.8 任務群（航空母艦群）指揮官は、完全封鎖水域の封鎖を維持する。

[932] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 448-449.

段階 II：第 317.8 任務群指揮官は、主力部隊上陸に先立ち、特殊作戦部隊による偵察と直接の攻撃を行う。

段階 III：第 317.0 任務群（水陸両用群）指揮官は、第 317.1.1 任務隊（海兵隊第 3 コマンド旅団）を乗船させ、上陸作戦を行う（対機雷戦も含む）。

段階 IV：第 317.1 任務群指揮官（フォークランド諸島陸上軍指揮官：Commander Land Forces Falkland Islands: CLFFI）および第 317.1.2 任務隊（第 5 歩兵旅団）の到着前に第 317.1.1 任務は陸上作戦を行う。

段階 V：強襲揚陸艦「フィアレス」艦上に第 317.1 任務群司令官(CLFFI)は所在し、第 317.1.2 任務隊を上陸させる。

段階 VI：第 317.8 任務群および 317.0 任務群の支援を受け、第 317.1 任務群（上陸部隊）はフォークランド諸島を奪回する[933]。

局地的制海権と航空優勢は段階 III を行う前に獲得しなければならなかった。そうでなければ最初の上陸作戦は夜間に行わなければならない。島民の犠牲は最低限に抑えなければならなかった。島民の財産の保護は、人命ほどではないが重視されていた。最も早い上陸作戦の実施日は、5 月 20 日であった。段階 III 開始の合言葉は「パルパス」(PALPUS)であった[934]。

ムーア少将は、同 12 日トンプソン准将へ以下の命令を出した。

① 貴官は、後続の増強部隊が上陸でき、離着陸場が設定でき、そこからフォークランド諸島奪回作戦を展開できる橋頭堡を東フォークランド島へ確保すること。

② 貴官は、橋頭堡の安全維持が確保される範囲で前線を前へ押し進め、情報を入手し、敵に対し士気上および物理上の優位を確立し、最終目的である奪回の促進を図ること。

③ 貴官は、小職がその戦域に司令部を設立するまで、フォークランドに上陸したすべての部隊の作戦上の指揮権を保持している。小職は、司令部につき上陸後可能な限り速やかに「フィアレス」上に設置する意図である。およそ D+7 日を予期している。

④ 小職の意図は、第 5 歩兵旅団を橋頭堡に上陸させ、フォークランド諸島を完全に奪回するための作戦を展開するつもりである[935]。

ムーアは、アルゼンチン軍を打倒するために両方の旅団（第 3 コマンド旅団と第 5 歩兵旅団）が必要である、という考えをつねづね持っていた。しかし電報の文面上では、第 5 歩兵旅団の作戦における役割が、予備の駐屯軍なのか、奪回作戦のカギとなる部隊なのか、不明瞭であった。さらに不明確な点は、ムーア

933 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 449-450.
934 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 450.
935 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 450.

少将と第5歩兵旅団が来るまでに、トンプソン准将はどのくらい前に進んでよいか、という点であった[936]。

5月13日には強襲揚陸艦「フィアレス」艦上でトンプソン准将から第3コマンド旅団に対して命令下達が行われた。任務は、ポート・サン・カルロス(Port San Carlos)、サン・カルロス、エイジャックス・ベイ(Ajax Bay)に上陸し、フォークランド諸島を奪回する攻撃作戦を発動するための橋頭堡を確立することであった。戦闘の構想は、日出の時に周囲のすべての高地を確保するため、揚陸艦を用いて夜間静粛な攻撃を行うことであった。主要部隊の任務および上陸地点は以下のとおりであった。

第1波：第40コマンド大隊は「キャンベラ(Canberra)」からサン・カルロス（ブルー・ビーチ）へ上陸する。第45コマンド大隊は物資補給船「ストロムネス(Stromness)」 からエイジャックス・ベイ（レッド・ビーチ）へ上陸する。

第2波：第2空挺大隊はカーフェリー「ノーランド(Norland)」 から第45コマンド大隊の確保したレッド・ビーチを通って、サセックス山(Sussex Mountain)を確保する。第3空挺大隊は「キャンベラ」からポート・サン・カルロス（グリーン・ビーチ）上陸し、そこを確保する。

乗船予備：第42コマンド大隊は「キャンベラ」上で待機する。

陽動部隊：空軍特殊空挺部隊D中隊は強襲揚陸艦「イントレピッド」からヘリコプターで降着し、グース・グリーンに所在するアルゼンチン軍部隊を攻撃し、彼らに連隊規模の部隊が攻撃していると思わせる。騒々しく火力を誇示するが接近戦闘は行わない。駆逐艦「グラモーガン(Glamorgan)」はバークリー海峡で活動し、スタンレー所在アルゼンチン軍の関心をひき付ける[937]。

この上陸部隊の構成は、上記の3個海兵隊コマンド大隊と2個陸軍空挺大隊の他、4個近接支援砲兵中隊(four batteries of close support artillery)、1個陸軍工兵中隊(a Royal Engineer Squadron)、レピア地対空ミサイル 1 個中隊(one battery of Rapier) 、ブローパイプ地対空ミサイル 2 個隊(two troops of Blowpipe)、それと武器と補給を担当する部隊からなっていた。またこれらを実際に上陸させたのは、上陸用収艇(Landing Craft Utility : LCU。排水量210トン) 8隻と、車両兵員上陸揚収艇(Landing Craft Vehicle/Personnel : LCVP。排水量24トン) 8隻、ヘリコプターではシー・キング11機、ウェセックス5機であった。上陸に要する日数はおよそ5日で、橋頭堡からの出撃はその後とみられた。この5日間で補給品を海岸に集積し、兵士は予想されるアルゼンチン軍の空襲に対し壕を掘り、身を守る[938]。

上陸後の作戦については、第5歩兵旅団の到着を待つが、利用すべき絶好の機会が発生した場合は、橋

936 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 450-451.
937 Nicholas van der Bijl, *Nine Battles to Stanley* (South Yorkshire, Leo Cooper, 1999), pp. 95-97.
938 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p.454; Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley; Midland, 2002), p.76.

頭堡を出てスタンレーへ向け進撃することが告げられた。またトンプソン准将は、アルゼンチン軍の逆上陸が行われた場合、イギリス軍の攻撃の勢いが低下するので、死者も負傷者も置いていくことを言明した。会議参加者は戦争の現実をあらためて認識した[939]。

第 9 項　上陸作戦実施の最終的決心

5 月 14 日には、各軍参謀長から戦時内閣へ「サットン作戦」の説明があった。その中でフィールドハウス大将は、上陸実施日について説明した。それによると水陸両用群がフォークランド諸島に近づくのは 5 月 20 日の夕方であり、翌日 21 日の早い時間帯が最初の上陸機会である。上陸は 1 週間遅らせることができ、上陸作戦開始の期間は 5 月 21 日から 28 日までであった[940]。

ウッドワード海軍少将はフィールドハウス海軍大将へ、作戦実施部隊として水陸両用群が移乗を始める 5 月 18 日 2130Z 時より前に、フォークランドへ上陸作戦を行う最終的決心の伝達が必要なことを伝えた。最初のうちは、上陸作戦実施時には航空優勢の獲得が必要条件であると考えられていた。しかし 5 月 17 日の時点で、上陸作戦実施が予想される時点までに航空優勢が獲得できないことは明らかであった。参謀本部は難しい判断をしなければならなかった[941]。

5 月 18 日サッチャー首相は戦時内閣を招集し、現状を勘案してフォークランド上陸作戦を認可すべきか審議した。参謀本部は戦時内閣に、以下の勧告を行った。

交渉を行って満足のいく結果は得られないし、長期にわたる封鎖が実行可能とも思えない。それ故勧告は、可能な限り速やかに上陸を行うべきだというものである。イギリス軍がいったん上陸したなら、困難があってもアルゼンチン駐屯軍が降伏するまで、戦い抜くはずである。この勧告をするにあたって、次のリスクが伴うことを認識してほしい。潜水艦を含むアルゼンチン艦隊と特に航空攻撃である。アルゼンチン軍を消耗させることは、我々の希望どおりにはいかなかった。 しかしリスクとそれに伴う損害は、軍事的に許容範囲内であると考えられる。

戦時内閣は勧告を受入れ、20 日の午後までに受入れ可能な外交的決着が得られない限り、上陸奪回作戦を行うと決心した。その決心は 5 月 18 日 1145A 時[942]。

第 10 項　特殊作戦部隊による対航空作戦

アルゼンチン海軍は、西フォークランド島のすぐ北にあるペブル島(Pebble Island)の飛行場にカルデロン海軍飛行場(Estación Aeronaval Calderón: EAN Calderón)を設置し、4 月 24 日に海軍第 4 攻撃飛行隊

---

939 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 97.
940 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p.455.
941 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p.456.
942 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 456-458.

することは、保証されていなかった。彼らは塹壕にこもり抵抗を続ける可能性もあった。さまざまな要素の中でもっとも懸念されたことは、島民のこうむる犠牲であった。この時期では島民へ対する考慮から、長期にわたる封鎖も含め直接攻撃に代わる案を検討する傾向があった。陸軍参謀長の陸軍大将エドウィン・ブラモール卿(The Chief of the General Staff, General Sir Edwin Bramall)は、陸上作戦に適切な構想がないことを心配していた。またブラモール大将は上陸作戦の実行可能性と必要性について疑念を抱いていたので、基本的戦略が固まるまでは陸上作戦の構想は放置されるものとみていた[904]。

このような考えから第 3 コマンド旅団へ兵力の追加を行うことは、必要な追加兵力ではなく、兵站支援上にも再補給にも問題を増やすだけとみられ、躊躇されていた。それでもなお、上陸後のことはさておき、上陸作戦につきまとう困難を考えると、兵力増強を求める用心深い意見が大勢を占めた。参謀本部は戦時内閣へ第 5 歩兵旅団(5 Infantry Brigade)の中から、第 2 空挺大隊(2nd Battalion, The Parachute Regiment) 900 名を第 3 コマンド旅団へ増強するよう求めた。この件はサッチャー首相に 4 月 15 日報告され、この大隊を運ぶために適当な艦船を増加することも合わせて承認された[905]。

### 第 4 項　イギリス軍指揮官の作戦に対する考え

4 月 12 日ウッドワード少将は大西洋上から次の電報により本国政府の注意を喚起した。

もはやアルゼンチン軍は十分な時間が与えられているので、イギリス軍が厳重に防衛されているだろうスタンレー空港を奪回することは、大変な犠牲とスタンレー市街に対する付随的損害なしにできないだろう。そうであれば、フォークランド諸島へ急いでもなんら有利な点はない。それならば海上封鎖を続けて、必要な装備を得て、アルゼンチン軍の集中するところを避けて、たとえば西フォークランド島に上陸し飛行場を設置する。そしてハリアー(GR.3)を、空母「ブルワーク(Bulwark)」〔予備役空母を現役に戻し〕に搭載するか、アセンション島から空中給油してこの離着陸場へ運ぶ。これは非常な助けとなり、残りのシー・ハリアー(Sea Harrier)を防空に専念させることができる。これは安い選択肢ではないが、他に代替手段がない。少なくとも早期占領が必然的にもたらす結果より、人命の損失は著しく少なくなるだろう[906]。

それに対するフィールドハウス海軍大将の回答は、ウッドワード海軍少将の考えが完全に外れてはいないことを示した。

我々も全く同じ立場で考えている。何よりも本官は、急いで行う上陸作戦の機会がすでに過ぎ去っていると確信している[907]。

[904] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 199.
[905] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 199.
[906] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 199-200.
[907] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 200.

4 月 15 日の参謀本部の計画方針は、明白に全面的な陸上戦を行うことを忌避しており、海岸に立てこもることという考えを促進するものであった。しかしフィールドハウス大将の本心は、フォークランド諸島の全面占領の計画が必要であるというものだった[908]。

他方ウッドワード少将はフィールドハウス大将から難題を投げかけられていた。それは 2 隻の空母のうち 1 隻が戦闘やその他の理由で使えなくなった場合どう対処するかというものであった。これは 1 つしか離着陸できる場所がない場合、シー・ハリアー運用の安全が確保できないので、全作戦を放棄して引き揚げなければならないからであった。それに対するウッドワード少将の回答は、西フォークランド島に離着陸場を造成して、イギリス空軍のファントム(Phantom)戦闘機を配備し、長期にわたって艦隊とフォークランド諸島の防空能力を増強するというものだった[909]。

しかし東フォークランド島に残ったアルゼンチン軍はどうするのか、という問題については、西フォークランド島に防衛可能な立てこもりできる場所を確保できるなら、イギリスの交渉能力がより高まるというものであった。ウッドワード少将は、もし西フォークランド島が不適切ならば、東フォークランド島南部のラフォニア(Lafonia)にあるロー湾(Low Bay)が、海上および上空からの攻撃から防御できる場所であると考えていた[910]。

ウッドワード少将は、フィールドハウス大将からもう 1 つ、「南へ急げ」と言われていた。ウッドワードは、南下する上陸部隊を護衛しなければならないことを信じていた。しかし彼は、クラップ准将とフィールドハウス大将の間で南方への移動を行う前にアセンション島でどれくらい準備を行わなければいけないか、議論が行われたことを知らなかった[911]。

クラップ准将とトンプソン准将(Commander Task Unit 317.1: Brigadier Julian H. A. Thompson)は、まだ南方へ行く準備が完了していなかった。彼らには部隊を訓練する時間が必要だったし、それ以上に船に大急ぎで積み込んだ物資を積み替えなければ、アセンション島を出航することができなかった。彼らは上陸地点については、上陸に続いてフォークランド諸島の完全占領が当然と信じており、その最終的目標に向かうのに最適な場所に上陸するべきと考えていた[912]。

4 月 17 日には、任務部隊がアセンション島へ集まり始めていた。この日、本国から任務部隊司令官フィールドハウス海軍大将が、任務部隊司令部の参謀を伴いアセンション島へ航空機で来訪した。彼らは航空母艦「ハーミーズ」上で、フィールドハウスの指揮下にある、空母戦闘群指揮官ウッドワード海軍少将、水陸両用群指揮官クラップ海軍准将および上陸群指揮官トンプソン海兵隊准将ならびにその幕僚と、作戦の全様相について会議を行った。その会議では、初めて作戦の全般構想とタイムテーブルが示された。それによると水陸両用群および上陸群は 4 月 19 日にアセンション島にそろい、4 月 29 日にそこを出発し、

908 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 200.
909 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.
910 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.
911 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.
912 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 201.

フォークランド諸島には 5 月 16 日到着する予定であった。これはクラップとトンプソンによる、上陸部隊は船内の貨物を上陸作戦に向くように積み直さなければならないという強硬な主張を最大限入れると共に、5 月を過ぎれば、兵站の維持および上陸部隊兵士の健康・士気に大きな負担がかかり、空母戦闘部隊の支援船の支援能力が尽きてしまうからであった。上陸地点はまだ決まっていなかったが、サン・カルロスがすでに強力な候補地として挙がっていた[913]。

### 第 5 項　上陸作戦概略の策定

フィールドハウス大将はアセンション島から帰国すると、フォークランド諸島へ上陸する作戦「サットン作戦(Operation SUTTON)」を立てるための作戦の概略を準備し、4 月 20 日参謀長委員会議長に示した。これは、フォークランド諸島を奪回するという観点から、いつ、どのようにしてイギリス軍をフォークランド諸島へ上陸させるかをまとめたものである。以下にその大枠を示す。フォークランド諸島の強風波浪の天候は 4 月下旬から頻繁となり、冬は 5 月中旬から始まる。月に 15 日は雨となり、5 日は嵐である。長期間海上にいると、特に悪天の場合乗船している兵員の疲労が著しくなる。また悪天は、上陸後に開けた場所や標高の高いところでは、兵員の士気と生存上で問題となる。反面いったん上陸してしまえば、この悪天は北極圏での経験を積みよく訓練されたイギリスの兵士には好ましいと思われた。逆にアルゼンチン軍は、兵員の宿泊場所を得るため、野原ではなく入植地、特にスタンレーの近傍に集中するだろうと想像された。

兵員の士気および体力、気象条件、政治の要求および軍事的判断を考えると、すべて早期に上陸を行うことが好ましかった。上陸にふさわしい期間は 5 月 14 日から 23 日の間に絞られた。空母戦闘部隊の戦域への進出と最初の上陸作戦の実行には、十分時間の余裕があるので、航空優勢の確立と、フォークランド諸島にあるアルゼンチン軍飛行場の無力化は、達成されるものと考えられた[914]。概略では、上陸地点は具体的に示されず、今後の情報収集とさらなる研究によるものとされた。情報を得るために、シー・キング(Sea King)・ヘリコプターか、潜水艦を使って特殊作戦部隊をフォークランド諸島へ潜入させることが示された[915]。

この概略に対しイギリス陸軍参謀は、上陸以後の陸上作戦について、いつ発動され、目的は何であり、それに伴う問題点について検討がなされていないと意見を述べた。また以下の疑問点も表明した。「陸上軍は、決意を持ったアルゼンチン軍に対し、それに突撃をかけ占領し維持するだけの十分な兵力を持っているのか。政治家は上陸作戦を行うよりも、外交手段も合わせた他の作戦を好むのではないか。」これらの疑問が解決した上で全面的にフォークランドを占領する計画を支持した。上陸時期については、遅らせても

913 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 202-203; David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London, Guild Publishing, 1987), p. 89.
914 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 207.
915 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 206-207.

有利になる点は何もなく、早ければ早いほど良いという意見だった[916]。

イギリス空軍参謀も、上陸以後に対し配慮が欠けているとの意見に同意したが、それ以上に海上封鎖が完璧に実行できるか心配していた。空軍参謀は、海上封鎖を続けアルゼンチン軍の士気が破壊されてから、上陸作戦を行うべきだという考えだった。この目的のために、航空偵察と航空地上支援攻撃を最大限用いるべきであり、シー・ハリアーはその能力を持っており、防空だけに使うことは資源の無駄であるとした[917]。

イギリス戦時内閣は、アルゼンチンへ最大限の圧力をかけるため、目に見える軍事的準備を進捗させるように望んでいた。4 月 22 日に政府は、アセンション島にいる水陸両用群をその日か翌日に出動させるように、フィールドハウス大将に通告した。アセンション島では水陸両用群および上陸群が荷物の積み直しのまっ最中であり、部隊はそのニュースを聞いて大いに失望した。水陸両用群指揮官クラップ准将は、そのようなことを行えば、作戦に混乱と致命的な損失をもたらすだろうと、妥協を許さない警告をフィールドハウス大将に申し立てた[918]。4 月 23 日にサッチャー首相は海軍参謀本部で説明を受け、その中でフィールドハウス大将は、つねに軍事的合理性より、つかの間の政治的配慮が優先され、それが困難をもたらしていることを説明した。24 日にフィールドハウス大将はアセンション島へ首相が納得したことを電報した[919]。

4 月 25 日には、首相官邸において、戦時内閣と高級指揮官・参謀部が会議を開いた。参謀部の提出資料には、多数の選択肢は書かれていなかった。水陸両用群がフォークランド水域に着いたなら長期に待つことはできず、上陸日の目標は 5 月 16 日であった。具体的にどこに上陸するかは書かれていなかったが、仮定は東フォークランド島の北部でスタンレーに近いところであった。真の問題点は上陸後であって、5,500 名の上陸イギリス軍が、スタンレーの周りにほとんど集中した 8,000 名のアルゼンチン軍と直面することであった。イギリス軍の機動能力の優勢と、空海の封鎖がうまくゆくこと、およびアルゼンチン軍航空戦力の消耗に期待していた[920]。

それにもかかわらず橋頭堡が確保されてから何が起こるか、正確には予想できなかった。イギリス軍が上陸することにより、アルゼンチン軍は軍事的に不利であることを悟り、名誉ある撤退に合意するかもしれない。しかしアルゼンチン軍が激しく戦う可能性があることも認識された。参謀部は、全面的な戦闘を行うよりも、島民から離れた場所にある外縁の部隊、司令部および兵站施設に対し連続して破壊・士気喪失させる攻撃を考えていた。戦時内閣は、イギリス軍に損失をもたらすであろうが、全面的な上陸を行う計画に承認を与えた[921]。

### 第 6 項　第 5 歩兵旅団の増強

916 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 208.
917 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 208.
918 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 210-211.
919 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 211.
920 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 211.
921 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 211-212.

イギリス軍は、2 個陸軍空挺大隊の増強を受けた海兵隊第 3 コマンド旅団が陸上兵力の主体であった。しかしこの兵力で、抵抗するアルゼンチン軍からフォークランドを奪回できるかという問題のほか、アルゼンチン軍の攻撃を受けた場合守ることができるかという問題も生じた。ある程度の兵力増強が必要であるということは、計画当初から明らかであった。しかし 4 月 25 日の戦時内閣と指揮官・参謀部の会議でもこの問題は持ち出されなかった[922]。

4 月 27 日になると、アルゼンチン軍のフォークランド諸島の陸軍部隊が 7 個連隊（アルゼンチンの 1 個連隊は 600 名強で、イギリスの 1 個大隊に相当する）であるという情報から、フィールドハウス大将は、上陸部隊に 1 個旅団増強が必要であると要請した。上陸部隊を 8 個大隊にするわけである。彼の考えは、任務部隊は消耗戦にはとても勝てそうにないから、短期間で強烈かつ決定的な戦闘を行わなければいけない、というものであった。参謀部の中には上陸作戦の必要性を疑う者もいて、また政治的影響も大きいことから決定に時間を要し、1 個旅団増強が戦時内閣で決定されたのは 5 月 3 日であった。第 5 歩兵旅団(5 Infantry Brigade)が増強部隊であり、旅団長はトニー・ウィルソン陸軍准将(Brigadier Tony Wilson)だった。この旅団は、第 3 コマンド旅団を増強するためすでに第 2、第 3 空挺大隊を引き抜かれており、グルカ小銃兵第 1 大隊(1st Battalion, 7th Duke of Edinburgh's Own Gurkha Rifles)のみであった。そのためウェールズ近衛第 1 大隊(1st Battalion, Welsh Guards)とスコットランド近衛第 2 大隊(2nd Battalion Scots Guards)を増強した[923]。

またフォークランドで作戦する陸上部隊が 2 個旅団となったので、陸上作戦を統一指揮する組織としてフォークランド諸島陸上軍(Land Forces Falkland Islands: LFFI)を設け、その指揮官としてムーア海兵隊少将を任命した。指揮権発動は 5 月 20 日からであった。ムーア少将はすでに 4 月中旬から、任務部隊司令部の陸上部隊副司令官(Land Forces Deputy)となりフォークランド戦争に関わっていた[924]。

#### 第 7 項　上陸地点の選定

4 月 30 日から、特殊部隊の SAS と SBS の合計 10 組が、イギリス海軍第 846 飛行中隊のシー・キング・ヘリコプターに輸送されて、フォークランド諸島の各所へ潜入した[925]。これら特殊部隊の任務は、上陸候補地点の地理的情報（海岸の傾斜、波浪の程度、接近経路、単位時間にどれくらいの上陸揚収艇を上陸させることができるか、装軌車・装輪車が上陸地点から島内へ走行することが可能な出口があるか等）とアルゼンチン軍の情報（上陸候補地点あるいはその近傍にアルゼンチン軍は所在するか、どこに主力は所在して何をしているか、アルゼンチン軍の警戒要領はどのようなものか、士気はどうであるか等）を収集することだった[926]。

---

922 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 212-213.
923 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 213-216.
924 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 455; Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 94.
925 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 278.
926 Julian Thompson, *No Picnic: 3 Commando Brigade in the South Atlantic: 1982* (London; Leo Cooper in association with Secker & Warburg Ltd, 1985), pp. 31-32.

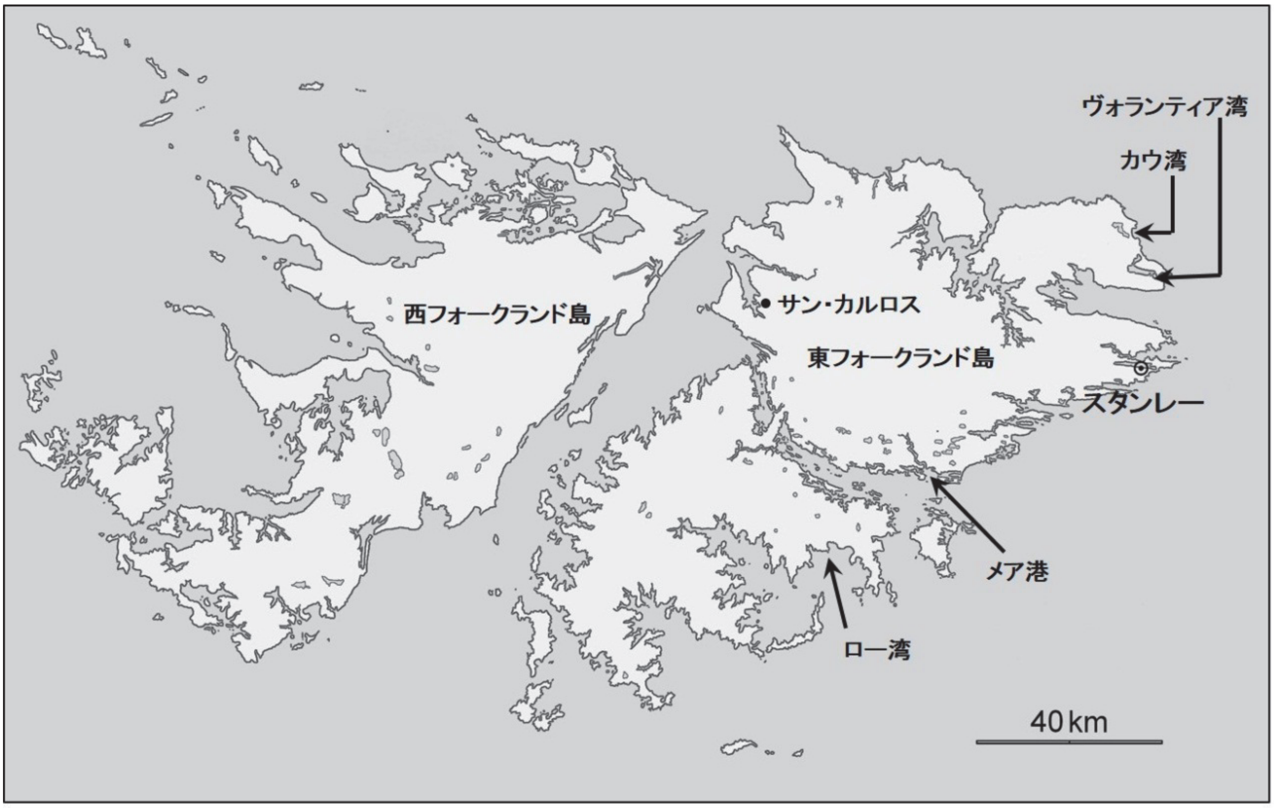
また上陸地点の絞り込みには海兵隊第 3 コマンド旅団参謀のサウスビー=テルユア海兵隊少佐（Major Ewan Southby-Tailyour）の知識と経験が大いに役立った。ヨットマンのサウスビー=テルユア少佐は、過去フォークランド海兵隊分遣隊の隊長だったとき、これらの島の海岸線をくまなくヨットで調査し、多数の図とレポートを作成していた。これが上陸地点を絞り込むうえで大いに役立った[927]。

上陸地点は、5 月 10 日にサン・カルロスに決定された。イギリス軍の上陸地点の候補については、大きく 3 つの場所が考えられていた。1 つは西フォークランド島であり、残りは東フォークランド島の北か南へ上陸するものであった。西フォークランド島は、アルゼンチン陸上軍の反撃が最小であり、展開した部隊に対し防護を与えることができ、アルゼンチン軍部隊から十分距離を取ることができ、島民に対し与える危険を最小にできる利点があった。反面アルゼンチン本土からの航空攻撃に対し脆弱であり、また駐屯するアルゼンチン軍主力に対し直接圧力をかけることができない欠点があった。さらにもう一度東フォークランド島へ上陸しなければならず、それは部隊を暴露し危険であった。また先にウッドワード少将の考えた、西フォークランド島にファントムの離着陸可能な飛行場を作るという案も、上陸部隊にそのような資材も労働力もなかったので実行不能であった[928]。

東フォークランド島の南部への上陸は、アルゼンチンの抵抗が少なく、島民へ被害を与える危険が少ない利点があった。南部にある前述のロー湾は、地形が岩におおわれ車両や物資を上陸するための砂浜がなかった。また航空機が低空飛行しやすく、いきなり湾上に現れることが可能なため、対空戦闘が行いづらいと見なされた。また東フォークランド島南部は、グース・グリーンの幅 2 キロメートルほどの地峡を通らなければ島の北部へ行けないことも問題であった。東フォークランド島南部は候補地から外された[929]。東フォークランド島北部では、サン・カルロス、カウ湾(Cow Bay)／ヴォランティーア湾(Volunteer Bay)、メア港(Mare Harbour)に候補が絞られた。カウ湾／ヴォランティーア湾は、スタンレーに近くただちにアルゼンチン軍へ圧力をかける利点があった。しかし敵前上陸の危険性が高く、アルゼンチン軍の即応対処部隊の反撃を受ける可能性があった。メア港はスタンレーから西南西へ約 50 キロメートル離れショアズール海峡(Choiseul Sound)に面している。ここは海の攻撃からは、さえぎられた良い場所であるが、空からの攻撃に対してはさえぎるものがなく、候補から外れた[930]。

サン・カルロスは、奥深い湾であり艦艇や潜水艦からの攻撃から守りやすかった。また丘陵にかこまれ空からの攻撃に対しても守りやすく、少なくとも停泊地にエグゾセ・ミサイルが飛んで来る危険はないと考えられた。また特殊部隊による偵察の結果からサン・カルロスの近辺にアルゼンチン軍の隊部隊がいないことも確認された。これらの点からサン・カルロスが上陸地点に選ばれたのだった[931]。

[927] Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 196.
[928] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 198.
[929] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 198, 201.
[930] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 202, 452.
[931] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 448, 452.




図第 18　イギリス軍の上陸作戦実施候補地

図はウィキメディア・コモンズ（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Egmont-Soledad.PNG）を加工した。上陸作戦実施候補地は、Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 198, 201, 202, 448, 452. に基づく。

第 8 項　上陸作戦実行の指示

5 月 10 日には、317 および 324 任務部隊指揮官フィールドハウス海軍大将は、317.1 任務群指揮官トンプソン海兵隊准将へ、フォークランドへ上陸しその地点をしっかり保持するより以上のことを準備するように、指示(instruction)した。これは 4 月 15 日の参謀本部の指令(directive)が、フォークランドを回復する見込みを以て上陸する、という曖昧だったものに比べ、はるかにはっきりしたものであった。12 日にはフィールドハウス大将は、参謀長委員会議長(Chief of Defence Sraff, CDS)海軍大将テレンス・ルウィン(Admiral of the Fleet Sir Terence Lewin)から、作戦の目的がフォークランド諸島を可能な限り速やかに奪回することで、合意を引き出した。しかし上陸後に取る行動については、極めて曖昧なままであった[932]。

同じく 12 日フィールドハウス海軍大将は、隷下部隊へ「作戦命令 3/82」(Operation Order 3/82)として「サットン作戦」を発令した。この作戦の目的は「可能な限り速やかにフォークランド諸島を奪回する」というもので、以下の 6 段階で実施される予定だった。

段階Ⅰ：第 317.8 任務群（航空母艦群）指揮官は、完全封鎖水域の封鎖を維持する。

[932] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 448-449.

段階 II：第 317.8 任務群指揮官は、主力部隊上陸に先立ち、特殊作戦部隊による偵察と直接の攻撃を行う。

段階 III：第 317.0 任務群（水陸両用群）指揮官は、第 317.1.1 任務隊（海兵隊第 3 コマンド旅団）を乗船させ、上陸作戦を行う（対機雷戦も含む）。

段階 IV：第 317.1 任務群指揮官（フォークランド諸島陸上軍指揮官：Commander Land Forces Falkland Islands: CLFFI）および第 317.1.2 任務隊（第 5 歩兵旅団）の到着前に第 317.1.1 任務は陸上作戦を行う。

段階 V：強襲揚陸艦「フィアレス」艦上に第 317.1 任務群司令官(CLFFI)は所在し、第 317.1.2 任務隊を上陸させる。

段階 VI：第 317.8 任務群および 317.0 任務群の支援を受け、第 317.1 任務群（上陸部隊）はフォークランド諸島を奪回する[933]。

局地的制海権と航空優勢は段階 III を行う前に獲得しなければならなかった。そうでなければ最初の上陸作戦は夜間に行わなければならない。島民の犠牲は最低限に抑えなければならなかった。島民の財産の保護は、人命ほどではないが重視されていた。最も早い上陸作戦の実施日は、5 月 20 日であった。段階 III 開始の合言葉は「パルパス」(PALPUS)であった[934]。

ムーア少将は、同 12 日トンプソン准将へ以下の命令を出した。

① 貴官は、後続の増強部隊が上陸でき、離着陸場が設定でき、そこからフォークランド諸島奪回作戦を展開できる橋頭堡を東フォークランド島へ確保すること。

② 貴官は、橋頭堡の安全維持が確保される範囲で前線を前へ押し進め、情報を入手し、敵に対し士気上および物理上の優位を確立し、最終目的である奪回の促進を図ること。

③ 貴官は、小職がその戦域に司令部を設立するまで、フォークランドに上陸したすべての部隊の作戦上の指揮権を保持している。小職は、司令部につき上陸後可能な限り速やかに「フィアレス」上に設置する意図である。およそ D+7 日を予期している。

④ 小職の意図は、第 5 歩兵旅団を橋頭堡に上陸させ、フォークランド諸島を完全に奪回するための作戦を展開するつもりである[935]。

ムーアは、アルゼンチン軍を打倒するために両方の旅団（第 3 コマンド旅団と第 5 歩兵旅団）が必要である、という考えをつねづね持っていた。しかし電報の文面上では、第 5 歩兵旅団の作戦における役割が、予備の駐屯軍なのか、奪回作戦のカギとなる部隊なのか、不明瞭であった。さらに不明確な点は、ムーア

933 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 449-450.
934 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 450.
935 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 450.

少将と第5歩兵旅団が来るまでに、トンプソン准将はどのくらい前に進んでよいか、という点であった[936]。

5月13日には強襲揚陸艦「フィアレス」艦上でトンプソン准将から第3コマンド旅団に対して命令下達が行われた。任務は、ポート・サン・カルロス(Port San Carlos)、サン・カルロス、エイジャックス・ベイ(Ajax Bay)に上陸し、フォークランド諸島を奪回する攻撃作戦を発動するための橋頭堡を確立することであった。戦闘の構想は、日出の時に周囲のすべての高地を確保するため、揚陸艦を用いて夜間静粛な攻撃を行うことであった。主要部隊の任務および上陸地点は以下のとおりであった。

第1波：第40コマンド大隊は「キャンベラ(Canberra)」からサン・カルロス（ブルー・ビーチ）へ上陸する。第45コマンド大隊は物資補給船「ストロムネス(Stromness)」からエイジャックス・ベイ（レッド・ビーチ）へ上陸する。

第2波：第2空挺大隊はカーフェリー「ノーランド(Norland)」から第45コマンド大隊の確保したレッド・ビーチを通って、サセックス山(Sussex Mountain)を確保する。第3空挺大隊は「キャンベラ」からポート・サン・カルロス（グリーン・ビーチ）上陸し、そこを確保する。

乗船予備：第42コマンド大隊は「キャンベラ」上で待機する。

陽動部隊：空軍特殊空挺部隊D中隊は強襲揚陸艦「イントレピッド」からヘリコプターで降着し、グース・グリーンに所在するアルゼンチン軍部隊を攻撃し、彼らに連隊規模の部隊が攻撃していると思わせる。騒々しく火力を誇示するが接近戦闘は行わない。駆逐艦「グラモーガン(Glamorgan)」はバークリー海峡で活動し、スタンレー所在アルゼンチン軍の関心をひき付ける[937]。

この上陸部隊の構成は、上記の3個海兵隊コマンド大隊と2個陸軍空挺大隊の他、4個近接支援砲兵中隊(four batteries of close support artillery)、1個陸軍工兵中隊(a Royal Engineer Squadron)、レピア地対空ミサイル 1 個中隊(one battery of Rapier)、ブローパイプ地対空ミサイル 2 個隊(two troops of Blowpipe)、それと武器と補給を担当する部隊からなっていた。またこれらを実際に上陸させたのは、上陸用収艇(Landing Craft Utility：LCU。排水量210トン）8隻と、車両兵員上陸揚収艇(Landing Craft Vehicle/Personnel：LCVP。排水量24トン）8隻、ヘリコプターではシー・キング11機、ウェセックス5機であった。上陸に要する日数はおよそ5日で、橋頭堡からの出撃はその後とみられた。この5日間で補給品を海岸に集積し、兵士は予想されるアルゼンチン軍の空襲に対し壕を掘り、身を守る[938]。

上陸後の作戦については、第5歩兵旅団の到着を待つが、利用すべき絶好の機会が発生した場合は、橋

936 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 450-451.
937 Nicholas van der Bijl, *Nine Battles to Stanley* (South Yorkshire, Leo Cooper, 1999), pp. 95-97.
938 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p.454; Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley; Midland, 2002), p.76.

頭堡を出てスタンレーへ向け進撃することが告げられた。またトンプソン准将は、アルゼンチン軍の逆上陸が行われた場合、イギリス軍の攻撃の勢いが低下するので、死者も負傷者も置いていくことを言明した。会議参加者は戦争の現実をあらためて認識した[939]。

第 9 項　上陸作戦実施の最終的決心

5 月 14 日には、各軍参謀長から戦時内閣へ「サットン作戦」の説明があった。その中でフィールドハウス大将は、上陸実施日について説明した。それによると水陸両用群がフォークランド諸島に近づくのは 5 月 20 日の夕方であり、翌日 21 日の早い時間帯が最初の上陸機会である。上陸は 1 週間遅らせることができ、上陸作戦開始の期間は 5 月 21 日から 28 日までであった[940]。

ウッドワード海軍少将はフィールドハウス海軍大将へ、作戦実施部隊として水陸両用群が移乗を始める 5 月 18 日 2130Z 時より前に、フォークランドへ上陸作戦を行う最終的決心の伝達が必要なことを伝えた。最初のうちは、上陸作戦実施時には航空優勢の獲得が必要条件であると考えられていた。しかし 5 月 17 日の時点で、上陸作戦実施が予想される時点までに航空優勢が獲得できないことは明らかであった。参謀本部は難しい判断をしなければならなかった[941]。

5 月 18 日サッチャー首相は戦時内閣を招集し、現状を勘案してフォークランド上陸作戦を認可すべきか審議した。参謀本部は戦時内閣に、以下の勧告を行った。

交渉を行って満足のいく結果は得られないし、長期にわたる封鎖が実行可能とも思えない。それ故勧告は、可能な限り速やかに上陸を行うべきだというものである。イギリス軍がいったん上陸したなら、困難があってもアルゼンチン駐屯軍が降伏するまで、戦い抜くはずである。この勧告をするにあたって、次のリスクが伴うことを認識してほしい。潜水艦を含むアルゼンチン艦隊と特に航空攻撃である。アルゼンチン軍を消耗させることは、我々の希望どおりにはいかなかった。 しかしリスクとそれに伴う損害は、軍事的に許容範囲内であると考えられる。

戦時内閣は勧告を受入れ、20 日の午後までに受入れ可能な外交的決着が得られない限り、上陸奪回作戦を行うと決心した。その決心は 5 月 18 日 1145A 時[942]。

第 10 項　特殊作戦部隊による対航空作戦

アルゼンチン海軍は、西フォークランド島のすぐ北にあるペブル島(Pebble Island)の飛行場にカルデロン海軍飛行場(Estación Aeronaval Calderón: EAN Calderón)を設置し、4 月 24 日に海軍第 4 攻撃飛行隊

---

[939] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 97.
[940] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p.455.
[941] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p.456.
[942] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 456-458.

(4 Escuadrilla de Ataque)の T-34C 軽攻撃機 4 機を配置した。設置といっても、滑走路は草地のままで、羊の毛刈り小屋と空家等を接収して、兵士の宿舎等にしただけだった。海兵隊第 3 大隊 H 中隊(Compañía H, Battallón de Infanteía de Marina 3: H/BIM 3)の一部がこの飛行場の守備のため 27 日に配備された。またアルゼンチン空軍第 3 攻撃飛行中隊(Grupo 3 de Ataque)は、兵力の一部プカラ(Pucará)12 機をグース・グリーンのこれもまた草地の滑走路であるコンドル空軍基地(Base Aérea Militar Cóndor: BAM Cóndor)に進出し、マルビナス・プカラ飛行中隊(Escuadron Pucará Malvinas)と呼称された。この中隊は 5 月 1 日にイギリス海軍航空隊シー・ハリアーの地上攻撃を受けたため、コンドル空軍基地を放棄しカルデロン飛行場へ移動した[943]。

イギリス任務部隊から見ると、5 月に入ってから上陸地点がサン・カルロスに固まり、また一連の航空作戦で、航空脅威を十分に認識することとなった。イギリス任務部隊にとって、サン・カルロスから 40 キロメートルほどしか離れていないペブル島に、ターボプロップの軽攻撃機とはいえ敵機が存在することは、橋頭堡の安全確保のため重大な問題であった。5 月 10 日「ハーミーズ」艦上における作戦会議で 317.8 任務群指揮官ウッドワード海軍少将は、ペブル島からの航空脅威を指摘し、特殊空挺部隊(SAS)の連絡将校へペブル島の飛行場に奇襲攻撃をかけることを求めた。ウッドワードは、すぐさまに実施することを考えていたが、SAS の考えは、まず事前に偵察隊を潜入させ、それから攻撃を行うというもので、3 週間はかかるというものであった。しかし上陸作戦実施が目前に迫っており、ウッドワードは 5 月 15 日までに実行することを命じた[944]。

SAS は会議の後、その夜のうちに 8 名からなる偵察部隊を出発させたが、悪天のため実際にペブル島を偵察できたのは 13 日から 14 日にかけてであった。偵察の結果から 14・15 日の夜に 45 名からなる本隊がペブル島に侵入し、偵察隊の先導により航空機に爆弾をしかけた。15 日 0215Q 時から攻撃を開始し、駆逐艦「グラモーガン」も地上からの弾着観測により、飛行場にたいして砲撃を行った。飛行場を守備するアルゼンチン海兵隊には全くの奇襲攻撃であり、最初は状況がつかめず炎上する航空機の消火活動を行おうとした。しかしイギリスからの銃撃を受け、ようやく反撃を行ったが、イギリス側は 2 名の負傷者を出しただけであった。0245Q 時には SAS は集合をはじめ、0530Q 時にはヘリコプターに搭乗し「ハーミーズ」へ帰艦した。飛行場にあったアルゼンチン航空機 11 機（プカラ 6 機、T-34C 4 機、スカイバン（沿岸警備隊の双発ターボプロップ軽輸送機で海軍が使用したもの） 1 機）全機が破壊され、燃料・弾薬も炎上し、以後この飛行場がアルゼンチン軍に使用されることはなかった。また SAS は嵐の中の作戦で死者を出さずに、大きな成功をおさめ、イギリス特殊作戦部隊の能力をアルゼンチンに見せつけた[945]。

### 第 11 項　上陸作戦実施前の計画細部修正

---

943 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 86, 87; Burden et al., *Falklands the Air War,* pp. 95-98.
944 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 88; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 435.
945 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 88-91; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 435; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 135-136.

アルゼンチン軍は、4 月末からフォークランドにある兵力の配置転換を行っていなかった。しかしここにきてサン・カルロスの奥深い湾の入り口であり、またフォークランド水道の北の入り口にも当たるファニング・ヘッド(Fanning Head)へ小部隊を派遣することにした。この地点でフォークランド水道は約 5 キロメートルの幅しかなく、またファニング・ヘッドは海面から約 230 メートル突出した断崖であり、その上から偵察するにも船舶の出入りを管制するにも絶好の場所であった。選ばれた部隊は、グース・グリーンに駐屯する第 12 連隊および第 25 連隊 B 中隊から差出された兵員 62 名で、指揮官はカルロス・エステバン陸軍中尉(Teniente Primero Carlos Esteban)、部隊の名称は「鷲分遣隊」(Equipo de Combate Águila : EC Águila)だった。この部隊の任務は、この地域に上陸が行われた場合早期に警報を出すこと、近くのポート・サン・カルロス入植地を管制すること、フォークランド水道の北の入り口を管制することの三点であった。この部隊の重火器は、106mm 無反動砲 2 門と 81 ミリメートル迫撃砲でアルゼンチン軍のヘリコプターでファニング・ヘッドまで輸送された[946]。

他方、イギリス軍は、5 月 14 日には、通信情報からポート・サン・カルロス周辺に新たな部隊「鷲分遣隊」が存在することを察知した。15 日にはこの部隊が中隊規模でありファニング・ヘッドを占拠し、フォークランド水道を見張っていることが知られた。イギリス軍は、部隊の規模からサン・カルロスへの上陸計画を変更しなかった。しかし上陸地点が発覚するのを避けるため、直前になるまでサン・カルロス周辺へ特殊作戦部隊による偵察を行うことを中断した。しかし小さな部隊とはいえ、上陸作戦を粉砕する可能性があるので、トンプソン准将は、海軍特殊舟艇部隊第 3 小隊（3 SBS）に、上陸後ファニング・ヘッドへ向かい「鷲分遣隊」を粉砕するよう命令した[947]。

5 月 18 日には、水陸両用群 TG 317.0 が全面封鎖水域東端の待機水域に到達し、航空母艦群 TG 317.8 と合流した。水陸両用群内の徴用された旅客船「キャンベラ」(SS Canberra)には、第 40 および第 42 コマンド大隊ならびに第 3 空挺大隊の計 2,000 名の兵員が乗船していた。水陸両用群では上陸のための準備が最終段階に入っていたその日の夕方、イギリス艦隊最高司令部から電報が来た。上陸時に 1 つの船「キャンベラ」に 3 個大隊も乗船していることについて、もしこの船が沈んだら死傷者の数は大変な数にのぼり上陸の成功を台無しにするだろうから、2 個大隊を分散せよ、というのであった[948]。
最終段階に来て、大幅に上陸作戦の計画を変更すること、およびアルゼンチン軍の鼻先の大西洋の真ん中で日中に上陸揚収艇を使い他の船へ移動することの大変さに、クラップ准将もトンプソン准将も強い憤りを感じていた。計画は以下のように変更された。

第 1 波：第 2 空挺大隊は、「ノーランド」から「イントレピッド」の上陸揚収艇に移乗してサン・カルロスの「ブルー・ビーチ 2」に上陸し、グース・グリーンからの動きに対処するためサセックス山に布陣する。第 40 コマンド大隊は「フィアレス」からサン・カルロス

[946] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 143; Middlebrook, *Operation Corporate*, p.208
[947] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 97-98; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 467.
[948] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 98; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 466.

の「ブルー・ビーチ」へ上陸する。

第 2 波：第 45 コマンド大隊は「ストロムネス」からエイジャックス・ベイの「レッド・ビーチ 1」へ上陸する。旧食肉加工工場を確保する。第 3 空挺大隊は「イントレピッド」からサンディ・ベイの「グリーン・ビーチ 1」へ上陸する。

乗船予備：第 42 コマンド大隊は「キャンベラ」で待機

ファニング・ヘッド：海軍特殊舟艇部隊第 3 小隊(3 SBS)がファニング・ヘッドの敵部隊に対処する。

陽動部隊：空軍特殊作戦部隊 D 中隊は、グース・グリーンのアルゼンチン部隊の注意をひき付ける。駆逐艦「グラモーガン」はバークリー海峡で活動する[949]。

トンプソン准将はこの計画変更の際に、グース・グリーンに駐屯するアルゼンチン軍による上陸地点攻撃という可能性としての脅威に対処するため、第 40 コマンド大隊と第 2 空挺大隊を第 1 波で横並びに上陸させ、第 2 空挺大隊のサセックス山への移動を早めるように変更した。上陸の予定は 0230Q ときで日出の 5 時間前であった[950]。

翌 19 日は、イギリス軍にとって幸いなことに穏やかな天気で、船と船の間の移動は大きな困難もなく行うことができた。ただしこの移動の最後の方になって、シー・キング・ヘリコプターが海にひっくりかえって墜落（原因は不明だが、鳥の衝突(bird strike)と考えられている）し、搭乗員および移動兵員合わせて 30 名のうち 21 名が死亡した。このうち 20 名が SAS の隊員であり、SAS には大きな打撃だった[951]。

20 日に、イギリス軍は陽動のトルネード作戦を実施した。陸上作戦では、空挺特殊作戦部隊の D 中隊約 40 名がデルヴズ少佐の指揮の下、ダーウィンへ陽動攻撃を行った。20 日の夕暮れ時 D 中隊は、強襲揚陸艦「イントレピッド」から受動型暗視装置（Passive Night Vision Goggle: PNG）を装備したシー・キング・ヘリコプターに搭乗し、ダーウィンの北側およびサセックス山の南側に着陸した。計画ではフリゲート艦「アーデント」(HMS Ardent)の艦砲による支援を受けるはずだったが、何らかの理由で艦砲射撃は実施されなかった。D 中隊は持てる火力全力でダーウィンを銃砲撃したが、アルゼンチン軍陣地への突撃は行わなかった。ダーウィンを守る第 12 連隊 A 中隊長のホルゲ・マンレサ陸軍中尉(Teniente Primero Jorge Manresa)は、上級のメルセデス任務部隊指揮官ピアッヒ中佐へ自分の中隊へ射撃があったことを報告した。ピアッヒ中佐自身は、受けた射撃をそれほど激しいものと認識しなかったが、部隊を最高の警戒態勢におき、スタンレーへ部隊が攻撃を受けたことを報告した[952]。

---

949 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 98-99; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 466.
950 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 468-469.
951 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 466-467; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 98-99.
952 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 467-468; Middlebrook, *Operation Corporate*, p.208; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 145-146; Hobson, *Falklands Air War*, p.76.

## 第4節　イギリスによるサウス・ジョージア島奪回

### 第1項　サウス・ジョージア島をめぐる状況

アルゼンチン軍は4月3日にサウス・ジョージア島を占領し、駐屯軍として55名をグリトヴィケンとリースに配置した。また廃材回収業者 39 名が引き続きリースに残った。ここでサウス・ジョージア島の地誌をみると、位置的には南緯53度56分から同54度55分と西経34度45分から同38度15分の間にある。長さは約170キロメートル、幅は最大で約30キロメートルの西北西から東南東方向に横長の島である。面積は約3,750平方キロメートルで埼玉県とほぼ等しい。地形は山地が多く、島の最高峰は2,933メートルである。島の半分以上はつねに氷で覆われている。過去には捕鯨業者が住んでいたこともあったが、南極圏に準ずる厳しい気候のため、現在では科学観測に従事する者以外で居住する者はない。距離的には、フォークランド諸島から約1,450キロメートル、アルゼンチン本土から最短で約2,100キロメートルほどである[953]。サウス・ジョージア島は、その厳しい自然環境と地形により、容易に飛行場を作ることができず、空輸ターミナルの役割は果たせなかった。また上陸して休養を取ることも不可能であった。結局この島の軍事的用途としては、可能性として任務部隊への支援基地と安全な停泊地を提供することであった。実際戦争後半には、この島で「クイーン・エリザベスII」が輸送してきた兵員を揚陸艦へ移しかえた[954]。

サウス・ジョージア島は、イギリスにとって最初の奪回可能な目標として、任務艦隊が出航してからすぐに認識されていた。この島の奪回が、すべての占領されたイギリス領土奪回への一歩に過ぎないとしても、作戦成功は士気を高め、アルゼンチンに圧力をかけ続けることができる。ノット国防相はのちに、サウス・ジョージア奪回作戦について、「純粋に政治的なもの」だと述べた。イギリス海軍参謀とイギリス本土艦隊司令長官は、この作戦を気晴らしと見ていた[955]。

しかし、この作戦が長引き損失が多ければ、逆効果であり、士気とイギリスの国際的地位両方を損なってしまうだろう。もし順調に行ったとしても、サウス・ジョージア島奪回の努力は資源の浪費であり、主たるフォークランド作戦を遅らせるものと議論が生じるかもしれない。もっともフォークランド諸島から遠く離れ、ごく少数のアルゼンチン駐屯兵は、航空支援が得られず、海上輸送も海軍艦艇の支援もイギリス攻撃型原子力潜水艦の哨戒下では望みがなく、イギリス海兵隊がいったん上陸すれば、ほとんど抵抗しないはずと思われた[956]。

### 第2項　イギリスの部隊派遣と作戦計画

---

[953] Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume I: The Origins of the Falklands War* (London; Routledge, 2005), p. 1; idem, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II: War and Diplomacy* (London; Routledge, 2005), p. 14; Roger Perkins, *Operation Paraquat: The Battle for South Georgia* (Somerset; Picton, 1986), pp. 1; 中尾裕次「誤算のフォークランド紛争（2－1）」『陸戦研究』（1982年11月）2頁。

[954] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 259-260.

[955] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 226.

[956] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 226.

a　部隊編成

4 月 7 日にはサウス・ジョージア島奪回のために特別な部隊として 317.9 任務群が編成された。この群はフリゲート艦「プリマス(HMS Plymouth)」と駆逐艦「アントリム(HMS Antrim)」およびタンカーでイギリス海軍補助艦「タイドスプリング(RFA Tidespring)」からなり、のちにサウス・ジョージア島近海で氷海警備船「エンデュアランス」が合流する。「プリマス」と「タイドスプリング」は 4 月 11 日にアセンション島を出航し、「アントリム」は、イギリス本土から寒冷地用衣類と装備が空輸されるのを待ち、それらを積み込み遅れて出航した。上陸部隊は第 42 コマンド大隊の M 中隊(M Company)が割り当てられた。317.9 任務群指揮官は、海軍でもっとも経験を積んだ者の一人である「アントリム」艦長ヤング海軍大佐(Captain B. Young)であった。上陸部隊指揮官は、ノルウェーの北極圏で 10 回冬を経験し、ヒマラヤ登山の経験もある第 42 コマンド大隊のシェリダン海兵隊少佐(Major G. Sheridan)が務めた。原子力潜水艦「コンカラー(HMS Conqueror)」は、317.9 任務群が着く前にサウス・ジョージア島に着くよう、またこの任務群と独立して行動するよう派遣された[957]。

b　作戦計画

作戦名は「パラケット作戦(Operation Paraquet)」と名付けられた。パラケットとは、小型のインコの仲間の名前である。しかし作戦参加者は、わざと文字を 1 字だけ変えて「パラコート作戦(Operation Paraquat)」と呼んだ。パラコートとは除草剤の名前である。4 月 10 日には、海軍参謀本部内に、サウス・ジョージア島奪回作戦立案のため別室が設けられた。世界の目は主力の任務部隊と外交交渉に向けられ、サウス・ジョージア島の件についてはほとんど考慮の外であった。アルゼンチンへ事前の警告を与えないようこの状態を保つのが望ましかった。秘密は厳重に守られ、この作戦について議論できるのは、首相、国防相および最高指揮官クラスに限定された[958]。

イギリスの作戦計画は、サウス・ジョージア島のアルゼンチン軍が少数の駐屯部隊のままで兵力増強や顕著な支援が行われていないことに依存していた。イギリスは、アルゼンチンが相当数の民間人と軍人の混じった集団をリースに上陸させ、次いで 4 月 3 日の侵攻作戦で 54 名のアルゼンチン海兵隊員を揚陸したとみていた。海兵隊は迫撃砲、携行対戦車兵器、暗視装置、おそらく車両とアルエット・ヘリコプターを持っているとみられ、手ごわいものと考えられた。アルゼンチンからの航空攻撃の脅威は割り引いて考えられた。なぜなら、それはスタンレーの滑走路が延長されたならば、キャンベラ、スカイホーク、ミラージュがその行動半径ぎりぎりいっぱいで、しかも日中の天気が良いときのみサウス・ジョージア島へ到達可能だったからである。アルゼンチン海軍航空隊の A-4Q は、航空母艦「ベンチシンコ・デ・マジョ」から発艦できるが、航空母艦がサウス・ジョージア島に 300 カイリ以内に近づかなければならず、イギリ

[957] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 226-227.
[958] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 227.

ス原子力潜水艦の脅威の前にそれは不可能だとみられた。アルゼンチンの C-130 や P-2 は、サウス・ジョージア島の偵察は可能であるが、パラシュートによる兵員や物資の供給は天候と地表の状態から考えられなかった。最後にアルゼンチンの潜水艦は、サウス・ジョージア島周辺で活動可能とみられた。イギリスは 4 月 9 日から 1 隻のアルゼンチン潜水艦（もとアメリカ海軍で使われガピー改造を受けたもの）が作戦中と見ており、事実潜水艦「サンタ・フェ」がサウス・ジョージア島へ向かっていた[959]。

これらの推測から、サウス・ジョージア島の守備はおそらく厳重でないものとみられた。4 月 8 日には、参謀本部(Chiefs of Staff)が、サウス・ジョージア島をできる限り早く奪回することに合意した。翌 9 日にフィールドハウス海軍大将は、島にいる民間人への被害を最小にし、南大西洋における他の作戦に与える悪影響を最小にとどめるように、奪回作戦の大まかな計画を立てることを命じた。フィールドハウス海軍大将は 4 月 12 日に、サウス・ジョージア島奪回の命令を計画した。翌日参謀本部でこの命令に関する説明を受けたブラモール陸軍大将は、割り当てられた兵力が妥当なものか、深い疑念を呈した。彼が問題としたのは、サウス・ジョージア島に所在するアルゼンチン軍に関し信頼できる情報が欠如しており、奪回に割り当てられたイギリス軍兵力は最小のアルゼンチン軍の抵抗に見合うものであり、情報の誤りを一切許さないからであった。最初の作戦は、事後に続くすべての作戦の雰囲気を定めてしまうものであるから、サウス・ジョージア島で失敗することは許されなかった。結局、追加兵力として、陸軍の空挺特殊作戦部隊 SAS(Special Air Service)の D 中隊(D Squadron)がこの作戦に追加されることとなった。すでに D 中隊は 4 月 5 日には、アセンション島に進出していた。またこれに海軍の特殊舟艇部隊(SBS)の 1 個分隊も追加された。これで上陸部隊の兵員は約 250 名となり、ブラモール陸軍参謀長も、これらの兵力増加により作戦の成功を納得した[960]。

作戦命令は、無線封鎖を守るため 4 月 15 日にイギリス空軍のニムロッド洋上哨戒機により「アントリム」へ空中から投下された。作戦の上陸兵力はイギリス海兵隊員約 150 名、特殊作戦部隊員約 70 名であった。ヘリコプターとしては、ウェセックス HAS.3(Wessex HAS.3)が「アントリム」に 1 機、ウェセックス HU.5 が「タイドスプリング」に 2 機搭載され、部隊の上陸を支援する予定だった。必要であれば「アントリム」による支援砲撃も行うことになっていた。この作戦は、人命の損失と施設等への破壊を最低にするつもりであった。実際には将来この島で居住する必要性から、施設等への損害を避けることが、民間人死傷者を抑えることより重視された。上陸部隊指揮官は前述のとおりシェリダン海兵隊少佐であったが、付加された SAS の D 中隊指揮官デルヴズ陸軍少佐(Major C. Delves)も同じ階級であり、指揮系統を複雑にした[961]。

作戦の順序は、まず D 中隊の山岳および極地作戦に特化した第 19 分隊(19 Troop)がヘリコプターでフォーチュナ氷河(Fortune Glacier)まで移動し、リース、ハヴィク(Husvik)、ストロームネス(Stromness)

---

959 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 227-228.
960 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 227-229; Gordon Smith, *Battle Atlas of the Falklands War 1982 by Land, Sea and Air* (no place; Naval-History. Net, revised edition 2006), p. 50.
961 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 229-230.

を偵察する。他方海軍特殊舟艇部隊の第2小隊(2 SBS)はヘリコプターかボートでハウンド湾(Hound Bay)へ移動し、カンバーランド湾(Cumberland Bay)とグリトヴィケンへの接近経路を偵察する。情報を集めそれを精査したうえで、主力であるM中隊が夜間に秘かに上陸する。他方特殊作戦部隊SASの残りの兵力で、アルゼンチン軍主力の防御陣地へ白昼強襲をかけるという計画であった[962]。フォーチュナ氷河を偵察部隊の着陸点に選んだ理由は、この島の厳しい環境下で偵察隊の長距離移動は避けたいということと、島にいるアルゼンチン人にヘリコプターによる着陸を発見され、あるいはその音を聞かれたくないことの妥協の産物であった。しかしヘリコプターのパイロットや「エンデュアランス」の乗員およびイギリス南極観測隊隊員は、誰もこの氷河に行ったことがなく、この着陸点に不安を抱いていた。またM中隊のシェリダン少佐も氷河は絶対避けるべきだと忠告した。しかし大部分のSASの隊員は自分自身を信じ、任務が可能だと考えていた[963]。

### 第3項　イギリス軍のサウス・ジョージア島への先行偵察隊の派遣

#### a　フォーチュナ氷河における失敗

317.9任務群はサウス・ジョージア島上陸作戦実行の許可を4月20日午後に受領した。21日0800P時に「アントリム」と「タイドスプリング」は、フォーチュナ氷河へSASの偵察隊が潜入可能な位置へ到達した。しかし天候状況は厳しく、風速平均45ノット（約23メートル／秒）最大70ノット（約36メートル／秒）、視界不良で気圧は965ヘクトパスカルまで低下していた。0630P時に「アントリム」のウェセックスHAS.3ヘリコプターによる天候偵察が行われた。その結果は、雲の切れ目を発見したが長続きしないだろうと思われること、またフォーチュナ氷河自体が、多数の深いクレヴァスと強烈な下降気流により、非常に厳しい条件であることが報告された[964]。

この条件下でも1100P時に先ほどのウェセックスHAS.3と「タイドスプリング」の2機のウェセックスHU.5を使って氷河への進出が試みられた。ウェッセクスHAS.3は何回かフォーチュナ氷河へ行く経路を見つけようと試みたが、激しい機体への着氷、視界不良、強風および強い吹雪によりミッションを打ち切り帰還した。1300P時に依然として風速平均40ノット（約21メートル／秒）最大60ノット（約31メートル／秒）であったが、視界は良くなってきたので、3機のヘリコプターは再度出発した。3機は、フォーチュナ氷河に達し、その着陸は危険でほとんどホワイトアウトに近い条件の下で行われたが、特殊作戦部隊の兵員と装備を氷河の上におろし、無事帰ってきた。「アントリム」と「タイドスプリング」は、コンスタンス岬(Cape Constance)から30マイル（約32キロメートル）沖合へ引き上げ、SAS偵察隊の通信をモニターできるようにした。しかし天気は午後に急速に悪化し、風は平均で70ノット（約36メートル／秒）に達し、翌22日朝に嵐がおさまるまで「アントリム」は「タイドスプリング」を綱でけん引し

---

962 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 230.
963 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 242.
964 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 242.

ていなければならなかった[965]。

4 月 22 日 1100P 時フォーチュナ氷河にいる SAS 偵察隊指揮官から、ただちに撤退したいとの無線通信があった。おそるべき悪天と氷河の状態により、これら経験を積んだ山岳および極地戦闘の専門家は、5 時間弱をかけて 500 メートルしか進めず、打ちのめされたのだった。風速が上がり、気温は氷点下 20℃未満でホワイトアウトの状態がほとんど常に続き、偵察隊は停止して幕営を余儀なくされた。4 つのテントのうち 2 つを立てることができたが、残りの 2 つは強風により破壊された。そのため 10 名だけがテントに入ることができ、残りの者は外で身を守れるところを探した。時間がたっていくぶん気象状態は良くなったが、また天気が悪くなって負傷者が出る前に、ただちに撤退することが賢明に思われた[966]。

1205P 時に「アントリム」の 1 機のウェセックス HAS.3 と「タイドスプリング」の 2 機のウェッセクス HU.5 が、救出に向かったが、強烈な風は速度を増し、氷河表面には常に下降気流が吹き荒れている中で、SAS 偵察隊は吹雪におおわれていたため発見することができなかった。3 機のヘリコプターは、帰艦して給油後、再度 1330P 時に救出に向かい、SAS 隊員を発見した。隊員をヘリコプターに搭乗させたが、ウェセックス HU.5 の 1 機が離陸の際ホワイトアウトに突入し、墜落してしまった。そのヘリコプター搭乗員と SAS 隊員を残り 2 機のヘリコプターに分乗させたが、また残りのウェセックス HU.5 が陰鬱な白一色の中を飛ぶうちに、稜線にぶつかってしまった。最後のウェセックス HAS.3 は、過荷重のなか、なんとか「アントリム」へ帰り着き SAS 隊員を降ろした。ただちにそのヘリコプターは、毛布、サバイバル・キット、医療品を搭載して墜落現場へ向かったが、気象条件が悪くたどり着けなかった。それでも生存者と無線交信を行うことができ、重傷者がいないことを確認できた。その後 2 回「アントリム」から事故現場へ向かったが悪天のため引返した。明るさの残る最後の時間帯の 1630P 時に飛びたったヘリコプターは、事故現場にいた全員を救出し、1 トン以上の過荷重状態で「アントリム」へ無事帰還した[967]。

b　グリトヴィケン偵察も失敗

その間「プリマス」と「エンデュアランス」は、4 月 21 日サウス・ジョージア島の東へ移動して、氷山や商船の存在に関し偵察を行った。「エンデュアランス」は、ヘリコプターで、セント・アンドリュース湾(St. Andrews Bay)に残っていたイギリス南極観測隊員と連絡をとり、科学者の一人を船まで連れてきて、SBS への島の状況を報告させた。その報告によれば、アルゼンチンの侵攻の後、アルゼンチン軍の動きはないということであった。それから「エンデュアランス」はハウンド湾(Hound Bay)へ進出し、海軍特殊舟艇部隊第 2 分隊先遣偵察チーム(2 SBS advance reconnaissance team)を暗くなる直前に上陸させた。最初のグループはワスプ(Wasp)・ヘリコプターで輸送され、最後のグループは天候が悪化したためジェミニ(Gemini)・ボートで輸送された。このチームは、4 月 22 日 0300P 時までに部隊配置を行った。このチー

965 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 243.
966 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 243-244.
967 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 244.フリードマンの時刻の記述は、サウス・ジョージア島の日没の時刻からみて誤っているので、この(3)項では日没に合わせて時刻を修正した。

ムの計画は、バーフ半島(Barff Peninsula)を徒歩で横断し、次の夕方にワスプ・ヘリコプターからジェミニ・ボート2隻の空輸を受け、それでカンバーランド湾を渡航しグリトヴィケンへ向かうというものだった[968]。

SBS の隊員は、4 月 22 日の午後には、予定どおりカンバーランド湾東南角部の浜辺でヘリコプターから、ジェミニ・ボートを受領したが、2 隻のうち 1 隻が破損した。暗くなってから稼働する残りの 1 隻に小部隊は全員乗り込み、カンバーランド湾を横断しようと試みたが、強力な向い風（風力 11、瞬間風速 70 ノット〔約 130 キロメートル／時〕）により吹き戻された。海の状態もノーデンショルド氷河(Nordenskjord Glacier)からの氷山が密集してきている状態だった。SBS の指揮官は任務遂行不能と判断し、撤退することを航空母艦へ求めた[969]。

c　リースの偵察成功

317.9 任務群指揮官ヤング大佐は、フォーチュナ氷河の失敗による情報収集のスケジュールの遅れを元に戻そうと努力した。4 月 23 日「アントリム」からストロームネス湾内のグラス島(Grass Island)へ、SAS の偵察隊員をジェミニ・ボートにより潜入させようとした。しかしボートは、暖かい船内から急に極端な寒さにさらされ、うまく動かなかった。船外機がなかなか始動せず 5 隻のうち 3 隻だけが、1 マイル（約 1.6 キロメートル）離れたグラス島へ到達した。0800P 時に「アントリム」は、ジェミニ・ボートの 1 隻から、ストロームネス湾から外海へ吹き出されてしまうとの救難信号を受けた。ヤング艦長は艦を岸へ近づけ、ヘリコプターで捜索させた。1000P 時に岸から 20 マイル（約 32 キロメートル）離れたところでようやく見つけ、疲れ切った隊員を救出した。もう 1 隻のジェミニ・ボートは、バスン半島(Busen Peninsula)へ達し、その隊員は 3 日後に救出された[970]。

それでもようやく、アルゼンチン軍の近くへ偵察隊を潜入させることに成功したのだった。SAS 偵察隊は、グラス島からストロームネスとリースを観察し、前者は人のいる気配がないこと、後者はほとんど活動がみられないことを認めた。23 日から 24 日の夜にかけて、サウス・ジョージア本島へ上陸し、ストロームネスに誰もいないことを確認した。またハーバー崎(Harbour Point)からリースを観察し、アルゼンチン軍が 1 日のほとんどを、悪天を避けるため屋内にいることが判明した[971]。

第 4 項　アルゼンチン軍のサウス・ジョージア島配備

サウス・ジョージア島防衛の担当は、アルゼンチン海軍であった。アルゼンチン軍は 4 月 3 日サウス・ジョージア島を侵攻占領し、リースに 12 名とグリトヴィケンに 43 名、計 55 名の海兵隊員を駐屯させた。

968 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 243.
969 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 245.
970 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 245-246.
971 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 246.

この他リースに民間人の廃材回収業者 39 名が滞在していた[972]。海軍最高司令官アナヤ大将は、将来はこの島に科学観測基地を設けてアルゼンチンの実効支配を示そうと考えていた[973]。

ところが、イギリス艦艇がこの島に近付いているという情報が入り、アナヤ海軍大将は、この島をあきらめ、部下には無抵抗で降伏するよう命じた。しかし彼はふたたび考えが変わり、増強として約 40 名の海兵隊員を潜水艦「サンタ・フェ」に乗せ、4 月 21 日マル・デル・プラタ(Mar del Plata)海軍基地を出発させた。海兵隊員には、攻撃を受けたら抵抗せよ、ただしイギリス軍が圧倒的な兵力であったなら、それから降伏せよ、と命じた[974]。「サンタ・フェ」は 24 日深夜にカンバーランド湾の入り口に到着し、25 日の 0300P 時頃から約 2 時間をかけて、海兵隊員と補給物資をグリトヴィケンに揚陸した[975]。

### 第 5 項　サウス・ジョージア島の奪回

#### a　グリトヴィケンの奪回

4 月 25 日朝、「サンタ・フェ」はグリトヴィケンを出発した。海戦の項に記してあるとおり、イギリスの 317.9 任務群のヘリコプターはカンバーランド湾内で「サンタ・フェ」を攻撃して行動不能にし、任務群の安全を確保した。「サンタ・フェ」はグリトヴィケンに戻り、キング・エドワード崎に乗り上げた。もはやグリトヴィケンにいるアルゼンチン軍が、イギリス軍の存在を知ったことは確実であり、イギリス軍はヘリコプターでグリトヴィケン周辺を偵察した。その結果、アルゼンチンの機関銃射撃はあったものの、海岸周辺での活動はなく、監視哨や防御陣地の設置は見られなかった[976]。

ヘリコプターは全機 1045P 時までには航空母艦へ帰り、317.9 任務群指揮官ヤング海軍大佐は、「アントリム」艦上でただちにヘリコプター搭乗員のディブリーフィングを行い、引き続き作戦会議を開いた。潜水艦「サンタ・フェ」を行動不能にしたこの勢いを利用するべきであることは全員が一致した。上陸戦闘兵員が約 120 名搭乗しているタンカー「タイドスプリング」はアルゼンチン潜水艦進出中との情報により、この時点で島から約 200 マイル（約 320 キロメートル）離れた海域に退避しており、この作戦から除外し、現有兵力で準備ができ次第強襲することに決定した。兵員は「アントリム」に搭乗している M 中隊の指揮班と迫撃砲兵、SAS の D 中隊の指揮班と通信兵および山岳・極地戦兵、2 SBS の指揮通信班およびその他の部隊の 79 名からなる。また「プリマス」と駆逐艦「ブリリアント」(HMS Brilliant)（アルゼンチン潜水艦に対抗するため 317.9 任務群に増強され 4 月 24 日合流した。）には、SAS と SBS の残りの

---

972 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 14.
973 Martin Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London; Viking, 1989), pp. 71-72.
974 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 72; Robert L. Scheina, *Latin America: A Naval History 1810-1987* (Annapolis; Naval Institute Press, 1987), p. 245. 増強の兵員約 40 名は Middlebrook を根拠とする。Scheina は、20 名の増強で、内 9 名が海兵隊、残り 11 名はサウス・ジョージア島の施設を維持するための技術者としている。
975 Scheina, *Latin America*, p. 247.
976 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 251.

兵隊および海兵隊の分遣隊が搭乗しており、合わせて 62 名であった[977]。

この強襲の計画は、まず「アントリム」と「プリマス」の 114mm 艦砲により、グリトヴィケンのアルゼンチン軍駐屯地周辺へ砲撃を行う。しかし上級部隊の命令である「人命の損失と施設等への破壊を最低にする」を守り、威かく射撃に徹する。艦砲射撃の観測には「エンデュアランス」のワスプ・ヘリコプター1 機がその任務に当たる。上陸部隊は前述した「アントリム」の寄せ集め部隊 79 名をグリトヴィケンから 1.5 マイル（約 2.4 キロメートル）南方にあるヘステスレッテン平地(Hestesletten Flats)へ、ヘリコプターで上陸させる。輸送に当たるのは「アントリム」のウェセックス HAS.3 を 1 機と「ブリリアント」のリンクス(Lynx)HAS.2 を 2 機の合計 3 機で、各機とも 1 回の輸送で 8 名の兵員しか運べなかったので、数回往復することになる。この平地とグリトヴィケンの間にはブラウン山(Brown Mountain)があり、アルゼンチン軍の駐屯地からは見ることができない。この部隊は、上陸後グリトヴィケンのアルゼンチン駐屯地へ進撃する。「プリマス」と「ブリリアント」の兵員 62 名は予備兵力として、必要があればアルゼンチン駐屯軍の側面を攻撃できるよう待機する[978]。

以上の計画に基づき、1400P 時から「アントリム」と「プリマス」による兵員の着陸予定地点とそれを見下ろせる場所に対する砲撃が始まった。1430P 時に 19 名の兵員を搭載した 3 機のヘリコプターが艦から発進し、1445P 時ヘステスレッテン平地にその兵員を降下させた。さらに 1530P 時までにヘリコプターは、「アントリム」の残りの兵員をその平地に輸送した。上陸した部隊は、北へ向かって進軍した。キング・エドワード崎に近くなると、部隊は慎重にアルゼンチン軍の兵舎へ接近した。しかし 1705P 時に国旗掲揚台に白旗があがっているのが確認された。実際にアルゼンチン軍は、艦砲射撃が始まるとすぐに白旗をあげていた。また無線通信で、グリトヴィケンのアルゼンチン軍最上級者「サンタ・フェ」艦長ビカイン海軍少佐(Capitán de Corbeta Horacio Bicain)が「アントリム」と交信し、グリトヴィケン所在アルゼンチン軍の降伏の意思を伝えた。1730P 時にはイギリス国旗とイギリス海軍旗がグリトヴィケンに掲揚された。この陸上戦闘で両軍に死者・負傷者はでなかった[979]。

#### b　リースの奪回

次はリースを占領するためヤング海軍大佐は、「プリマス」艦長ペントリース海軍大佐(Captain D. Pentreath)を総指揮官として 4 月 25 日 1815P 時「プリマス」と「エンデュアランス」に SAS と SBS の隊員を搭乗させ、リースのあるストロームネス湾へ派遣した。「エンデュアランス」艦長バーカー海軍大佐

---

[977] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 251-252.なお Freedman は時刻を同じ数字で Z 時としている。Roger Perkins, *Operation Paraquat: The Battle for South Georgia* (Somerset; Picton, 1986)p. 160 の時刻は Freedman と同じ数字表記（Perkins は時間帯を書いていない）であるが、記述内容がサウス・ジョージア島の日の出・日の入時刻との関係から、P 時の方が自然である。また Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley; Midland, 2002), p. 37 は、Freedman と同じ数字表記でローカル・タイム（P 時）と表しているので、本稿の表記も P 時とした。

[978] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 252; Perkins, *Operation Paraquat*, pp. 168-169.

[979] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 252-253; David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London, Guild Publishing, 1987), p. 105.

(Captain Nick Barker)はリースのアルゼンチン軍へ、無線で降伏するように説得した。リースのアルゼンチン軍指揮官はアスティス海兵隊大尉であり、その通信に対し「民間人 39 名は投降するが、アルゼンチン海兵隊員は戦う。」と返答した。イギリス側は、2300P 時に特殊作戦部隊の兵員をジェミニ・ボートでトンスバーグ崎(Tonsberg Point)に上陸させ、艦砲で火力支援を行いながらリースを攻撃する計画で、準備に取りかかっていた。ところが 2245P 時にアスティス大尉から無線交信があり、決心を変え海兵隊員も降服の準備を行っている、イギリス軍指揮官は明日リースのサッカー場へヘリコプターで飛来して欲しい、そこで降伏の指示を受ける、というのであった。イギリス側はそれを認めた[980]。

4 月 26 日早朝(0200P 時ごろと思われる)イギリス側は、ハーバー崎にエィヴォン・シーライダー(Avon Searider: 小型モーターボート)とジェミニ・ボートで SAS と SBS の 60 名の兵員を上陸させた。リースから 600 ヤード（約 540 メートル）離れた地点であり、アルゼンチン軍兵舎を監視するには良い場所であった。0600P 時「エンデュアランス」から 2 機のワスプ・ヘリコプターにより SBS の兵員をリース港とハーバー崎の前浜に送りこんだ。またアルゼンチンの民間人が手に懐中電灯を持ち、古い捕鯨用施設から出てきてハーバー崎のイギリス軍に降服した[981]。

ここでバーカー大佐は、いまだアルゼンチンの武装兵が支配している場所へヘリコプターで着陸することの危険性を考えた。バーカー大佐は、ペントリース大佐に具申して予定を変更し、無線でアスティス大尉へ、全員武器を建物に置いてハーバー崎のイギリス軍の所まで前進するように命じた。アスティス大尉はこの命令に従うほかはなく、夜が明けてからアルゼンチン海兵隊員は 12 名が 1 列縦隊になって行進してきた。アスティス大尉は、昨夜のうちに急いで兵舎のまわりやサッカー場に多数の地雷を敷設していた。バーカー大佐の用心は、まさに的中したのだった[982]。

### 第 6 項　まとめ

アルゼンチン側から見れば、このイギリスによるサウス・ジョージア奪回作戦は、予想していなかったことであり、防衛の準備が全くなかった。アルゼンチンは海上戦力では、イギリス攻撃型原子力潜水艦の脅威から、ディーゼル潜水艦を 1 隻送ったのがやっとであり、それもイギリスに行動不能にされてしまった。航空戦力については、フォークランド諸島からさらに離れた飛行場もない島であり、侵攻の際に使ったヘリコプターは、フォークランド諸島へ引きあげてしまっていた。わずかにアルゼンチン本土から、ボーイング(Boeing) B707 と C-130 による数回の偵察を行っただけであった。制海権も航空優勢もない孤島を、守りきることができないことは太平洋戦争の戦例を見れば明らかである。

アルゼンチンの戦略が、この島を守りきることではなく、イギリスに多大の出血を強い、有利な条件で停戦交渉を行おうということなら、徹底的な要塞化という考えもあるだろう。しかしフォークランドより

---

980 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 253-254; Perkins, *Operation Paraquat*, pp. 177-178.
981 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 254; Perkins, *Operation Paraquat*, p. 178.
982 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 254; Perkins, *Operation Paraquat*, pp. 178-179.

も遠く離れ、気象条件も厳しいこの島の要塞化は、より困難なことであり、むしろフォークランドの要塞化に全力を集中した方が望ましい結果が得られただろう。アナヤ海軍大将による陸戦兵力の増強は少数で無意味であり、兵力のむだ使いであった。またそのために潜水艦に浮上航行を強い、その損失につながった。駐屯陸上兵力は、兵舎にこもったままで、監視哨や陣地を設けることもなく、戦意は非常に低かった。これは、アナヤ大将の当初の指示である、抵抗せずに降伏せよ、が影響したのだろうか。また外交情報や航空偵察により、イギリス軍がサウス・ジョージア島奪回に向っていることはアルゼンチンもわかっていたはずである。それが駐屯部隊に情報として伝わっていたのか不明である。

一方イギリスは、この「パラケット作戦」において航空戦力、海上戦力、陸上戦力すべての面で上回っており、士気においても圧倒していた。イギリスは、指揮官で同等階級者が指揮系の上下の部隊におり、若干の不具合はあったようだが、大きな問題とはならなかった。イギリス軍にとって問題となったのは、アルゼンチン軍よりもサウス・ジョージア島の気象・地形であり、まかりまちがえば多数のSAS、SBSの隊員を失ったはずであった。そうなれば以後の「コーポレート作戦」は、雰囲気が重苦しいものになっただろう。しかし実際はヘリコプターを2機失っただけで、兵員がすべて無事だったのはイギリスにとって幸運であった。

## 第5節　イギリス軍のサン・カルロス上陸

### 第1項　第1波、第2波の上陸とアルゼンチン軍「鷲分遣隊」の駆逐

上陸作戦の第1番の戦闘行動は、ファニング・ヘッドにいるアルゼンチン軍「鷲分遣隊」を駆逐し、水陸両用群の艦船の安全を確保することであった。5月20・21日現地時間深夜、35名で汎用機関銃と迫撃砲で武装した海軍特殊舟艇部隊第3小隊(3 SBS)は、艦砲射撃管制将校(Naval Gunfire Officer: NGFO)とスペイン語通訳将校を伴い、駆逐艦「アントリム」から2機のウェセックス・ヘリコプターでファニング・ヘッド南東約3キロメートルの地点に着陸し、それからファニング・ヘッドまで約900メートルの稜線上まで移動した[983]。21日0052Q時「アントリム」の4.5インチ砲によるファニング・ヘッドに対する射撃が始まり、約30分間で合計268発を撃ち込んだ。3 SBSの隊員は、汎用機関銃を横一線に配置し、その後方に迫撃砲と小火器による守備班をおいた。そして暗視眼鏡で、ファニング・ヘッドの状況を観察した[984]。

一方、この時ファニング・ヘッドには、ロベルト・レジェス少尉(Teniente Roberto Reyes)を指揮官に下

---

[983] 3 SBSが「鷲分遣隊」を駆逐する作戦の実施時刻は、資料によりさまざまであり、たとえば3 SBSのファニング・ヘッド近傍降着時間は20日2300Q時頃とするものから、21日0340Q時とするものまで幅がある。一番新しいもののひとつであり、各資料にあたり非公開の公式資料をも見ているFreedmanの公式戦史では、21日0340Q時としている。しかしFreedmanも書いているように、上陸部隊が最初にサン・カルロスに上陸する予定時刻は21日0230Q時であった。常識的に考えれば「鷲分遣隊」の駆逐は0230Q時より前でなければならなかったはずである。Freedmanはその点について何も言及していない。参考: Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 103-104; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 469; David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War* (London, Guild Publishing, 1987), pp. 179-180; Burden et al., *Falklands the Air War,* pp. 269, 278.

[984] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 104; Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p. 180; Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 207. 艦砲の発射時刻は、Brownによった。

士官 4 名、兵 15 名が配置についていた。残りの「鷲分遣隊」の者はポート・サン・カルロスに所在していた。「アントリム」の射撃で、ファニング・ヘッドに配置した 106mm 無反動砲は破壊され若干の負傷者を生じた。レジェス少尉は、砲撃の合間に部下をファニング・ヘッドの山影に退避させ、部隊長のエステバン中尉に連絡を取ろうとしたが取れず、ファニング・ヘッドから退却することを決心した[985]。

布陣していた 3 SBS の兵士は、ファニング・ヘッドから自分達の方へ向かって来るアルゼンチン兵士を暗視眼鏡で見て、一斉に射撃を行った。その後通訳将校のロッド・ベル海兵隊大尉(Captain Rod Bell, RM)は、スペイン語で降伏を呼びかけた。結局 6 名が投降し、3 名は負傷して横たわっているところを収容された。レジェス少尉の率いる残りは反撃を行いつつ、闇夜の中に逃げ出すのに成功した。3 SBS は約半分を逃したものの要衝の地ファニング・ヘッドを押さえ、上陸部隊の安全を確保した[986]。
レジェス少尉の率いる小集団はその後サン・カルロス周辺をさまよい、海鳥と羊を捕獲して食べて命をつないだ。しかし大部分が塹壕足（trench foot : 凍傷に似た足部疾患）や凍傷にかかり、6 月 8 日にイギリス海兵隊第 40 コマンド大隊の偵察隊員に捕えられ捕虜となった[987]。

3 SBS が「鷲分遣隊」を駆逐している間、イギリス上陸部隊本隊第 1 波の海兵隊第 40 コマンド大隊は、乗艦の強襲揚陸艦「フィアレス」から上陸用収艇（Landing Craft Utility : LCU。排水量 210 トン）に乗り込み発進した。同じく第 1 波の第 2 空挺大隊は民間徴用船「ノーランド」から強襲揚陸艦「イントレピッド」を航空母艦とする LCU4 隻に移乗する予定だった。しかしまず「イントレピッド」の LCU が、暗夜、湾内（当日は月齢約 28、月の出 0503Q 時、日出 0736Q 時）で無線封鎖と灯火管制の中、「ノーランド」を発見するのに手間取った。続いて第 2 空挺大隊は、予行練習もなしに完全武装の個人装具と携行武器をつけ、暗く貨物を満載した狭苦しい船内を通って、舷側から不安定な縄梯子をつたって約 3 メートル下の LCU に移乗するのに手間取った。結局上陸時刻は計画の 21 日 0230Q 時から 1 時間ほど遅れてしまった[988]。

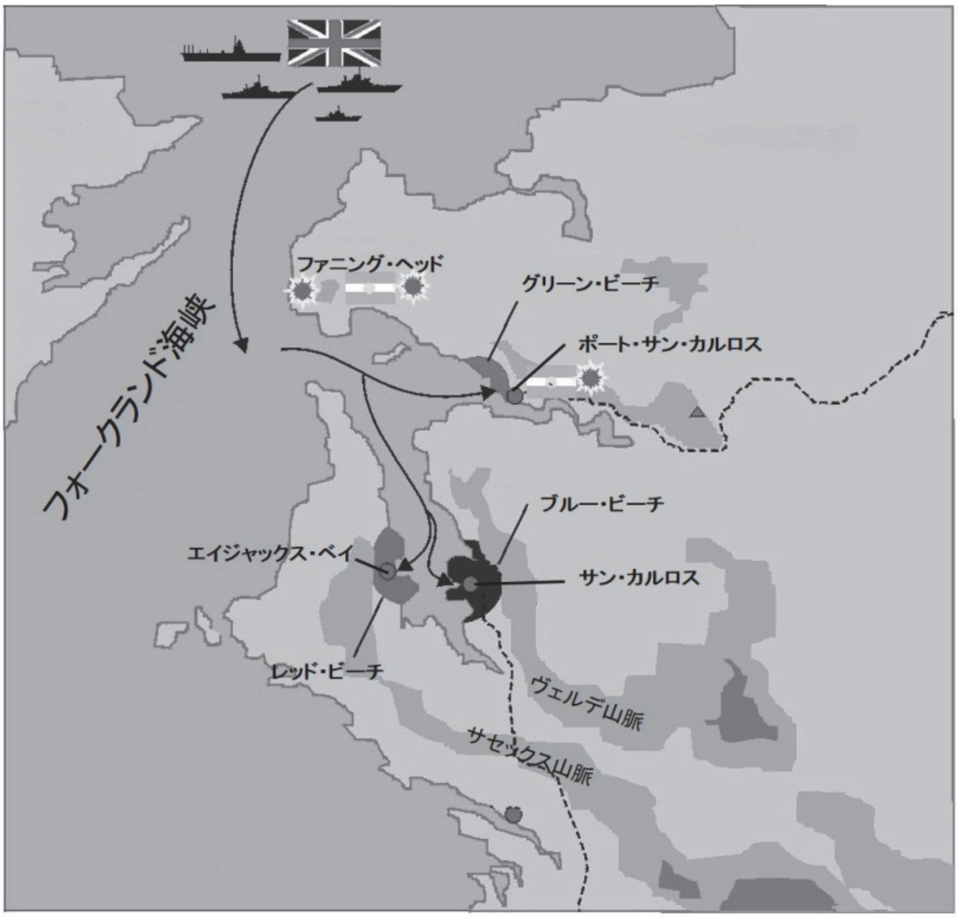
最初に上陸した部隊は、サセックス山確保の重要性から第 2 空挺大隊であり、次が第 40 コマンド大隊だった。第 2 空挺大隊は、0330Q 時ごろサン・カルロスのブルー・ビーチ 1 に上陸し、数分遅れて第 40 コマンド大隊がブルー・ビーチ 2 に上陸した。第 2 空挺大隊は上陸時若干の混乱を生じたが、すぐに C 中隊が先頭となって 1 列になり、8 キロメートル先の標高 270m のサセックス山へ向け行軍を開始した。第 40 コマンド大隊は、上陸地点周辺の入植地を解放しユニオン・ジャックの旗を入植地に掲揚した。それからサン・カルロス東方標高約 240 メートルのヴァード山(Verde Mountain)稜線上に橋頭堡の東面を防御する陣地を布陣した[989]。

---

985 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 104; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 146.
986 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 104; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 146.
987 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 104.
988 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 102-103; Middlebrook, *Operation Corporate*, pp. 208-209. なお、Freedman は上陸遅延の原因を「フィアレス」搭載の衛星航法システムの欠陥で「フィアレス」が計画より速く進みすぎたためであるとしている(Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 469-470.)。
989 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 470; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 106-108; Middlebrook, *Operation Corporate*, pp. 210-211.

上陸部隊第 2 波の上陸は、計画よりさらに遅れが生じた。予定より 2 時間遅れ 0530Q 時に「ストームネス」搭乗の海兵隊第 45 コマンド大隊は LCU に移乗を終え、エイジャックス・ベイのレッド・ビーチへ向った。大隊は上陸して、目的の 1 つである旧食肉加工工場を確保し、ついでサセックス山の北斜面を完全重装備で行軍し、第 2 空挺大隊に加勢した。第 3 空挺大隊は、揚陸強襲艦「イントレピッド」から 2 隻の LCU と 4 隻の車両兵員上陸揚収艇 LCVP（Landing Craft Vehicle/Personnel : 排水量 24 トン）に移乗し、ポート・サン・カルロスのグリーン・ビーチへ向かい発進した。途中 LCU1 隻が上陸の砂浜まで約 18 メートルというところで座礁してしまい、LCVP で座礁した LCU の搭載物を上陸地点まで往復輸送した。第 3 空挺大隊の上陸は、0700Q 時ごろとなった。第 3 空挺大隊は、ポート・サン・カルロスに上陸して、上陸部隊の北翼を守備する配置についた[990]。

一方アルゼンチン軍については、ファニング・ヘッドから約 8 キロメートル離れたポート・サン・カルロスにいる「鷲分遣隊」の指揮官エステバン中尉は、深夜「アントリム」の砲撃の音を聞いたが、レジェス少尉の部隊と第 3 SBS の交戦による小火器等発射音は聞こえなかった。それから 3 時間エステバン中尉は、レジェス少尉と連絡をとろうとしたが、できなかった。またレジェス少尉からの伝令がやってきて、何が起きたかつたえるだろうと期待していたが、誰も来なかった。夜明けになってエステバンは、双眼鏡を持った斥候を入植地の裏にある高台に送りこんだ。0810Q 時頃、朝霧がうすれるうちに、斥候は、約 5 キロメートル離れたサン・カルロスの湾内に白い客船が浮かんでいるのを見て驚いた。さらに朝霧があけると、3 隻の軍艦が見え、




図第 19　イギリス軍のサン・カルロス上陸地点

出典：Wikimedia Commons（http://commons.wikimedia.org/wiki/File:San_Carlos_1a.png）を基として、Gordon Ramsey, *The Falklands War Then and Now* (Old Harlow, Essex; After the Battle, c2009), p. 190. を参考に加筆した。

990 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 470; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 108; Middlebrook, *Operation Corporate*, pp. 211-212.

上陸揚収艇が兵員を満載して白い船から出発する光景も観察された。朝霧が完全にあけると、あらゆる方向から上陸揚収艇が航行しているのが見え、さらにイギリス兵が1列になって、ポート・サン・カルロスへ向かって来るのも見えた。エステバン中尉はこれらの状況を、すべてグース・グリーンの第 12 歩兵連隊へ無線で報告すると共に、航空機による対地攻撃を要請した。そして、42 名の部下を率いてポート・サン・カルロスの入植地から東方へ離脱した[991]。

第2項　揚陸の継続

5月21日イギリス軍は、夜が明けると上陸作戦の次の段階として、ヘリコプターも使い、さまざまな物資の揚陸を始めた。

ヘリコプターによる揚陸は、イギリス陸上部隊の進捗状況がよく知らされないまま行われていた。イギリス海軍第 846 航空中隊(846 Naval Air Squadron)のシー・キング・ヘリコプター1機は、機体下のスリングに迫撃砲弾薬をぶら下げ、機内には、レピアの発射器の設置場所を偵察するための第 12 対空連隊 T 中隊の兵員を搭載し、ポート・サン・カルロス入植地東方を飛行していた。イギリス海兵隊第3コマンド旅団航空中隊(3 Command Brigade Air Squadron, RM: 3CBAS)のガゼル(Gazelle)・ヘリコプター1機（汎用機関銃およびロケット弾装備）はその護衛のために編隊を組んで飛行した。そのうちこの編隊は気づかないうちに、地上の第3空挺大隊の先頭を超え、入植地より東方を飛行していた[992]。

シー・キングのパイロットは、誤りに気づき 0810Q 時頃に 180 度旋回を行い、護衛のガゼルのパイロットもそれに従った。その時地上にいたのはアルゼンチン「鷲分遣隊」の兵員で、指揮官エステバン中尉は低空を旋回するヘリコプターを見て、ヘリボーン作戦で自分たちは包囲されているものと信じ、部下に射撃を命じた。シー・キングは突然の射撃を受け、機体下の迫撃砲弾を切り離し、旋回して射程圏外へ脱出した。シー・キングに被弾はなかった。続いて「鷲分遣隊」はガゼルに集中射撃を浴びせ、ガゼルは海上に不時着した。搭乗員2名は、機内から脱出し海面に浮かびあがった。エステバン中尉は部下に射撃中止を命じたが、兵士の中には離れていて命令の聞こえない者や興奮していた者がいて、浮かび上がった搭乗員を射撃した。また兵士は徴兵されて1カ月半ほどで、ジュネーブ条約について何も教育を受けていなかった。パイロット1名が死亡した[993]。

その直後の 0835Q 時頃、別の第 846 航空中隊シー・キングの前方を飛び偵察を行っていた 3CBAS のガゼル・ヘリコプター1機もまた、「鷲分遣隊」の攻撃を受け陸上に墜落、搭乗員2名はその衝撃で死亡した。その他にも別の 3CBAS のガゼル1機が午前中地上からの小火器の射撃を受け、12 発被弾し任務を中止し

---

[991] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 146-147.
[992] Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 213; Hobson, *Falklands Air War*, p.77.
[993] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 147; Hobson, *Falklands Air War*, p.77; Burden et al., *Falklands the Air War*, p.341; Sgt. E. R. Candlish, "Follow-Up Incident Report on Loss of Gazelle CX, 21 May 82 – 'D' Day" (20 Oct. 82), Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, pp. 192-193. Hobson および Burden はガゼルが攻撃を受けた時間を、0741Q 時としている。この墜落したガゼルの生存者 Candlish のレポートでは 0810Q 時としているので、ここではそれによった。またそのレポートでは搭乗員死亡の原因となった傷は飛行中に受けたもので、墜落後の銃撃は命中していないはずである、としている。

帰還した。乗員に負傷はなく、ヘリコプターも 2 時間で修理された[994]。「鷲分遣隊」は、教育を十分受けていない新兵がほとんどなのにもかかわらず、短時間のうちに 2 機のヘリコプターを撃墜し、1 機に損害を与えた。

イギリス第 3 空挺大隊は、ヘリコプターの損害を受け、A 中隊と C 中隊へポート・サン・カルロス周辺から「鷲分遣隊」を掃討するよう命令した。A 中隊は兵士の集団を発見し、ただちに射撃を行うと同時に火力支援を要請した。ところがその兵士の集団は C 中隊であり、C 中隊も A 中隊をアルゼンチン兵士と思い小火器で応戦すると共に火力支援を要請した。火力支援の要請を受けた大隊司令部も誤認し、榴弾砲による射撃が行われ、それに迫撃砲も加わった。2 両のシミター軽戦車が C 中隊を攻撃し、重傷を負った兵員を救出しようとしたヘリコプターが損傷を受けた。大隊司令部のヒュー・パイク陸軍中佐(Lieutenant Colonel Hew Pike)は、自分の中隊同士が戦っていることに気づき、射撃停止を命じた。これがフォークランド戦争におけるイギリス軍最初の「同士討ち」であった[995]。

第 3 空挺大隊に配属された軽戦車で編成された装甲偵察車隊は、アルゼンチン部隊の追撃命令が出るものと期待して待っていた。しかし試みてもいないのに、司令部の考えは、泥炭地の上では軽戦車でも運用できないだろう、というもので、ついに追撃命令は出なかった[996]。

エステバン中尉は、42 名になった「鷲分遣隊」を率いて第 3 空挺大隊の砲撃をかわし、1 名の負傷者も出さずに東方にのがれた。4 日間約 30 キロメートルの泥炭地の原野を横断し、ダグラス入植地(Douglas Settlement)へたどり着いた。そこからいったんヘリコプターでスタンレーまで輸送され、そして原隊のあるグース・グリーンへ戻った[997]。

5 月 21 日は、フォークランド水道にいた艦艇に対してアルゼンチン航空部隊が激しい攻撃をかけたが、サン・カルロス湾内で荷を下ろしている船や、陸揚げされ野積みになっている武器、弾薬、資材等へは攻撃がなかった。まだレピア・地対空ミサイルがサン・カルロス周辺に配置されず防空網が完成されていない脆弱な時期だっただけに、第 3 コマンド旅団にとっては幸運だった。船から物資の陸揚げは全力で行われ、まず兵員 3,000 名が 2 日分の携行食を持って上陸した。次に弾薬の陸揚げに力点が置かれ、各部隊の所在しているところにまず置かれた。上陸群が管理する大量の予備弾薬は、海兵隊コマンド兵站連隊(Command Logistic Regiment, RM) によりエイジャックス・ベイに保管庫が作られ、その後の作戦で弾薬補給処の役割を果たした[998]。

またとくにレピア・ミサイルは、橋頭堡の防空態勢を固めるため一刻も早くサン・カルロス周囲の高台に設置すべきものと考えられていた。しかし精密機器であるため輸送船のデッキの下に収容されており、

---

994 Hobson, *Falklands Air War*, p.78; Burden et al., *Falklands the Air War,* p. 341; Candlish, "Follow-Up Incident Report on Loss of Gazelle CX, 21 May 82 – 'D' Day" p. 193. このガゼルの墜落時刻も Candlish によった。

995 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 112. なお Hobson および Burden には、このヘリコプターの損傷について記述がない(Hobson, *Falklands Air War*, pp. 76-85; Burden et al., *Falklands the Air War,* pp. 337-362.)。

996 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 111-112; Middlebrook, *Operation Corporate*, pp. 215.

997 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 148.

998 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 164-165; Middlebrook, *Operation Corporate*, pp. 216, 226-227;

揚陸がなかなか進まなかった。レピアをすべて降ろすだけでもヘリコプターで63ソーティを必要とした[999]。それでも揚陸手段が少ない中、この 21 日中に、弾薬も含め 1,000 トンの貨物が船から降ろされた。その中には総数 30 門中 24 門の L118 軽砲と、12 基中 10 基のレピア・ミサイル発射器、8 両の軽戦車も含まれていた[1000]。

またこの日のうちに橋頭堡を囲む稜線は、すべて抵抗なく確保し、ほとんどにわたり壕が掘られ、動哨が巡回した。この成功は、事前のSAS、SBSによる注意深い偵察と、直前の陽動作戦によるものである[1001]。

マルビナス諸島総軍司令官メネンデス少将は、エステバン中尉の報告や航空機による偵察から、サン・カルロス地区へイギリス軍が上陸したことを知った（もちろんグース・グリーンに対する攻撃やスタンレーに対する艦砲射撃の報告も知っていた）。判断としては、サン・カルロスへの上陸は第 3 コマンド旅団の一部の兵力で陽動作戦であり、今後第 3 旅団の残りと第 5 歩兵旅団は、スタンレーを含めたフォークランドのどこへでも上陸できるというものだった。また道路がなく、泥炭地と硬い岩石で行軍が困難なフォークランドの地誌を考えると、接地圧の低いキャタピラー式輸送車か、ヘリコプターがなければ、部隊の機動は困難であった。フォークランドのアルゼンチン軍には前者は全くなく、後者は少数でしかもイギリス航空部隊の対地攻撃によりさらに数が減少していた。また隠れる樹木 1 本さえないフォークランドで、イギリスの航空優勢が増していく中、陸上部隊の徒歩行軍は危険であった。そのため、たとえサン・カルロスへ陸上部隊による攻撃を考えたとしても実行は不可能だった[1002]。

結局アルゼンチン軍の陸上部隊はサン・カルロス上陸に対し、ごく少数の「鷲分遣隊」が軽度の戦闘を行ったのみだった。しかもその戦闘は、イギリス軍を攻撃したのではなく、イギリス軍に追い払われたものであった。上陸後アルゼンチン軍は、ごく少数の海兵隊員を偵察のためサン・カルロス周辺に送りこんだが、成果はなかった。22 日以後 5 月 27 日までイギリス軍は地上においてアルゼンチン軍と接触することはなかった[1003]。そして、輸送船、人員および橋頭堡に集積してある物資等がアルゼンチン航空部隊の目標となることは、少なかった。このため物資の陸揚げは 27 日までにはほとんど終わり、すべての火砲、車両、すぐさま必要となる物資および弾薬は陸揚げすることができた[1004]。

## 第 6 節　グース・グリーン（Goose Green）の戦い

### 第 1 項　イギリス軍がグース・グリーンでの戦闘を決意するまで

#### a　サン・カルロス上陸後の陸上作戦の方針

[999] Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 213; Hobson, *Falklands Air War*, p.78.
[1000] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 165; Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 226; Hobson, *Falklands Air War*, p.78.
[1001] Middlebrook, *Operation Corporate*, p. 217.
[1002] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 113; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 175-176.
[1003] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 113; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 175.
[1004] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 491.

5 月 21 日からのイギリス軍によるサン・カルロスへの上陸に対し、アルゼンチン軍は航空部隊による攻撃の他は、一切これに対して抵抗を行おうとしなかった。一方イギリス軍の高級指揮官にとって、フォークランドに上陸した後アルゼンチン駐屯軍に対し、どのように攻撃作戦を行うかは、戦略的に重大な論争となっていた[1005]。

ちょうどこの上陸の時期は、イギリスの計画する作戦線表の実施に対する条件が厳しくなってきていた頃であった。すなわち冬に向う天候の悪化、兵員および兵器の消耗、兵器の損失、伸びきった補給線など、これらが重なり合いイギリスの作戦遂行は摩擦の大きいものになってきていた。また作戦線表で段階を 1 歩進めるには政治的決断を必要とするものである。任務部隊のイギリスからの出航、サウス・ジョージア島の奪回、封鎖水域の宣言、第 5 歩兵旅団派遣の決定、第 3 コマンド旅団の上陸、みなすべてそうであった。スタンレーにおける戦闘については、上陸前は政治的合意が形成されておらず、5 月 12 日の「サットン作戦」の命令では、この問題についてはっきり書かれていなかった。また 5 月 14 日に戦時内閣に対し参謀長委員会会議が行った「サットン作戦」実施計画の報告は、どうやって上陸するかに焦点が絞られ、どうやってフォークランドを奪回するかについては何も書かれていなかった[1006]。

5 月 19 日には、317.1 任務群の上陸後の作戦概要について任務部隊司令官の承認が得られた。この概要からは、作戦を急いで実施しようという意図はうかがえなかった。陸上軍指揮官になるムーア海兵隊少将にとってみれば、3 個大隊とヘリコプターがすぐ増強されるのであるから、何も先走ってやる必要はなかったのだ。この時点での計画は、アルゼンチン軍は十分組織化された抵抗を行い、イギリス軍は 2 個旅団の進撃のため十分な資源を準備するという仮定の下に行われていた。しかしこの仮定は参謀長委員会会議も第 3 コマンド旅団も受け入れたものではなかった[1007]。

任務部隊司令部では、アルゼンチン軍の積極性について楽天的な見方を取るようになっていた。5 月 22 日には、任務部隊指揮官フィールドハウス大将が、海兵隊第 3 コマンド旅団長トンプソン准将へ今後の陸上作戦につき彼の意図の概要を尋ねた。トンプソンが直面していた問題は、極端に伸びきった補給線と前縁部隊の脆弱性であり、具体的に言えば、ヘリコプターの数と防空のための兵器が限られていることだった。アルゼンチンの航空兵力がさらに減少しないうちに、ヘリコプターで大規模な陸上部隊の展開を行うことは、トンプソンにとって受け入れがたいことであった。フィールドハウスは、トンプソンが過剰に慎重であり、アルゼンチン軍の抵抗力を誇大に考えていると見なした。さらに作戦の遅れは、国内では、国民がテレビでイギリスの船が沈むのを見せつけられながら、陸上戦では何も起こらないという不満から支持の低下を招き、国際的には、休戦を求める圧力が強まり、イギリスはフォークランド諸島のごく一部を占領するだけに終わってしまう危険性があった[1008]。

しかも上陸の成功とアルゼンチン軍の絶えまない航空攻撃は、イギリスの政治家から、交渉による和解

---

1005 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 552-553.
1006 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 554-555.
1007 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 555-556.
1008 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 556-557.

を求めるふりさえもする意欲を失わせてしまった。そしてスタンレーの奪回がフォークランド諸島のイギリス統治権を回復する唯一の手段として、求められるようになった。ロンドンにおける雰囲気の変化は、戦場においてより高いリスクを許容する戦略の形成に結びついていった[1009]。

5月24日には、フォークランド諸島陸上軍指揮官としてフォークランドに赴くため「クイーン・エリザベスII」に搭乗中のムーア少将へ、任務部隊司令部から電報が届いた。その電文は、「アルゼンチン軍は、効果的な攻撃的陸上作戦を行う意志も手段もなく、こちらから迅速かつ強力な打撃を与えれば、すぐ決着するだろう、スタンレーにすぐさまコマンド部隊を送り込むことを期待する。」という中身であった。ムーアの返事は、「まだアルゼンチンの航空戦力が十分に損耗する時期が不明であり、したがってスタンレーの近くに砲兵・歩兵を展開できる時期も不明である」と答えながらも、しかし彼の目的が、相変わらず速やかなスタンレーの占領であることを強調した[1010]。

ムーアは、ロンドンにいる海軍の提督が、陸上作戦の複雑さを真に理解しておらず、「すべてが意志の問題であり、すばやい行動はすばやい解決をもたらし、いざとなればアルゼンチンは戦わない」と決め込んでいる、と心配した[1011]。

b　状況の変化と陸上作戦の変転

任務部隊司令部とトンプソンならびにムーアとの不一致は、作戦実施における迅速さとリスク許容の兼合いの問題であり、スタンレーという目標の方向性については一致していた。また両者の間に、グース・グリーン（Goose Green）とダーウィン（Darwin）に駐屯するアルゼンチン軍を攻撃することについても、ある程度の合意が存在していた。グース・グリーンには、牧羊農家が入植しており、フォークランドで2番目に大きい集落である。グース・グリーンから1.5キロメートルほど離れ数軒の農家があるダーウィンと合わせて戦争当時の人口は約120名であった。グース・グリーンは、東フォークランド島の主部をなす島とラフォニアという比較的大きな島を結ぶ地峡の近くにあり、この地峡は約8キロメートルの長さで、幅は約1.5キロメートルである[1012]。

ムーアは、飛行場を破壊し駐屯軍に損害を与え、橋頭堡に帰還するグース・グリーンへの襲撃を計画し、トンプソンも同様に考えていた。この段階における任務部隊司令部は、この襲撃がスタンレー攻撃の戦力を減少させるのではないかということと、また不必要な損耗の危険性に神経質になっていた。なぜ占領ではなく襲撃かというと、占領は奪回した入植地を守備しなくてはならず1個大隊を拘束するからであった。

---

1009 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 554-555.
1010 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 557-558. ムーアは5月21日にアセンション島から *QEII* へヘリコプターで移動した。*QEII* には秘匿のかかった衛星通信装置(Satellite Communication Terminal: SCOT) が装備されていたが、アセンション島を過ぎたあたりから故障して使えなくなっていた。ムーアは *QEII* 乗船間、電報の送受信だけで、ロンドンやフォークランド地上部隊との直接の意思疎通を欠いていた。ムーアは5月27日駆逐艦「アントリム」に移乗し、5月30日フォークランドに到着した。
1011 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 558.
1012 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p.177; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 558, 573.

任務部隊司令部も、ここのアルゼンチン部隊はスタンレーへ通じる道をふさいでいるわけでもなく、イギリス軍を妨害する能力も限られていたので、多くの資源をこの部隊へ投入することは無駄であるとみていた[1013]。

5 月 24 日夜イギリス軍の特殊空挺部隊(SAS) が緊要地点であるケント山 (Mount Kent) にアルゼンチン軍がいないことを発見した。トンプソンはそれを知り、旅団全部をケント山からチャレンジャー山 (Mount Challenger) にかけて送りこみスタンレーをとり囲む線を押さえようと思いたった。砲兵をいったんこれらの高地に展開すれば、イギリス軍の地歩は固いものとなる。トンプソンは高所を押さえてスタンレーへ一気に進もうと考えた。翌 25 日早朝には、トンプソンは任務部隊司令部へその計画を送付した。ところがその日のうちに、「アトランティック・コンベアー」が攻撃され多数のヘリコプターを失い、トンプソンの計画を実行する見込みがなくなった[1014]。

25 日の夕方、任務部隊司令部からトンプソンに電報が届き、スタンレー周辺の高地をすぐさま確保することと、スタンレー占領を妨げることなくグース・グリーンを確保することを求めてきた。トンプソンは、第 5 歩兵旅団の到着とさらなるヘリコプターの到着を待つべきであると、元の考えに戻っていた[1015]。

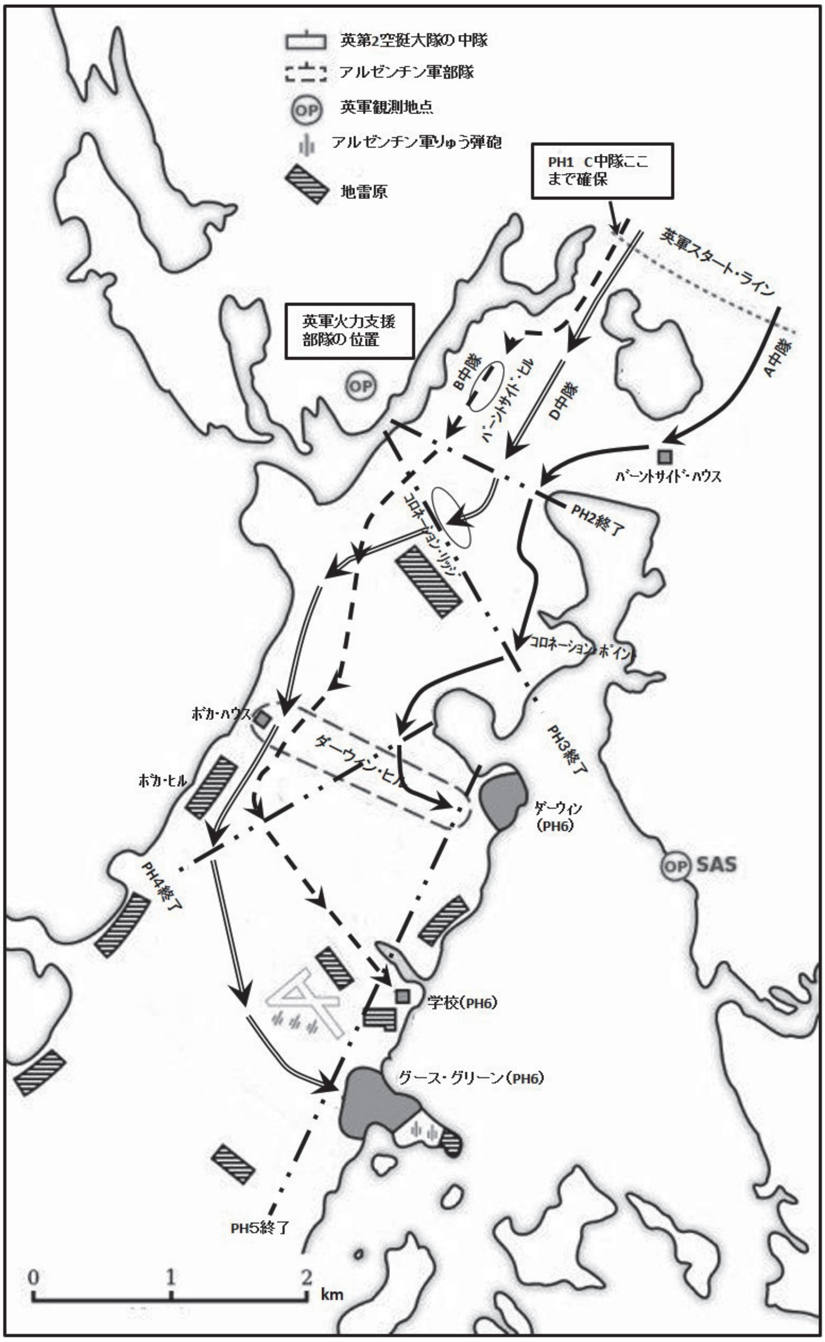
任務部隊司令部は以前から陸上軍指揮官が慎重過ぎるとみていた。5 月 26 日の任務部隊司令部陸戦参謀長リチャード・トラント陸軍中将(Lieutenant General Richard Trant) からトンプソン准将への電報は、陸上作戦における航空脅威を軽く見なし、ブローパイプ(Blowpipe) 歩兵携行地対空ミサイルによる自己防御ならびに部隊機動を夜間ヘリコプターで移動することに限定すれば作戦進捗を保証できると示唆した[1016]。

クラップ海軍准将もトンプソン海兵隊准将も、現在橋頭堡に確立されている防空網の傘から外へ出たら航空脅威はさらに大きくなるものとみていた。彼らは任務部隊司令部が、アルゼンチンの抵抗する能力について、非現実的に楽観視していると信じていた。また彼らは遠くから来るスカイホークだけではなく、この島にいるプカラも脅威であると、心配していた。また時期が来たらアルゼンチン陸上軍も航空部隊と同様の決意と勇気を示すだろうと考えていた[1017]。 この行き違いは、極めて遠く離れた人間同士の交信で、お互い相手をよく知らず、また相手のそれぞれかかえている問題点をよく理解しないために起こったものである。ロンドンでは「アトランティック・コンベアー」の損失から、トンプソンとは反対の結論を導いた。政治家と高級指揮官は、この損失によって作戦が失敗の危機に瀕しており、何らかの行動を示さなければならないと認識した[1018]。

---

[1013] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 559.
[1014] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 559-560.
[1015] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 560.
[1016] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 560-561.
[1017] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 561.
[1018] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 561.

グース・グリーン攻撃は、以前は付随的な作戦であったが、いまや主導権を再び握るための好機とロンドンではみなされていた。そこにおける勝利は、イギリス国民へはフォークランドの再占領が明白に進展していることを、アルゼンチン軍指揮官へはイギリス軍に抵抗しえないことを、国際社会へは交渉のための休戦を行うような小休止を設ける意図のないことを示すものと思われた。任務部隊司令部は、ケント山への移動が前に計画したような規模で行えないことは理解したが、第 5 歩兵旅団を待つことは考慮の外であり、グース・グリーン攻撃は道理にかなうものとみていた[1019]。



図第 20　グ　ス・グリ　ンの戦い　　ジョ　ンズ中佐の計画

出典：Wikimedia Commons（http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b9/Battle_of_Goose_Green.png）の図を基に、Spencer Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…: The History and Mythology of the Battle of Goose Green* (Cambridge: Lutterworth, 1995), p. 13から作成した。

任務部隊司令官フィールドハウス海軍大将は、第 317.8 任務群（空母戦闘群）指揮官ウッドワード海軍少将へ連絡をとり、サン・カルロスへ上陸してトンプソン准将が橋頭堡から外へ出撃するまで叫び続けろと命じた。ウッドワードも陸上部隊のゆっくりした進展にいらだっていたが、彼の職権以外の事項について陸上軍指揮官へ命令することはできないと拒否した。トンプソン准将は、イギリスで行われている戦略論争に気づいていなかった。ムーア少将はそのような事項をよく理解していたが、まだ「クイーン・エリザベス II」に乗りフォークランドへ向け移動中であった。また戦時内閣はムーア少将をよく知り信頼していたが、トンプソン准将をよく知らず彼に対する戦時内閣の信頼は段々と失わ

[1019] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 562.

れていった[1020]。

結局、26 日の午前中遅くになって、フィールドハウスとトンプソンが直接衛星通信装置で話し合い、トンプソン准将はグース・グリーンの攻撃とスタンレーへの進撃に向けた機動を始める命令を受けた[1021]。

グース・グリーン攻撃の役割を担うのは、グース・グリーンに最も近いサセックス山稜線を守備していた第 2 空挺大隊であった。すでに 5 月 22 日にトンプソン准将は大隊長のハーバート・ジョーンズ陸軍中佐（Lieutenant Colonel Herbert Jones）へ、グース・グリーン襲撃の計画を立てるように命じていた[1022]。ジョーンズ中佐は 23 日から 24 日にかけて第 3 旅団司令部へ計画を提出した。最初の計画は兵員をヘリコプターで空輸する計画だったが、ヘリコプターの不足により司令部から拒否された[1023]。

承認された計画は、24 日暗くなってから D 中隊が約 24 キロメートルを徒歩で行軍し、カミラ・クリーク・ハウス(Camilla Creek House)を確保する。25 日から 26 日の夜間に A および B 中隊がそこまで前進し、26 日から 27 日の夜間に全力でグース・グリーンを襲撃する計画だった。実際に 24 日の日没後には、D 中隊が出発し、カミラ・クリーク・ハウスへ向った。ところが日付が変わって 25 日になって D 中隊へ作戦中止の連絡があった。これは前述のとおりケント山・チャレンジャー山へ第 3 コマンド旅団全部を投入する計画が急遽持ち上がったためであった[1024]。そして 26 日にグース・グリーン攻撃計画が復活し、計画中止で気分を害していたジョーンズ中佐を喜ばせた[1025]。

### 第 2 項　アルゼンチン軍の態勢

#### a　上級組織の改編

アルゼンチン軍は、イギリス軍のサン・カルロス上陸当初には、これが陽動作戦で本格的上陸はスタンレーにあるものと考えていた。5 月 23 日には、アルゼンチン 3 軍の首脳部は、全く不適切であることが証明された指揮系統を改編することに合意した。それにより戦闘と兵たん両方に責任を持つ統合作戦センター（Centro de Operaciones Conjuntas: CEOPECON）がコモドロ・リバダビア（Comodoro Rivadavia）に開設された[1026]。

指揮下にある全司令部は、情報と要求を CEOPECON 経由で発信した。CEOPECON は、高級司令官と 3 軍の参謀長で構成された軍事委員会へ、現在の状況と決定された行動、現在行われている作戦への評

---

1020 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 562.
1021 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 562. Fitz-Gibbon はこの会話でフィールドハウスはトンプソンに対し「もし貴官がグース・グリーンを攻撃しないなら、貴官を更迭する」という内容を言ったとしている（Spencer Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…: The History and Mythology of the Battle of Goose Green* (Cambridge; Lutterworth, 1995), p. 1)。
1022 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 559; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 119.
1023 Mark Adkin, *Goose Green: A Battle Is Fought to Be Won* (London; Cassell, 2003, first published by Leo Cooper, 1992), p. 98-99.
1024 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 559; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 119, 122-123.
1025 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 123-124.
1026 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* p. 362.

価ならびに近い将来に起こりそうな事象について常に報告していた。逆に軍事委員会は、さらに作戦遂行に必要な資源が生じた場合あるいは重要な事象について決心する場合に CEOPECON から要求のあったときのみ介入した。CEOPECON の長はオスバルド・ガルシア陸軍中将が就任した。ここに初めて 3 軍統合の態勢が、形式だけでもできたのだった[1027]。

5 月 24 日までには、アルゼンチン軍情報機関も、イギリス第 5 歩兵旅団によるスタンレー上陸は起こりそうになく、サン・カルロス上陸が主攻であると認めるようになった。またイギリス軍によるグース・グリーンへの攻撃がさしせまっていると予想した。ただしイギリス軍は、フォークランド島民の生命を危険にさらさないため、スタンレーに直接攻撃をかけず、封鎖によりアルゼンチンを屈服させると見なしていた[1028]。

翌 25 日には大統領ガリチェリ大将が新設の CEOPECON を訪れ、戦況について話し合った。その結果、CEOPECON からスタンレーにいるメネンデスへ電報が打たれ、明確な言葉で、陸軍の固定的防御を批判し、上陸したイギリス軍に対し積極的な攻勢を取るように要求した[1029]。しかしこの要求は、四国の三分の二ほどの面積のフォークランド諸島に対し、13,000 名ほどの兵員で、機動するための十分なヘリコプターも装軌車両もない状況では不可能というものだったろう。

### b　グース・グリーンの防衛

グース・グリーン防衛の主力は第 12 連隊(12mo Regimiento)であり、その定数は 643 名であった。この連隊はアルゼンチン北部の亜熱帯地方がもともとの駐屯地で、4 月下旬に航空機でフォークランドへやってきた。重装備、通信機、車両はもちろんスコップ、武器手入具等のさまざまな装備は船で輸送するはずであったが、イギリスの封鎖のためついにフォークランドへは到着しなかった。兵士も半分以上が 2 月に徴兵されたばかりで訓練がほとんど完了していなかった。つまり武器・装備およびそれを扱う人間ともに不十分で、部隊の戦闘能力は高いものではなかった。連隊長はイタロ・ピアッヒ陸軍中佐(Teniente Coronel Ítalo Piaggi)で 1982 年 2 月からこの職に就いたばかりであった[1030]。

イギリスが攻撃して来るまでの間に部隊の出入りがあり、28 日の時点でグース・グリーンを守る部隊の編成は以下のとおりであった。

歩兵：第 12 連隊 A 中隊、C 中隊、偵察小隊。第 25 連隊 C 中隊。第 8 連隊の 1 個小隊。

工兵：第 9 工兵中隊の 1 個分隊。

砲兵：105 ミリメートルパック・ハウザー×3 門。

迫撃砲：81 ミリメートル×3 門。かろうじて使える 120 ミリメートル×1 門。

対戦車砲：106mm 無反動砲×1 門（照準器なし)。

---

1027 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* p. 362.
1028 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* pp. 362-363. Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 122.
1029 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* p. 363.
1030 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 56-57; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 564; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 116.

対空砲：35 ミリメートル×2 門。20 ミリメートル×6 門。

車両：徴発したランドローバー×2 台

無線機：2 台

この時点で人員は空軍の兵士も含めて合計 1,007 名、そのうち実質的な戦闘人員は約 550 名で、攻めて来るイギリス第 2 空挺大隊よりわずかに少ない程度であった[1031]。

ピアッヒ中佐は第 12 連隊の上級部隊である沿岸集団の司令官パラダ陸軍少将から 3 つの命令を受けていた。1 つ目は必要な時に集団の予備兵力となることであり、メルセデス任務部隊(Fuerza de Tareas Mercedes）と呼ばれた。2 つ目はグース・グリーンに駐屯することであり、3 つ目はグース・グリーンにあるコンドル軍用飛行場(Base Aérea Militar Cóndor: BAM Cóndor)を守ることであった[1032]。

つまりメルセデス任務部隊は、武器も兵員も不足する中で、飛行場と 2 カ所の入植地（グース・グリーンとダーウィン）の周囲 17 キロメートルを守らなければならなかった。普通 1 コ師団の担当正面は約 10 キロメートルである。しかも重点は海からの上陸作戦に対処することになっていた。ピアッヒ中佐のグース・グリーン防衛構想は全周防御で、第 12 連隊(12mo Regimiento）A 中隊（Compañía A）を地峡を横断するダーウィン尾根(Darwin Ridge)にほぼ沿った生垣の線から海岸に面した廃墟のボカ・ハウス(Boca House)まで配置し、地峡の主防衛とする予定であり、十分に手を加えた陣地を築き、その前方に地雷も敷設していた[1033]。

しかしイギリス軍のサン・カルロス上陸後、パラダ少将は、サン・カルロスからの陸上攻撃に備え防衛線をさらに北に移すよう命じた。ピアッヒは､A 中隊にさらにその約 2.5 キロメートル北へ陣地を作らせ、そこに配備した。ピアッヒの担当周囲は 31 キロメートルになった[1034]。A 中隊の兵力はよそへの派遣等で 2 個小隊分しかなかった。中隊長は、ホルヘ・マンレサ陸軍中尉（Teniente Primero Jorge Manresa）で、兵力は士官が中隊長以下 4 名、下士官 14 名、兵士約 100 名、それに偵察小隊から来た 2、3 名の兵士が前哨陣地についた。支援火器は、底板に対する角度が固定された 120 ミリメートル迫撃砲 1 門と通常の 81 ミリメートル迫撃砲が 1 門か 2 門、7.62 ミリメートル機関銃が 2 門のみであった[1035]。

A 中隊が抜けた後のダーウィン尾根の主防衛線は、エルネスト・ペルフォ陸軍少尉(Teniente Ernesto Peluffo)を隊長として、第 12 連隊の管理部門からかき集めた人間で臨時の司令部中隊(Compañía Comando)を作り配備した。またイギリス軍がこの主防衛線に攻撃にかかる前に、新たに 2 個小隊が増強として配備された。1 つはギジェルモ・アリアガ陸軍少尉（Teniente Guillermo Aliaga)を小隊長とする第 8 連隊（8vo Regimiento）C 中隊第 3 小隊（3ª sección /Compañía C）で、主防衛線左翼のボカ・ハウスへ守備についた。2 つ目は、予備兵力としてとっておいた第 25 連隊(25o Regimiento)C 中隊第 7 小隊(7mo

---

[1031] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 8; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 564-566; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 179.
[1032] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 115-116.
[1033] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 179.
[1034] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 179-180.
[1035] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 182.

sección /Compañía C）で小隊長はロベルト・エステベス陸軍少尉(Teniente Roberto Estévez)であり、司令部中隊の右翼に配備された[1036]。

カルロス・モラレス陸軍少尉（Teniente Carlos Morales）を小隊長とする偵察小隊は、カメリア・クリークまでを北端として偵察を行い、時にはバーントサイド・ハウス(Burntside House)の南にある円陣を根拠地として使うこともあった。ラモン・フェルナンデス陸軍中尉（Teniente Primero Ramon Fernández)を中隊長とする第 12 連隊 C 中隊（Compañía C）は、ラフォニアからの経路を守備した。また第 25 連隊 C 中隊も予備兵力となった[1037]。

アルゼンチン軍のグース・グリーン防衛における欠点は、数えきれないほどあった。第 1 に決定的なことは、入植地、飛行場およびイギリス軍の接近経路を管制できるダーウィン丘（Darwin Hill）に兵員を配置しなかったことだった。もし 1 個中隊がここに陣地を掘って支配していたなら戦闘の結果は違っていただろう。第 2 に支援砲兵火力が不足しており、イギリス軍の攻撃を粉砕または阻止することができなかった。第 3 に無線機が実質的になかったため、部隊全体ならびに各兵種の迅速かつ有機的な運用ができなかった。第 4 に防衛線に縦深がなく、イギリス軍の攻撃を吸収または後退反撃することができなかった。第 5 にただ一線の塹壕も直線であり、一点を攻撃された場合に相互に支援することができなかった。第 6 に地雷原を陣地より前方遠く離れた所に敷設したため、陣地から地雷原を見ることも火力の管制下におくこともできず、地雷原を有効な防衛線として使えなかった。第 7 に塹壕の前には地雷原の他に妨害物を何も設置しなかった。もし有刺鉄線でも設置していたならば、イギリス軍の攻撃は相当困難になっただろう[1038]。

これらの欠点の中で砲兵火力や無線機などは、イギリス軍の海上封鎖に原因を求めることもできるだろう。しかしその他の点については、アルゼンチン陸軍の基本的な戦術能力ならびに教育に重大な欠陥があったことを示している。

#### c　イギリスの攻撃計画

5 月 22 日グース・グリーン襲撃計画作成の命令を受けたジェームズ中佐は大隊の情報将校コールソン陸軍大尉（Captain Alan Coulson）を伴い、第 3 コマンド旅団司令部でグース・グリーンの最新情報を得ようとした。司令部にも十分な情報は集まっておらず、使用に耐えうる航空偵察写真もまだなかった。それでもグース・グリーン周辺には 300 名から 500 名の兵員、数機のプカラ軽地上攻撃機および防空部隊が存在すると見積もられていた。また特殊空挺部隊(SAS)の情報見積もりもあり、それにはグース・グリーンの所在部隊は 1 個歩兵中隊となっていた。SAS の隊員 4 名は 5 月上旬から潜入し、16 日間グース・グリーンを観察し、その間に 1 個中隊しか確認していなかった。また 5 月 21 日のグース・グリーンへの陽動攻撃においてもアルゼンチンの反撃が弱く、SAS は強く攻撃すれば相手が崩壊する印象を持った[1039]。サ

1036 Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, pp. 182-184; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 116.
1037 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 116.
1038 Adkin, *Goose Green*, pp.140-141.
1039 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 119-120; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp.

ン・カルロス上陸成功では、SAS と SBS の事前偵察がその要因の 1 つとされた。木一本無いフォークランドで隠ぺいは難しく偵察する側に有利であるが、SAS はグース・グリーンでは有効な情報をもたらさなかった。広大な土地で 4 名の人間が地面から見える範囲には限界があったのだろうか。

地道で長期的な第 3 コマンド大隊の情報収集の結果よりも、比較的短期間でも高名な SAS の情報の方が信じられる傾向にあった。また他の部隊が偵察を行って情報を入手しようと思っても、SAS が先に偵察に入っているところへは立ち入りが制限された。他の部隊からは、SAS は自分の入手した情報を他の部隊へ十分提供していないとの不満もあった[1040]。

22 日午後第 3 空挺大隊は、アルゼンチン軍の下士官を捕獲し、その尋問の結果、グース・グリーン周辺には第 12 歩兵連隊が所在することが判明した。またポート・サン・カルロスで捕獲したアルゼンチン軍の書類から、第 12 歩兵連隊の編成は 3 個歩兵中隊と 1 個偵察小隊ならびに火力支援と後方補給部隊からなり、空軍の兵員を除いても 450 名程度が存在すると推定された[1041]。

26 日にはグース・グリーンに関する情報が更新され、最低でも 1,000 名のアルゼンチン兵がそこに所在するとみられた。しかしイギリス軍の橋頭堡へ攻撃を仕掛けないことから攻撃的な戦闘力は持たないものとみられた[1042]。要するに攻撃計画策定開始時点では、少数の敵兵力とみられたものが、徐々に情報が集まって結構な数いることがわかってきた。これはジョーンズ中佐も承知していたようで、命令下達では、アルゼンチン軍の中隊数、機関銃数、迫撃砲数、などほぼ正確に記していた[1043]。

前述のように 26 日にグース・グリーン攻撃が知らされ、第 2 空挺大隊の兵士はみな、ようやく動くことができると歓迎した。なぜなら上陸以来大隊は、橋頭堡の南側の防御のためサセックス山に 6 日間布陣していたが、その間に 27 名の兵士が病気（内 12 名は塹壕足）や、膝または踝のケガのため後送されていたからだ。実質的戦闘をしないうちに約 4 パーセントの人員を損失したのだ[1044]。

その理由は、環境と装備に原因した。いったんぬれてしまうと靴、靴下および足は完全に乾かすことができなかった。官給品の軍靴は防水性がなく、かつ入った水は出ることがなかった。周囲は常に湿っており、また凍えるような寒さも加わって、細心の注意と懸命な努力を払わなければ、2、3 日中に兵士の足は動かなくなるのだった。サセックス山の頂でも、地下水位は地表から約 30～45 センチメートルであり、泥炭地に掘った塹壕は凍るような水で満たされた。風も強敵であり、毎秒 1 メートルにつき 1℃体感温度を下げる。そこでは毎秒 18 メートルの風が吹くことが多かった。携行食料は極地用のものが主であったが、それは大量の水を必要とした。しかしサセックス山への補給はヘリコプターによる限られたものであり、水の配給は 1 名 1 日 1 本の水のみであった[1045]。

---

566-567.
1040 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 120-121; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 567.
1041 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 121.
1042 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 124.
1043 "Order for the Battle of Goose Green Received at Camilla Creek House 27 May 82" Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 191.
1044 Adkin, *Goose Green,* p. 117.
1045 Adkin, *Goose Green,* pp. 117-118.

27 日 1000Q 時 BBC の国際放送は、全世界に「空挺大隊は、まさにグース・グリーンとダーウィンを攻撃する準備ができている。」と放送した。これを聞いてジョーンズ中佐は「ノット国防省とサッチャー首相を訴えてやる」といきまき、怒り心頭に達していた。一方アルゼンチン軍のピアッヒ中佐もこの放送を聞いたが、まさか BBC が自国軍の本当の動きを放送するわけあるまい、と欺まん工作とみて特に対応は取らなかった[1046]。

しかし第 2 空挺大隊には、アルゼンチン側の対応がわかるわけもなく、奇襲効果は失われたと信じた。また既述のようにアルゼンチン軍の兵力も結構多そうなので、第 2 空挺大隊は「任務はずいぶん厳しくなりそうだが、兵器は十分でない。第 8 砲兵中隊をもっと増強できないか」と電報を打った。その結果 L118 軽砲が 3 門に増強され、1 門あたりの弾薬数も増加された[1047]。

グース・グリーンの戦いで 28 日の戦闘開始の時点における第 2 空挺大隊の兵力は以下のとおりであった。

歩兵：A, B, D 小銃中隊。C（偵察）小銃中隊（2 個小隊）。

工兵：第 59 偵察工兵分隊。

砲兵：M118 軽砲（105 ミリメートル）×3 門。

艦砲支援：21 型フリゲート艦×1 隻（夜間のみ、115 ミリメートル砲×1 門）。

迫撃砲：81 ミリメートル×2 門。

対戦車兵器：ミラン対戦車ミサイル×3 コ分遣隊

防空兵器：ブローパイプ携行対空ミサイル×6 コ分遣隊

兵員数は約 620 名で、アルゼンチン軍の実質的な戦闘員人数よりわずかに多い程度であった[1048]。

第 2 空挺大隊は 5 月 27 日カミラ・クリーク・ハウスに移動し、1500Q 時からジョーンズ中佐は命令下達を行った。攻撃要領としては、よく訓練されているイギリス軍空挺部隊の特徴を生かし、始まりは静粛に接近し、アルゼンチンの陣地に達したら持てる火力を最大限使い、アルゼンチン軍の方向感覚を失わせ、夜間のうちに攻撃を完了するというものだった。ジョーンズ中佐の作成したグース・グリーン攻撃計画は 6 つの段階に分かれていた。

第 1 段階：C 中隊は、前方のルートを偵察し先発中隊のために出発線の準備と防御を行う。また C 中隊はセリトス・アロヨ（Ceritos Arroyo）川にかかる橋にあると思われる銃陣地を掃討する。

第 2 段階：28 日 0200Q 時 A 中隊はバーントサイド･ハウスのアルゼンチン軍を攻撃し、0230Q 時 B 中隊はバーントサイド丘(Burntside Hill)のアルゼンチン軍を攻撃する。A 中隊が最初で続いて B 中隊が攻撃

[1046] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 126; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas'*, p. 180; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 570.
[1047] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 570-571.
[1048] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 8; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 573.

する。

第 3 段階：0300Q 時 A 中隊は、コロネーション崎(Coronation Point)のアルゼンチン軍を攻撃し、D 中隊はコロネーション尾根(Coronation Ridge)北側にあるアルゼンチン軍陣地を攻撃する。

第 4 段階：0400Q 時 B 中隊は D 中隊を追い越して、ボカ・ハウスのアルゼンチン軍陣地を攻撃する。もし必要であれば、B 中隊は植込みの線で停止し、D 中隊が追い抜くこと。

第 5 段階：0500Q 時ダーウィンからグース・グリーンにかけて攻撃する。C 中隊は飛行場を掃討する。

第 6 段階：0730Q 時ダーウィンとグース・グリーンを占領する。

また各部隊の行動は以下のように命令された。

A 中隊：第 2 段階でバーントサイド・ハウスを占領する。段階 3 でコロネーション崎を占領する。第 5 段階でダーウィンの境界で機会を見つけ戦果を挙げ、第 6 段階でダーウィンを占領する。

B 中隊：A 中隊がバーントサイド・ハウスを占領したら、バーントサイド丘　にあるアルゼンチン陣地を占領する。A 中隊がコロネーション岬を奪取する間、予備兵力となる。第 4 段階でボカ・ハウスの陣地を攻撃する。第 5 段階で B 中隊は予備兵力となり、第 6 段階でも予備兵力であるが、学校校舎を攻撃する準備をすること。

C 中隊：前方を掃討すると共に開始線において A, B 中隊を防衛する。第 3、4 段階では予備兵力となり、第 5 段階では飛行場を掃討し、対空火器を破壊する。第 6 段階ではボディ・クリーク橋（Bodie Creek Bridge）を占領し、A 中隊が攻撃すると同時にグース・グリーンの南まで進撃する。

D 中隊：第 2 段階まで A 中隊、B 中隊の予備兵力となる。第 3 段階で D 中隊は B 中隊の目標の南西にある敵小隊の陣地を占領する。第 4 段階では、必要な時にボカ・ハウス攻撃を支援できるよう待機している。第 5 段階では C 中隊に後続しグース・グリーンへ進撃し好機があれば戦果拡張を図る。第 6 段階ではグース・グリーンを奪取する。

（火力支援以下に関する項省略）[1049]

ジョーンズ中佐は結論として、「今までのすべての証拠から、敵は激しい攻撃をくらえばすぐに崩壊する」と述べた。彼が何を根拠にこう述べたのかは不明である[1050]。またトンプソン准将はジョーンズ中佐に襲撃（assault）を命じていたが、ジョーンズ中佐の命令では占領（capture）に変わってしまった。ジョーンズ中佐は、この攻撃を自分の軍歴の中で与えられた絶好の機会と考え、熱狂して計画を立て目的を拡大したように思われる[1051]。

これだけ複雑な命令であるにもかかわらず、ジョーンズ中佐のせっかちな性格のため急いで下達は行わ

---

[1049] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 12-15, 190-194; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 128; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 573.

[1050] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 129; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 573.

[1051] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 567-568; Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 11.

れた。命令を理解できたものはおそらく中隊長以下誰もいなかっただろうといわれている[1052]。しかもアルゼンチン軍の兵力はほぼ正確に判明していたが、その配置についてイギリス軍は掌握していなかった。またイギリス軍は現地の地形をよく知らず、夜間作戦であるから中隊間において協調を取って作戦を実行することは困難であった。ジョーンズ中佐の計画で 1 時間毎に区切られた段階の進行は希望的観測としか言いようがなかった[1053]。

### d　グース・グリーンの戦い

#### (a) イギリス軍攻撃の予兆

前述のように、BBC によるグース・グリーン攻撃の予告はアルゼンチン側では真剣に受け止められなかった。しかし以下に述べる他の兆候からイギリス軍の攻撃が近いものと予想された。第 2 空挺大隊は攻撃準備のため 26 日から 27 日の夜にカミラ・クリーク・ハウス（Camilla Creek House）へ前進した。メルセデス任務部隊はこの行軍を察知し、イギリス軍の意図がわからなかったが、グース・グリーンからいやがらせの砲撃を行った。27 日には第 2 空挺大隊の観測所がメルセデス任務部隊の砲撃を受けている[1054]。

また 27 日 1030Q 時には、アルゼンチン軍偵察小隊の歩哨が第 2 空挺大隊の偵察隊を発見し銃撃を加えたが、死傷者は生じなかった。同日正午過ぎにはイギリス空軍のハリアー2 機による、グース・グリーンへのクラスター爆弾と機関砲による攻撃が行われた。しかしメルセデス任務部隊はこの攻撃で被害を受けず、逆にハリアーの 1 機を対空砲火（おそらく 35 ミリメートル砲）で撃墜した[1055]。

ピアッヒ中佐は偵察小隊からイギリス軍偵察隊に銃撃を加えたとの報告を受け、偵察小隊長のモラレス少尉へカミラ・クリーク・ハウス北方のイギリス軍の活動を偵察せよと命令した。モラレス少尉は 3 名の兵士を従え、徴発したランドローバーに乗って偵察に出発した。しかし彼らは、地峡の北端付近でイギリス軍の待ち伏せ攻撃を受け、全員捕虜となり、部隊へ戻ることはなかった[1056]。

ピアッヒ中佐はこれらの一連の事象から、イギリス軍の攻撃が近いことを悟った。またモラレス少尉のランドローバーには、連隊に 2 つしかない無線機の 1 つを搭載しており、それを失ったことで以後ピアッヒ中佐は連隊内の連絡に伝令兵を使わざるを得なかった[1057]。

#### (b) イギリス軍の攻撃

---

[1052] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 11,14.
[1053] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 15-16; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 572.
[1054] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 180; Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 12.
[1055] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 180; Burden et al., *Falklands the Air War,* p. 376; Hobson, *Falklands Air War*, p.101.
[1056] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 181; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 129; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 288.
[1057] Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 181.

### ⅰ　攻撃開始位置までの移動

5 月 27 日 1800Q 時第 2 空挺大隊 C 中隊は、工兵分隊を伴い、出発線までのルートの偵察と確保のため、カミラ・クリーク・ハウスを出発した。寒く乾燥した夜であったが、工兵分隊は途中 3 ヶ所ある橋に爆弾が仕掛けられていないか、腰まで凍るような水につかり確認した。2100Q 時には偵察と確保を終え出発線に到達した。2200Q 時には、A, B, D 中隊がカミラ・クリーク・ハウスを出発した[1058]。

火力支援中隊のうち、汎用機関銃小隊、対戦車ミサイル小隊および狙撃兵からなる直接火器は、カミラ・クリーク・ハウスの北西に配置され、攻撃初期の段階で火力支援を行う計画だった。しかし対戦車ミサイル小隊はミラン・ミサイルの夜間使用が困難なことと弾数の少ないことから、この支援に加わらなかった。また直接火器は、射程距離の関係から左翼の中隊の攻撃を支援することができなかった[1059]。

間接火力支援を行う第 8 砲兵中隊 M118 軽砲 3 門の展開は、27 日の日の入（1600Q 頃）後から、海軍のパッシヴ・ナイト・ゴーグル（Passive Night Goggle, 受動型暗視ゴーグル。以下 PNG と呼ぶ。）を装備したシー・キング HC. 4 ヘリコプターを使い行われた。砲兵中隊の人員 28 名を運ぶのに 1 ソーティ、砲を運ぶのに 3 ソーティ、弾薬 960 発を運ぶのに 16 ソーティ、合計で 20 ソーティを要し、カミラ・クリーク・ハウスに展開した[1060]。

艦砲による火力支援は、フリゲート艦が昼間サン・カルロスでアルゼンチン航空部隊の攻撃に対する盾となるため、27 日 2100Q 時から 28 日 0430Q 時の間に限られた。第 2 空挺大隊の攻撃開始予定は 28 日 0200Q 時であり、艦砲からは 2 時間 30 分しか支援を受けられないことになる。そこで攻撃開始前から艦砲支援を受けることとし、フリゲート艦「アロー」（HMS Arrow）は 27 日 2200Q 時から予想される目標に対して 3 時間艦砲射撃を行った[1061]。つまりジョーンズ中佐の企図した「始まりは静かに接近」という要領は、最初から実行できなかった。

攻撃を担当する各中隊の状況は、C 中隊はその他の中隊のため行進経路にチェックポイントを置きそこに案内役を配置して各中隊の出発点まで案内するよう準備した。D 中隊は行軍途中にチェックポイントを見失い、一時的に行方不明になっていた。B 中隊は自身の出発点であるバーントサイド丘（Burntside Hill）の北側に移動した[1062]。

### ⅱ　攻撃開始

A 中隊はバーントサイド池（Burntside Pond）の東に位置し、バーントサイド・ハウスへの攻撃を準備していた。攻撃開始予定時刻は 28 日 0200Q 時であり、艦砲射撃観測将校(NGFO: Naval Gunfire Observer) は 0145Q 時から、「アロー」に A 中隊の目標であるバーントサイド・ハウスへ支援射撃を行わせた。「ア

---

1058 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches...*, p. 23.
1059 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches...*, pp. 24-25.
1060 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches...*, p. 25.
1061 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches...*, p. 25.
1062 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches...*, p. 25.

ロー」による射撃はしばらく続き、A 中隊の攻撃開始は 0235Q 時となった[1063]。A 中隊は 3 個小隊を並列に並べ、バーントサイド・ハウスの東側から一斉に攻撃した。A 中隊は反撃を一切受けず、バーントサイド・ハウスを 0327Q 時に占領した。アルゼンチン軍は準備砲撃を受けると、一切抵抗せずすぐに後退したようだった[1064]。

右翼の B 中隊の第 2 段階の目標はバーントサイド丘であった。B 中隊は予定とおり出発点まで進出していたが、火力支援の HMS「アロー」の艦砲故障のため、計画の 0230Q 時に攻撃を開始できなかった。ようやく艦砲の故障がなおり、目標確認のため数発の照明弾を発射したが、また故障して射撃が止まった[1065]。そこでそれまで A 中隊を支援していた第 8 砲兵中隊の 105 ミリメートル軽砲を B 中隊の支援にまわしたが、105 ミリメートル軽砲の弾薬には照明弾がなかった。ヘリコプターによる輸送能力が限られたため、照明弾は HMS「アロー」の砲に頼り、HE（High Explosive: 高性能爆薬）弾のみを輸送したためだった。全くの暗闇で降雨の中、B 中隊の前線観測将校（Forward Observation Officer: FOO)アッシュ大尉(Captain R. Ash)は、座標参照点に基づき弾着の音または閃光で弾着点を判断し、修正を指示した[1066]。

0315Q 時頃から B 中隊が前進を開始すると、アッシュ大尉は 105 ミリメートル軽砲の弾着を 2～400 メートル延伸させた。B 中隊は 4 名一組のチームにわけ、それぞれおおまかな方向をもって進撃した。なぜなら当時の天候は霧か雪かみぞれが渦巻き、また戦場は、全くの暗闇でかつ地形が荒涼として特徴がつかみにくかったからである。戦闘は非常な近接戦であり、塹壕を 1 つずつ、手りゅう弾を投げ込み機関銃で掃射し、あるいは M79 グレネード発射機(M79 grenade launcher)でてき弾を打ち込んで制圧した。バーントサイド丘を守備するアルゼンチン軍兵士は、前述のパラダ少将に急遽最前縁に配置を命じられた第 12 連隊 A 中隊（実質 2 個小隊）であった。アルゼンチン軍兵員の多くは、ほとんど戦意を持ち合わせておらず、中には寝袋にくるまったまま殺された兵士もいた。B 中隊は多数の塹壕を掃討し、0400Q 時バーントサイド丘を確保した[1067]。

B 中隊長のクロスランド陸軍少佐（Major John Crosland）は、現在の中隊の勢いを生かそうとして、当初計画の第 3 段階で D 中隊の目標となっているコロネーション尾根を攻撃する考えが浮かんだ。0440Q 時にクロスランドは無線でジョーンズ大隊長と交信し、自分の意図を伝え、了解を得た。このクロスランド少佐の進言は作戦の進捗を早めたが、それでも当初計画のコロネーション尾根の攻撃の時刻（0300Q 時）より 1 時間 40 分遅れていた[1068]。

D 中隊は、カミラ・クリークとバーントサイド池が形成する最も狭いところを通過して南下し、A 中隊がバーントサイド・ハウスを猛烈に射撃するのを左に見ながら行進し、B 中隊の後方で停止した[1069]。大隊

---

1063 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 25.
1064 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 26-27.
1065 Adkin, *Goose Green,* p. 187.
1066 Adkin, *Goose Green,* pp. 171, 188.
1067 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 34-37; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 182.
1068 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 37.
1069 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 44.

長ジョーンズ中佐の率いる第 1 戦術司令部(Tac 1)は、D 中隊の前方に位置していた[1070]。0500Q 時頃ジョーンズ中佐は、大隊の進出最前縁よりさらに前へ進み、アルゼンチン軍の射撃を受け戻ってきた。そして大隊長は D 中隊長フィル・ニーム少佐(Major Phil Neame)へ、踏み跡の進行方向に陣取るそのアルゼンチン軍を掃討するように命じた。しかしニーム少佐には、全くの暗黒でかつ悪天の中、その踏み跡の先がどこにあり、踏み跡のどこにアルゼンチン軍が布陣しているのか不明だった。また近接する味方の A, B 中隊が、どこに位置するのかもわからなかった[1071]。

後から検証すると、このアルゼンチン軍陣地はコロネーション尾根の南東端にあり、第 3 段階で D 中隊の目標であった地点より 3～400 メートル南東にあった。配備されていたのは、前述のマンレサ陸軍中尉を長とする第 12 連隊 A 中隊の右翼の部分だった。結局 B 中隊と D 中隊が近接平行して地峡を南下することとなった[1072]。アルゼンチン軍の機関銃・小銃射撃は猛烈であり、それに迫撃砲の射撃も加わった。この戦闘で初めて第 2 空挺大隊は死傷者を出した。この戦闘でもイギリス軍は、「ほふく」してアルゼンチン陣地に近づき手榴弾を陣地に投げ込み機関銃で掃討して、1 つ 1 つ陣地を奪取し、アルゼンチン軍は後退していった[1073]。

この小さいが激しい戦いの後、D 中隊はさらに作戦を続けるため部隊の陣容を整えなければならなかった。全くの暗闇の中での激烈な戦闘のため、兵員が散り散りになってしまったからだ。集合まで多くの時間を要し、イギリス軍にとって貴重な夜の時間はほとんどなくなってしまった。マンレサ中尉の A 中隊はイギリス軍を阻止することはできなかったが、時間をかけさせて日中にまで戦闘を持ち込み、イギリス軍に損耗を与える原因を作った[1074]。

一方、最初に攻撃を開始した A 中隊は、前述のとおりバーントサイド・ハウスを 0327Q 時に無抵抗で占領した。暗黒の戦場で各小隊が再集合し、弾薬の再分配を行い、付近にアルゼンチン軍がいないことを再確認した。その後そこにうずくまり、他の中隊の戦闘経過を閃光と曳光弾の光を追って 1 時間近く見ていた。ようやく 0421Q 時に A 中隊は大隊から発進許可の無線連絡を受けたが、当初計画より 80 分遅れとなった[1075]。

A 中隊の第 3 段階の攻撃目標は、バーントサイド・ハウスから約 1 キロメートル離れたコロネーション崎に所在すると思われるアルゼンチン軍だった。A 中隊は、コロネーション崎に近づくと火力支援を要請し、アルゼンチン軍の守備ラインにいつ遭遇するかと思いながら暗闇の中を前進した。しかし抵抗は一切

---

1070 第 1 戦術司令部(Tactical 1: Tac 1)は、戦闘時に大隊の指揮をとる組織であった。この戦闘の場合は、大隊長ジョーンズ中佐、副官、迫撃砲管制官、砲兵中隊指揮官、通信手 7 名、世話係の下士官 2 名で構成されたいた。Tac 1 の指揮能力が戦闘で失われた場合の代替指揮組織として Tac 2 が同時に編成されていた。Tac 2 は、大隊序列 2 位のキーブル少佐(Major Keeble)、砲兵隊の将校、迫撃砲小隊の将校、それに通信手の約 10 名で構成されていた。残りの大隊司令部の人間は大隊主部(Battalion Main: Bn Main)と呼ばれ、約 30 名で構成され、管理を行い指揮活動は行わなかった(Adkin, *Goose Green,* pp. 29-30)。

1071 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 44-45; Adkin, *Goose Green,* pp. 199-200.

1072 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 45; Adkin, *Goose Green,* pp. 192-193, 200.

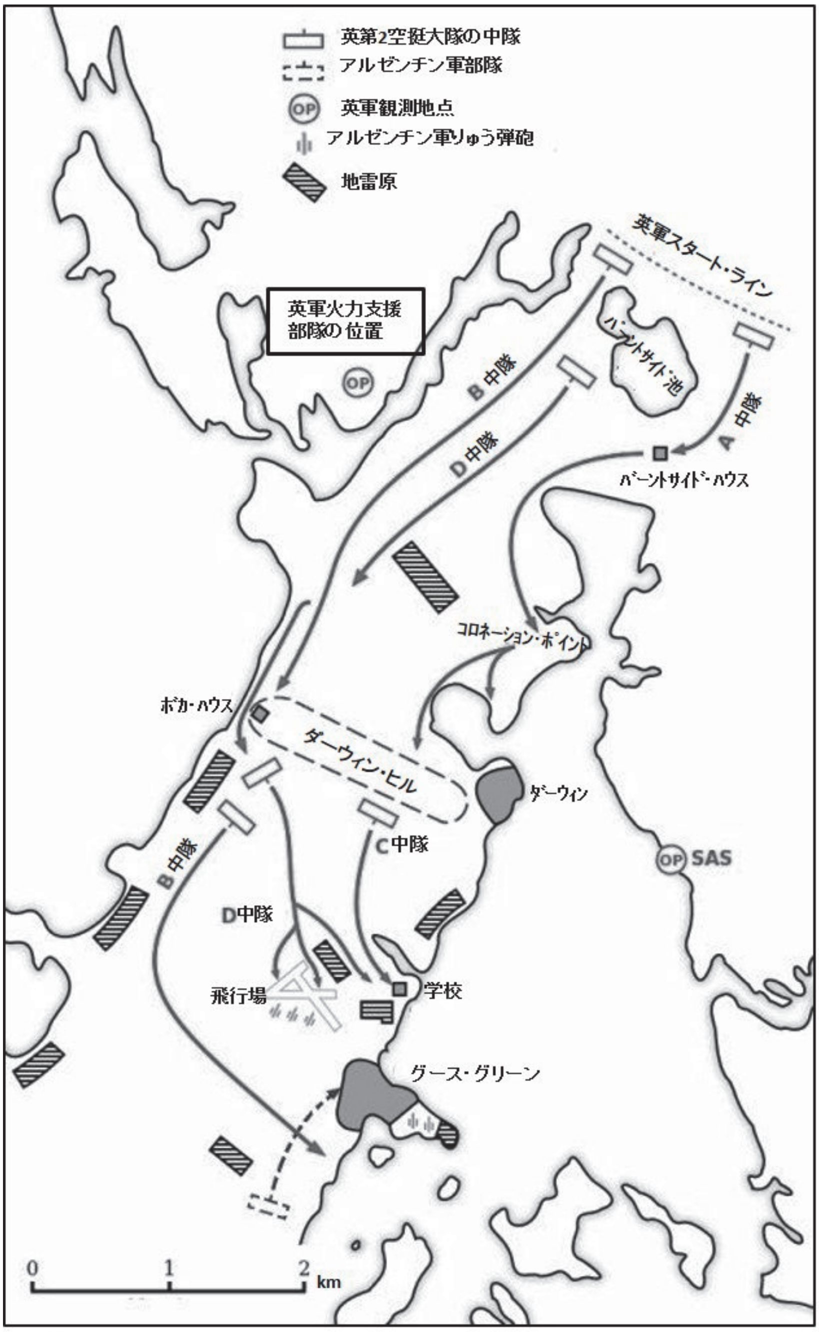
1073 Adkin, *Goose Green,* pp. 200-201.

1074 Adkin, *Goose Green,* pp.193, 205.

1075 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p.28; Adkin, *Goose Green,* p. 206.

なく 0520Q 時にコロネーション崎を占領した。アルゼンチン軍は、ここに所在しなかったし、過去に所在したという痕跡も発見できなかった[1076]。

この 0520Q 時は、第 3 段階の計画としては 1 時間 20 分遅れであった。しかし明るくなる時刻までは、まだ 1 時間以上あり、コロネーション崎から前述した緊要地形であるダーウィン丘までは約 1,000 メートルに過ぎなかった。次の第 4 段階は、B 中隊が D 中隊の支援を受けながらボカ・ハウスを攻撃し、A 中隊はコロネーション崎で大隊予備兵力として待機する予定であった。A 中隊長ファラー－ホックレー少佐(Major Dair Farrar-Hockley)は、第 4 段階で A 中隊が待機するという命令を無視して、ダーウィン丘への攻撃を続行すれば、A 中隊が第 5 段階の目標を計画どおり達成できる唯一の中隊であることに気がついた。ファラー－ホックレー少佐は、暗闇の続く時間がつきかけていることとダーウィン丘の戦術的重要性を考え、無線で大隊長へ続けてダーウィン丘を攻撃する許可を求めた。なぜなら彼は、ジョーンズ中佐が部下に対し自己の命令の厳格な履行を求め、部下の独断による行動を許さないことをよく知っていたからだった[1077]。




図第 21　グース・グリーンの戦い
出典：Wikimedia Commons (http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b9/Battle_of_Goose_Green.png) を和訳した。

しかし大隊長の返事は、A 中隊がどこにいるか実際に自分の目で確かめたいので現位置で待機せよ、と

[1076] Adkin, *Goose Green,* p. 207.
[1077] Adkin, *Goose Green,* p. 215-216. なおフィッツ－ギボンは、部隊長が部下の行動を厳格に規制することを、単にジョーンズ中佐の個人的な性格によるものではなく、当時のイギリス陸軍の文化であったことを指摘している (Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 53-55.)。

いうものだった[1078]。それを受けてA中隊は、次の進撃までコロネーション崎で約1時間待機した[1079]。もしこの時すぐさまA中隊がダーウィン丘を占領していたならば、ダーウィン尾根(Darwin Ridge)での長時間で大量出血の戦闘を、短時間で損害の軽いものにしていたかもしれない[1080]。

ジョーンズ中佐は、コロネーション崎まで到達し、A中隊がそこまで短時間で到達したことと、その周辺にアルゼンチン軍がいないことに驚いた。ジョーンズはファラー・ホックレー少佐と話し合った後、A中隊に対し最大限の速度でダーウィン丘を攻撃するよう命じた[1081]。ファラー・ホックレー少佐は、第3小隊をダーウィン入江の入り口に配置し、残りの2個小隊をもって、山ろくを登りハリエニシダの生えた小峡谷に入り、ダーウィン丘の頂上に向いダーウィン入植地を占領する計画で出発した。少佐の後ろには、急いで攻撃せよと要求する大隊長とその第1戦術司令部が続行したため、少佐もまた自己の中隊を急がせた[1082]。

ダーウィン入江の最奥部から真西へ 6～700 メートルのダーウィン尾根から北北東突き出す支稜線（以下支稜線と呼ぶ。）には16の塹壕と幾つかのテントがあるとの情報があったが、この攻撃の際には無視された。A中隊のダーウィン丘への攻撃経路の右翼は、これらの塹壕に対してがら空きであり、危険を見込んだ上で攻撃が行われた[1083]。

### iii　前進の頓挫

A 中隊の第 1, 2 小隊は丘を登り始めた。先頭の分隊は、開けた山ろくをくさび形隊形(arrowhead formation)で、両翼には汎用機関銃(GPMG: General Purpose Machine Gun)を配置して前進した。一歩登る毎にまわりは明るくなってきて、周囲のようすが見えるようになり、ダーウィン尾根が灰色の空に浮かび上がってきた[1084]。

A中隊先頭の分隊は、ハリエニシダの生えた小峡谷（以下小峡谷と呼ぶ。）に入る直前で、3名の人影に遭遇した。無害なように見え、先遣隊の中には入植している民間人と思った者もいた。しかし先遣隊の者が英語で声をかけると、相手はスペイン語で返事をした。アルゼンチン軍も、マンレサ中尉の前衛部隊が夜間の戦闘後に後退して来たものと考えたようであった。しかし両軍ともほぼ同時に誤りに気づくき、0645Q時に銃撃戦が始まった[1085]。

開けた場所で近距離からのアルゼンチン軍の猛射撃であったが、イギリス側にとって幸運なことに負傷者はほとんどなく、中隊長ファラーーホックレー少佐を含む大部分がハリエニシダの生える小峡谷へ逃げ

---

[1078] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 56.
[1079] Adkin, *Goose Green,* p. 215.フィッツーギボンは待機時間を 30～45 分としている(Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 56.)。
[1080] Adkin, *Goose Green,* p. 215.
[1081] Adkin, *Goose Green,* p. 216.
[1082] Adkin, *Goose Green,* p. 218.
[1083] Adkin, *Goose Green,* pp. 218-220.
[1084] Adkin, *Goose Green,* pp. 220-223.
[1085] Adkin, *Goose Green,* pp. 223-224; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* p. 185.

込むことができた。おそらく夜明け近くでまだ明るさが十分でなく、またイギリス兵士の反応がすばやかったため照準が定めにくかったものと思われる。後方に位置した大隊長とその第 1 戦術司令部、中隊司令部主部および第 1 小隊の数名は小峡谷に到達できず、ダーウィン池へ後退した。[1086]。

小峡谷内は比較的安全であったが、小峡谷の入り口を見下ろすアルゼンチン軍の幾つかの塹壕に対処しなければいけなかった。ほふくして近づき、手榴弾、66 ミリメートル・ロケット弾および汎用機関銃で塹壕を粉砕した[1087]。

ファラーーホックレー少佐は、なんとかダーウィン丘に向けて突破しようと努力したが、すべて失敗に終わった。A 中隊の迫撃砲を小峡谷の上部に上げ、支稜線上に位置するアルゼンチン軍の塹壕を攻撃した。しかしやわらかい地面に砲弾が沈みこみ、HE 弾はほとんど効果がなかった。WP(White Phosphorus: 白リン)弾は、対人用として大いに効果を発揮したが、常に不足していた。そのうちにアルゼンチン軍の迫撃砲弾が A 中隊の迫撃砲付近に弾着するようになり、迫撃砲を小峡谷の中に引き上げなければならなかった[1088]。

ファラーーホックレー少佐の左翼へ迂回しようという試みは、汎用機関銃が相当の火力を発揮し、支稜線の多くの部分を確保したが、アルゼンチン軍の残りの塹壕からの火力がおとろえず、不可能であった[1089]。

HMS「アロー」は 0445Q 時にはフォークランド水道北部へ向け引揚げたため、この時点で第 2 空挺大隊へ火力支援を行うことは不可能だった[1090]。第 8 砲兵中隊へ火力支援を要請したが、この時に同時進行していた B 中隊によるボカ・ハウス攻撃への支援が優先されたため、A 中隊攻撃方面へ火力が向けられなかった。しばらくたってようやく第 8 砲兵中隊による火力支援が割当てられたが、ガスト（突風）が強く弾着はバラバラであり、効果が無かった[1091]。

0725Q 時にファラーーホックレー少佐はハリアーによる近接支援を要請した。開けた支稜線上の塹壕は、ハリアーが搭載するクラスター爆弾には格好の目標だった。しかし航空母艦周辺は海霧が濃いため、ハリアーの離艦はキャンセルされ、航空近接支援は行われなかった[1092]。このような状況で、A 中隊の攻撃はダーウィン丘の中腹の小峡谷の中で、完全に行き詰まってしまった。

B 中隊は、第 3 段階においてコロネーション尾根を攻撃した後、自己の現在位置を見失ってしまった。大隊長から無線で現在位置を尋ねられると、中隊長クロスランド少佐は「月から 400 ヤード（約 360 メートル）西」と答えていた。B 中隊は南下を続け、明るくなる頃に左前方に陣地を認めた。しかしこれはダーウィン丘の地域にあり、B 中隊にとっては範囲外であった。B 中隊はさらに南下を続け、A 中隊がアルゼンチン軍火器によって前進を止められたのとほぼ同じ頃、機関銃射撃により制止させられた。B 中隊は、アルゼンチン軍主防衛線の西側、ボカ・ハウス付近の陣地にぶつかったのだった。アルゼンチン軍は小銃、

---

[1086] Adkin, *Goose Green,* p. 224-225.
[1087] Adkin, *Goose Green,* p. 226.
[1088] Adkin, *Goose Green,* pp. 229-230.
[1089] Adkin, *Goose Green,* p. 231.
[1090] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p.42.
[1091] Adkin, *Goose Green,* p. 231.
[1092] Adkin, *Goose Green,* p. 231.

機関銃、榴弾砲、迫撃砲、狙撃銃で対抗した。とくに 50 口径(12.7 ミリメートル)重機関銃は、イギリス軍の GPMG より破壊力と射程で優っていた。B 中隊は、ここで 4〜5 時間動けなかった[1093]。

0730Q 時頃、D 中隊は A 中隊の約 700 メートル北方にあり、予備部隊となっていた。D 中隊長ニーム少佐は、A, B 中隊の攻撃が頓挫しているのをみて、予備兵力として戦闘に投入してもらおうと、D 中隊の現在地を無線で大隊長ジョーンズ中佐へ報告した。しかし大隊長の答えは「そこで停止していろ」というものだった。その後 D 中隊の停止位置にアルゼンチン軍砲弾の弾着が近接してきたため、D 中隊はアルゼンチン軍砲兵観測陣地から見て山陰になると思われる南方、すなわち前線方向へ移動した。ジョーンズ中佐は、このD中隊の動きを認め、彼の先ほどの命令を無視しているのでないかと考え、再度戦闘には加わるな、とD中隊に無線で命じた[1094]。

またニーム少佐は、ジョーンズ中佐へ、地峡西側の海岸線を通ればアルゼンチン軍の主防衛線を迂回できる、と提案した。しかし大隊長の答えは、「無線を混信させるな。おれは今まさに戦いをやっているところだ」というようなものだった[1095]。

C 中隊もこの時、D 中隊の左翼（東）で、コロネーション崎の西のわずかに高くなったところに位置し、やはり予備中隊となっていた。C 中隊の先任将校(the company sencond in command)だったピーター・ケネディ陸軍中尉(Lieutenant Peter Kennedy)は、以下のとおり述べている[1096]。

「A 中隊は、夜明けと共にダーウィン丘の中腹で釘付けになっていた。C 中隊は中隊の 12 挺の軽機関銃(LMG: Light Machine Gun)が、A 中隊に対抗している支稜線上のアルゼンチン軍と交戦できる位置まで前進していた。問題なのは距離が遠く正確に目標を識別できないことだった。そこで A 中隊と無線交信し、敵味方の正確な位置を聞き、軽機関銃で支援しようとした。ところがジョーンズ中佐は、無線を使うなと命令し、おれは今戦っているんだ、と言った。」[1097]

ジョーンズ中佐は、A 中隊を直接指揮し A 中隊を使ってダーウィン丘を突破させようと考えたようであった。大隊長は第 1 戦術司令部と A 中隊司令部の合わせて 20 名以上を伴い、ダーウィン池から A 中隊のいる小峡谷まで、煙幕手榴弾を使ってアルゼンチン軍の銃火をくぐって前進した。中佐が A 中隊に追いついたのは 0830Q 時頃であった[1098]。

この時点で A 中隊は、小峡谷の右翼の支稜線上にある 7 個程度のアルゼンチン軍塹壕を制圧した。しかしアルゼンチン軍は、まだ支稜線上に多数ある塹壕から圧倒的な火力を発揮しており、A 中隊の直接正面から、または後方を突く、あるいは回りこもうとした攻撃はすべて失敗した。A 中隊の汎用機関銃は射撃を継続していたが、火砲または航空機による火力支援がなければ、ここを突破できないように見えた[1099]。こう着状態は継続し、A 中隊の兵員は射撃するか、休憩するかしていた。アルゼンチン軍の榴弾砲と迫撃

1093 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp.74-75; Adkin, *Goose Green,* pp. 257-258.
1094 Adkin, *Goose Green,* p. 238.
1095 Adkin, *Goose Green,* p. 239.
1096 Adkin, *Goose Green,* p. 239.
1097 Adkin, *Goose Green,* p. 239.
1098 Adkin, *Goose Green,* pp. 240-241.
1099 Adkin, *Goose Green,* p. 241.

砲は小峡谷前方の開かつ地に絶え間なく着弾し、ハリエニシダが燃え上がり混乱に輪をかけた。負傷者は小峡谷の端末に運ばれ手当を受けた[1100]。

この時点でD中隊は地峡の西側へ移動し、海岸線から300メートルのところで停止していた。D中隊長ニーム少佐は、なおも海岸線を通ることでアルゼンチン軍の主防衛線を迂回できると考えていた。ニーム少佐は、大隊長へもう一度無線で中隊の現在位置を報告し、少佐の考えを提案した。しかしジョーンズ中佐の答えは「おれの戦闘をどうやってやるか、おれに向かって口出しするな。」であった[1101]。

第2空挺大隊支援中隊(Support Company)のミラン対戦車ミサイル小隊と機関銃小隊は前進し、0900Q時を若干過ぎた頃にダーウィン尾根から約1,200メートルのD中隊の位置に到着した。両小隊はそこで待機するよう命じられた。ミラン小隊長のケトレー陸軍大尉(Captain P. Ketley)は、ダーウィン尾根上の動きを観察し、目標の明確な識別が可能になるよう、さらに前進し、ミラン・ミサイルを戦闘に使用することを希望した。支援中隊長ヒュー・ジェナー陸軍少佐(Major Hugh Jenner)は、無線で大隊長へこの考えを提案したが、ジョーンズ中佐の答えは「だめだ。おれがこの戦闘を片づけるまで、誰一人前進することはまかりならん」であった[1102]。

第1戦術司令部(Tac 1)内には、砲兵指揮官(Battery Commander: BC)のトニー・ライス陸軍少佐(Major Tony Rice)がおり、大隊に割当てられた砲兵中隊の指揮にあったていた。彼はこの司令部内でジョーンズ中佐の次任であり、大隊長と同じレベルで戦闘を観察し、戦闘中も大隊長と同じ場所におり、大隊長への有力な助言者であった。また実際に大隊長が負傷・戦死した場合、一時的に砲兵指揮官が大隊の指揮をとり、第2戦術司令部(Tac 2)が指揮を継承するまで大隊長の代わりを務める。この当時ライス少佐には、ジョーンズ中佐の関心があまりにもA中隊の戦闘にとらわれ過ぎているように見え、B中隊やD中隊の戦力を検討するようにしむけたが、かなわなかった[1103]。

第2空挺大隊は、明るくなってからアルゼンチン軍の主防衛線に正面からぶつかり、進撃が停頓してしまった。大隊長ジョーンズ中佐へは、既述のとおり部下指揮官から多数の有益な示唆（火力支援、アルゼンチン主防衛線の迂回）が提案されたが、彼はそれら総てを拒絶した。ジョーンズ中佐は、大隊の攻撃がうまく進行しないことにいら立っていたようである。とくにA中隊の近くに位置し、A中隊の攻撃が成功しないのを見て、みずからA中隊の兵隊を率いてアルゼンチン軍の防御線を突破しようと考えた[1104]。

しかし、その兵力運用は理解しがたいものであり、大隊長の周辺にいた20名程度の人間を使ったのみであった。当時小峡谷の中には60名程度のイギリス兵が所在しており、それまでのA中隊の攻撃が失敗したことを考えると、全力をもって攻撃に当たることが一般的感覚であろう。しかもこの20名程度の突撃の中に、大隊長ジョーンズ中佐、大隊砲兵指揮官ライス少佐、A中隊長ファラーーホックレー少佐、大隊長副官ウッド大尉(Captain D. Wood)、大隊迫撃砲射撃指揮官(Motor Fire Contllorer: MFC)ウォースレ

---

1100 Adkin, *Goose Green,* p. 242.
1101 Adkin, *Goose Green,* pp. 242-243.
1102 Adkin, *Goose Green,* p. 243.
1103 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p. 94.
1104 Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, p.110.

ーートンクス大尉(Captain M. Worsley – Tonks)、A 中隊先任((2 i/C, A Coy)デント大尉(Captain C. Dent)、A 中隊砲兵観測将校(Forward Obsevation Officer: FOO, A Coy) ワトソン大尉(Captain J. Watson)の 7 名もの将校がおり、また 6 名が重い無線機をかついでいた[1105]。

この支稜線に対する突撃は、たちまちアルゼンチン軍の猛射撃を受け、死傷者を出し頓挫した。ただしジョーンズ中佐は、単独で支稜線塹壕を右へ 150 メートルほど迂回して進んだが、結局アルゼンチン軍の塹壕から射撃をうけ、戦死した。時刻は 0930Q 時頃であった[1106]。

ジョーンズ中佐の死後もこの分隊の攻撃は続き、66 ミリメートル対戦車ロケット弾によりジョーンズ中佐を狙撃した塹壕に直撃弾を与えた。この破壊力によって、まわりの塹壕は白旗を振り、それはすぐに支稜線上のアルゼンチン軍の降伏につながった[1107]。

## 第 7 節　イギリス軍のスタンレー攻撃準備

### 第 1 項　第 3 コマンド旅団のスタンレー攻撃準備

イギリス政府は、グース・グリーンでの勝利によってひと安心した。この勝利により、イギリス軍が依然として主動と勢いを保持していることを示した。しかしまたアルゼンチン軍は、簡単に片付く相手でないことをも示した。

グース・グリーンの占領後に、イギリスの情報機関はアルゼンチン軍の兵力を、西フォークランド島のポート・ハワードとフォックス湾に 1,000 人ずつ、東フォークランド島のスタンレーに 6,500 から 8,000 人と見積もった。6 月 7 日に 317.1 任務部隊司令部は、全兵力を 8,000 人、そのうち戦闘兵員数を 5,000 人と推測した。実際には 4 月末までにアルゼンチン軍は 13,000 人をフォークランド諸島に投入し、そのうち戦闘職種は 5,000 から 6,000 人であった[1108]。

アルゼンチン軍のスタンレー防衛要領は、若干の前方観測点と動哨を配置した固定的防御であった。アルゼンチン軍は、周囲の山中に配置された防御陣地に守られ、有利であると見なしていた。しかしスタンレーの約 48 キロメートルの外周に対し、アルゼンチン軍の保有兵力は、その三分の一を守るのに十分な量に過ぎなかった。結局重要地点に兵力を分散配備し、相互に支援することが不可能であった[1109]。

イギリスの政治家は、国際的な圧力によって停戦を選ぶのではなく、アルゼンチン軍を打ち破って戦争を終了させたいと考えていた。そのためイギリス陸上部隊は、たとえ装備や軍需品や兵力が限られていても、攻撃をおし進めることが督促された。天候はひどく悪化しており、吹きさらしのところにいる地上部隊は、天候により敵に直面するのと同様の肉体的損傷を受けることが予想された。また指揮と通信に関する問題はしばしばひどい状態になっていた。それゆえアルゼンチン軍の中で進行していると思われている

---

[1105] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 117-119.
[1106] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 117-119; Adkin, *Goose Green,* p. 245.
[1107] Fitz-Gibbon, *Not Mentioned in Dispatches…*, pp. 124-127; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 576.
[1108] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 584.
[1109] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 584.

士気の低下と、イギリス軍にかかっている過労の、どちらが先に耐えられなくなるかの競争と考えられた[1110]。

一方、フォークランド諸島地上軍（LFFI）指揮官のムーア海兵隊少将は、ようやく戦域に到達した。ムーアは、5 月 27 日に衛星通信装置が故障していた「クイーン・エリザベス II 世」から駆逐艦「アントリム」へ移乗し通信連絡を確保した。さらに 29 日にムーアは、強襲揚陸艦「フィアレス」へ移乗し、その設備を利用して LFFI 司令部を開設した。30 日にはムーア准将はフォークランド諸島地上作戦について全面的な指揮をとった[1111]。

ムーアの「フィアレス」移乗により水陸両用群（CTG 317.0）指揮官クラップ海軍准将が近くに位置し、ムーアは海軍作戦に関するアドバイスと陸上作戦支援に対する航空母艦群指揮官（CTG 317.8）ウドワード海軍少将との調整支援を得ることができた。しかしクラップ准将にとってこの新しい任務は困難であった。それは一方でクラップが地上作戦の計画についてよく知らされず、他方では彼の幕僚が、後方支援や対空防御には熟練していたが、地上作戦支援のためのハリアーや艦砲射撃の運用について知識が欠けていたからであった[1112]。

ムーアにとってもっとも困惑した事象は、彼の指揮下にある二人の旅団長が、両名とも任務部隊司令部（Northwood）から信頼を得ていないことであった。第 5 歩兵旅団は事前搭乗演習をウェールズで実施したが、うまくゆかず、旅団長トニー・ウィルソン陸軍准将の能力について疑問がもたれていた。ムーアもウィルソン准将の自信のなさに気付いた。またムーアはロンドンから、政府および軍の指導者は、もう一人の旅団長トンプソン准将に期待を裏切られ、彼に臆病の傾向があるとさえ考えているようであることを知らされた。ムーア少将は、トンプソン准将が第 3 コマンド旅団指揮官の任に適しないと判断したなら、解任する権限を持っていた。しかしムーアは、トンプソンと彼の苦境については十分理解し、彼に対する以前からの信頼が根拠のないものであるとは思わなかった[1113]。

任務部隊司令部は、フォークランドの地上軍に誰か、現地の運用上の困難について理解し、その状況について政治家にも理解できる言葉で任務部隊司令部へ伝達できる人間がいたら、安心できると考えた。ムーア少将は、5 月 27 日遅くの任務部隊司令部陸戦参謀長トラント陸軍中将との最初の電話交信で、こういう事態は毎日起こることであり、任務部隊司令部のその考えは良くないものである、とはっきり示した。なぜなら、このやり方は時間がかかるものであり、ムーアは今後の電報については、フィールドハウス大将とその幕僚だけでなく、幅広い回覧者を対象とした文面にすると回答した[1114]。

ムーアは、まず彼自身によって現状がいかに進行しているのか評価することが必要であり、そのためにはムーアを電報のあて先に含めることに慣れていない者に、現時点からそれを行うことを要求した。彼のこの日の電報の一つは、次のトンプソンに対する叱責であった。「本官は、本日初めて貴官の状況について

[1110] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 584-585.
[1111] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 586.
[1112] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 586.
[1113] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 586.
[1114] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 586.

納得のゆく説明を得ることができた。」ムーアは続けて「しかしそれは、本官の通信幕僚が本官宛ではない貴官の電報を傍受することによって、判明したのだった。」[1115]

ムーアはトンプソンへ今後状況報告を必ずムーアへ送ることを命じ、かつその中身は短いぶっきらぼうな声明ではなく、状況の完璧な描写を求めた。ムーアはトンプソンに「本官がまったく真実の情報から隔絶されているため、貴官を不確かな情報による批判から守ることが、しだいに困難になってきている」ことを注意喚起した[1116]。

ムーアは、ケント山におけるアルゼンチン軍のようすから、彼らがスタンレーの外郭防衛線を越えた高く不毛で厳しい寒さの場所で戦う気力のないことを見抜いた。6 月 1 日にムーアはフォークランド諸島地上軍最初の命令として、「スタンレーを確保せよ」と命じた。これはいわゆる「南方戦略（southern strategy）」に基づくものであった。「南方戦略」とは、以下のイギリス軍の仮定から生れたものである。すなわち第一の仮定は、アルゼンチン軍の防衛を突破するには、手元のすべての兵力を投入する必要があり、第 2 の仮定は、アルゼンチン軍防衛は、南方からの進攻に対処しているというものだった[1117]。

この理由の第一は、アルゼンチン軍の上陸作戦のドクトリンがアメリカの海兵隊のそれを起源としているからであった。アメリカ海兵隊のドクトリンは目標のできるだけ近くに上陸することを強調していた。イギリス軍は、アルゼンチン軍がイギリス軍も同様のドクトリンと考えて、最大の目標であるスタンレーの近くに、すなわち南方からの上陸作戦を予測していると考えた。ムーアは、第 5 歩兵旅団をスタンレー南方から接近させれば、アルゼンチン軍は仮説通りの展開となったと考え、西方からスタンレーを攻撃する第 3 コマンド旅団に対して、十分な準備はできないだろうと考えた[1118]。南方からのイギリス軍の進撃がなかったなら、メネンデス少将は西方から接近してくる第 3 コマンド旅団に注目すると考えられた[1119]。第 3 コマンド旅団がティール・インレット（Thiel Inlet）からマロ橋（Malo Bridge）を経由してケント山へ進攻する。第 5 歩兵旅団は、カミラ・クリーク・ハウスを出発し、マーチ・リッジ（March Ridge）、フィッツロイ（Fitzroy）、ブラフ・コヴ（Bluff Cove）を経由しチャレンジャー山にいたる経路であった。チャレンジャー山で第 5 歩兵旅団は第 3 コマンド旅団と合流する予定だった[1120]。

イギリス海兵隊第 40 コマンド大隊は、スタンレー進攻に選ばれなかった部隊だった。この大隊はサン・カルロスの橋頭堡地区防衛が任務であった。トンプソン准将は、第 40 コマンド大隊をティール・インレットまたはダグラス入植地へ移動させる意図を持ち、5 月 30 日から移動を実施するよう命令を下した。橋頭堡地区の防衛については、後から来た第 5 歩兵旅団のいずれかの部隊が引き継ぎ、この大隊はその任務から解放される予定だった。しかしながら 5 月 31 日この部隊移動はキャンセルされ、6 月 1 日フォークランド地上軍司令部から第 40 コマンド大隊へ、もとへ戻り橋頭堡を守備せよとの命令が下った。この命令

[1115] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 586.
[1116] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 586.
[1117] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 556, 587.
[1118] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 556.
[1119] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 587.
[1120] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 587.

に大隊長ハント海兵隊中佐（Malcolm Hunt, Lieutenant-Colonel, RM）は激怒し、ムーア少将を直接訪れ、何とか決心を変更させようとしたが無駄だった[1121]。

第 40 コマンド大隊がスタンレー進攻に加われず、その代わりにイギリス陸軍のウェールズ近衛大隊が参加した。その第一の理由は、アルゼンチン軍が西フォークランド島所在の部隊を使って大胆な作戦を行う心配があり、それに対処するにはヘリコプターや上陸用舟艇での機動作戦に陸軍の部隊より熟練した海兵隊の部隊が欠かせないと考えられたからだった。第 2 の理由は、その当時の第 40 コマンド大隊とウェールズ近衛大隊の相対位置関係にあった。第 40 コマンド大隊をスタンレー進攻に用いるには、その司令部を前方に移動させるだけではなく、ウェールズ近衛大隊の司令部を後方に下げなければならず、ひっ迫した当時のヘリコプター輸送能力から、それは採用されなかった[1122]。

### 第 2 項　ケント山奪取

ケント山はスタンレーの西方に位置し、そこからスタンレーに向って見下ろす位置にある。スタンレーを攻め落とすには、まずケント山を占領して火力支援部隊を配置し、そこからスタンレーへ向って攻め下っていくのが陸上戦闘の原則にかなっていた[1123]。グース・グリーンの戦いでも記述したように、5 月 24 日に SAS の偵察によりアルゼンチン軍の兵力配備がケント山にないことを知ったイギリス軍は、ただちにここへ大兵力を投入しようとした。しかし翌 25 日に「アトランティック・コンベアー(SS *Atlantic Conveyor*)」が撃破されヘリコプターを多数失い、兵力の運搬手段を喪失するとその考えを放棄し、SAS の D 中隊（D Squadron）のみが山頂を固めた[1124]。

一方アルゼンチン軍のスタンレー防御は、イギリス軍のスタンレー周辺上陸を想定した海岸方向への防御に重点を置いていた。しかしケント山周辺に兵力を全く配置していなかったわけではなかった。アルゼンチン陸軍航空隊のヘリコプター部隊である第 601 航空戦闘大隊（Batallón de Aviación de Combate 601：CAB601）は、スタンレー内のムーディー・ブルックに駐屯していた。5 月 1 日イギリス海軍のスタンレー周辺へのシー・ハリアーによる対地攻撃ならびに艦艇による砲撃は、CAB601 の航空機へ何ら被害を及ぼさなかった。しかし CAB601 はさらなる航空攻撃と艦艇の砲撃を避けるため、ケント山の北側に退避し、そこをありあわせの基地とした[1125]。そのヘリコプター部隊を守備するため、アルゼンチン陸軍の第 12 歩兵連隊 B 中隊が、ケント山北側へ配備されていた[1126]。しかし前述したように、この B 中隊も 5 月 28 日にはグース・グリーンの戦闘を支援するために、ヘリコプターで大部分が引き抜かれ、残りは 40 名ほどで

---

[1121] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 587.
[1122] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 589.
[1123] 葛原和三「『フォークランド紛争』再考のために（2／2）」『陸戦研究』（2011 年 5 月）60-61 頁。
[1124] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 559-560; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 147.
[1125] Hobson, *Falklands Air War*, pp. 45, 62, 63; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 65; Rivas, *Wings of the Malvinas*, pp. 307-308.
[1126] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 149. なお、これは 5 月 24 日の SAS の偵察による「ケント山周辺に敵兵なし」と矛盾している。SAS の偵察不十分によるものか、B 中隊程度の兵力は問題にならないと考えたのか不明である。

あった[1127]。

同じ 28 日の夕方に、イギリス海兵隊の第 42 コマンド大隊は、翌 29 から 30 日の夜にケント山に進出するよう命じられた。大隊長ニック・ヴォークス中佐（Lieutenant Colonel Nick Vaux）は、大隊司令部とK 中隊、迫撃砲兵ならびに砲兵中隊の半分をケント山へ送り込む計画を立案した[1128]。29 日夜第 42 コマンド大隊の指定された部隊は、イギリス海軍第 846 飛行中隊の NVG 装備シー・キング・ヘリコプターに搭乗して、ケント山まで前進しようとしたが、猛吹雪にはばまれ帰投した[1129]。

マルビナス諸島総軍司令官メネンデス少将は、前日の 28 日配下にあるコマンド部隊に対し、サン・カルロス方面から接近してくるイギリス軍の補給･連絡線を襲撃しイギリス兵を捕虜にする作戦を発動した。5 月 29 日アルゼンチンの特殊作戦部隊は、ヘリコプターに分乗して、ケント山を襲撃した。第 602 特殊作戦中隊第 3 突撃分隊（3ra Sección de Asalto, Compañía de Comandos 602）が搭乗したヘリコプターは、ケント山の東斜面に降りることができた。しかし第 602 特殊作戦中隊第 2 突撃分隊（2da Sección de Asalto, Compañía de Comandos 602）が搭乗したヘリコプターは、悪天候のためケント山から約 5 キロメートル南東のブラフ・コウヴ峰（Bluff Cove Peak）へ分隊を降ろしてしまった。第 2 突撃分隊は翌 29 日の夜明けになってからケント山へ向ったが、周囲をパトロールする SAS からの射撃を受け死者 2 名を出し、ケント山への進撃を一時中断した[1130]。

目的地に正確に着いた第 3 突撃分隊は、降りてすぐに SAS と激しい近接戦闘を始めた。SAS の D 中隊はケント山を散開して守備していたが、アルゼンチン軍部隊による襲撃については事前の警告を受けていなかった。アルゼンチン特殊部隊は擲弾筒によって制圧しながら、吹雪にまぎれて SAS の防衛線に浸透した。SAS は、一時ケント山からの撤退も考えた。しかしトンプソン准将は、ケント山を保持する重要性に鑑み、D 中隊長デルヴズ少佐へケント山周辺の全部隊を指揮する権限を授け、是非ともケント山を保持するよう命じた[1131]。

ケント山での戦闘は、夜間になり日付が変わっても継続した。しかし 30 日の夜明けを迎えアルゼンチン第 3 突撃分隊長アンドレス・フェレロ陸軍大尉（Capitán Andrés Ferrero）は、SAS が戦場の主導権を握っていることと、アルゼンチン軍増援部隊の来る兆候がないことからケント山をあきらめ、エスタンシア山（Mount Estancia）へ向かった[1132]。

一方第 2 突撃分隊を指揮するトマス・フェルナンデス陸軍大尉（Capitán Tomas　Fernández ）は、第 3 突撃分隊がケント山にまだいるだろうと考え、30 日夜になってからまたケント山へ向かった。しかし第 2 突撃分隊は、ケント山の斜面に取り付いたところで SAS の D 中隊からの奇襲を受けた。この戦闘が継続している最中に、第 42 特殊作戦大隊の K 中隊、105mm 軽砲 3 門、迫撃砲 6 門が、シー・キング・ヘ

1127 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 142; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 192-194.
1128 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 589-590.
1129 Hobson, *Falklands Air War*, p. 108; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 589-590.
1130 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 589-590; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 147-148.
1131 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 147-148.
1132 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 148.

リコプターによってようやくケント山の西側斜面へ送りこまれた。これによってケント山におけるイギリス軍の優位は確立し、アルゼンチン軍特殊部隊はスタンレーへ後退した[1133]。イギリス軍は、スタンレー攻撃の出発点を確保することができたのであった。

### 第 3 項　ケント山方面へ向けての兵力集中

5 月 27 日、明るくなってから、イギリス海兵隊第 45 コマンド大隊は、ダグラス入植地（Douglas Settlement）へ向かって徒歩でサン・カルロスを出発した。当初のヘリコプターで輸送されるという計画は、25 日に「アトランティック・コンヴェアー」ともどもヘリコプターが破壊されて挫折し、二本の足で歩く以外に方法がなかった。一人の携行する荷物の重さは、基本的な戦闘装備ならびに生活用品・寝袋・私物等が入ったバックパックで約 120 ポンド（約 54 キログラム）に達した。重装備については、限定された量が、少数の装軌式水陸両用車 Bv 202 に搭載され運搬された[1134]。

行進経路は、やわらかい泥沼の泥炭地か背の高い草やぶで足をくじくおそれがありあり、重荷を背負った兵士にはたいへん困難な行軍となった。行進速度は非常にゆっくりであり、幾人かの軽症を負う者もあらわれた。ついに第 45 大隊は、第 3 旅団司令部へ「目的地へ計画どおり到着するにはヘリが必要である。ヘリをどの程度使えるか、見込みはいかがか」と要求したが、その答えは「全くない」であった。第 45 大隊のこの要求は、ヘリコプターの不足が極端に厳しい悪い時期に重なっていた。多くの汎用支援用ヘリコプターが一時的に故障状態にあり、また夜間運用できるヘリコプターは、第一に SAS・SBS の特殊作戦部隊の作戦へ優先してまわされ、また苦戦が伝えられているグース・グリーンの第 2 空挺大隊へ砲を運搬するのに使用されていた[1135]。

第 45 コマンド大隊の行軍第 1 日目の目標は、サン・カルロスから約 20 キロメートルの距離にあるニュー・ハウス（New House）であった。やがて日は暮れて行軍は夜間に及んだ。夜の行軍は昼にも増して困難であり、大隊の 600 人に及ぶ長蛇の列が、ぶつかったりつまずいたりしながら前進した。ニュー・ハウスへは 2200Q 時に到着し、大隊はそこで宿営した[1136]。

宿営に当たって大隊は、各人に寝袋に寝袋カバーをかけるだけで就寝するよう命じた。各人携行の防水ポンチョ、支柱およびゴムひもを使って、寝袋の上に簡易テント風にポンチョをかけることもできたのだが、大隊は認めなかった。しかしそれは裏目に出て、夜明け前に土砂降りの雨となり、寝袋カバーは雨を防ぐことができず、寝袋はびしょぬれとなった。兵士達にとって、士気の最後の砦は寝袋であり、それは無限の安らぎと力を兵士に与えた。今、最後の砦を破られ、士気はフォークランド奪回作戦実施間で最低

---

1133 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 148; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 590; Hobson, *Falklands Air War*, pp. 110-111; Julian Thompson, *3 Commando Brigade in the Falklands: No Picnic* (Barnsley; Pen & Sword, 2008, first published in 1985 by Leo Cooper), p. 114.
1134 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 590.
1135 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 590.
1136 Thompson, *No Picnic*, p. 108.

点に達した[1137]。

5月28日明け方、第45コマンド大隊は、ダグラス入植地までの残りの12キロメートルの行程を出発した。アルゼンチン軍との遭遇を考えて各人のバックパックをニュー・ハウスに残置し、戦闘隊形をとって前進した。大隊の先頭は1300Q時にダグラスに着いたが、アルゼンチン軍はすでに撤退していた。住民はイギリス軍を大いに歓迎し、農業用トラクターとトレーラーを住民自ら運転して、装備・物資の輸送に協力した。大隊は入植地の周囲にざん壕を掘り、また斥候隊をだして周辺を偵察させた。ヘリコプターによって、各自のバックパックと携行食料がダグラス入植地へ空輸された。特に携行食料は、大隊の兵士にとってこの24時間で最初の食事となり歓迎された[1138]。

第45コマンド大隊は、5月29日をダグラス入植地の守備陣地の強化と兵士の休養にあてた。同大隊は翌30日1000Q時に、直線で約15キロメートル離れた次の目標であるティール・インレットへ向けて徒歩で出発し、1730Q時には先頭が着き、2100Q時には部隊の最後尾が到着した。31日には、第3コマンド旅団長トンプソン准将が同大隊の視察に現れ、これまでの徒歩行軍をねぎらうとともに、次のケント山までの移動はヘリコプターが使えるだろうと述べた[1139]。

しかし6月1日および2日は、たいへんな悪天候であり、ヘリコプターを輸送には使えなかった。6月3日には天候が回復したが、新たにフォークランドへ到着した第5歩兵旅団のためにヘリコプターの大部分がそちらに割当てられた。第45大隊長アンドリュー・ホワイトヘッド海兵隊中佐（Lieutenant Colonel Andrew Whitehead）は、もう一度徒歩行軍する決心をした。同大隊は6月3日の薄明とともにティール・インレットを出発し、翌4日1300Q時にはケント山南西のブラフ・コウヴ峰に到達した[1140]。

第3コマンド旅団の配下にあるもう一つの大隊である第3空挺大隊は、当初の計画では第45大隊の通った後に従うことになっていた。しかし島民からの情報により、ダグラス入植地を通らず、ティール・インレットへ直接向かう、より直線的なルートをとることにした[1141]。第3空挺大隊は5月27日1100Q時にポート・サン・カルロスを出発した[1142]。

第45コマンド大隊と同様に徒歩行軍は困難なものであり、多くの兵士が部隊の進行速度に合わせられず、後方からさらにゆっくりと部隊を追いかけた。翌28日1100Q時に第3空挺大隊の先頭は、ティール・インレットの西方9キロメートルのアロイ・ペドロ川（Arroy Pedro river）のところで停止した。大隊は28日の日中の間、部隊の最後尾の兵士が追いつけるよう、そこで対空警戒態勢を取りながら待機した[1143]。

やがて最後尾が追いついたが、ヘリコプターの不足により第3大隊には、支援火砲が輸送されず、ティール・インレットにいるであろうアルゼンチン軍を攻撃することができなかった。しかし28日の日の入前に海軍特殊作戦部隊（Special Boat Squadron: SBS）の偵察によりティール・インレットにはアルゼン

---

1137 Thompson, *No Picnic*, pp. 108-109.
1138 Thompson, *No Picnic*, p. 109.
1139 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 591; Thompson, *No Picnic*, p. 113.
1140 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 591; Thompson, *No Picnic*, p. 122.
1141 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 591.
1142 Thompson, *No Picnic*, p. 110.
1143 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 592; Thompson, *No Picnic*, p. 110.

チン軍がいないことが判明した。第3空挺大隊は、暗くなってからティール・インレットへ向け出発し、2230Q時にそこを確保した[1144]。

29日1400Q時に第3空挺大隊は、トンプソン准将からエスタンシア・ハウス（Estancia House）へ移動する準備を行うよう命令された。そこには約200名からなるアルゼンチン軍が所在すると信じられていた。しかし第3大隊指揮官パイク陸軍中佐（Lieutenant Colonel Hew Pike）は、兵士が骨の折れる行軍によって疲れきっていること、ならびに支援火力兵器と弾薬集積が不足していることから、攻撃する態勢が整っていないと懸念を表明した。そこでトンプソン准将は、第3空挺大隊が、第45特殊作戦大隊が到着するまでティール・インレットを確保すること、ならびにエスタンシア・ハウスに出発する前にティール・インレット周辺の残敵を掃討するよう命令が変更された[1145]。

翌30日2機のヘリコプターが大隊の輸送を支援し、残りの迫撃砲と支援火器がティール・インレットまで空輸され、警戒中隊（D中隊）も大隊に合流した。1030Q時に大隊は、迫撃砲を積載したトラクターの縦列を従え、エスタンシア・ハウスへ向け出発した。その日の終わりには、大隊は目的地の近くまで前進した。5月31日も計画どおり大隊の業務は進行していたが、警戒中隊からエスタンシア・ハウスにアルゼンチン軍がいないことが報告されると事態が変わった。大隊は静かにエスタンシア・ハウスまで前進し、アルゼンチン軍がいないことを確認し、1840Q時そこを占領した[1146]。

6月1日には別の入植地からトゥルディ・モリソン（Trudi Morison）婦人に率いられたトラクターと車両の一団が、イギリス軍を助けに現れた。これらのトラクター等は、弾薬、携行食及びその他の物資を各中隊へ輸送するのに使用された。エスタンシア・ハウスを比較的容易に手に入れた第3空挺大隊は、次の目標であるロングドン山へ向けてパトロールの準備を行った。その攻撃は、第45コマンド大隊によるツー・シスター山攻撃と時期を合わせるため、2日後が想定された[1147]。6月2日にトンプソン准将は、ロングドン山の東端まで積極的なパトロールを行い、無人の陣地はすべて確保するように命令した。6月3日には攻撃が計画されたが、ヘリコプター輸送の重点が、計画外である第2空挺大隊のフィッツロイ前進に置かれたため、延期された。十分な支援兵力が整うまで大規模な攻撃は行われなかった[1148]。

第3空挺大隊長パイク中佐は、攻撃を延期するつもりはなかった。彼は部下の将校にロングドン山攻撃の概要を示し、積極的かつちゅう密なパトロールを行わせた。兵士は、しばしばアルゼンチン軍陣地の50メートルまで近づき、パトロールを行った。その結果2コ中隊のアルゼンチン軍部隊が守備していると想像された（実際は1コ中隊であった）[1149]。

3日1200Q時、第3空挺大隊は、最低限ロングドン山西側のふもとに巡視するための基地を設置することを意図して、前進を始めた。順調に前進し、1255Q時アルゼンチン軍兵士と接触したが、彼らはすぐに

---

1144 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 592; Thompson, *No Picnic*, p. 110.
1145 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 592.
1146 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 592-593.
1147 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 593.
1148 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 593.
1149 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 593-594.

ざん壕に隠れてしまった[1150]。

この時点でトンプソン准将の関心は、第3空挺大隊については、後の使用のためロングドン山へのルートを啓開することであり、第 45 コマンド大隊についてはツー・シスター山へのルートを開く準備をすることであった。しかし第3空挺大隊は、トンプソンよりさらに野心的であり、今自身のいる位置を利用するべき機会であると見ていた。この大隊の戦時日誌の 1318Q 時には、「積極的なパトロールは、夜の間に目標を占領することができるかもしれない」と記録している。先頭の中隊は良好な前進を続けたが、すぐにアルゼンチン軍の小火器、迫撃砲ならびに火砲の射撃、とくにツー・シスター山（Mount Two Sisters）方向から部隊の右翼への射撃を受けるようになった。1424Q 時、トンプソン准将はパイク中佐へ、以下のように送信した[1151]。

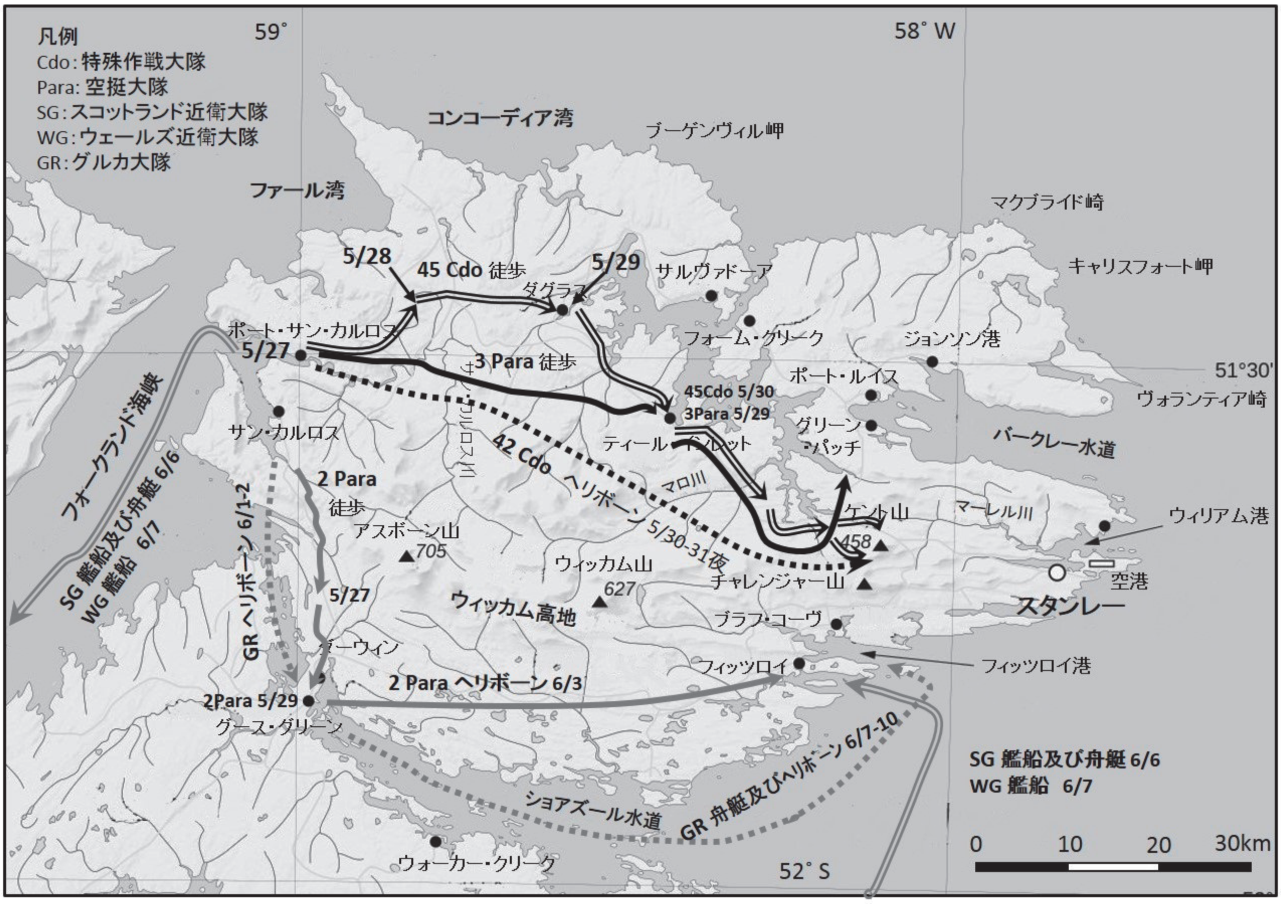
本官は、貴官があまりに速く攻撃を強行しているのでないかと案じている。本官は、貴官が抜け出すことができないような状況におちいることを欲していない。それゆえ貴官は、現在地にとどまりざん壕を掘るべきである。貴官が、自身の将来の企図を実行することはかまわない。しかし貴官の全部隊を前面に移動させてはならない。貴官は前面をパトロールすることだけが認められている。陣地を固めたら、ただちに状況報告を送信すること。停止したならば、しかっリ陣地を作るべきである[1152]。

これを受けてバイク中佐は前進を停止し、ロングドン山から約 6 キロメートルのマーレル橋（Murrel Bridge）の西側の斜面に陣地を置き、大隊に陣地を強化するよう命じた。全中隊は壕を掘り始め、陣地を強固にした。その後、第3空挺大隊は徹底的なパトロールを開始した。6月6日早朝にはマーレル川（Murrel River）の橋の上で両軍の衝突が起き、アルゼンチン軍のパトロールは奇襲を受けて5人の死者を出した。しかしながら第3空挺大隊のパトロールは、タンブルダウン山（Mount Tumbledown）方向から迫撃砲と機関銃の射撃を受け、ただちにその場所を離れた。翌日にはさらにこぜり合いが発生し、この地域のアルゼンチン軍は、他の地域のアルゼンチン軍よりよく訓練を受け士気が高いことを示した[1153]。

第5歩兵旅団の前方進出を待つことによるスタンレーの防御陣地への攻撃開始の遅れは、第3コマンド旅団にとっていらだたしいものであり、また危険を伴っていた。アルゼンチンは、イギリスがケント山周辺を占領していることに気付き、6月4日にダガー6機でケント山とグリーン・パッチ入植地（Green Patch Settlement）に、またスタンレーから離陸したプカラ4機は同じくケント山に爆弾を投下した。その日の遅くにはアルゼンチン空軍のキャンベラ爆撃機が空襲を行った。これらは何物にも命中しなかったし、イギリス軍に負傷者も生じなかった。しかしながらイギリス軍は、ダガーに対していかなる迎撃も行えなか

1150 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 594.
1151 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 594.
1152 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 594.
1153 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 594.

ったことを心配した[1154]。




図第 22　サン・カルロス上陸後のイギリス地上部隊の機動状況

地図はWikimedia Commons (http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/4/4e/Falkland_Islands_topographic_map-en.svg/2550px-Falkland_Islands_topographic_map-en.svg.png) に筆者が手を加えたものである。英軍地上部隊の動きについては、Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 588, 599; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 145; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 344. を参考にした。

トンプソン准将はティール・インレットにある旅団司令部と再補給地点の脆弱性を心配した。レピア地対空ミサイル分遣隊の進出は、うんざりするほど遅かった。トンプソンがムーア少将へ宛てた 6 月 4 日 2140Q 時電報には、「約束されたレピア地対空ミサイルが来ないだけでなく、BBC はこの地域にスタンレーを攻略する部隊の司令部があると放送した。もし敵がこれを信じたら、この地域は無防御の優先目標となり、サン・カルロスのような空襲を受ける」として、レピアが到着するまでの間、シー・ハリアーによる防空を要求した[1155]。　フォークランド諸島地上軍司令官ムーア海兵隊少将も、トンプソン准将の見解を支持する電報を航空母艦群指揮官ウドワード海軍少将へ発信し、6 月 5 日には戦闘機による防空が行われるよう期待した[1156]。

第 3 コマンド旅団は、アルゼンチン軍のスタンレー西側外郭防衛線であるロングドン山、ツー・シスター山およびハリエット山の攻撃のための兵力集中をほぼ完了した。トンプソン准将は、6 月 6 日には、隷

1154 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 594-5.
1155 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 595.
1156 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 595.

下の大隊へ外郭防衛線攻撃の命令を下せるだけの情報が集まった確信した。翌7日には隷下大隊の主要メンバーをティール・インレットへ集めて、命令下達を行うこととした[1157]。

トンプソン准将はこの命令を下す前に、フォークランド地上軍司令部と連絡を取り、第5歩兵旅団がこの攻撃に同調して攻撃開始できる状態にあるか確認を行った。地上軍司令部の答えは、第5歩兵旅団はまだその状態になっておらず、いつその状態になるか予定もたたない、というものだった。第3コマンド旅団は、この回答を受け、隷下大隊へは攻撃命令下達を保留し、改めて各大隊へ予想攻撃目標を支持するとともに、引き続きパトロールを行うよう命令した[1158]。

### 第4項　第5歩兵旅団のフォークランド進出

第5歩兵旅団が戦闘に加わるまでの過程は、長く苦難に満ちたものだった。この旅団は、最初に基幹である2コ空挺大隊を第3コマンド旅団に吸い上げられ、寄せ集めの部隊で編成された。第5旅団に付加されたグルカ兵を用いることは、政治的に微妙な問題がつきまとった。ウェールズ近衛第1大隊とスコットランド近衛第2大隊を付加することは、これらの部隊の普段の任務が宮殿の衛兵であり、批判が付きまとった。スコットランド大隊の部隊の訓練は、射撃と体育に限られていた。また戦術については古めかしいものであった[1159]。

身体能力を向上し、旅団内で統一された戦闘ができるようになるため、ウェールズの演習場で訓練がなされた。しかしその演習は、小隊および中隊レベルであり、あまり期待できるものではなかった。多くの部隊は以前に一緒に演習したことが一度もなく、統一行動が、取れなくても不思議ではなかった。それにもまして旅団指揮官であるトニー・ウィルソン准将の能力に対する疑念が持ちあがった。しかしこの重大な時期に指揮官を交代することを「躊躇」する考えの方がより強く、更迭する事態までは至らなかった[1160]。

サウサンプトンから「クイーン・エリザベスII世」(QEII)が出港するとただちに、第5歩兵旅団は訓練計画を策定し、与えられた時間を最大限有効に活用し身体機能と戦闘に対する全般的準備を向上しようとした。しかし悪天候が訓練の進捗を妨げた。それに加えて第5歩兵旅団は、アセンション島に上陸して積荷を積みなおし射撃訓練を行い実戦的な戦闘能力を向上させるはずであった。しかし5月19日に着信した電報により、「QEII」はアセンション島へ寄港せずに直接フォークランド諸島へ向かうように命令された。その意図は、すばやく兵力を集中して作戦の「勢い」を高めることと、陸上部隊指揮官であるムーア少将とその司令部を一刻も早く前線へ送り込むことであった。5月21日までにムーア少将とその参謀は沿岸警備艦（offshore patrol vessel）「ダンバートン・キャッスル（HMS *Dumbarton Castle*）」ならびにアセンション島からヘリコプターにより「QEII」へ移乗した[1161]。

「QEII」はサウス・ジョージア島周辺の南大西洋上でフェリーと合流するため最大巡航速度で南へ向か

[1157] Thompson, *No Picnic*, p. 137.
[1158] Thompson, *No Picnic*, pp. 137-138.
[1159] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 596.
[1160] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 596.
[1161] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 596-597.

った。しかし5月24日になって、大西洋上での船同士の貨物等の移送をしないことに決心した。「QEII」の戦闘域内通過に伴うリスクをロンドンが許容できないと判断したためであった。「QEII」は直接サウス・ジョージア島へ向かい、島の湾内の穏やかな海面上で他の船への人員と貨物の移送を行う。第5歩兵旅団はそこからフォークランドへ向かい、「QEII」は、アルゼンチン軍機の偵察可能範囲から、十分にその外側を通るよう計画された[1162]。

5月27日1330Z時「QEII」はサウス・ジョージア島の北東でイギリス海軍駆逐艦「アントリム」と合流し、前述のようにムーア少将が「QEII」から「アントリム」へ移乗した。その後「QEII」はサウス・ジョージア島へ向かい、同日2300Z時（サウス・ジョージア時刻2000P時）ごろカンバーランド湾内のグリトヴィケン沖に投錨した。そこには既に同じく徴用船の「キャンベラ」、「ノーランド」、「バルチック・フェリー（MV *Baltic Ferry*）」、「ノルディック・フェリー（MV *Nordic Ferry*）」および「アトランティック・コーズウェー（SS *Atlantic Causeway*）」が待機していた。第5歩兵大隊の兵員は翌朝になってからの移乗を期待していた。しかしBBCの放送によって「QEII」がサウス・ジョージア島にいることが明らかになっており、アルゼンチン空軍の空襲を避けるためすぐさま移乗を開始した。28日遅くまでかけて第5歩兵旅団の3,000人の人員と装備の移乗が完了した[1163]。

6月1日第5歩兵旅団の第一陣がフォークランド諸島のサン・カルロスに上陸した。ヘリコプターの不足は、第5歩兵旅団のサン・カルロスへの物資揚陸すら困難なものとなった。船からの揚陸は、ほとんど上陸用舟艇に頼らざるを得ず、多くの時間を必要とした。6月2日にサン・カルロスへ入港した「キャンベラ」と「ノーランド」から人員・物資を完全に揚陸するのに24時間を要したのだった。その間アルゼンチン空軍の空襲を恐れたが、イギリス軍にとって幸いなことに天候不良で雲底が低く、空襲日和ではなかった[1164]。

### 第5項　第5歩兵大隊れい下部隊のスタンレー方面展開

第5歩兵旅団れい下の主な歩兵大隊は、第1ウェールズ近衛大隊および第2スコットランド近衛大隊であり、5月31日には第2空挺大隊が第3コマンド旅団から第5歩兵旅団れい下へ配属替えとなった[1165]。この項では、これら3つの大隊が、イギリス地上軍によるスタンレー攻撃前に、どのように攻撃開始位置までに移動したかを明らかにする。

5月30日サン・カルロスへ強襲揚陸艦「フィアレス」が入港し、フォークランド諸島地上軍司令官ムー

---

1162 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 597; Nicolas van der Bijl and David Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, (Branley; Leo Cooper, 2003), p. 54.

1163 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 597; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 54-55; David Brown, *The Royal Navy and the Falklands War: The Epic, True Story*, (London; Arrow books, 1989, first published 1987 by Leo Cooper), p. 242; Hobson, *Falklands Air War*, p. 103. なおFreedmanは「QEII」から他の船への移乗は26日からとしているが、本注の他の資料はすべて27日としている。また「QEII」がカンバーランド湾に投錨した時刻についても資料により異なっているが、この部分の記載はBrownを根拠とした。

1164 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 73.

1165 Gordon Ramsey, *The Falklands War Then and Now* (Old Harlow, Essex; After the Battle, c2009), p. 109

ア海兵隊少将、水陸両用群指揮官クラップ海兵隊准将、第3コマンド旅団長トンプソン海兵隊准将および第5歩兵旅団長ウィルソン陸軍准将が、主要な参謀を加え会同した。ムーア少将は、スタンレー占領ための基本的な作戦構想を一同に示した。第3コマンド旅団を北側から接近させ左翼に配置し、第5歩兵旅団を南方から接近させ右翼に配置しそれぞれ攻撃を行い、目的地はタンブルダウン山とウィリアム山であった[1166]。

ムーアは海兵隊少将であり、指揮下の主要部隊は海兵隊の第3コマンド旅団と陸軍の第5歩兵旅団であった。すなわち彼は、海兵隊部隊に「えこひいき」していないと見えるようにフォークランド地上軍の指揮を行うことに気を使っていた。またムーアの「QEII」による移動間は、同じく「QEII」に乗船している第5歩兵旅団長のウィルソン准将と常に顔を合わせていた。さらに「QEII」の衛星通信装置の故障も重なり、ムーアは、第3コマンド旅団長のトンプソン准将より、ウィルソン准将と話す機会が多く、必然的にウィルソン准将の意見がより聞き入れられるようになった[1167]。
このような第5歩兵旅団の持つ利点も、旅団自身の後方支援体制が貧弱で人員・装備・物資を移動させる十分な手段がなかったため、うまく生かされなかった。「QEII」での航海の間にウィルソン准将は、運搬手段であるヘリコプターについて第5歩兵旅団が第3コマンド旅団と均等に分配を受ける約束をムーア少将から得た。サン・カルロスに到着したウィルソン准将は、水陸両用軍指揮官クラップ准将へ、輸送ヘリコプターの均等配分を訴えたが、その願いはかなわなかった。その時点においては、まさに第3コマンド旅団がヘリコプターによる移動の最中であり、突然のヘリコプター割当て変更の要求は受け入れられなかったのだ[1168]。

第2空挺大隊は、5月28, 29日にグース・グリーンを攻撃・占領したばかりであったが、29日には早くも次の攻撃を考えていた。ジョーンズ中佐の戦死後、大隊長代理を務めるキーブル少佐は、グース・グリーンから約25キロメートル東北東のスワン・インレット・ハウス（Swan Inlet House）にある入植地を次の目標とした。その攻撃には1個小隊を使い、海兵隊第3コマンド旅団飛行中隊（3 Command Brigade Air Squadron RM: 3CBAS）のスカウト（Scout）・ヘリコプター3機の支援を受ける計画だった[1169]。

5月30日指揮官会同ののち、ウィルソン准将はヘリコプターを使い、グース・グリーンに所在する第2空挺大隊を訪問した。ウィルソン准将は、そこでキーブル少佐からスワン・インレット・ハウス攻撃計画の説明を受けたが、それを拒否した。代わりにウィルソンの示した計画は、第5歩兵旅団はポート・プレズント（Port Pleasant）へ進軍し、第2空挺大隊の任務は、その間旅団の左翼をアスボーン山（Mount Usborne）方面ならびにウィッカム高地（Wickham Heights）方面からの脅威に対して警戒するというものだった。第2空挺大隊の反応は否定的だった。ポート・プレズントはスワン・インレット・ハウスより倍の距離にあり、かつ部隊はすべてのものを自ら運ぶか、ヘリコプターで空輸するより他に方法がなく、

1166 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 69.
1167 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 598.
1168 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 598.
1169 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 67.

そしてヘリコプターの大隊規模の割当ては見込みがなかったからであった[1170]。

ウィルソン准将は第 2 空挺大隊の反応に腹を立てて帰った。しかし彼は 6 月 2 日再び第 2 空挺大隊を訪問し、キーブル少佐へスワン・インレット・ハウス攻撃を行うように命じ、大隊はその日のうちに攻撃を実施した。この日は、陸軍航空隊第 656 中隊（656 Squadron, Army Air Corps）から 5 機のスカウト・ヘリコプターの支援を受け、うち 2 機はフランス製の SS-11 対戦車ミサイルを各機 2 発搭載し、残り 3 機は各機 4 名の兵士を乗せ出発した。ミサイルを搭載したスカウト・ヘリコプターはスワン・インレット・ハウス入植地の 800 メートル西方に達すると SS-11 ミサイルを発射し、それらは建物に命中した。次に各機 4 名の兵士を乗せたヘリコプターが兵士を降ろし、ミサイルを搭載したヘリコプターにはサブ・マシンガンを持った空挺大隊の兵士が乗り込んでおり上空から援護した。入植地には誰もいないことがわかり、兵士が家屋にある電話を回すと、フィッツロイの入植地につながった[1171]。

島民が電話にでて、空挺隊員から「フィッツロイおよびブラフ・コウヴの周辺にアルゼンチン軍はいないか」と聞かれると、「いない」との返事だった。フィッツロイとブラフ・コウヴ両入植地を占領すれば、スタンレーを攻撃しようとする第 3 コマンド旅団の右翼を守ることができる。またそこは、第 5 歩兵旅団がスタンレーを攻撃するときの集合場所としても利用できる。さらにはフィッツロイとブラフ・コウヴの間は海が狭く湾入しており、そこを結ぶ木製の橋を破壊されてしまうと、道もなく車も通れないところを約 22 キロメートル迂回しなければならなくなるのであった。スワン・インレット・ハウスを占領した部隊から無線連絡を受けたキーブル少佐は、ウィルソン准将へ、ポート・プレズントへ行軍する計画をやめヘリボーン作戦で直ちにフィッツロイとブラフ・コウヴを奇襲するように進言した[1172]。

第 2 空挺大隊は、6 月 2 日午後にグース・グリーンでイギリス空軍の「アトランティック・コンヴェアー」の災厄から 1 機だけ生き延びたチヌーク・ヘリコプターを乗取った。このチヌークに 1 回目は完全武装の兵員 81 人を乗せ、2 回目は 75 人を乗せフィッツロイへ輸送した。安全の確保のため陸軍第 656 中隊のスカウト・ヘリコプター2 機が第 2 空挺大隊の偵察小隊を乗せ、かつチヌーク・ヘリコプターの護衛ならびに前路偵察を務めた。このかけは完全な成功で、アルゼンチン軍兵士は存在せず、第 2 空挺大隊はフィッツロイとブラフ・コウヴを占領し、また両者を結ぶ橋を確保した。ただし橋はアルゼンチン軍によって破壊されていたが、修理可能であった[1173]。

第 2 空挺大隊は、翌 3 日に大隊の残りの人員をフィッツロイとブラフ・コウヴへ空輸させた。一刻も早く多数の人員を送ることを重視したため、兵士はみな軽装備であり、現地についてから 4 日間寝袋と携行食料なしであった。またひき続いた悪天候によりヘリコプターによるフィッツロイへの弾薬輸送ができなかった。第 2 空挺大隊は戦闘できる態勢になく、アルゼンチン軍が反撃しなかったことは幸運であった。おそらくこの時期悪天候が続いたことにより、アルゼンチン軍の観測所からイギリス軍の動きが見えなか

1170 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 70.
1171 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 75-77.
1172 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 67, 77.
1173 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 77-80; Hobson, *Falklands Air War*, p. 115; Burden et al., *Falklands the Air War*, pp. 348, 388.

ったためと思われる[1174]。

この大胆な前進により第 2 空挺大隊は味方から隔絶され、敵には暴露し、補給端末から切り離された脆弱な状態にあった。他方、第 3 コマンド旅団はケント山方面で配置につき、アルゼンチン防衛ライン探索のための偵察を行おうとしているところだった。しかしイギリス軍が保有するヘリコプターは、第 3 コマンド旅団と第 2 空挺大隊の双方の補給を満足させるだけの量を持たず、この前進は補給上の優先順位をゆがめた。フォークランド地上軍司令部は大きな後方支援上の問題を抱え込んだ[1175]。

6 月 3 日ウィルソン准将は、第 2 空挺大隊の前進によって作られた「勢い」を維持するため、第 5 歩兵旅団の残りの部隊もフィッツロイとブラフ・コウヴに集中することを命令した。彼は、ウェールズ近衛大隊とグルカ小銃兵大隊および旅団司令部を船で輸送することを望んだ。これは「勢い」の維持の他に、アルゼンチン軍の反攻に備えるという理由もあった。また旅団をフィッツロイ周辺とサン・カルロスあるいはグース・グリーンに二分することは、たださえ乏しい第 5 歩兵旅団の後方支援体制から許容できないことであり、むしろひとつの場所に集結することが避けられないことであった。しかしこのことは上級部隊であるフォークランド地上軍が第 3 コマンド旅団と第 5 歩兵旅団双方の後方支援を同時に行わなければならず、その少ない後方支援能力にさらに負担をかける結果となった[1176]。

この時期に至ってイギリス陸軍は海軍による海上輸送の支援を期待していたようである。ムーア少将もクラップ准将に沿岸輸送の手配を依頼できると考え、6 月 3 日幕僚を通じて第 5 歩兵旅団をフィッツロイへ輸送できないか検討を依頼した。クラップ准将は、手助けしたいと望んではいたが、海上輸送の考えを好んではおらず、できることなら避けたいと願っていた。クラップは、この戦争が速さと主導を要求していることは理解していたが、統合上陸作戦において無計画で調整の取れていない行動は、許容されないことを理解していた。そして第 5 歩兵旅団は、統合上陸作戦について経験も知識もなかったのだった[1177]。

第 5 歩兵旅団では、ヘリコプターや船舶に頼らない移動も試みられた。6 月 2 日ウェールズ近衛第 1 大隊はサン・カルロスに上陸し、翌 3 日朝の会議で大隊長リケット陸軍中佐（Lieutenant Colonel J.F. Rickett）は、ウィルソン旅団長へ徒歩行軍でサン・カルロスから出撃することを志願した。リケット中佐は、サセックス山を超えて、旅団戦術司令部のあるダーウィン／グース・グリーンへ行き、さらにそこからブラフ・コウヴへ行軍する計画を立てた。早くもその日の 2020Q 時にサン・カルロスを出発したが、大隊へのヘリコプターの支援は、偵察分隊を前送する他は、物資輸送としては皆無だった。車両についてはランド・ローヴァー（Land Rover）がサン・カルロスへいっしょに揚陸されていたが、泥ねいのため使えなかった。ウィルソン旅団長は、会議の席上でスノーキャット（Sno-Cat: 雪上車の商標名）を大隊へ手配するよう最大限努力すると言ったが、なかなか現れなかった。やがてダーウィン方面からスノーキャットが現れたが、

1174 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 81.
1175 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 82; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 601.
1176 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 88; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 600-601.
1177 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 89.

燃料がないということだし、大隊の重い装備等（迫撃砲、ミラン対戦車ミサイル、ブローニング機関銃、弾薬、個人装備を入れた各人のバックパック）を運ぶにはあまりに小さかった。そこで島民が提供した農業用トラクターとトレーラーに大隊の貨物を積み込み、大隊は意気揚々と出発したが、トラクターはさっそく泥ねいに突っ込み迫撃砲と弾薬が泥の中に放り出された。大隊は迫撃砲などを掘り返しトラクターに積み直し再度出発したが、それを 2 回繰り返した。結局 2220Q 時に、大隊長リケット中佐は時速 1 キロメートルという行進速度から、行軍を続けても無意味だとして、サン・カルロスへ引き返した[1178]。

第 5 歩兵旅団の海上輸送に話を戻すと、6 月 3 日ムーア少将とクラップ准将は、人員を輸送する手段が海上によるものしかないと決心した。その日の 1710Q 時クラップ准将は空母戦闘群指揮官ウドワード少将へ電報を打った。その要点は、強襲揚陸艦「イントレピッド」と揚陸輸送船「サー・トリストラム（RFA *Sir Tristram*）」を使用して 2 コ近衛大隊を輸送する計画であり、艦対空ミサイルによる防御と CAP の誘導管制および艦砲射撃支援のため駆逐艦／フリゲート艦 2 隻の支援をウドワードへ要求していた。それに対しウドワードの 4 日 0651Q 時の返電は、好天時のアルゼンチン空軍による対艦攻撃を恐れ、悪天時を選び夜間の上陸実施が好ましいこと、さらに兵員移動は徒歩行軍によるかヘリコプターによる方が確実ではないかと計画を変更するよう示唆した[1179]。

4 日午前中からフォークランド諸島の海岸線について知識・経験の豊かなサウスビー＝テルユア海兵隊少佐が、クラップのれい下の第 5 歩兵旅団を海上輸送する計画を立案するスタッフに加わった。彼は、兵員を満載した 2 隻の輸送船を同時にフィッツロイへ送っても、揚陸に適する砂浜がないから無意味だ、と進言した。また LCVP（Landing Craft Vehicle and Personnel, 小型上陸用舟艇、満載排水量 13.5 トン、車両 1 台または人員 35 名搭載）とメクセフロート（Mexeflote, 鉄製上陸用エンジン付きいかだ、標準約 12 トンの物資等を輸送可能）による揚陸は時間がかかることを述べた。クラップは 1 個大隊をブラフ・コウヴへ上陸させて、残りの大隊をフィッツロイへ上陸させることに決心した[1180]。

4 日 2029Q 時クラップはウドワードへ、気象条件および軍事的状況を考えるとブラフ・コウヴまで近衛大隊、火砲および弾薬を海上輸送すべきである、と返電した。また強襲揚陸艦「イントレピッド」にはフリゲート艦「アロー（HMS *Arrow*）」を、揚陸輸送艦「サー・トリストラム」にはフリゲート艦「アヴェンジャー（HMS *Avenger*）」をそれぞれ護衛につけ、6 日の日の出前までにブラフ・コウヴに着くべきだ、と述べた。依然としてウドワードは、このようなやり方で艦船を危険にさらすことを躊躇して、「サー・トリストラム」は自身で防御すべきだ、と示唆した。それでも両者は、ブラフ・コウヴ上空でシー・ハリアーによる空中警戒待機（Combat Air Patrol: CAP）を行うことに合意し、必要ならばフリゲート艦「ヤーマス」を「サー・トリストラム」の護衛につけることができるようにした[1181]。

---

1178 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 91-92; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 601.
1179 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 601-602.
1180 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 93; Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, pp. 360-361.
1181 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 602.

6 月 5 日両近衛大隊は「サー・トリストラム」への乗船を始めた。最初にスコットランド近衛大隊が乗船し、次にウェールズ近衛大隊が乗船を始めた。しかしウェールズ近衛大隊は乗船を止められ、次にスコットランド近衛大隊とウェールズ近衛大隊の順番が入れ替えられた。命令とそれを打ち消す命令が次々出され、なぜひんぱんに変更されるのか不明なため皆怒り心頭に達した[1182]。

この変更の理由は、イギリス本土の任務部隊司令部にあった。任務部隊司令官フィールドハウス大将は、部隊の移動が日中にかかる計画であり、艦船は地上からの砲撃と機雷に脆弱なため心配していた。フィールドハウスはティール・インレットまたはサルヴァドル内水域（Salvador-Water）の南東端に上陸することを望んだ。ムーア少将は、水上輸送に伴う危険を認識していたが、スタンレーをただちに攻撃したいならば、許容すべき危険であると任務部隊指揮官へ返答した。ヘリコプターと徒歩行軍によって前進するならば、最低でも 5 日遅れることを意味した。そしてその遅れは、待機している第 3 コマンド旅団の備蓄弾薬の減少ならびに兵士の肉体的・精神的な消耗を招くものだった。またフィールドハウスの勧める上陸地点は第 5 歩兵旅団の兵士により負担を強いるものであったし、第 2 空挺大隊が孤立している状況を変えるものではなかった[1183]。

この時期フィールドハウスは、サッチャー首相が停戦ではなく断固として勝利を待ち望んでいることを確信していた。そして首相は一般大衆の支持に支えられていた。フィールドハウスは、海上輸送で大量の死者を出したら大衆の意見は変わり、首相の立場は危ういものになると考えていた。したがってこの場面でフィールドハウスは、多少時間がかかっても安全な方法をとるように指導したのであった[1184]。

ここでの議論は、第 5 歩兵旅団の輸送船がアルゼンチン軍の観測によって発見されるかどうかも関わっていた。ティール・インレットは、周辺の高所を第 3 コマンド旅団が占領しており、アルゼンチン軍から観測されることはなかった。一方フィッツロイは、アルゼンチン軍が占領するハリエット山およびウィリアム山から、入港している船のマストが見えるのであった[1185]。

最終的にフィールドハウスの懸念を解決する唯一の方法は、強襲揚陸艦に歩兵大隊を乗船させサン・カルロスを出発させるが、かなり離れた位置から大隊を LCU（Landing Craft Utility : 満載排水量 175 トンの汎用上陸用舟艇）に乗せ強襲揚陸艦から発進し、夜の明けないうちにフィッツロイとブラフ・コウヴへ上陸させるというものであった。ムーアは、これに基づくかなり複雑な動きを行う新しい計画を 6 月 5 日 1510Q 時に発信した。スコットランド近衛大隊は「イントレピッド」に乗船し、ライヴリィ島周辺海域へ来たら 4 隻の LCU に移乗し、ブラフ・コウヴへ上陸し、「イントレピッド」は夜明け前にサン・カルロスへ引き返す計画であった。次の夜にウェールズ近衛大隊の大部分が同様な作戦を行い、残った部隊はダーウィンから徴用商船「モンスネン（MV *Monsunen*）」に乗船しブラフ・コウヴへ移動する計画であった

[1182] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 602.
[1183] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 602-603; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 94.
[1184] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 603.
[1185] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 603-604.

[1186]。

計画された移動要領は、貧弱な通信手段と戦域を統括する指揮官がいないことを除いても、複雑に過ぎた。この時、五つの各級司令部が並行して存在していた。フィールドハウスは任務部隊指揮官としてノースウッド（Northwood：ロンドン北西約 15 キロメートルに所在）におり、ウドワードは、空母攻撃群指揮官として航空母艦「ハーミーズ」に座乗し、フォークランド地上軍指揮官ムーアと上陸艦艇群指揮官クラップはサン・カルロスにおり、第 5 歩兵旅団司令部はダーウィンにあり、第 2 空挺大隊はフィッツロイとブラフ・コウヴに所在した。同じ船（「フィアレス」）にいるムーアとクラップの間ですら意志疎通は十分行われておらず、例えばクラップは、第 5 歩兵旅団をスタンレー南方から用いるムーアの戦略を知らされていなかった[1187]。

4 隻の LCU の指揮官には、サウスビー＝テルユア海兵隊少佐が、彼の知識・経験から夜間に正確な位置に上陸できる唯一の人間として、指名された。しかし少佐がそれを知ったのは、「イントレピッド」へ乗船する 30 分前であった[1188]。6 月 5 日サン・カルロス出港の直前まで、サウスビー＝テルユア少佐は「フィアレス」の艦橋でクラップ准将およびその幕僚と打ち合わせを行った。その結果は、ミドル島（Middle Island）あるいは可能ならばエレファント島（Elephant Island）まで強襲揚陸艦で進出し、そこから LCU でブラフ・コウヴまで向かうというものだった。それならば LCU が 6 ノットで、約 4 時間で到達できる距離であった[1189]。

6 月 5 日から 6 日の夜間に第 5 歩兵旅団の第 1 回目の海上輸送が行われた。「イントレピッド」は、約 600 名のスコットランド近衛大隊を乗船させ 5 日 1630Q 時にサン・カルロスを出港した[1190]。「イントレピッド」に乗船したサウスビー＝テルユア少佐は、艦長ディングマンズ海軍大佐（Captain Peter Dingemans）及びその運用幕僚と合流し、その晩の計画について話し合った。そこでサウスビー＝テルユア少佐は、ディングマンズ艦長から、強襲揚陸艦を 1 隻でも失うと政治的影響が大きいので、ライヴリィ島より東へはいけないと通告された。ライヴリィ島で降ろされたなら、LCU がブラフ・コウヴへ到着するのに倍の 8 時間はかかる。サウスビー＝テルユア少佐は、何とかエレファント島まで行くようにディングマンズ艦長を説得しようと努めたが無駄だった[1191]。

翌 6 日 0030Q 時「イントレピッド」から 4 隻の LCU が発進した。ブラフ・コウヴへ向かう途中で、この小艦隊は、イギリス海軍駆逐艦「カーディフ（HMS *Cardiff*）」とフリゲート艦「ヤーマス（HMS *Yarmouth*）」に遭遇した。どちらも「この海域で味方艦が他に運行していることはない」という誤った情報を伝えられていたため交戦寸前までに至ったが、かろうじて識別して交戦を回避することができた。4 隻の LCU は 0800Q 時頃ブラフ・コウヴへ到着した。第 5 歩兵旅団長ウィルソン准将は旅団司令部員を伴

[1186] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 604.
[1187] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 604.
[1188] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 605.
[1189] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 100-101.
[1190] Brown, *The Royal Navy and the Falklands War*, p. 285.
[1191] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 103.

い、6 日早朝にヘリコプターでフィッツロイへ進出し、羊の毛刈り小屋に旅団司令部を開設した[1192]。

兵員は LCU に乗船している間、悪天候のため波浪を受け、天井のない LCU では隠れるところもなく、ずぶぬれであった。ブラフ・コウヴへ上陸しても、天候は悪く強い雨と吹きすさぶ風、温度の低下で、それによる体調不良者はかなりの数にのぼった[1193]。このずぶぬれのスコットランド近衛大隊を温かい施設へ収容するため、それまでそこにいた第 2 空挺大隊は第 5 歩兵旅団予備となってフィッツロイへ戻り、そこに設けられるはずの旅団管理区域（Brigade Administrative Area）を守備することになった[1194]。

第 2 空挺大隊もけっして状態が良かったわけではなく、5 月 21 日以来ずっと屋外におり、まともなところで寝泊まりしたことはなく、多数の塹壕足（trench foot）患者をかかえていた。第 2 空挺大隊は、フィッツロイへ移動するため、ブラフ・コウヴに到着した LCU のうち 3 隻を使ってフィッツロイ近傍のポート・プレズントへ向かうこととした。しかしこれはサウスビー＝テルユア少佐が、LCU の各艇長にブラフ・コウヴで待機するよう命じたことに反していたし、上級司令部はこの LCU の行動を掌握していなかった[1195]。

3 隻の LCU は直接ポート・プレズントへ向かおうとしたが、猛烈な悪天のためブラフ・コウヴへ戻ってきた。次に遠回りをしてようやくポート・プレズントへ到着したが、今度は悪天のためポート・プレズントで留まることとなった。この 3 隻の LCU が一時的に行方不明になったことは、第 5 歩兵旅団の移動に大きな影響を与えた[1196]。

6 月 6 日、サン・カルロスに残っていた第 5 歩兵旅団のフィッツロイへの第 2 弾の移動が行われた。今回の計画は、揚陸輸送艦「サー・トリストラム」が、弾薬等およびその他の補給物資を、強襲揚陸艦「フィアレス」が、ウェールズ近衛大隊を中心とする部隊を搭載し、6 日夜サン・カルロスを出発し、エレファント島の南まで航行する。そこでサウスビー＝テルユア少佐が指揮する「イントレピッド」の 4 隻の LCU と会合し、そのうち 2 隻には、「フィアレス」搭載の兵員を移乗し、「フィアレス」搭載の 2 隻の LCU と共にフィッツロイへ輸送する。「イントレピッド」の残り 2 隻の LCU は、「フィアレス」に搭載し、サン・カルロスへ輸送してそこで荷役作業を行う、というものであった[1197]。

6 日 1930Q 時「フィアレス」が護衛のフリゲート艦「ペネラピ（HMS *Penelope*）」と「アヴェンジャー」を伴い、サン・カルロスを出発した。揚陸輸送艦「サー・トリストラム」は、その 2 時間後サン・カルロスを出港した。サウスビー＝テルユア少佐からは「ブラフ・コウヴの天候は悪く、作戦は多分キャンセルされるだろう」と無線で「フィアレス」へ連絡があった。ところが困惑させることに海面の状況は穏

---

1192 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 605-606; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 103-110.

1193 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 606; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 109. スコットランド近衛大隊の低温等悪天候による体調不良者は、Freedman によれば多数(many severe cases)、Bijl と Aldea によれば 3 例だけ(only three cases)としている。

1194 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 606.

1195 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 606.

1196 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 606.

1197 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 112. 本来「フィアレス」は 4 隻の LCU を搭載しているが、そのうち内 2 隻はティール・インレットで荷役作業を行っていた。

やかであった[1198]。

7 日 0200Q 時頃に「フィアレス」は予定会合点であるエレファント島南方に到着したが、サウスビー＝テルユア少佐が率いるはずの 4 隻の LCU とは会合できなかった。「フィアレス」は、サン・カルロスへ帰り着くのが夜明けになるぎりぎりの時刻まで、そこで待ったが、LCU は現れなかった。そこで「フィアレス」搭載の 2 隻の LCU にウェールズ近衛大隊の半分と空挺大隊の工兵小隊等を搭載し、それらの LCU は、フィッツロイではなく、ブラフ・コウヴへ向かうことに計画が変更された[1199]。

2 隻の LCU は、7 日 0414Q 時に「フィアレス」から海面に乗り出し、0800Q 時にはブラフ・コウヴへ到着した。空挺大隊の工兵はさらにフィッツロイ橋まで LCU で輸送され、悪天の中その橋の修復にあたった。一方「フィアレス」は、残り半分のウェールズ近衛大隊およびその他の部隊を搭載したままサン・カルロスへ戻った[1200]。このウェールズ近衛大隊の残りおよびその他の部隊は、第 5 歩兵旅団がスタンレーを攻撃するにはぜひとも必要であり、三度目の海上輸送を行うことになった。ちょうどサン・カルロスには揚陸輸送艦「サー・ギャラハド（RFA *Sir Galahad*）」が空荷でおり、この船を使用することになった[1201]。またサン・カルロスにおける荷役作業は、小型の上陸用舟艇が欠如していたため、破たんに近づいていた。これは陸上作戦の補給の破たんを意味することであり、またサン・カルロス湾内が荷役を待つ船で混雑することは、晴天時にアルゼンチン航空部隊へ絶好の目標を提供することになった。「フィアレス」付属の上陸用舟艇 4 隻の内 2 隻は、ティール・インレットにおり、残りの 2 隻と「イントレピッド」付属の 4 隻の計 6 隻はフィッツロイに所在した。水陸両用群指揮官クラップ准将は、「フィアレス」艦長ラーケン大佐(Captain Jeremy Larken)にはティール・インレットから LCU 2 隻を、「イントレピッド」艦長ディングマンズ大佐にはフィッツロイから 4 隻を集めて、サン・カルロスへ連れ戻るよう命じた[1202]。

「サー・ギャラハド」は 7 日 1750Q 時には、「イントレピッド」と共にサン・カルロスを出港する予定だったが、移乗に長い時間がかかり、その時刻には間に合わなかった。「イントレピッド」は、予定時刻通り出発した。「サー・ギャラハド」へ搭乗した残りのウェールズ近衛大隊に対して、この船がフィッツロイへ向かうという説明は何もなかった。ウェールズ近衛大隊の隊員は、前夜「フィアレス」乗船時に示され、また先行した大隊半分がいるブラフ・コウヴへ向かうものと思っていた[1203]。

7 日 2200Q 時になって「サー・ギャラハド」は兵員と物資の搭載を完了し、サン・カルロスを出港した。翌朝の 0650Q 時頃「サー・ギャラハド」はフィッツロイ（ポート・プレズント）へ到着した。しかしフィッツロイの陸上にいるイギリス軍部隊には、「サー・ギャラハド」がここへ来ること及びその理由が伝達されていなかった。第 5 歩兵旅団司令部は、何が起きているのか、明らかに気づいていなかった。その理由の一つは、フォークランド諸島地上軍司令部と第 5 歩兵旅団司令部の間にウィッカム高地が横たわり、互

[1198] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 113.
[1199] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 113.
[1200] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 114.
[1201] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 117.
[1202] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 118.
[1203] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 119.

いの通信が困難であったからだ[1204]。

フィッツロイでは6月8日の時点でも「サー・トリストラム」が貨物を降ろしているところであった。そこへ第2隻目の「サー・ギャラハド」の出現に対して、その船の貨物を降ろす手立てを全く欠いていた。フィッツロイに所在したサウスビー＝テルユア少佐は、LCUで「サー・ギャラハド」に行き、この船に搭乗している部隊が7日午前中にサン・カルロスへ戻った残り半分のウェールズ近衛大隊およびその他の部隊であることを確認した[1205]。

「サー・ギャラハド」に搭乗しているウェールズ近衛大隊の先任者セイル陸軍少佐（Major Guy Sayle）は、大隊指揮官に命じられたとおり、先行してブラフ・コウヴにいる大隊と合流するため、このままこの船に搭乗してブラフ・コウヴへ行くつもりであった。サウスビー＝テルユア少佐は、セイル少佐に対し、この船はブラフ・コウヴへは行かないし、歩いていくよりないことを告げ、またこの晴天では空襲が予測されるので、一刻も早く下船することを勧めた。しかしセイル少佐は、この船でブラフ・コウヴへ行くことを主張し譲らなかった[1206]。

サウスビー＝テルユア少佐は、フィッツロイで下船してブラフ・コウヴへ歩いても、フィッツロイ橋を通れば、約7マイル（約11キロメートル）で到着し、それほど遠い距離ではないと、重ねて説明した。フィッツロイ橋は、アルゼンチン軍により6月2日に一部が破壊されていた。セイル少佐は、フィッツロイ橋の修理が現に同じ船に搭乗している工兵の任務のはずなので、その橋を渡ることができるか疑念を抱いていた。橋が使えなければ、さらに約20マイル（約32キロメートル）遠回りせねばならず、受け入れられるものではなかった。実際にフィッツロイ橋は、サウスビー＝テルユア少佐の言う通り7日に上陸したイギリス工兵により、修理が完了していた[1207]。

またサウスビー＝テルユア少佐の乗り付けたLCUには、「サー・トリストラム」から降ろした弾薬が搭載してあった。ウェールズ近衛大隊の将校は、弾薬と兵員を同時にLCUに搭載することは規則に違反しており危険であるから、兵員を搭載するわけにはいかないとも言った。サウスビー＝テルユア少佐は、今は戦争をやっており、平時の規則にこだわる時ではない、それよりもこの船に乗り続けている方がよほど危険であると主張したが、聞き入れられなかった。結局サウスビー＝テルユア少佐は、セイル少佐を説得することができなかった。つまるところウェールズ近衛大隊は6月1日からフォークランドへやってきて、ちょうどアルゼンチン航空部隊の活動が損耗と悪天でほとんど行われなかった時期であり、サン・カルロスで艦船に爆弾が次々命中する様子を体験していなかった。そのため彼らは、艦船に対する航空機の脅威

---

1204 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 121, 127; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 402.

1205 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 127-128.

1206 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 128; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 400. セイル少佐の戦後の言い分では、「サー・ギャラハド」によるブラフ・コウヴ行きを主張したのではなく、中佐以上の階級の者から部隊を下船させる命令を出してくれと主張した、と言っている。現実的な問題として、ウェールズ近衛大隊は、フィッツロイに存在せず、第5歩兵旅団司令部も司令官および幕僚は、会議等のためフィッツロイを出払っており、中佐以上の者はいなかった。（Ramsey, p. 400）。

1207 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 128; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 399.

を感じることができなかったのだろう[1208]。

イギリス軍は、6月2日サン・カルロスに2フィート×10フィートのアルミニウム板をしきつめた長さ850フィート（約260メートル）の滑走路を完成させ、運用を開始した。これによりシー・ハリアーのフォークランド諸島上空でのCAP時間が大幅に延長されることになった。しかし6月8日1100Q時にハリアーが、エンジン故障により、この滑走路へクラッシュ・ランディングを行い、アルミニウム板の多くを吹き飛ばした。このためこの日は、これ以降この臨時滑走路使用が不可能となり、CAP時間の利点が失われた[1209]。

さらにこの日は、「ハーミーズ」がボイラー整備のため、フォークランド諸島から通常よりさらに東へ離れたところに位置しており、これもフォークランド上空でのシー・ハリアーCAP時間に影響を及ぼした[1210]。またイギリス軍は、8日にはフィッツロイ周辺にレピア地対空ミサイルの発射基4基を設置していたが、大部分がまだ運用不能であった[1211]。

一方アルゼンチン側は、6月6日にはイギリス艦船によるフィッツロイ／ブラフ・コウヴ周辺への陸上兵力増強に気づいていた。8日1115Q時にはアルゼンチンの観測所がイギリス揚陸輸送船のフィッツロイ入港を報告し、マルビナス諸島総軍司令部は、CEOPECOMへこの艦船を攻撃するよう至急電報を送った[1212]。1250Q時にアルゼンチン空軍A-4B 5機がポート・プレズントへ攻撃をかけ、「サー・ギャラハド」と「サー・トリストラム」へ爆弾を命中させた。「サー・ギャラハド」は、大炎上し沈没はしなかったが使用不能となり、死者48人、負傷者57人を出した。これはこの戦争におけるイギリス側最大の損失を出した戦闘となった。「サー・トリストラム」は、炎上したが、消し止めて被害拡大を抑え、死者2人にとどめた[1213]。

アルゼンチン空軍は、この戦争における最後の大戦果を挙げたが、結果としてイギリス軍のスタンレー進攻を約2日遅らせただけだった[1214]。

## 第9節　スタンレーの戦い

### 第1項　アルゼンチン軍の準備

グース・グリーンの陥落（5月29日）後、アルゼンチンの情報組織と統合軍総司令官会議は、イギリス軍の最終的攻撃が間近に迫っていることを感じ取った。統合軍司令官会議は航空攻撃の強化とスタンレーへの航空輸送の維持を進言した。スタンレーのアルゼンチン陣地を防御しようとするなら、本土あるいは

---

1208 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 129; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 401.
1209 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 129; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 379;
1210 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 130.
1211 Hobson, *Falklands Air War*, p. 124.
1212 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, pp. 387-388; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 611.
1213 Hobson, *Falklands Air War*, p. 124; Burden et al., *Falklands the Air War*, p. 124; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 410.
1214 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 216.

西フォークランドからさらなる補給が必要となるからだった[1215]。アルゼンチン軍の統合作戦センター（CEOPECON）は、マルビナス（フォークランド）諸島にある物資の量をすべて検討させた。その結果6月15日までは、アルゼンチン軍の所要を十分に満たす食料と燃料があることが判明した[1216]。

6月3日のアルゼンチン情報組織の見積もりでは、イギリスの能力を過大評価し、イギリスが最終攻撃を行わないのは、政治的理由および火力を充実する目的で増強の必要があるため、としていた。アルゼンチン統合軍総司令官会議は、航空機と潜水艦をもって、イギリスの補給線を遮断することを提議した。6月4日アルゼンチン陸軍は、より多くのイギリスの砲撃と対地航空攻撃があったことを報告した。またアルゼンチンは、アルゼンチン空軍のケント山（Mount Kent）とチャレンジャー山（Mount Challenger）への対地攻撃により、イギリス軍の作戦進捗が鈍化したものと錯覚した。事実は、イギリス軍が第一の優先順位を補給におき、作戦行動を後回しにしたからだった[1217]。

アルゼンチン軍の偵察によれば、ケント山の西側にイギリス軍の多数の野営が見られ、エスタンシア・ハウスに多数の後方支援施設が作られていることを報告していた。アルゼンチン軍指揮官は、スタンレーの防御陣地から出て何らかの作戦を行うべきか、いまだに考えていた。CEOPECONは進撃するイギリス軍の後方に対する作戦実行の可能性検討を命じた[1218]。

また6月8日アルゼンチン空軍がフィッツロイでイギリス揚陸輸送艦2隻に爆弾を命中させた際には、アルゼンチンでは戦果が過剰に報告され、イギリス軍は500人から900人の死者を出したと報じられた。これはたちまちアルゼンチン本国を高揚させ、さっそくマルビナス諸島総軍司令官メネンデス少将へ、フィッツロイを攻撃するよう要求がなされた。メネンデス少将は、それについて参謀に現状を分析させ、部隊には機動力がなく特に重砲を機動させることが不可能であること、イギリス軍が航空優勢と海上優勢を握っていること、こちらが攻撃をかける前にイギリス軍がケント山＝チャレンジャー山を結ぶ線から攻撃をかけるだろうこと、これらの理由から不可能であると結論づけた[1219]。

メネンデス司令官は、6月9日夜マルビナス諸島総軍参謀長ダエル少将をアルゼンチン本土へ派遣した。ダエル少将は翌10日夜遅く首都ブエノスアイレスへ到着した。その目的は大統領以下軍の首脳部に「マルビナス諸島」の現状を報告するとともに、さらに本国から支援を引き出そうというものだった[1220]。ダエルは、兵員について長期にわたる駐屯と、補給の若干の問題にもかかわらず、健康面に問題はなく、士気も旺盛であると報告した。問題点としては、戦略および戦術両面の情報不足を指摘した。補給について、弾薬・食料が6月23日まで十分あること、要望として夜間暗視ゴーグルおよび155ミリメートル砲弾の供給を挙げた[1221]。

---

1215 Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War: The Falklands Conflict of 1982* (London and Boston; Faber and Faber, 1991, first published 1990), p. 378.
1216 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 378.
1217 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 380.
1218 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 380.
1219 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 389.
1220 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 390; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 218.
1221 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 390. ガリチェリは後年、要求されたものは千足の軍靴と千

ダエル少将は、メネンデス司令官の了承を得たアルゼンチンの持てる軍事力すべてを投入しての作戦を提案した。それはイギリスの企図を粉砕し、いくばくかの時間を稼ぎ、究極的には勝利か十分納得のゆく交渉へ持ち込みたいという意図があった。郵便ポスト作戦（Operación Buzón）と名付けられたこの計画の目標の一つは、サン・カルロスであり、西フォークランド島ポート・ハワードに所在する第5旅団を船で輸送し、追加兵力としてアルゼンチン本土から空挺部隊を降下させる。第2の目標はダーウィン入植地に所在するイギリス軍で、これも西フォークランド島フォックス・ベイに所在する第8旅団を船舶で機動し攻撃する。第3はスタンレーを包囲しているイギリス軍で、これはスタンレーから攻撃をかける上に、空挺部隊をイギリス軍の後方に降下させるというものだった[1222]。

この作戦を行うためアルゼンチン海軍は、西フォークランド島と東フォークランド島を分けるフォークランド海峡の海上優勢を確保する必要があった。さらにサン・カルロスとダーウィンに対する艦艇からの砲撃と第5、第8旅団の海上輸送もダエル少将から要請された。またアルゼンチン空軍は、フォークランド諸島上空の局地的航空優勢を確保しなければならなかった[1223]。

ダエル少将の計画は、戦いの実情を知る者から夢想的であると見られた。イギリス原子力潜水艦の前にアルゼンチン艦隊は無力であり、フォークランド諸島へ到達することもできなかっただろう。たとえ到達できたとしてもイギリス水上艦艇は航空優勢を持つ上に数量、技術、情報の面で優っており勝敗は明らかであった。アルゼンチン空軍も状況は変わらず、対艦攻撃では成果を挙げたが、航空優勢獲得では全く振るわなかった。空挺部隊に対する地上近接支援も何ら準備がなかった[1224]。

フンタは、艦隊と残っている空軍を危険にさらすわけにはいかなかったので、ダエルの計画は否認された。ダエル少将はガリチェリ大統領から、すでに「マルビナス」にはイギリス軍を撃退できるだけの十分な兵力があるはずだと言われた。そしてメネンデス司令官へ、たとえ全員が死んでも最後まで戦い抜き、降伏してはならない、と伝えるようにも言われた。ダエル少将は6月13日夜「マルビナス」へ向けて飛行機で帰ったが、スタンレー飛行場がイギリス軍の砲撃を受けており、結局アルゼンチン本土へ戻った。ダエルはガリチェリ大統領の言葉をメネンデス司令官へ伝えることができなかった[1225]。

イギリスの地上軍は、6月11日金曜日には、スタンレー西部のアルゼンチン軍防衛線を攻撃開始する準備ができていた。スタンレーに所在するアルゼンチン軍はおよそ8,500～9,000名であり、そのうちおよそ5,000名が戦闘員（歩兵、砲兵、装甲車搭乗員および少数の指揮官）とみなされた。アルゼンチンは45門の野砲（155ミリメートル砲×3門、105ミリメートル砲×42門）を持ち、約1万発の砲弾を備蓄していた。イギリス軍は野砲（105mm 軽砲）の 30 門投入で、数的には劣っていたが、イギリス海軍艦艇から

---

着の下着であった、と回想している（Freedman and Gamba-　Stonehouse, *Signals of War*, p. 390.）。
1222 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, pp. 390-391; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 218-219.
1223 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 391; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 219.
1224 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 392; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 219.
1225 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 392; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 219.

114 ミリメートル砲の火力支援を受けることができる有利な点もあった[1226]。

スタンレーの戦いにおいて、アルゼンチンとイギリスの地上戦力を比べた場合、ほぼ同等の戦力であった。アルゼンチンは守備側であり、数週間前から陣地を準備できるという利点があった。しかしアルゼンチンは航空優勢については「ほぼ」、海上優勢については「完全に」失った状態であった[1227]。

ここで改めてアルゼンチンのスタンレー防衛体制を振り返ると、ここの担当はプエルト・アルヘンティノ集団で司令官はオスカー・ホフレ陸軍少将であった。しかし最終的決定権はマルビナス諸島総軍司令官メネンデス陸軍少将が握っていた。この集団の主な部隊は歩兵部隊で、第 3, 4, 6, 7, 25 歩兵連隊並びに海兵隊第 5 大隊が配置されていた。その他に野戦砲兵、高射砲兵、ヘリコプター部隊が配置されていた。スタンレー外周にはハリネズミのように歩兵部隊が配置されていた[1228]。

しかしその防御方向はイギリスがスタンレーに直接上陸作戦を行うと考えていたので、海の方向を向いていた。ところがイギリスは 5 月 21 日サン・カルロスに上陸して揚陸を継続し、5 月 26 日にはアルゼンチンにも、イギリスがサン・カルロスから陸路スタンレーへ向かう公算が高いことを認識した。つまりスタンレーから見ると西側から攻撃されることになる[1229]。

アルゼンチン軍は、スタンレー西側のチャレンジャー山とウォール山（Wall Mountain)に第 4 歩兵連隊を配置していたが、その防御方向は南方向すなわち海側を向いていた。そこで 28 日第 4 歩兵連隊を東隣にあるツー・シスターズ山（Two Sisters）とハリエット山（Mount Harriet）に移動するよう命じ、防御方向を西方、北方および南方に向かせた。第 4 歩兵旅団は各種装備を船で輸送するはずが、イギリスの海上封鎖でそれらが届かなかった部隊である。例えば有刺鉄線ならびに材木を保有しておらず、陣地構築のため上級部隊へ要求したが、補給されることはなかった。また個人装備の携行スコップも、部隊の中で数個しかなく陣地構築に苦労した[1230]。

その他に 6 月 11 日夜から 12 日早朝ならびに 13 日夜から 14 日早朝の戦場となった場所には、次のように最初から兵力が配置されていた。ロングドン山とワイアレスリッジ（Wireless Ridge）には第 7 歩兵連隊が、タンブルダウン山（Tumbledown Mountain）とウィリアム山（Mount William）には海兵隊第 5 大隊が、守備についていた。しかしこれらの部隊の主な防御方向も海側へ向いていた。

またプエルト・アルヘンティノ集団には、スタンレー南方の守備に第 3、第 6 歩兵連隊が、スタンレー空港の守備に第 25 歩兵連隊が、スタンレーのすぐ北にあるマレル半島（Murrell Peninsula）に第 4 歩兵連隊の A 中隊が配置されていた。しかしこれらの部隊は 6 月 11・12 日、13・14 日スタンレー西側へのイギリス軍の攻撃に機動して対処することはなかった[1231]。なぜならアルゼンチン軍はアメリカ軍を手本として上陸作戦を考えており、そのアメリカ軍の教義が、目的に近いところに上陸するというものだった。つ

[1226] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 216.
[1227] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 216-217.
[1228] Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War,* pp. xxvi-xxvii, 145; Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas',* pp. 58-59, 223-224.
[1229] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 224, 226-227.
[1230] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 224-225.
[1231] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 226-227.

まりアルゼンチン軍は、イギリス軍が重心であるスタンレーの近くへもう一度上陸作戦を行うだろうと考えていた。そのためスタンレーの海岸線付近から兵力を引き抜けなかったのである[1232]。

### 第2項　6月11・12日の戦闘

#### a　イギリス軍のスタンレー西側外郭防衛線攻撃計画

6月7日第3コマンド旅団司令部は、ケント山の斜面に移動した。旅団長トンプソン准将は6日2105Q時にフォークランド諸島地上軍司令官へ、旅団は必要な偵察を完了し、スタンレー西側の外郭防衛線である、ロングドン山、ツー・シスターズ山およびハリエット山に対する 8・9 日の夜の攻撃準備が完了していることを報告した。地上軍司令官ムーア少将は、6月8日0800Q時頃その攻撃を10・11日の夜へ延期し、さらにその24時間後11・12日の夜へ延期した[1233]。

第3コマンド旅団の攻撃開始を遅らせた理由は、部分的には第5歩兵旅団の直面した問題によるものだが、大きく影響したものは、補給に対する考慮によるものだった。ムーア少将は、二人の砲兵連隊長と必要な弾薬補給量について話し合った。砲兵連隊長は、現在砲一門当たり300発弾薬を蓄積しているが、攻撃開始までには一門あたり1,000発を蓄積したいという希望であった。その量の弾薬を砲側までヘリコプターで運ぶなら4日間という見積もりであった。それにこれまでの経験から天候不良の要素を加えると、まるまる一週間必要ということになる。そして弾薬集積の間にも準備砲撃を行うので、その分を加えると 9 日間ということになる。最終の攻撃に一刻も早く取りかかりたいという熱意と、必要な弾薬の保証という両者の調整には、細かな判断を必要とした。ムーア少将は、一門あたり500発で間に合わせるよう砲兵連隊長に命じた。このさらなる弾薬の前送のため作戦開始が遅れたのであった[1234]。

またこの遅れには、フォークランド諸島地上軍内での戦略に若干の不一致が生じていたことも影響した。第5歩兵旅団長ウィルソン准将は、外郭防衛線（スタンレー西側のロングドン山、ツー・シスターズ山、ハリエット山を結ぶアルゼンチンの防衛線）のうちハリエット山のフィッツロイとスタンレーを結ぶ道路の狭い部分を突破することを主張した。ウィルソンの考えは、防衛線を一旦突破できたら、すべての大隊をそこから次々注入し、一挙に内郭防衛線（ワイアレスリッジ、タンブルダウン山、ウィリアム山を結ぶ防衛線）に圧力をかけるというものであった[1235]。

第3コマンド旅団長トンプソン准将は、ウィルソン准将の考えに対し、狭い範囲での防衛線の突破は、アルゼンチン軍にイギリス軍の攻撃経路を明らかに示すものであり反対であった。また狭い範囲での突破は、ロングドン山にあるアルゼンチン軍陣地をそのままにするということであった。イギリス軍の行動は

---

[1232] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 224; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 556.
[1233] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 619.
[1234] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 619.
[1235] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 619.

そこから観測され、火砲を指向されるに違いなかった[1236]。

地上軍司令官ムーア少将は、配下の二人の旅団長が合意した戦略が必要であったが、また広い正面での攻撃必要であるとも考えていた。なぜなら狭い敵正面を突破して敵陣へ進攻する軍隊は、周囲の高所に位置する敵砲兵に対し脆弱であり、すべての高所は奪取する必要があるからだ[1237]。

この問題について6月8日フォークランド諸島地上軍副司令官ジョン・ウォーターズ陸軍准将（Deputy Commander, Brigadier John Waters）とトンプソン准将およびウィルソン准将が、「フィアレス」艦上で会談していた。そこへ「サー・ギャラハド」がフィッツロイで大破したという連絡が入り、情勢が一変した。この被害により第5歩兵旅団の立場は弱くなり、ムーア少将は第3コマンド旅団により依存するようになった。フォークランド諸島地上軍の再編が行われ、第5歩兵旅団隷下の第2空挺大隊とウェールズ近衛大隊（フィッツロイで被害を受けた2個中隊は外され、代わりに海兵隊第40コマンド大隊の2個中隊が増強された。）が第3コマンド旅団の指揮下へ移った[1238]。

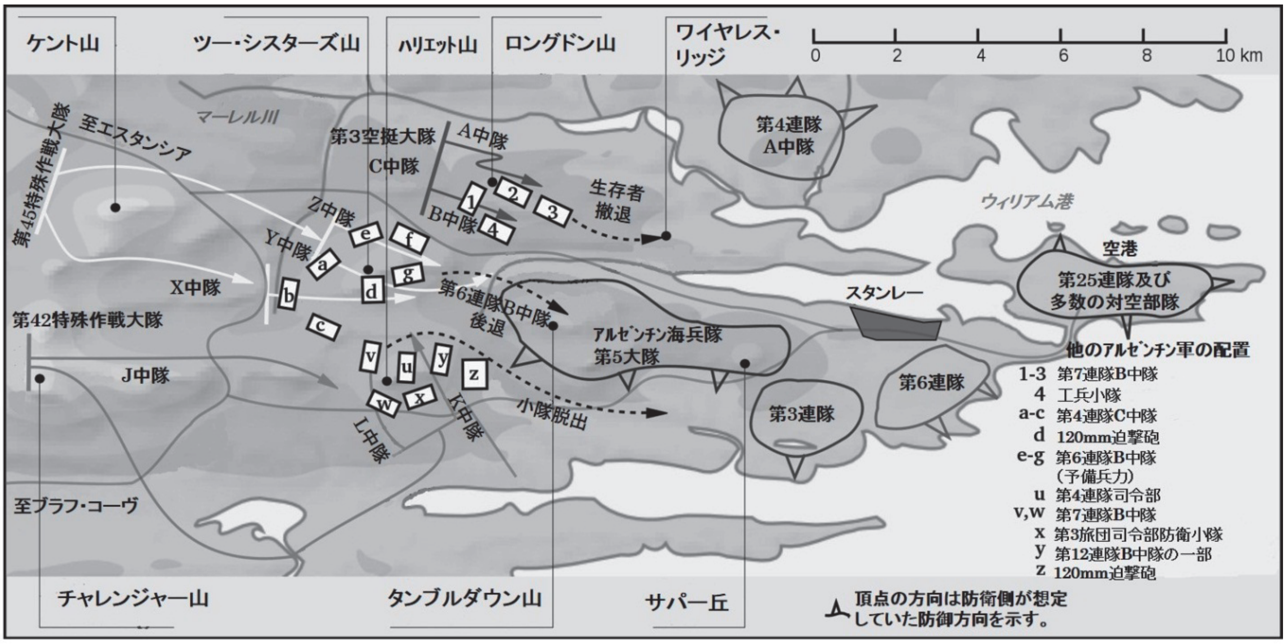
ウィルソン陸軍准将は、ムーア海兵隊少将が自身と同じ海兵隊員を好み、ウィルソンの旅団から部隊を引き抜いて海兵隊の旅団へ入れ、功績を海兵隊のものにしようとしたのではないかと疑った。事実は、ムーア少将もまたウィルソン准将の指揮官としての能力に疑いを持ったのだった。ムーアはトンプソンが3コ大隊の戦闘を同時に指揮できると確信していた。しかしウィルソンに関しては同時に2コ以上の大隊の戦闘を指揮してほしくなかった[1239]。

ムーアが6月9日に発した作戦命令は、フェーズ1では増強された第3コマンド旅団がハリエット山とツー・シスターズ山へ夜間攻撃をかけ、フェーズ2では第5歩兵旅団がタンブルダウン山とウィリアム山を攻撃し、フェーズ3ではサパー丘を確保するというものだった。これらの攻撃は、夜間は海軍の艦砲支援、中間は航空近接支援をうける。ロングドン山の攻撃についてムーアは、トンプソンの自由裁量に任せた[1240]。

6月11日のスタンレー西側外郭防衛線の攻撃は、まず海軍艦艇による艦砲支援射撃から始まった。フリゲート艦「アロー」、「ヤーマス」および「アヴェンジャー」ならびに駆逐艦「グラモーガン」がその任にあたり、1959Q時から砲撃が始まった。艦砲弾薬の補給が乏しくなっていたこと、および砲身寿命に近づいた砲もあったことから、一艦あたりの砲弾量は約300発を上限とした。艦砲射撃は、ハリエット山、ロングドン山、ワイアレスリッジ、スタンレー西部などを目標として、翌12日0240Q時まで続けられ、四艦合計で788発を発射した。これはこの戦争における最大の艦砲射撃となり、地上作戦進捗に大いに貢献した。しかし流れ弾がスタンレー市街に命中し住民3名が死亡、負傷者も出たという、イギリス軍にとって起きてほしくない事態も起こった[1241]。

---

[1236] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 619.
[1237] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 619.
[1238] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 620.
[1239] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 620.
[1240] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 620.
[1241] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 623; Brown, *The Royal Navy and the Falklands*




図第 23　6月 11-12日にかけての地上戦闘

この図はEric Gaba作成のWikimedia Commons（http://en.wikipedia.org/wiki/File:Battleoftumbledown.svg）の図を筆者が和訳したものである。

トンプソン准将の計画は、最初に第 3 空挺大隊がロングドン山を攻略し、次に第 42 コマンド大隊が南方からハリエット山を攻撃し、同時に第 45 コマンド大隊が南西方向からツー・シスターズ山を攻撃するというものであった。これらの陣地を成功裏に奪取し好機があるなら、トンプソンは、さらに前進する準備を行うように各大隊に指示した。この場合、第 3 空挺大隊はワイアレスリッジを、第 45 コマンド大隊は第 42 コマンド大隊の支援を受けてタンブルダウン山を狙う計画だった。トンプソンは攻撃開始時刻を第 3 空挺大隊には 11 日 2001Q 時を、第 42 コマンド大隊には 11 日 2030Q 時を、第 45 コマンド大隊には 11 日 2100Q 時をそれぞれ指定した[1242]。

b　ロングドン山の戦闘

ロングドン山は、標高が約 600 フィート（約 180 メートル）、南北両側が斜面なっている丘で、稜線はほぼ東西方向に約 1 マイル（約 1.6 キロメートル）の長さがあり、周囲からは約 300 フィート（約 90 メートル）ほどの標高差がある。この稜線には東西に二つの小さなピークがあり、東側が高い。この山の守備担当は第 7 歩兵連隊であるが、この連隊はこの丘だけでなくワイアレスリッジ周辺も守備範囲であった。そのためこの連隊がロングドン山に割り当てた兵力は、B 中隊（3 コ歩兵小隊編制）、歩兵の任務で工兵 1 個小隊および 12.7 ミリメートル重機関銃を 5〜7 丁装備した海兵隊 1 個分隊からなっていた。この山のアルゼンチン指揮官はカルロス・カリソ＝サルバドレス陸軍少佐（Mayor Carlos Carrizo- Salvadores）であった。部隊配置は西側のピークに第 1 小隊（小隊長フアン・バルディーニ准尉：Subteniente Juan Baldini）、

*War*, pp. 317-318.
[1242] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 624.

稜線鞍部の北側に第 2 小隊（小隊長ラウル・ゴンサレス 3 等軍曹：Sargento Raúl González ）、稜線鞍部の南側に第 3 小隊（小隊長エンリケ・ネイロッチ少尉：Teniente Enrique Neirotti）、予備兵力として工兵小隊（小隊長ウーゴ・キロガ少尉：Teniente Hugo Quiroga）は東側ピーク付近に配置されていた[1243]。

アルゼンチン軍は対人警戒用にラジット・レーダー（RASIT radar）を保有しており、ロングドン山へも配備していた。6 月 10 日にイギリスの偵察班がロングドン山に接近したときも、アルゼンチン軍はそれを探知して撃退した。ところが 11 日になってサルバドレス少佐は部下にラジット・レーダーの停止を命じた。イギリス軍に逆探知されて、砲撃を受けるのを嫌ったものと思われる。もしアルゼンチン軍がこのレーダーを使用していたなら、イギリス軍の損害はさらに大きなものとなったと言われている[1244]。

第 3 空挺大隊の直面した問題は、待機位置と目標であるロングドン山の距離が約 5 マイル（約 8 キロメートル）ほど離れて地雷がばらまかれており、長距離昼間偵察でも夜間偵察でもアルゼンチン軍の防御状況がよくわからなかったことであった。6 月 11 日の最新の情報では、アルゼンチンの第 7 歩兵連隊が 3 コ中隊約 800 名で守備しており、良く作られた塹壕の中にこもり、ムーディー・ブルックの 105 ミリメートル砲とサパー丘の 155 ミリメートル砲の支援を受けているというものだった。実際にロングドン山を守備していたのは 220 名ほどであり、その陣地も位置が悪く、作りも粗末で、鉄条網も土のうもなかった。地雷敷設は適切でなく警戒監視も不十分だった。しかしいかに準備が不十分だったとはいえ、ロングドン山は天然の要塞であり、アルゼンチン兵を追い出すのは骨が折れた[1245]。

第 3 空挺大隊長ヒュー・パイク陸軍中佐は、単純にアルゼンチン軍に接触するまで静粛に行動し、接触後はアルゼンチン軍の兵力と抵抗力を見ながら奪取していく、と考えていた。準備砲撃を行えば、イギリス軍の攻撃企図を暴露してしまうことを恐れたのだ[1246]。しかし前述のとおり、事前の偵察が困難で敵情もよくわからない状態では、この方針で成功することは困難だろう。ただし第 3 コマンド旅団は、この日同時に 3 か所の攻撃を行ったが、そのすべてに準備砲撃を行うだけの弾薬を保有していなかった。パイク中佐の方針はそれ以外にとる手立てなかったためともいえるだろう[1247]。

ロングドン山の稜線は、幅が狭く、同時に一個中隊しか戦闘できなかった。第 3 空挺大隊のロングドン山攻撃計画は、2 コ中隊での攻撃で、そのうち A 中隊はロングドン山の北約 500 ヤード（約 460 メートル）にある丘（イギリス軍呼称ウィング・フォワード：Wing Forward）を占領し、そこを火力支援の基地とする。B 中隊は尾根の西端から取りつき、A 中隊から火力支援を受けながら攻め上がり、稜線上の西側のピーク（イギリス軍側呼称フライ・ハーフ：Fly Half）から東側のピーク（イギリス軍呼称フル・バック：Full Back）まで占領する。両ピークの間は広くなっておりイギリス軍は「ボール（Bowl）」と名付けた。C 中隊は後方にいて、どちらかの中隊を支援するか、あるいは次の目標のワイアレスリッジへ向かうとい

1243 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 232-234; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 170-171.
1244 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 234; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 171.
1245 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 234; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 625.
1246 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 170; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 626.
1247 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 626.

うものだった。この大隊にとって不幸だったのは、攻撃ルートが最もアルゼンチン軍の防御の厚いところと重なったことであった[1248]。

各中隊には汎用機関銃火力支援班（GPMG fire support Group）が付属していたし、大隊の支援中隊（Support Company）は 2 種の火力支援を行った。一つは人力輸送分隊（Manpack Group）であり、6 門の銃架付汎用機関銃（GPMG(SF)）、5 基のミラン対戦車ミサイル発射器（1 基当たりミサイル 3 発）、18 組の担架搬送員（stretcher-bearers)、および弾薬運搬も兼ねた糧食員などで構成されていた。もう一つは車両分隊（Vehicle Group）であり、6 門の 81mm 迫撃砲、1 基のミラン・ミサイル発射器、負傷者処置班、ブローパイプ地対空ミサイル班から構成され、5 台の雪上車、3 台の徴発したトラクターと 4 台の民間ランドローバーを機動力として持っていた[1249]。

第 3 空挺大隊は、11 日夕方の薄明が終わった直後（1615Q 時頃[1250]）、集合地点を出発した。行軍はゆっくりしたものだったが、それでもスタート・ライン通過は予定より 15 分遅れの 2016Q 時であった。それからしばらくはイギリス軍が前進するのみで、交戦は何もなかった。イギリス兵は、アルゼンチン軍の歩哨は悪いところに位置しているか、居眠りしているかのどちらかだろうと考えた。アルゼンチン兵からも、戦闘が始まった後もまだ多数のアルゼンチン兵が眠っており、多数のアルゼンチン兵は何が起きたのかよくわからないまま戦死したとする証言がある[1251]。

B 中隊長マイク・アーギュー陸軍少佐（Major Mike Argue）は、最初の計画で北西方向からロングドン山へ接近するものを、スタート・ラインから一旦まっすぐ南下して、それからほぼ真西の方向からロングドン山へ接近した。アーギュー少佐は、その方が部隊の損害が少ないだろうと考えたからだった[1252]。B 中隊は北側に第 4 小隊（小隊長アンディ・ビッカーダイク陸軍中尉：Lieutenant Andy Bickerdike)、真ん中に第 5 小隊（小隊長マーク・コックス陸軍中尉：Lieutenant Mark Cox)、南側に第 6 小隊（小隊長ジョン・ショウ陸軍中尉：Lieutenant Jon Shaw）を配置し、2115Q 時頃には地形は上り坂になり、第 4 および第 5 小隊は突撃隊形をとった[1253]。

2130 時ごろ B 中隊第 4 小隊の分隊長イアン・ミルン伍長（Corporal Ian Milne）が地雷を踏み片足を吹き飛ばされた。それまで静粛だった戦場は突然騒々しいものとなり、アルゼンチン軍の陣地は銃撃を開始した。パイク中佐は、第 3 空挺大隊火力支援担当の第 79 特殊作戦砲兵中隊へ射撃を要求、ただちにアルゼンチン軍陣地へ砲弾が飛来した。しかし岩に囲まれた陣地に対し砲撃の効果は限定されたものだった[1254]。第 3 空挺大隊 A 中隊（中隊長デヴィッド・コレット陸軍少佐：Major David Collett）は、何の抵抗も受けることなく稜線上へ出た。しかしそこはアルゼンチン軍 B 中隊第 2 小隊から見下ろされる位置にあり、

---

1248 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 234; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 170.
1249 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 170.
1250 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 183.
1251 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 626; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, pp. 456-457.
1252 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 626.
1253 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 172.
1254 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 626; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 172.

2128Q 時から交戦に入った。すぐに A 中隊はアルゼンチン狙撃兵の格好の目標となり、さらにアルゼンチン軍の砲兵支援射撃にも叩かれ、くぎ付けとなった。もはや A 中隊は、「ウィング・フォワード」占領をあきらめ、B 中隊がフライ・ハーフを占領するまで待つこととなった[1255]。

第 3 空挺大隊 B 中隊第 4 小隊は「フライ・ハーフ」の北側をまわりアルゼンチンの第 1 小隊の右翼へ侵入した。第 5 小隊は、狭い岩の斜面が戦場となり、アルゼンチン兵の投てきした手りゅう弾が、斜面の上から転がり落ちてきた。イギリス兵は手りゅう弾や岩の破片を浴び、その斜面は手りゅう弾街道（Grenade Alley）として知られるようになった。イギリス兵は遮へい物を求めたため、分隊はバラバラになり、その後は個人あるいは小集団で攻めあがろうとした。アルゼンチン軍は優秀なナイト・ヴィジョン・ゴーグルを持っており、狙撃銃による狙撃や海兵隊の 12.7 ミリメートル重機関銃射撃に、しばしばイギリス軍はくぎ付けにされた。イギリス軍は、そのようなアルゼンチン軍陣地に対しては、対戦車兵器、手りゅう弾、機関銃などを使用して、犠牲を出しながら掃討していった[1256]。

アルゼンチン軍 B 中隊長カリソ＝サルバドレス少佐は、第 1 小隊長バルディーニ准尉からの有線電話で小隊の情勢が非常に悪化していることを知った。その直後にバルディーニ准尉は、機関銃座につこうとして戦死した。真夜中ごろカリソ＝サルバドレス少佐は、第 1 小隊にかかっている重圧を除くため、尾根上（「ボール」）へ予備兵力の工兵小隊を反攻のため出撃させた。これにより第 1 小隊の生存者と幾人かの負傷者は主防衛線まで後退することができた[1257]。

第 4 小隊と第 5 小隊は、稜線の鞍部（イギリス軍呼称「ボール」）に出たが、ここでまたアルゼンチン軍第 2 小隊の 12.7 ミリメートル重機関銃 2 門の掃射を受け、くぎ付けになった。2 コの小隊は共同して、互いに一方が機動する間に他方が火力支援を行う態勢をとり、この 2 門の重機関銃陣地を排除しようとした。しかし最初の試みは、アルゼンチン軍の狙撃兵の射撃を受け、第 4 小隊長ビッカーダイク中尉を含む 6 名が負傷し、失敗した。ビッカーダイクは大腿部に銃弾を受け、第 4 小隊の指揮権をイアン・マッケイ 3 等軍曹（Sergeant Ian McKay）に譲り後送された[1258]。

マッケイ軍曹は第 5 小隊のイアン・ベイリー伍長（Corporal Ian Bailey）と話し、両小隊の中から突撃班をだして重機関銃陣地を掃討することにした。指揮官はマッケイ軍曹で次にベイリー伍長、その下に上等兵 3 名が突撃班に選ばれた。小隊の機関銃 3 門の支援を受けながら、5 名の突撃班は約 35 メートルの開かつ地を突破しようとした。飛び出してすぐに 2 名の上等兵は銃撃を受け戦死した。もう一人の上等兵は、遮へい物の陰に追いやられた。マッケイ軍曹とベイリー伍長は最初の重機関銃陣地に手りゅう弾を投げ込み、止まらずにその陣地を銃撃し通過した。ベイリー伍長はもう一つの重機関銃陣地まであと約 10 フィート（約 3 メートル）というところで、臀部に銃撃を受け倒れた。ベイリー伍長は、マッケイ軍曹がただ一人で次の重機関銃陣地に飛び込んでいくのを目撃し、やがて重機関銃は射撃を停止した。マッケイの遺

[1255] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 627; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 172.
[1256] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 172-173.
[1257] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 173.
[1258] Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 458; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 174.

体は、アルゼンチン兵の遺体と一緒に塹壕の中で発見された[1259]。この攻撃により、B 中隊にかかる火力は減少したが、さらなる攻撃は押し返され、死傷者はさらに続いた[1260]。

第 4 小隊の指揮官代理が戦死してしまったので、B 中隊長アーギュー少佐は、デス・フラー3 等軍曹（Sergeant Des Fuller）をさらなる指揮官代理として第 4 小隊へ送り込んだ。フラー軍曹は、第 5 小隊のスチワート・マクローリン伍長（Corporal Stewart McLaughlin）の分隊から火力支援を受けながら、第 4 小隊を率い積極的な攻撃を連続して行った。しかし 5 人の負傷者を出し、アルゼンチン軍の機関銃射撃により攻撃は停止した。今度はフラー軍曹が火力支援を行い、マクローリン伍長の分隊が機関銃陣地に攻撃をかけたが、丘の上から手りゅう弾が投てきされて攻撃は停止した。

イギリス第 3 空挺大隊 B 中隊第 6 小隊は、第 4 および第 5 小隊よりさらに南の経路をとり、「フライ・ハーフ」の南側からアルゼンチン軍 B 中隊第 3 小隊の陣地を攻撃し、1 個分隊を壊滅させた。しかし第 3 小隊の残りの分隊および海兵隊の重機関銃分隊は頑強に抵抗した。空挺部隊の伝統である気力とスピードは、戦闘の現実の前にしぼんでしまった[1261]。イギリス軍 B 中隊長アーギュー少佐は直ちに火力支援を要請し、アルゼンチン軍陣地の周りで砲弾がさく裂した。アルゼンチン軍第 3 小隊長ネイロッチ中尉と小隊先任軍曹の双方が負傷すると、ロペス（Lopez）大尉が第 3 小隊の指揮をとった。第 6 小隊は、暗闇の中でアルゼンチンの大きなざん壕を見逃して前進してしまい、後ろから攻撃され 4 人が戦死し 8 人が負傷した。第 6 小隊は「ボール」に上がると、ちょうど第 5 小隊がアルゼンチン軍の 12.7 ミリメートル重機関銃の十字砲火を受けているところに迷い込んでしまい、停止するほかなかった。小隊長ショウ中尉は「フル・バック」から 700 ヤード（約 640 メートル）のところで停止し、負傷者の捜索・後送を行った。12 日 0200Q 時には人力輸送分隊が第 6 小隊に合流し、担架により負傷者の後方への輸送を開始した[1262]。

一方 12 日 0130Q 時には、アルゼンチン軍 B 中隊長カリソ＝サルバドレス少佐もロングドン山の状況がさらに深刻になっていることを認識した。第 1 小隊長バルディーニ准尉からも、第 2 小隊長ゴンサレス軍曹からも連絡が途絶えていた。またイギリス軍はすでに稜線の西のピークを確保していた。もはや B 中隊はロングドン山から追い出されそうになっていた。カリソ＝サルバドレス少佐は、上級部隊長でありワイアレスリッジに所在する第 7 歩兵連隊長オマール・ヒメネス中佐（Teniente Coronel Omar Giménez）と連絡を取り、兵力増強を求めた。ヒメネス中佐は狙撃分隊を送ると返事をした[1263]。

B 中隊が 0300Q 時頃にイギリス軍を西側ピークまで押し戻した直後に、C 中隊第 2 小隊長ラウル・カスタニェーダ少尉（Teniente Raúl Castañeda）が「フル・バック」に到着した。カリソ＝サルバドレス少佐はカスタニェーダ少尉に状況説明を行い、中隊司令部所属の 3 人の兵隊を案内役としてつけ、第 2 小隊

---

1259 Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 458. マッケイ軍曹は、戦死後この戦争においてただ二人だけが授与されたヴィクトリア・クロスを授けられた（もう一人はグース・グリーンの戦闘のジョーンズ中佐。Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 790.）。
1260 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 627.
1261 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 172.
1262 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 172, 175.
1263 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 175.

と合同して北側から反撃するように命じた。カスタニェーダ少尉の小隊は向こう見ずな勇気を発揮し、第3 空挺大隊の攻撃を何度も持ちこたえたのみならず、カリソ＝サルバドレス少佐へ秩序だった撤退を可能にする時間を与えた[1264]。

イギリス軍のA中隊はロングドン山の稜線上でくぎ付けにされたままで、B中隊はアルゼンチン軍の狙撃兵に出血を強いられていた。砲兵火力支援はアルゼンチン軍が岩稜のざん壕にこもっているため効果が少なく、海軍の「アヴェンジャー」による艦砲支援もわずかな効果しかなかった。それに対してアルゼンチン軍のりゅう弾砲と迫撃砲は、第3空挺大隊のA中隊とC中隊を叩き、その精度は増してきた[1265]。アーギュー少佐は、損害の大きい第4小隊と第5小隊を後退させて一つの部隊に再編し、それをコックス中尉に指揮させることにした。今度は稜線北斜面の羊の通り道をこの部隊に進撃させて迂回しようというものであった。この狭い一本道でアルゼンチン兵といきなり遭遇して撃ち合いとなった。1人死亡し2人負傷したが、相手を壊滅させたと信じられ、この迂回は成功するものと思われた。しかし次の開かつ地に出ると、アルゼンチン軍の猛烈な射撃にあい、失敗に終わった[1266]。

第3空挺大隊長パイク中佐は、A中隊がこれ以上現地点から進捗できないので、いったん後退して、ロングドン山の西端に位置するよう命じた。B中隊は105ミリメートル砲の砲撃を受け1人の死者と4人の負傷者を出し、アルゼンチン軍の抵抗はなお継続していた。B中隊の死傷者は12日早朝までに50パーセントを超えたのだった。大きな損害を受けたB中隊を休ませ、今度はA中隊がロングドン山の西端から山頂の東端までを掃討することとなった。パイク中佐はこのことを12日0325Q時にトンプソン准将へ報告した[1267]。

A中隊長コレット少佐は、B中隊の経験に学んで、戦術を変更した。それは濃密な火力支援を受けながら、ゆっくりと確実に手順を踏むというもので、アルゼンチン軍のすべてのざん壕と機関銃陣地を、完全に除去して、前進するイギリス兵に危害を与えるような人間を一人も残さない、というものであった。銃火等により分隊が停止した場合は、一人が岩を防護物として前へ出て、自分の位置をタバコの火か懐中電灯で表示し、機関銃火等の弾道修正を叫んで行う。泥炭土で隙間を埋めている陣地に対しては、機関銃火で泥炭土を粉砕し、2人一組でそこの隙間へ忍び寄り、手りゅう弾を投げ込み、銃撃や銃剣突撃を行った。コレット少佐は、稜線の北側を第1小隊に、南側を第2小隊にそれぞれ担当させた[1268]。

第1小隊が稜線に到達したときには、アルゼンチン軍が陣地を放棄し始めている兆候がみられた。カリソ＝サルバドレス少佐は、指揮所近くの岩へミラン対戦車ミサイルが命中したので、指揮所を放棄した。それでもアルゼンチン軍は「フル・バック」を懸命に防御したが、徐々に陣地を奪われていった。A中隊

1264 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 175-176.
1265 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 627.
1266 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 176; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 464.
1267 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 627, 629.
1268 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 177; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 465; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 629.

はついにロングドン山稜線の東端まで占領した[1269]。

0500Q 時頃にはカリソ＝サルバドレス少佐も終わりが近づいていることがわかった。アルゼンチン軍のB 中隊と海兵隊重機関銃分隊は整然と退却した。プエルト･アルヘンティノ集団司令官ホフレ少将は 0630Q時にカリソ＝サルバドレス少佐と彼の中隊がロングドン山から撤退し、スタンレー防衛の戦力となることを承認した。アルゼンチン軍はロングドン山の戦いが始まったときは、287 名の人員が所在したが、撤退できたのは 78 名だった。50 名が捕虜となり、戦死 31 名、負傷者は少なくとも 120 名であった[1270]。

0628Q 時に A 中隊長コレット少佐は､第 3 空挺大隊長パイク中佐へロングドン山の攻略が完了したことを報告した。この戦いは、およそ 10 時間にわたって継続し、イギリス軍は 18 人の戦死者と約 40 名の負傷者を出した。12 日の夜明けを迎えて、ワイアレスリッジへのさらなる攻撃は、アルゼンチン軍の所在するタンブルダウン山からよく見えるため放棄された。しかしアルゼンチン軍によるタンブルダウン山からロングドン山への狙撃とロケット弾攻撃は 12 日の日中も継続し、これによって第 3 空挺大隊は 4 名の戦死者と数名の負傷者を出した。第 3 空挺大隊は、タンブルダウン山から見えないロングドン山の北斜面に壕を掘って退避した[1271]。

c　ツー・シスターズ山の戦闘

ツー・シスターズ山は、名前からもわかる通り、東西に 2 つのピークを持つ山で、ピーク間の距離は約1,200 メートル、標高は 1,070 フィート（約 326 メートル）である[1272]。アルゼンチン軍の最初のスタンレー防衛計画では、この山を防衛することは考えられていなかった。しかしイギリス軍がサン・カルロスへ上陸してからは、第 4 歩兵連隊（連隊長ディエゴ・ソリア陸軍中佐：Teniente Coronel Diego Soria）の一部を配置した。そのため最初から防衛計画に入っていた地区に比べると、防衛はそれほど頑強ではなかった[1273]。

ツー・シスターズ山には、2 コ中隊が配置されたが、それぞれが違う連隊に所属していた。すなわち西のピークには第 4 歩兵連隊の C 中隊が配置され､東のピークには第 6 歩兵連隊の B 中隊が配置され､両者の指揮系統は分離していた｡C 中隊の最先任者はリカルド･コルドン陸軍少佐（Mayor Ricardo Cordón）で､隣接するハリエット山に所在する第 4 歩兵連隊長ソリア中佐の指揮下にあった。B 中隊長はオスカル・ハイメート陸軍少佐（Mayor Oscar Jaimet）で、スタンレーに所在するプエルト・アルヘンティノ集団司令官ホフレ少将の直接指揮下にあった。西のピークに所在する C 中隊は、サン・カルロスから進軍してくるイギリス軍へ直接対峙しているので､東のピークの B 中隊に比べ強力で約 170 人の人員と迫撃砲を数門保

1269 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 177.
1270 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 177.
1271 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 629-630.
1272 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 237; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 632.
1273 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 237.

有していた。B 中隊は、ほぼ 100 から 120 名の人員だった[1274]。

ツー・シスターズ山を攻撃したイギリスの部隊は、サン・カルロスから全行程を徒歩行軍した海兵隊の第 45 コマンド大隊であった。大隊長はアンドリュー・ホワイトヘッド海兵隊中佐（Lieutenant Colonel Andrew Whitehead, RM）で、その作戦計画は、3 段階にわけてツー・シスターズ山を奪取するというものだった。第 1 段階では、X 中隊が重火器を携行して直接西側から接近し、西側ピーク（イギリス軍呼称ロング・トーネイル：Long Toenail）を占領する。第 2 段階では、西側ピークの X 中隊からの火力支援を受けながら、Y 中隊および Z 中隊が北西から接近し二つのピーク間の鞍部を占領する。第 3 段階で Y 中隊および Z 中隊が東側のピーク（イギリス軍呼称サマー・デイズ：Summer Days）を占領する、という段取りであった[1275]。またロングドン山攻撃と同様、静かに目標に接近して、アルゼンチン軍と接触してから、りゅう弾砲、艦砲、迫撃砲の火力支援が行われる計画だった[1276]。

ところが実際は計画通りに進まなかった。X 中隊は、6 月 11 日 1700Q 時に集合地点を出発し 6 キロメートル離れた「スタート・ライン」へ向かった。「スタート・ライン」出発予定時刻は第 3 コマンド旅団から 2100Q 時と定められていた。X 中隊長イアン・ガーディナー海兵隊大尉（Captain Ian Gardiner, RM）は、集合地点から「スタート・ライン」まで 3 時間とみていた。しかし 地面の状態が悪いこと、漆黒の状態で足元が見えないこと（ただしこの日の月の出は 2030Q 時頃、月齢 19.5 で、月の出以降は漆黒ではなかったろう）、航法を誤ったこと、重火器等を運搬する人員は当然ながら負担が大きいことなどから大幅に「スタート・ライン」到着が遅れた[1277]。

X 中隊の「スタート・ライン」到着は 2330Q 時であり、旅団が規定した時刻よりも 2 時間半以上遅れた。また 6 キロメートルの行軍に 6 時間半かかったのだから、時速 1 キロメートル未満であり、フォークランドの地形の困難さを表す一例である。第 45 コマンド大隊長ホワイトヘッド中佐は、12 日 0016Q 時、夜間を活用することを重視して決断を下し、計画を変更し X 中隊の「ロング・トーネイル」占領を待たずに、Y 中隊および Z 中隊の前進を命じた[1278]。Y 中隊および Z 中隊は、すでに 11 日 2100Q 時より少し前に「スタート・ライン」（X 中隊とは異なる場所）に到着していた[1279]。

計画の変更により、イギリス軍は 3 コ中隊がほぼ同時に攻撃を行うことになった。そのため西側ピークを守るアルゼンチン軍 C 中隊は西側から X 中隊の攻撃、後面の北東側から Y 中隊の攻撃を受けることになった。X 中隊は遅れを取り戻すべく必死に攻撃した。有効な火力支援がなかなか得られない（同時に攻撃が行われているロングドン山やハリエット山へ火力支援が向けられた。また迫撃砲は、泥炭地のため数

---

[1274] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 237. なお Ramsey によると、コルドン少佐が、第 6 歩兵連隊 B 中隊も合わせて指揮していた、としている（Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 481.）。
[1275] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 237.
[1276] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 630.
[1277] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 237; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, pp. 178-179; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 624, 630; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, p. 480. Bijl は、X 中隊が午後 5 時に月明かりの中を出発した、と述べているが、月の出の時刻から午後 5 時には月は出ていなかった。
[1278] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 179; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 630.
[1279] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 179.

発撃つごとに底板が沈下し、連続射撃ができなかった。）中で、できる限り速く機動して、アルゼンチン兵を退散させ、西側のピークを占領した[1280]。

Y 中隊と Z 中隊の攻撃も順調に進んだが、アルゼンチン軍のよく準備した機関銃陣地の前では停止することもあった。アルゼンチン軍はさらに 155 ミリメートル砲を含む野砲や迫撃砲で停止した部隊を射撃した。これに対し第 45 コマンド大隊も火力支援を要請し、今回は駆逐艦「グラモーガン」からの艦砲も含めて有効な支援が得られた。ただ一か所「サマー・デイズ」の西端では、第 45 特殊作戦大隊の攻撃が約一時間にわたり停滞した。アルゼンチン軍の機関銃射撃、迫撃砲射撃、野砲射撃が Z 中隊に激しく降り注いためであった。Z 中隊第 8 小隊（8 Troop）長のクライヴ・ダイトー海兵隊中尉（Lieutenant Clive Dytor, RM）は、激しく降り注ぐ銃火の中、立ち上がり「総員前進！」と叫び、頂上に向かって「ズールー！ズールー！ズールー！」（Z 中隊の掛け声）と叫びながら走り銃撃した。最初は部下の中から「そのお×××頭を伏せろ！バカ野郎」という声もあったが、すぐに全員がダイトー中尉に従って攻め上がった[1281]。

この突撃で Z 中隊は「サマー・デイズ」の頂上まで攻め上がり、第 45 コマンド大隊は 2 つのピークを確保した。あとは Y 中隊を別経路で攻め上がらせ 12 日 0240Q 時稜線の上端に到達した。その後大隊は、まだ残っているアルゼンチン軍陣地を掃討し、それも 0418Q 時に完了した[1282]。

イギリス軍がツー・シスターズ山のアルゼンチン軍陣地を調べてみると、6 丁の機関銃（数丁の 12.7 ミリメートル重機関銃を含む）からなる防御陣地で構成されていた。経験のある兵隊が守備していた場合に限り、これらの陣地は極めて強力な防衛拠点となっただろう。またイギリス海兵隊は、アルゼンチン兵を「幾人かは踏みとどまり極めて勇敢に戦ったが、大部分の兵士は、積極的で戦う決意を持った相手に対しては、逃げてしまった。」と評価した。イギリス軍のツー・シスターズ山の戦いにおける損害は、戦死者 4 名、負傷者 10 名であった。アルゼンチン側の損害は、戦死者 10 名、負傷者 50 名、捕虜 54 名だった[1283]。夜が明けると第 45 コマンド大隊は、第 3 空挺大隊同様にアルゼンチン軍の長距離射撃により被害をこうむるようになった[1284]。

#### d　ハリエット山の戦闘

ハリエット山は、約 900 フィート（約 270 メートル）ほどの標高があり、頂上部分はこぢんまりとした岩石のかたまりの山で、フィッツロイからスタンレーにつながる道路を管制できる位置にあった[1285]。イギリス軍にとっては、いくつかの地雷原を通らなければハリエット山に接近できないので、難しい目標だった。アルゼンチン軍のこの山に対する部隊配置は、第 4 歩兵連隊の司令部と同連隊 B 中隊、第 3 歩兵連隊

[1280] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 237-238; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 630; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 180.
[1281] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 238; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 631; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 181; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, pp. 481-482.
[1282] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 631.
[1283] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 631.
[1284] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 183.
[1285] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 239; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, pp. 396, 490.

司令部守備中隊、第 12 歩兵連隊 B 中隊中の 1 個小隊および 1 コ重迫撃砲小隊であった。人員の合計は約 300 名で、すべての部隊が第 4 歩兵連隊長ソリア中佐の指揮下にあった[1286]。

ハリエット山を攻撃した部隊は、イギリス海兵隊の第 42 コマンド大隊（大隊長ニック・ヴォークス海兵隊中佐：Lieutenant Colonel Nick Vaux）であった。この大隊は、サン・カルロスからヘリコプターで空輸され、5 月 30 日からケント山へ展開していた。大隊は、次期作戦に備えて周辺地域の偵察を徹底的に行った。その結果、当初計画のウォール山からハリエット山への進攻は、見直しを迫られた。なぜならアルゼンチン軍はその進攻を予測しており、その経路に地雷原を設定していることが予想されたからだった[1287]。またハリエット山のアルゼンチン軍陣地は非常に強力で、ちょっとした天然の要塞であり、数ある「クルミ」の中でも最も固い殻のようだった[1288]。

そこで考えられたのが、迂回ルートをとることであった。ヴォークスの計画の一大方針は、アルゼンチン軍をあざむいて後方から奇襲攻撃することであった。具体的にはハリエット山の南側の道路方向から攻撃することであり、アルゼンチン軍への奇襲効果もより高まると思われた。その計画にそって偵察が行われ、ついには道路の南側に地雷の敷設されていない経路を確定した。アルゼンチン軍はハリエット山の北側と西側の斜面に陣地を集中しているように観察された。6 月 9 日には、アルゼンチン軍のハリエット山防御に関する情報が十分に集まり、ヴォークス中佐はそれ以上の偵察行動を終了させた[1289]。

ヴォークス中佐の計画は、第 42 コマンド大隊を構成する J, K,および L 中隊のうち、K 中隊がハリエット山の南方向から迂回し稜線東側の頂上を占領し、K 中隊がそこを確保したあと L 中隊も南側から接近して稜線西側のピークを占領する。他方 J 中隊は陽動作戦としてハリエット山の西側から攻撃をかけ、アルゼンチン軍に主攻撃方面を西側からと思わせるというものだった[1290]。

6 月 11 日日の入り後、暗くなってから（1615Q 時頃）偵察小隊はミラン・ミサイル分隊と共に「スタート・ライン」までの進攻経路を確保するため出発した。偵察小隊は先発し、経路にしるしをつけ前進した。ミラン・ミサイル分隊は、一隊はスタンレー＝グース・グリーン道を西方に、もう一隊はハリエット山の南方のスタンレー＝フィッツロイ道を東方に向けて配備された。これらミラン・ミサイル分隊は、アルゼンチン軍がフォークランド島に配備した 90 ミリメートル砲装備のパナール装甲車が反攻してきた場合の対抗手段であった[1291]。

K 中隊（中隊長ピーター・バビングトン海兵隊大尉：Captain Peter Babbington, RM）は 1615Q 時チャレンジャー山を出発し、集合地点で個人装具等を残置した後、第 9 小隊が先頭となって、大きく迂回しながらハリエット山南方へ向かった。総員約 250 名が約 4 マイル（約 6.4 キロメートル）近くを、夜間に

1286 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 239-240.
1287 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 589-590, 631.
1288 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 633.
1289 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 631-633.
1290 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 183.
1291 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 633; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 183.

地雷原を避けつつ、アルゼンチン軍に見つかることもなく「スタート・ライン」まで到達した[1292]。1730Q時には、L中隊（中隊長デヴィッド・ウィーン海兵隊大尉：Captain David Wheen, RM）が出発した。前進途中に2回迫撃砲による照明弾が打ち上げられ、中隊は停止した。一瞬アルゼンチン軍に探知されたかと不安が走ったが、どうやら適当な射撃だったようであった。計画通り第 7 コマンド砲兵中隊（7 Command Battery）が稜線上へ猛砲撃を行い、アルゼンチン軍に少なくとも25名の負傷者を出させた[1293]。

このハリエット山攻撃で、アルゼンチン軍に対する陽動行動は、J 中隊の同山西方からの攻撃だけでなく、支援火力による陽動攻撃も行われた。K中隊が「スタート・ライン」を通過する予定の2200Q時には、イギリス・フリゲート艦「ヤーマス」から4.5インチ（114mm）砲約40発の一斉射撃が、ハリエット山の西端へ、他の一斉射撃はハリエット山とゴート・リッジ（Goat Ridge）の間にあるアルゼンチン軍陣地へ着弾した[1294]。

ハリエット山西側ではJ中隊による陽動作戦が開始され、にせの偵察隊によるアルゼンチン部隊との衝突を起こした。迫撃砲部隊は照明弾でハリエット山西部山頂を照らし、ミラン・ミサイル分隊は、ゆっくりよろめきながら飛ぶミサイルを目標に打ち込んだ[1295]。

K 中隊は予定通り 2200Q 時に「スタート・ライン」を出発し、アルゼンチン軍に察知されないまま約20分で700メートルを前進確保した。K中隊は、ハリエット山稜線東端の第3歩兵連隊司令部守備中隊陣地の中まで深く侵入した。アルゼンチン軍はほぼ完全に奇襲され、イギリス軍の銃撃にびっくりして反応を示すまで、K中隊は東側頂上の150メートルまでに近づくことができた。早くも2240Q時第42コマンド大隊は、アルゼンチン軍の猛烈な機関銃射撃の下にあるが、ハリエット山頂上稜線の東端を確保したことを報告できた[1296]。

しかしK中隊が稜線東部地区を完全に制圧したのは2305～2315Q時頃であった。K中隊は、砲兵から火力支援を受けながら、アルゼンチン軍陣地を掃討した。アルゼンチン軍兵士個々の位置をピンポイントで捉えることは不可能なので、K中隊は市街地戦戦術を応用した。つまり二人一組あるいは分隊半分がチームとなってざん壕、掩蔽壕および強化陣地を66mmロケット弾、手りゅう弾、銃剣で一つ一つ掃討した[1297]。

K 中隊の第 1 小隊はアルゼンチン軍の重迫撃砲小隊陣地を占領し、小隊長マリオ・フアレス陸軍准尉（Subteniente Mario Juárez）に重傷を負わせ、4門の120mm重迫撃砲を捕獲した。第2小隊は、第12歩兵連隊の一部分と第4歩兵連隊の偵察小隊を制圧した。アルゼンチン軍は稜線東側に予備兵力を配置しており、誰もがそこが最初に戦闘に巻き込まれるとは考えていなかった。そこにイギリス軍が劇的な勢い

---

1292 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 633; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 240.
1293 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 183.
1294 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 633.
1295 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 185.
1296 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 633; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 185. 「スタート・ライン」出発からアルゼンチン軍に気づかれるまでの時間を、Bijiは30分、Freedmanは20分としている。
1297 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 185.

で攻め込み、また不慣れな夜間戦闘により、アルゼンチン軍は混乱し圧倒され、経験のない徴集兵は降伏し始めた。しかし第 4 歩兵連隊司令部情報将校のホルへ・エチェベリア陸軍中尉（Teniente primero Jorge Echeverría）が呼び戻したので、それを止めることができたが、エチェベリアが重傷を負うともう止める者がいなかった[1298]。

L 中隊は、2200Q 時の K 中隊が「スタート・ライン」を出発したとき、中隊長ウィーン大尉が大隊司令部へ、経路からそれてしまったこと、地雷に対し非常に用心していること、予定時刻までに「スタート・ライン」に到着することを確信していることを無線連絡した。それから 30 分後 L 中隊は出発準備が完了した。大隊長ヴォークス中佐は L 中隊へ攻撃開始を命じ、L 中隊はハリエット山の南東方向から頂上稜線の西端を目指して攻撃を開始した[1299]。

L 中隊の攻撃開始は、K 中隊の攻撃開始より後だったため、もはや時間的奇襲効果はなかった。アルゼンチン軍第 3 歩兵連隊司令部守備中隊中の一小隊は、L 中隊が「スタート・ライン」を超えてから 140〜200 メートルで、重機関銃の効果的射撃を浴びせた。L 中隊はいっぺんに 3 人の負傷者を出した。L 中隊長ウィーン大尉はミラン対戦車ミサイルの支援を受け、これらの機関銃陣地を破壊した[1300]。アルゼンチン軍は B 中隊第 2 小隊をここの増強に回し、戦闘は激化、戦況は一進一退となった。L 中隊は、目的地であるハリエット山稜線の西端まで、野砲と迫撃砲の支援を受けた 6 ヵ所の重機関銃座と少なくとも 4 ヵ所の夜間暗視ゴーグルを装備した狙撃兵陣地を掃討しなければならなかった。もっともイギリス軍も野砲と艦砲の正確かつ濃密な支援を受けてはいた。「スタート・ライン」から目的地まで 600 メートルに過ぎなかったが、L 中隊はそれを掃討するのに数時間かかった[1301]。

ヴォークス中佐は、新たな命令を下し、L 中隊には攻勢の勢いを維持したままゴート・リッジまで進撃すること、K 中隊はハリエット山の東端を固めて、アルゼンチン軍の反攻に備えることを命じた。L 中隊はゴート・リッジへ向け進撃し、孤立したアルゼンチン軍陣地や狙撃兵を排除した。ヴォークス中佐は、タンブルダウン山をも占領する望みをもって、連隊の戦術司令部（Tactical HQ）および J 中隊と共に前進した。しかしハリエット山およびゴート・リッジの全陣地を掃討するのに 0630Q 時までかかり、暗闇があと 1 時間ほどしか続かない状況では、新規作戦実施は不可能だった[1302]。

---

1298 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 185; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 240.
1299 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 185-186.
1300 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 185; Julian Thompson, *No Picnic: 3 Commando Brigade in the South Atlantic: 1982* (London; Leo Cooper in association with Secker & Warburg Ltd, 1985), pp. 165-166.
1301 Thompson, *No Picnic,* p. 166; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 186; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 633-635. Freedman は L 中隊が稜線西端に到達したのを 12 日 0300Z（11 日 2300Q）時とし、Thompson は、「スタート・ライン」から稜線西端まで 600 メートルで、そこを踏破するのに 5 時間かかった、としている。Bijl は 600 メートル進むのに 6 時間近く要したとしている。L 中隊の「スタート・ライン」出発を 11 日 2230Q 時とすると、Thompson の場合、L 中隊が稜線西端に着くのは 12 日 0330Q 時、Bijl の場合、12 日 0430Q 時頃となる。Freedman の時刻の誤りなのか、稜線西端に到着するのは速かったが、通過した陣地を完全に掃討するのに時間がかかったのか、不明である。
1302 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 635. Freedman は、この命令が出された時刻を 12 日 0600Z（0200Q）時としている。前注にある通り、Thomson、Bijl が正しいとすると、この時刻に L 中隊は、稜線西端までの掃討を行っている最中だった。ヴォークスが同時並行してゴート・リッジまでの攻撃を行うよう L 中隊に命じたのか、Freedman はその辺りの事情を書いていない。

連隊長ソリア中佐は、連隊の指揮所がイギリス軍に占領される直前に、そこでB中隊長カルロス・アロヨ陸軍中尉（Teniente Primero Carlos Alberto Arroyo）と状況を検討した。ソリア中佐は、稜線西端に向かって反攻できないか（連隊指揮所は稜線東端にある）考えた。しかしスタンレーとの交通が断たれたこと、未経験の徴集兵に自殺的冒険を行わせることは愚行である、とのアロヨ中尉の進言にソリア中佐は同意し、部下に対しタンブルダウン山へ向かって脱出するように命じた。しかし脱出に成功したのは2個小隊にすぎず、ソリア中佐自身もイギリス軍にとって貴重な資料を持ったまま捕虜となった[1303]。

ロングドン山およびツー・シスターズ山における戦闘と同様に、ハリエット山の戦闘も明け方にはイギリス側の勝利に終わった。この戦闘におけるイギリス軍の死傷者は比較的軽微であり、2名戦死、13名負傷であった。アルゼンチン軍の死傷者等は、10名戦死、53名負傷、300名以上の捕虜であった。ヴォークス中佐の独創的な計画により、アルゼンチンの強固な陣地が陥落した。他の場所で見られた強固な抵抗はここではなかった。イギリス軍が強力な火力支援のもとに予期しない方向から攻撃したことにより、戦意を喪失したようである。アルゼンチン兵士が放棄した個人装備や兵器の山、さらにはアルゼンチン軍将校の証言を見てもこれは明らかである[1304]。

もう一つのアルゼンチン軍の無秩序の原因は、K中隊の報告にあるように、降伏しようとする自軍兵士に対し、アルゼンチン軍将校および下士官が銃撃したことがしばしば見られたことである。イギリス海兵隊員はこのことで、これらの将校等を積極的に攻撃目標とした[1305]。

戦闘が一段落すると、すぐに第42コマンド大隊は、次期戦闘で第2スコットランド近衛大隊を手助けするため、タンブルダウン山のアルゼンチン軍陣地を観察した。6月13日には、第45コマンド大隊とともに、その夜の第5歩兵旅団のタンブルダウン山およびウィリアム山攻撃の予備となるか、あるいはその攻撃をさらに利用する命令が出された[1306]。

この6月11・12日の戦闘で、イギリス軍は、スタンレー西側の外郭防衛線であるロングドン山、ツー・シスターズ山およびハリエット山を陥落させることができた。イギリス軍の計画では、アルゼンチン軍陣地が早期に陥落し、その他もろもろの状況が好ましければ、さらに奥へ進攻するつもりだった。しかしそれは、極めて楽観的な望みであり、実際にはそれ以上侵攻することはできなかった[1307]。

一方アルゼンチンにとって、これらの戦闘の結果は極めて厳しいもので、スタンレー西側の外郭防衛線を完全に失ってしまった。約850名の人員がこれらの丘を守備していた。そのうち50名が戦死し、420名が捕虜となり、約380名のみがスタンレー方向へ後退できた。人員の損害は50パーセント以上だった[1308]。イギリス兵の死傷者は、戦死24名（翌日のアルゼンチン軍砲撃による死者も含む）、負傷者65名で、捕

[1303] Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 186; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 243; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 635.
[1304] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 635; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 241.
[1305] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 635.
[1306] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 635.
[1307] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 244.
[1308] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 244.

虜はなかった。イギリス軍は次の夜（6月12・13日の夜）に内郭防衛線への攻撃を仕掛けるつもりだった。しかし必要な準備が完了せず、次の攻撃は24時間後に延期された[1309]。

### 第3項　6月13・14日の戦闘

#### a　イギリス軍のスタンレー西側外郭防衛線攻撃計画

6月12日朝、アルゼンチン軍首脳部は、ロングドン山からハリエット山にかけて約4,500人のイギリス兵が集中していると報告を受けた。この事実は、「マルビナス」所在のアルゼンチン軍へは、失望するに違いないという理由から伝えられなかった。フォークランド諸島のアルゼンチン軍は、新鮮な食料が6月10日でつきたとみられていた。パンについては1カ月補給されておらず、多数のアルゼンチン兵が「たん白質欠乏、重度の栄養失調並びに精神医学上の問題」に侵されているという報告もあった[1310]。

6月13日には、マルビナス諸島総軍司令官メネンデス少将とガリチェリ大統領が交信し、メネンデスは、「イギリス軍が示した行動から考えて、まさに今晩彼らは最終的攻撃をかけてくるだろう。必然的に今日から明日にかけてスタンレーの運命は風前のともしびにある」と警告した。ガリチェリの答えは「結構、貴官の持つあらゆるものをスタンレーの周りに配置するのだ。我々はそこを守らなければならない。」であった[1311]。

イギリス軍のスタンレー西側内郭防衛線攻撃にあたって、重要なことはタンブルダウン山の占領であった。なぜならこの山は、標高229メートルに過ぎないが、内郭防衛線の中にあっては一番高く、周囲を管制できるからであった。ここの占領は第2スコットランド近衛大隊に課された。グルカ小銃大隊はスコットランド近衛大隊がタンブルダウン山を占領した後、そこを通過して南方にあるウィリアム山を占領する。その後第1ウェールズ近衛大隊がウィリアム山東方にあるサパー丘を占領する。それと同時に第2空挺大隊がタンブルダウン山北方にあるワイアレスリッジを占領するという計画だった[1312]。

スコットランド近衛大隊とグルカ大隊は6月12日明るくなってからヘリコプターで集合地点へ空輸されるはずだった。しかしイギリス軍のヘリコプター空輸支援能力は、次の戦いのフェーズに備えて兵員、野砲、弾薬等の前方への移動や、負傷者と捕虜の後方への移動で、ほぼ限界に達していた。まずは第3コマンド旅団への弾薬補充を優先し、第2スコットランド近衛大隊、第1ウェールズ近衛大隊およびグルカ大隊が所属している第5歩兵旅団の攻撃準備は、6月12日のうちにできないことが明らかになった。フォークランド諸島地上軍司令官ムーア少将は、攻撃開始の24時間延期に同意した[1313]。

6月13日は良い天気だった。イギリス軍は、猛烈な勢いで弾薬と物資を前線へ集積し、この日の夜に再

1309 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 244, 248.
1310 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 637.
1311 Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, p. 397.
1312 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 639, 641.
1313 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 639-640.

開される攻撃に備えた[1314]。0800Q 時の直後スコットランド近衛大隊はヘリコプターでハリエット山のすぐ西へ移動した。大隊はアルゼンチン軍の間欠的な砲撃に対して、壕を掘って入り 1 人の軽症者を出したのみだった。グルカ大隊は 1240Q 時からヘリコプターで移動が開始された。多くのグループが間違った場所に降ろされ、日中の残りの時間は大隊の再集結にあてられた。再集結は、時々の、ただし時には猛烈な、アルゼンチン軍野砲と迫撃砲によって妨害を受けた[1315]。

ウェールズ近衛大隊は、スコットランド近衛大隊とグルカ大隊がそれぞれの目標攻撃時には予備兵力となり、それが完了してからウィリアム山の南方を掃討するという計画であった。13 日 1900Q 時ウェールズ近衛大隊は、集結地点へ向け移動を開始し、そこを経由して「スタート・ライン」へ向かった。その経路は事前に掃討してあり、第 42 特殊作戦大隊も使用したが、若干経路をそれたため、地雷原へ入り 2 名の負傷者を出した。工兵偵察隊は徹底して地雷を除去したが、5 時間を要し、「スタート・ライン」に到着したのは 14 日 0300Q 時だった。結局予備兵力としての出番はなく、もとの位置へ戻り、そこで 1000Q 時より前に移動はないと言われた[1316]。

火力支援の面では、12 日夜にイギリス海軍はフリゲート艦「アクティブ」と「アロー」が前線後方のムーディー・ブルック（Moody Brook）、サパー丘および競馬場（Racecourse）へ 186 発の砲弾を撃ち込んだ。13 日から 14 日の夜にかけては、地上部隊の内郭防衛線への攻撃を支援するため、4 隻の艦艇の要求がフォークランド諸島地上軍司令官からあった。13 日 2300Q 時から、フリゲート艦「アヴェンジャー」、「ヤーマス」、「アクティブ」および「アムバスケード（HMS *Ambuscade*）」が、4 時間にわたって 856 発を撃ち込んだ。これはこの戦争で最大の艦砲による地上攻撃となった。しかし 4.5 インチ砲弾の補給は不足しており、この時点でこの規模の砲撃をもう一度行う分しか残っていなかった[1317]。

一方イギリス軍砲兵は、13 日の朝に 42 カ所の目標に対し、1,620 発を発射した。引き続き最終的攻撃とスタンレーへの前進を支援するため、さらに 5,500 発が 40 カ所の目標に対し発射された。砲兵の方も補給が問題で、この戦争が終わった時点で、あと 2 日分砲撃するだけの弾薬しかなく、再補給は数週間後であった[1318]。

b　タンブルダウン山の戦闘

タンブルダウン山は前述の通り、内郭防衛線の中で標高 229 メートルと最も高いところであり、スタンレーを含む周辺地域を支配する重要な地点である。東西方向に長さ約 1.5 マイル（約 2,400 メートル）の幅の狭い岩稜である。岩稜東端から南方へ支稜がでていて、そのピークがウィリアム山（標高 213 メートル）である[1319]。タンブルダウン山の防衛は、海兵隊第 5 歩兵大隊（Batallón de Infantería de Marina Nº

[1314] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 249.
[1315] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 640.
[1316] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 641.
[1317] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 639.
[1318] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 639.
[1319] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 251; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,*

5）が、受け持っていた。この大隊は、ウィリアム山とサパー丘の防衛も同時に行っており、三カ所合わせての人員は 703 名であった。大隊長はカルロス・ロバシオ一海兵隊中佐（Capitán de Fragata Carlos Robacio)で、 大隊司令部はタンブルダウン山よりスタンレー方面へ約 1.5 マイル（約 2.4 キロメートル）下がったところに設置された。M 中隊（Compañía M）はサパー丘へ、N 中隊（Compañía N）はタンブルダウン山とウィリアム山へ配置され、O 中隊（Compañía O）は予備兵力であった[1320]。

アルゼンチン海兵隊も兵は徴兵制であるが、陸軍と違い年間を通じて入隊させるシステムであり、季節によって部隊の実力が大きく変動することはなかった。それに加えて第 5 歩兵大隊には、1963 年生まれの新兵はおらず、1962 年生まれ以前の経験を積んだ兵隊で構成されていた。さらにこの大隊は南アメリカ最南端のフエゴ島（Isla Grande de Tierra del Fuego）リオ・グランデ(Río Grande）が駐屯地であり、寒さには強く、衣服などの装備品も耐寒性が十分考慮されたものだった[1321]。またこの大隊は、一つの単位として戦線に配置されており、他の陸軍部隊のように雑多な部隊を寄せ集めて一つの場所を守るのではなく、指揮統率上望ましいものであった。その上に火力支援も同じ海兵隊の砲兵部隊があたっていた。また 11・12 日の戦闘でツー・シスターズ山またはハリエット山から撤退してきた少数の陸軍兵も付加されていた[1322]。

アルゼンチン軍海兵隊第 5 歩兵大隊は、4 月上旬からフォークランド諸島へ派遣されており、したがって陣地設定工事も進んでいた。岩の下の掘って頑丈な天井のある陣地を造成し、またその配置もよく考えられていた[1323]。

タンブルダウン山攻撃担当のスコットランド近衛大隊長マイケル・スコット陸軍中佐（Lieutenant Colonel Michael Scott）は、3 コ中隊をこの山の稜線を攻撃にあてた。細く長い稜線を三分割して、それぞれ手前の西側の稜線を G 中隊が、左翼中隊が中間のピークまでの稜線を、右翼中隊が中間のピークから東端までの稜線を担当した[1324]。

またスコットランド近衛大隊は、アルゼンチン軍の兵力を分散させるため、陽動作戦も計画した。ウィリアム山の南方をスタンレーに向かって通じる道路を偽装の攻撃を行い、アルゼンチン軍のタンブルダウン山方面の兵力をウィリアム山南方に分散させようというものだった。本部中隊としてリチャード・ベセル陸軍少佐（Major Richard Bethell）を長に約 30 名のスコットランド近衛大隊の人員で編成され、ブルーズ・アンド・ロイヤルズ（Blues and Royals）連隊の軽戦車シミターおよびスコーピオン計 4 両ならびに地雷原通過のため工兵の支援を受けて、進撃する計画だった。シミターおよびスコーピオンは、この戦

---

p. 641.

[1320] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 251, 254; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 641.

[1321] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 254-255; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 641-642; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 189.

[1322] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 255.

[1323] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 251, 254; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 642.

[1324] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 256; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 642.

争で初めての戦闘参加となる[1325]。

スコット大隊長は 12 日夜に 4 フェーズにわたる攻撃の命令下達を行った。

・フェーズ 1：本部中隊が陽動攻撃をかける。攻撃方向は南西方向から。

・フェーズ 2：G 中隊がタンブルダウン山西方稜線の三分の一を攻撃し占領する。

・フェーズ 3：左翼中隊が G 中隊を通りこして、中央ピークまでを攻撃し占領する。

・フェーズ 4：右翼中隊が左翼中隊を通り越して、稜線東端までを攻撃し、占領する[1326]。

それ以後は他の大隊の任務となる。その後の計画は、フェーズ 4 が完了するとグルカ大隊が火力支援の基地をタンブルダウン山に設け、大隊内の 2 コ中隊を使いそれぞれタンブルダウン山から北東に伸びる稜線とウィリアム山を占領する、というものであった[1327]。

アルゼンチン海兵隊第 5 歩兵大隊は、一連のイギリス軍の行動を観察して、タンブルダウン山に対する攻撃が近いことを感じていた。12 日夜に大隊は、106mm 迫撃砲陣地の移動を行い、イギリス軍の砲撃による被害を防止した。それと同時にタンブルダウン山の N 中隊を増強し、大隊司令部付近に対抗攻撃班を配置した。大隊は、イギリスの戦術が確実に一歩一歩段階的に陣地を占領して進めるものとみて、夜明けまでに完全に陣地を占領できなければイギリス軍は撤退するものと期待をかけていた。またタンブルダウン山に攻撃をかけるだろうが、ウィリアム山南方を通る道からも攻撃してくると予測して、ウィリアム山南方に O 中隊を配置した[1328]。

13 日の攻撃はスコットランド近衛大隊の陽動作戦から始まった。1700Q 時頃、スコットランド近衛大隊の兵士は軽戦車によじ登ってから、軽戦車は出発した。1830Q 時スコットランド近衛大隊の兵士は軽戦車から下車し徒歩で前進、戦車は歩兵の後ろに回り火力支援する隊形で続行した。2045Q 時からアルゼンチン軍陣地（O 中隊：場所はウィリアム山南方のポニー峠（Pony Pass））との接触が始まり、戦闘がおこった。相互に銃撃と手りゅう弾の投てきとなり、約 2 時間の戦闘が続いた。その後アルゼンチン軍陣地の銃火が沈黙したので、ベセル少佐は陽動の任務を達成したとして後退した。しかし後退途中で地雷原に入り 4 名の負傷者を出した[1329]。

軽戦車部隊は歩兵との無線交信の状態が悪く、歩兵の状況がなかなかつかめなかった。前進途中で道路に大きな弾痕のクレーターがあり、それを迂回するため路外に出た部隊長の乗るスコーピオンが地雷を踏んでしまった。戦車は全損したが、乗員に死者や重傷者は出なかった。軽戦車部隊は残りの 3 両で引き続

---

1325 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 255; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 642.
1326 Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 185-186.
1327 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 255; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, p. 642.
1328 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 254.
1329 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 255; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II*, pp. 642-643; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 188-190; Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, pp. 507-508.

き歩兵に対する火力支援を続け、歩兵の後退を待って帰投した[1330]。

最終的に、この陽動作戦でイギリス軍の損害は、戦死 2 名、負傷 9 名、戦車の損害 1 両、であった。イギリス軍は、アルゼンチン軍に 10 名の死者を出させたと当時主張したが、Middlebrook によると、死者 1 名、負傷者数不明である。またこの陽動攻撃があっても、アルゼンチン軍は、この方面へさらに兵力を投入することはなかった。その意味で陽動は目的を果たせなかった[1331]。

タンブルダウン山への攻撃は、予定通り 13 日 2100Q 時から、G 中隊によって開始された。ゴート・リッジの東端から出発し 2,500 ヤード（約 2,290 メートル）開豁地を通り、タンブルダウン山西の斜面を登り始めた。2230Q 時に G 中隊は予定地点まで到達し、その間アルゼンチン軍の反応は何もなかった。目的地もアルゼンチン軍が放棄して誰もいなかった。フェーズ 2 は完了した。次は左翼中隊の番で G 中隊の間を通り抜けて 2230Q 時から前進を開始した。まさにこの時点からアルゼンチン軍の銃砲火の一斉射撃が始まった[1332]。

このタンブルダウン山を守備していたのは、前述のように N 中隊であった。中隊長はエドゥアルド・ビリャラーサ海兵隊大尉（Teniente de Navío Eduardo Villarraza）で、N 中隊は、通常の 3 個小隊編制ではなく 4 個小隊で編成されており、強力な中隊であった。さらにこの中隊には海兵隊工兵小隊と、前述のツー・シスターズ山またはハリエット山から撤退してきた陸軍兵士も付加されていた。また N 中隊は付加された迫撃砲と重機関銃から十分な火力支援を受けていた[1333]。

反面 N 中隊のほとんどすべての兵力は稜線の東端にあり、北側と南側の開けた土地、特に南側のイギリス軍がやってくると思いこんでいた道路を支配するために配備されていた。結局稜線上に配置され、スコットランド近衛大隊と直接戦闘したのは、若い海兵隊少尉カルロス・バスケス（Teniente de Corbeta Carlos Vázquez）が指揮する第 4 小隊（4to pelotón）のみであった。さらにこの小隊は通常編制ですらなく、余剰の海兵隊員から編制されていた。この小隊は、26 人の海兵隊員と 2，3 名の海兵隊工兵ならびにオスカー・シルバ陸軍准尉（Subteniente Oscar Silva）の指揮下に 16 名の陸軍兵士から構成されていた。シルバ准尉は、11・12 日ツー・シスターズ山の戦闘で敢闘し撤退してきた、若き将校だった。この小隊はまた、イギリス軍が日中に攻撃してくるという予測から、南に面して配備されていた。しかし実際スコットランド近衛大隊は夜間に西から攻撃してきた[1334]。

一旦戦闘が始まるとアルゼンチン軍は、うまく壕の中にこもり、あらゆる火器を投入した。イギリス兵には野砲と迫撃砲が降り注ぎ、火力で圧倒されていた。イギリス兵たちの予想に反して、アルゼンチン兵

[1330] Ramsey, *The Falklands War Then and Now*, pp. 508-510; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 190-191.

[1331] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 190; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 255; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 643. 陽動作戦のイギリス軍負傷者の数は、資料により 4 から 11 名と、さまざまである。

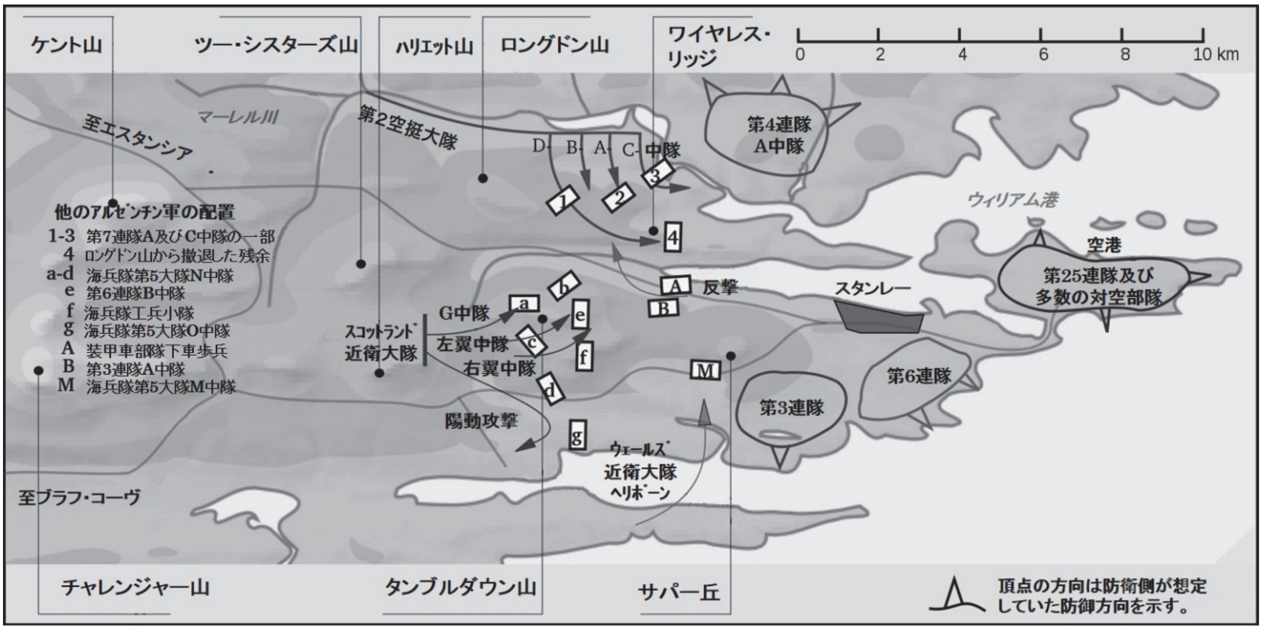
[1332] Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 191-192; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 643.

[1333] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 256.

[1334] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 256.

はその場に踏みとどまり戦い続けた。イギリス軍は戦闘のかなめの一つである野砲が目標になかなか命中しなかった[1335]。

多くの者が傷つき、ごつごつした岩稜の前進はゆっくりとして苦痛に満ちていた。夜になってから 40 ノット（約 20 メートル毎秒）にも達する冷たい吹雪になったが、それも何の助けにもならなかった。アルゼンチン軍の通信ケーブルを探り当て、それをたどってざん壕や陣地に行き着き、それらを破壊した。しかしなおアルゼンチン軍の抵抗は激しかった。敵味方が非常に接近し、艦砲では敵陣地砲撃が味方を巻き込む危険性があり、野砲が頼りであった時期に、イギリス野砲部隊指揮官は、通信連絡が貧弱なためスコットランド近衛兵の位置確定が困難になっていることを心配した。第 2 スコットランド近衛大隊戦術司令部に配置された艦砲射撃観測将校は、戦術司令部（Tactical HQ）が戦闘間ずっと「スタート・ライン」より後方にあり、有効な指揮・統制を行うためには、戦術司令部の位置が先頭の中隊から遠すぎると感じた[1336]。




図第 24　6月 13-14日にかけての地上戦闘

この図はEric Gaba作成のWikimedia Commons（http://en.wikipedia.org/wiki/File:Mount.longdon.battle.svg）の図を筆者が和訳したものである。

戦闘開始後 3 時間後の 14 日 0130Q 時、イギリス軍左翼中隊は、たいへん悪い天気の中で依然としてくぎ付けのままであった。後方から兵力増強を行っても、それを役立てる有効な方法がなかった。第 5 歩兵旅団は利用可能な資源の中で作戦進捗を推し進める有効な手立てをもっていなかった[1337]。

大隊長スコット中佐は、無線で左翼中隊長ジョン・キーズリー陸軍少佐（Major John Kiszely）と状況を

---

[1335] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 643.
[1336] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 643-644.
[1337] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 644.

話し合い、前進する兵の前方にあるアルゼンチン軍陣地を野砲で砲撃し、兵は引き続いてその陣地に手りゅう弾と銃撃を加える、という戦術で合意した。左翼中隊は直ちに 4 から 5 カ所のアルゼンチン軍ざん壕を奪取した。戦闘は接近し激しいものになり、アルゼンチン兵は手りゅう弾、銃撃または銃剣で殺されるか、降伏するようになった[1338]。ここを守備する第 4 小隊長バスケス少尉も、0230Q 時から 0300Q 時にかけて状況が悪化し、死傷者のほとんどは 0300Q 時以降に発生した、と回想している[1339]。

0400Q 時左翼中隊長キーズリー少佐と 3 名の兵士は目標であるタンブルダウン山頂上に到達した。0505Q 時山頂周辺の掃討確保が完了し、5 時間以上寒い中で待機していた右翼中隊が攻撃する番となった。この中隊は G 中隊の西で待機しており、その夜は強い西風で戦闘騒音が聞こえておらず、右翼中隊の兵士は何が起きていたのか理解していなかった[1340]。

0600Q 時右翼中隊が左翼中隊の前線に到達し、左翼中隊長キーズリー少佐から右翼中隊長シモン・プライス陸軍少佐（Major Simon Price）へそれまでの戦況が申し送られた。アルゼンチン軍機関銃陣地と狙撃兵が 2－300 メートル先の岩稜地帯にいること、アルゼンチン軍兵士は決意が固いこと、84mm カール・グスタフ・ロケット砲や 66mm ロケット弾ではアルゼンチン兵士ざん壕から追い出せないこと、良く調整された火力支援と突撃のみが敵を突破できること、などが説明された[1341]。

右翼中隊の計画は、1 個小隊に火力支援をさせながら右翼を回り込んでいく戦術をとった。砲兵および迫撃砲は、グルカ小銃大隊がタンブルダウン山の北斜面を前進するため、支援できず、支援可能なのは対戦車ミサイルのみであった。右翼中隊の最初の攻撃は成功であり、以後稜線周辺のアルゼンチン軍陣地を少人数のチームで一つ一つつぶしていった。0700Q 時バスケス少尉には 2 コのざん壕と少数の弾薬が残るのみとなった。無線で中隊長と交信し、兵力増強を中隊長に求めたが、返事はそのような兵力はないというものだった。バスケス少尉は 0715Q 時にイギリス兵にざん壕を包囲され、彼の戦争は終わった。0800Q 時にはタンブルダウン山における交戦は終了した。この戦闘におけるイギリス軍の損害は死者 8 名、負傷者 35 名であり、アルゼンチン軍の損害は死者 20 名以上、負傷者多数であった[1342]。

#### c　ウィリアム山の占領

ウィリアム山は前述のように、スコットランド近衛大隊がタンブルダウン山を占領した後、グルカ小銃大隊が攻撃し占領する計画だった。ところがタンブルダウン山占領に予想外に時間がかかる見込みとなっ

[1338] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 644.
[1339] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 259.
[1340] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 644; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 198.
[1341] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 644-645; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 198.
[1342] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 646; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, pp. 203, 211-212; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 262. ここでのアルゼンチン軍の動きは主に Middlebrook によっている。Bijl と Aldea によると、14 日朝海兵隊第 5 歩兵大隊長ロバシオー中佐は、まだ大隊の損耗は少なく戦況は自隊が勝っており、タンブルダウン山で戦闘を続けるつもりだった。しかし 0700Q 時にプエルト・アルヘンティノ集団司令官ホフレ少将からロバシオー中佐へ、イギリス軍との接触を断ち、サパー丘へ後退して戦力再編を行え、との命令があった、としている。

た。その占領を待ってグルカ小銃大隊を出発させると、グルカ兵はアルゼンチン軍が管制する土地を昼間の長い時間横切らなければならない。ムーア少将とウィルソン准将は、それが危険であると考えた。グルカ小銃大隊は、6 月 14 日 0235Q 時スコットランド近衛大隊の位置まで前進し、タンブルダウン山の状況にかかわらず、ウィリアム山を攻撃するよう命令を受けた。グルカ小銃大隊長デヴィッド・モーガン陸軍中佐（Lieutenant Colonel David Morgan）は、A 中隊には、タンブルダウン山東端まで進出して、ミラン・ミサイルと 12.7 ミリメートル重機関銃 6 門の火力支援基地を設定すること、B 中隊にはタンブルダウン山東端から北にある小山を占領し、スタンレー公園進出の準備をすること、D 中隊には南へ向かいウィリアム山を占領することをそれぞれ命じた[1343]。

グルカ小銃大隊はタンブルダウン山稜線北側を迂回する間に砲撃を受け 8 名の負傷者を出し、これが前進を少し遅らせてしまった。明るくなりスコットランド近衛大隊がタンブルダウン山まで占領した時点で、アルゼンチン軍がウィリアム山から撤退したのは明らかとなった。グルカ小銃大隊長は B, D 中隊へ、一刻も早く攻撃を行い、目標を占領するよう命じた。しかし友軍の誤射や地雷原の発見などにより遅れが生じ、D 中隊が最終的にウィリアム山を確保したのは、1305Q 時となった。アルゼンチン軍の実質的反撃は、ほとんどなかった。ウィルソン准将は、さらにグルカ大隊を前進させようとしたが、ムーア少将が事態を統制し、グルカ小銃大隊はその場で待つよう命じられた[1344]。

#### d　ワイアレスリッジの戦闘

ワイアレスリッジは、西から東に流れるムーディー・ブルック川が流れる渓谷の北側の稜線であり、実際には 2 本の稜線が並行して東西に走っている。南側の稜線の方がより顕著であるが、それでも高さは 1 カ所で 300 フィート（約 91 メートル）に達しているにすぎない。軍事上の要害としてみた場合、標高においても、岩稜のひろがりにおいても、タンブルダウン山のような他のスタンレー周辺の防御地点と比べると、はるかに劣っていた[1345]。

ここを守るのはアルゼンチン陸軍の第 7 歩兵連隊（Regimiento de Infantería 7）の A および C 中隊を中心とする部隊であった。第 7 歩兵連隊は、すでに 6 月 11・12 日のロングドン山の戦闘で B 中隊を失っていた。北側の稜線の西側の丘（標高約 250 フィート（約 76 メートル））に C 中隊を配置した。ここは湿地帯でイギリス軍はラフ・ダイヤモンド（Rough Diamond）と名付けた。その東どなりの丘も標高約 250 フィートで A 中隊を配置し、イギリス軍はそこをアップル・パイ（Apple Pie）と名付けた。南の稜線の最高点にイギリス軍はブルーベリー・パイ（Blueberry Pie）と名付け、第 7 歩兵連隊の司令部は南の稜線の東部の丘に配置された。南の稜線の方が北のそれより攻め難い地形にもかかわらず、南の稜線に実質的な

---

1343 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 646; Bijl and Aldea, *5th Infantry Brigade in the Falklands 1982*, p. 209.
1344 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 646.
1345 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 263.

戦闘部隊は配置されなかった[1346]。

イギリス軍でここの攻撃を命ぜられたのは、グース・グリーンですでに戦闘を行った第2空挺大隊であった。第2空挺大隊は、グース・グリーンの経験から、火力をふんだんに用いれば戦闘はそれだけ容易になることを学んだ。今度はそれをワイアレスリッジの戦いに応用したのだった。この戦闘は、フォークランド戦争の中で唯一騒々しい始まりの戦闘だった。その火力を提供したのは、第 29 コマンド大隊砲兵連隊の 2 個中隊、フリゲート艦「アンバスケード」、第 2 および第 3 空挺大隊の迫撃砲、機関銃小隊およびこの戦闘で第 2 空挺大隊に配属された軽戦車によるものだった[1347]。

第 2 空挺大隊長デビッド・チャンドラー陸軍中佐（Lieutenant Colonel David Chaundler）の攻撃計画は、徹底した準備砲撃を含む夜間攻撃で北側から侵攻し、4 つのフェーズに分かれていた。フェーズ 1 では D 中隊がワイアレスリッジ北側稜線の西にあるアルゼンチン軍陣地（ラフ・ダイヤモンド）を占領する。フェーズ 2 では A および B 中隊がワイアレスリッジ北側稜線の東にある「アップル・パイ」を占領する。フェーズ 3 では A および B 中隊が D 中隊に対して火力支援を行い、D 中隊は、ワイアレスリッジ南稜線を西から東へ掃討する。フェーズ 4 では C（偵察）中隊が北側稜線東端からさらに東にあるアルゼンチン軍陣地（兵力：1 個小隊）を占領する、というものだった[1348]。

出発前の「スタート・ライン」の準備は、いつもの通り C（偵察）中隊が行った。アルゼンチン軍の空中炸裂弾の砲撃を受けたので、それ以上砲撃を受けないよう位置の若干の修正を行った。第 2 空挺大隊はワイアレスリッジの約 600 メートルきたへ移動した。地形は湿地帯で池や小さな湖があちこちに散在し、前進間に 2 名の者が池の氷を踏み抜いて、深い水に引きずり込まれた。第 2 空挺大隊はそれまでずっと作戦を行っており 3 日間ほとんど寝ていなかった。そして今はブリザードにさらされていた[1349]。

部隊の出発直前になって、中隊長チャンドラー中佐へ旅団司令部から最新の情報を反映した地図が届けられた。それによるとワイアレスリッジには新たにアルゼンチン軍 2 コ中隊が所在し、また「スタート・ライン」から「アップル・パイ」までの大隊の進攻軸線を横切って地雷原があることが記されていた。チャンドラーは、今さら計画を変更するわけにはいかず、危険を受容して歩きぬけることとした。この情報に関して彼は部下に一言も告げなかったようである[1350]。

D 中隊が「スタート・ライン」を通過する 30 分前から準備砲撃が始まった。D 中隊が出発して最初の目標である「ラフ・ダイヤモンド」に到達すると、アルゼンチン軍の反攻はほとんどなく、2，3 のアルゼンチン兵の死体を発見しただけであった。準備砲撃により大部分が逃げ出した後だった。それでもアルゼンチン軍は自軍が放棄した陣地に正確に砲弾を撃ち込んだので、D 中隊は攻撃後の部隊の再編成を離れた場所でやらなければならなかった。A および B 中隊も前進をはじめ、彼らの前からアルゼンチン軍兵士が逃げ出すのを目撃した。ざん壕は簡単に奪取できるので問題にならず、ここでも旧陣地に対するアルゼン

---

1346 Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 204.
1347 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 648.
1348 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 650; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 205.
1349 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 650; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 205.
1350 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 650; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 207.

チン軍の正確な砲撃が問題であった。これに対しては艦砲射撃により2カ所のアルゼンチン軍砲兵陣地を破壊し解決した(フェーズ4においてC中隊も目標へ前進したがアルゼンチン兵が放棄した後だった)[1351]。

フェーズ3に入りD中隊はワイアレスリッジの西端から東へ向けて掃討を開始した。第1のアルゼンチン軍陣地は反攻もなく奪取した。第2の陣地はあらゆる種類（軽戦車、機関銃、ミラン対戦車ミサイル、艦砲）の火力の集中射撃で制圧された。失敗といえばアルゼンチン軍の155ミリメートル砲の砲弾孔へ2両の軽戦車が落っこちたことだけであった。このフェーズ3番目で最後の目標では、アルゼンチン軍が頑強な抵抗を示した。もちろんイギリス軍はここもあらゆる火器で集中射撃を行った（イギリス軍野砲弾が間違いでD中隊に着弾し1名の死者と1名の負傷者を出した)。D中隊が接近すると、アルゼンチン兵は逃げながら戦っていたが、突然アルゼンチン兵はバラバラになって走って逃げだした。もはやアルゼンチン兵は疲れと士気の崩壊と敗戦は誰の目にも避けられないことから、戦おうという雰囲気はなく、なんとか生き残りたいという欲求だけになっていた[1352]。プエルト・アルヘンティノ集団司令官ホフレ少将は反攻を企図し、14日明るくなってから小隊規模の兵力で2度攻撃を行ったが、第2空挺大隊は苦も無く撃退した[1353]。

こうして第2空挺大隊は、ワイアレスリッジ占領を2名の死者だけで達成することができた。しかし大隊は、まだイギリス軍による占領が済んでいないタンブルダウン山とウィリアム山から砲撃および銃撃を受けていた。しかしそれも 14 日の昼頃までには両方とも占領され、砲撃も止まった。この戦いのアルゼンチン兵は500名程度であり、死者は100名程度に達したかもしれない。捕虜は17名のみであとは皆逃げてしまった。第2空挺大隊の死者は3名、負傷者は11名であった。この大隊のグース・グリーンの戦いと比較すると格段の差がある。グース・グリーンで苦しんで学んだすべての教訓が、この戦闘に反映された。空挺部隊の断固とした意志に今回は艦砲、野砲、軽戦車が加わって戦いを完全なものにしたのだ[1354]。

### 第4項　アルゼンチンの降伏

スタンレー防衛の崩壊は、ワイアレスリッジの喪失から始まった。もはやここを占領した第2空挺大隊とスタンレーの間にはさえぎる自然障害物が何もなかった。スタンレーの西までイギリスはこの開けた土地を支配することができた。一方アルゼンチンは、スタンレーの一辺が完全にイギリス軍のものになってしまったので、もはや防御することができなくなった。多数のアルゼンチン兵が、大きな川の流れのようにムーディー・ブルック、タンブルダウン山ならびにウィリアム山からスタンレーへ戻り始めた。フォークランド諸島地上軍司令官ムーア少将は、スタンレーへ撤退しているアルゼンチン兵を攻撃しないように、自軍兵士へ命令を出した[1355]。

---

[1351] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 650; Ramsey, *The Falklands War Then and Now,* pp. 532-533; Thompson, *No Picnic,* p. 178.
[1352] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 650-651; Bijl, *Nine Battles to Stanley*, p. 204.
[1353] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 264-267.
[1354] Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 651.
[1355] Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 270; Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,*

マルビナス諸島総軍司令官メネンデス少将は、14 日早朝には残っている防衛線が持ちこたえられないと結論付けた。メネンデスは 0900Q 時までには参謀本部へ、スタンレー内郭防衛線をすべて失ったことを伝えた。彼は 1000Q 時頃ガリチェリ大統領へ電話をかけ、不安定な防衛線を築いたが夜まで持ちこたえる自信がないこと、弾薬と火砲がないこと、イギリス軍は陸海空で見せた優位をもって引き続き攻撃を続けるだろうこと、そして、戦闘を続けるなら短時間のうちに多くのアルゼンチン兵が戦死し、それは降伏よりさらに悪い事態であることを指摘した。ガリチェリ大統領には実情が理解できず、メネンデスの要請を拒否した。メネンデスは自己の責任において降伏することとなった[1356]。すでに戦場では実質的な戦闘停止が 1200Q～1330Q 時頃の間に自然に形成されたようである[1357]。メネンデスが降伏文書にサインしたのは、14 日 2359Z 時であった[1358]。

第 9 節　まとめ

フォークランド諸島における最初の陸上の戦いは、アルゼンチン側がイギリス側の兵力を知り（イギリス側が直前に 2 倍にしたことは侵攻前日までわからなかったが）、それに対して 10 倍以上の兵力を投入した。数時間の戦闘でイギリス軍は降伏しており、フォークランドを占領するという目的を十分に達成し、横綱相撲といってよい。上陸作戦も、それが専門である海兵隊部隊が事前に訓練を行って本番に挑んだものであり、当日上陸がスムーズに行ったことは、アルゼンチン海兵隊の能力の高さを示すものだろう。しかし総督公邸の攻撃については、わざわざ占領のため準備していた部隊をその任から外し、総督公邸について知識のない部隊を投入したのは理解できないところである。

他方イギリス軍は、圧倒的なアルゼンチンの兵力に直面しても、武力による抵抗を行った。イギリスが抵抗せずただちに降伏しても、軍事的結果は同じであっただろう。また結果的にイギリス側の死者はゼロであったが、武力による抵抗を決意するさい、死者がでないという保証はなかったはずである。しかし政治的に考えた場合、無抵抗で互いに一発も発砲せずに占領された場合、アルゼンチンに武力侵攻ではなかったという宣伝の口実を与えることになっただろう。その意味でイギリス海兵隊員は、国益を守るため圧倒的に劣勢な状況でも義務を果たしたといってよいだろう。また十分銃火を交わした後で死者の出ないうちに降伏したことは、イギリス人の冷静な性格をみることができる。

結局のところ、アルゼンチン軍は「マルビナス」奪回には成功したが、当初もくろんでいた奇襲は成功しなかった。これは直接この陸上戦闘に関係することではないが、すでに 3 月 28 日の時点でアルゼンチン艦艇の無線交信を傍受したイギリスがアルゼンチンの侵攻意図を察知し、奇襲の要素はなくなっていた。歴史書をひもとくまでもなく、イギリスが通信諜報等の情報戦にたけていることは周知の事実であり、無

---

p. 657.

1356 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* p. 657; Freedman and Gamba-Stonehouse, *Signals of War*, pp. 402-406; Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, pp. 272-273.

1357 Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas'*, p. 272; Chris Hobson with Andrew Noble, *Falklands Air War* (Hinckley; Midland, 2002), p. 138.

1358 Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign Volume II,* pp. 658-659.

線封鎖も行えなかったアルゼンチン軍の能力には大いに疑問がもたれるところだろう。結局奇襲による無血（無発砲？）占領という機会を自身で台無しにしたわけだが、奇襲が成功したとしてもイギリス人が抵抗しないという確証をアルゼンチン人は持っていたのだろうか。それはこの後でもえんえんと出て来るアルゼンチンのイギリスに対する見込み違いの数々を見ると、深刻な考察がなされていたのか大いに疑問である。またそれが結局武力侵攻という形になり、国際世論の場で非難されることになったのであった。